

中津城下町遺跡 殿町地区

発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第32集

例言

- 一、本書は中津市教育委員会が1997年度、1998年度、1999年度に実施した中津城下町遺跡殿町地区の発掘調査報告書である。
- 一、調査は大分県教育委員会より依頼を受けて実施した。
- 一、発掘調査は高崎章子、花崎徹が担当した。
- 一、出土陶磁器、瓦、土師器、瓦質土器の実測及び磁器のデジタルトレースは株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 一、一部の瓦質土器と大半の土師器小皿の実測は、福山美樹、上川幸枝、清水洋美、岩本敏美、松永理恵、相良紀善見、猪立山順子、穴井美保子、塩谷綱子が行った。
- 一、磁器以外の遺物(陶器、土師器、瓦質土器、瓦等)のトレースは金丸孝子が、遺構トレースは金丸の他、浦井直幸、松永理恵、穴井美保子、佐藤智子、橋内順子が行った。
- 一、遺物整理は上記の外、岩崎弘子、秋吉三和子、中島二三恵、松村たか子が行った。
- 一、遺物観察表は瓦質土器・陶磁器を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに依頼し、高崎が加筆修正を行った。
瓦、土師器の観察表は高崎が作成した。表作成には宮本志保の協力をうけた。
- 一、巻末図版の写真撮影は高崎が行った。
- 一、遺物実測図は原則として縮尺は1/3で、一部1/4、1/6のものについては、図中に明記した。
- 一、本文中、土坑(SK)、溝(SD)、井戸(SE)、石列には1区から27区まで通し番号をつけた。
柱穴(SP)については区ごとに番号をつけた。
- 一、本書の執筆、編集は高崎章子が行った。

目次

例言

第一章	調査の経緯と体制	1
	1. 調査の経緯	1
	2. 調査の体制	1
第二章	地理と歴史的環境	3
	1. 中津の遺跡	3
	2. 中津城と城下町の歴史	5
	3. これまでの調査	7
第三章	調査内容	9
	1. 調査の概要	9
	2. 平成9年度調査の概要	9
	3. 平成10年度調査の概要	9
	4. 平成11年度調査の概要	10
	5. 平成12～15年度作業の概要	10
第四章	遺構と遺物	14
第五章	まとめ	174
	1. 出土遺物について	174
	(1) 遺構の年代	
	(2) 土師器小皿について	
	(3) 軒瓦について	
	2. 荷状遺構について	181
	3. 御水道遺構について	185
	4. おわりに	189
	写真図版1～4	

插图目次

第1图	发掘風景写真	2
第2图	中津市内主要遺跡分布图(1/50000)	4
第3图	「黒田如水縄張り」写真	6
第4图	「黒田如水縄張り」部分	6
第5图	中津城址地图	6
第6图	中津城空中写真	7
第7图	城下町調査区配置图(1/5000)	8
第8图	殿町調査区配置图(1/2000)	8
第9图	金谷地区全景写真	9
第10图	金谷地区土層写真	9
第11图	調査区全体图(1/500)	11·12
第12图	1区全体图·土層图(1/80)	14
第13图	2区全景写真	15
第14图	2区全体图(1/80)	15
第15图	SD-1断面图(1/40)	15
第16图	SD-1小皿出土状況写真	15
第17图	遺物実測图1	16
第18图	遺物実測图2	17
第19图	3区全景写真	18
第20图	3区全体图·土層图(1/80)	19
第21图	SK-18写真	19
第22图	遺物実測图3	20
第23图	遺物実測图4	21
第24图	遺物実測图5	22
第25图	4区全体图·土層图(1/80)	23
第26图	4区SP-1·SP-2断面图(1/40)	23
第27图	遺物実測图6	24
第28图	5区全体图·土層图(1/80)	25·26
第29图	SK-30·SK-83土層图(1/40)	25·26
第30图	4区全景写真	27
第31图	5区全景写真	27
第32图	5区SK-104写真	28
第33图	SK-104平面图·断面图(1/40)	28
第34图	SK-32断面写真	29
第35图	遺物実測图7	33
第36图	遺物実測图8	34
第37图	遺物実測图9	35

第38图	遺物実測图10	36
第39图	遺物実測图11	37
第40图	遺物実測图12	38
第41图	遺物実測图13	39
第42图	遺物実測图14	40
第43图	遺物実測图15	41
第44图	遺物実測图16	42
第45图	遺物実測图17	43
第46图	遺物実測图18	44
第47图	遺物実測图19	45
第48图	遺物実測图20	46
第49图	遺物実測图21	47
第50图	遺物実測图22	48
第51图	遺物実測图23	49
第52图	遺物実測图24	50
第53图	遺物実測图25	51
第54图	遺物実測图26	52
第55图	6区全景写真	53
第56图	6区全体图(1/80)SK-58土層图(1/40)	53
第57图	遺物実測图27	54
第58图	7区全景写真	55
第59图	7区全体图·土層图(1/80)	55
第60图	8区東側写真	56
第61图	8区西側写真	56
第62图	8区全体图·土層图(1/80)	57
第63图	SE-1写真	57
第64图	遺物実測图28	59
第65图	遺物実測图29	60
第66图	遺物実測图30	61
第67图	遺物実測图31	62
第68图	遺物実測图32	63
第69图	遺物実測图33	64
第70图	遺物実測图34	65
第71图	遺物実測图35	66
第72图	SK-159写真	67
第73图	9区全体图·土層图(1/80)	67
第74图	9区全景写真	68
第75图	十瓶出土状況写真	68
第76图	10区全景写真	69
第77图	SE-2写真	70

第78图	10区全体图·土層图(1/80)·····	70	第118图	SK-215瓦敷·完備状況(1/40)·····	98
第79图	遺物実測図36·····	71	第119图	遺物実測図53·····	99
第80图	遺物実測図37·····	72	第120图	遺物実測図54·····	100
第81图	遺物実測図38·····	73	第121图	19区全体图·土層图(1/80)	101、102
第82图	遺物実測図39·····	74	第122图	19区全景写真·····	101、102
第83图	遺物実測図40·····	75	第123图	SF-2写真·····	104
第84图	遺物実測図41·····	76	第124图	SF-2平面図·断面図(1/40)·····	104
第85图	11区全体图·土層图(1/80)·····	77	第125图	SD-4横の木杭跡検出状況写真·····	105
第86图	11区全景写真·····	77	第126图	SD-4南壁断面写真·····	105
第87图	遺物実測図42·····	78	第127图	SD-4平面図·断面図(1/40)·····	105
第88图	遺物実測図43·····	79	第128图	遺物実測図55·····	106
第89图	12区全体图(1/80)·····	80	第129图	20区全体图·土層图(1/80)·····	107
第90图	12区全景写真·····	80	第130图	SD-5石垣(1/40)·····	107
第91图	13区全景写真·····	80	第131图	SD-5石垣写真·····	107
第92图	遺物実測図44·····	81	第132图	20区全景写真·····	108
第93图	13区全体图·土層图(1/80)·····	82	第133图	21区全景写真·····	108
第94图	14区全景写真·····	82	第134图	21区全体图·土層图(1/80)·····	108
第95图	14区全体图·土層图(1/80)·····	83	第135图	遺物実測図56·····	109
第96图	SD-2写真·····	84	第136图	SK-256石列3写真·····	110
第97图	SD-2平面図·断面図(1/40)·····	84	第137图	SK-256石列3平面図·断面図(1/40)·····	110
第98图	遺物実測図45·····	86	第138图	22区全景写真·····	110
第99图	遺物実測図46·····	87	第139图	22区全体图·土層图(1/80)·····	111
第100图	遺物実測図47·····	88	第140图	SK-259写真(1/80)·····	111
第101图	遺物実測図48·····	89	第141图	23区第1面·····	112
第102图	遺物実測図49·····	90	第142图	23区第3面東側写真·····	112
第103图	遺物実測図50·····	91	第143图	23区全景写真·····	112
第104图	遺物実測図51·····	92	第144图	石列5写真·····	112
第105图	15区全体图·土層图(1/80)·····	93	第145图	石列6写真·····	112
第106图	15区全景写真·····	93	第146图	石列7、8写真·····	112
第107图	16区全体图(1/80)·····	93	第147图	23区第1面①西側(1/80)·····	113、114
第108图	17区全景写真·····	94	第148图	23区第1面②西側(1/80)·····	113、114
第109图	17区全体图·土層图(1/80)·····	94	第149图	23区北側壁土層图(1/80)·····	113、114
第110图	SD-3平面図·断面図(1/40)·····	95	第150图	23区第2面全体图(1/80)·····	113、114
第111图	SD-3石列2検出状況写真·····	95	第151图	23区第3面全体图(1/80)·····	113、114
第112图	SD-3完備状況写真·····	95	第152图	遺物実測図57·····	116
第113图	遺物実測図52·····	96	第153图	遺物実測図58·····	117
第114图	18区全景写真·····	97	第154图	遺物実測図59·····	118
第115图	SK-215写真·····	97	第155图	遺物実測図60·····	119
第116图	SK-225写真·····	97	第156图	遺物実測図61·····	120
第117图	18区全体图·土層图(1/80)·····	98	第157图	24区全景写真·····	121

第158図	24区全体図(1/80)·····	121
第159図	25区全景写真·····	122
第160図	25区全体図・上層図(1/80)·····	122
第161図	SK-332平面図・土層図(1/40)·····	123
第162図	SK-332写真·····	123
第163図	SK-332断面写真·····	123
第164図	遺物実測図62·····	124
第165図	遺物実測図63·····	125
第166図	遺物実測図64·····	126
第167図	遺物実測図65·····	127
第168図	遺物実測図66·····	128
第169図	26区・27区北側壁土層図(1/80)	129-130
第170図	26区・27区全体図第2面(1/80)	129-130
第171図	27区全体図第3面(1/80)	129-130
第172図	26区全体図第1面(1/80)·····	132
第173図	26区全景写真·····	132
第174図	SK-362写真·····	132
第175図	SD-10上層図(1/40)·····	133
第176図	SD-10写真·····	133
第177図	SD-10完掘状況写真·····	133
第178図	27区全景写真·····	135
第179図	SE-5平面図・断面図(1/40)·····	135
第180図	SE-5写真·····	135
第181図	SK-391·····	135
第182図	遺物実測図67·····	137
第183図	遺物実測図68·····	138
第184図	遺物実測図69·····	139
第185図	遺物実測図70·····	140
第186図	遺物実測図71·····	141
第187図	遺物実測図72·····	142
第188図	遺物実測図73·····	143
第189図	遺物実測図74·····	144
第190図	遺物実測図75·····	145
第191図	遺物実測図76·····	146
第192図	遺物実測図77·····	147
第193図	SK-32出土遺物組成表·····	175
第194図	上・静脈小血流量·····	176
第195図	軒平瓦型式分類図(1/6)·····	178
第196図	軒丸瓦型式分類図(1/6)·····	179
第197図	溝遺構位置図(1/1000)·····	183・184

第198図	御水道位置図(1/7000)·····	187
第199図	御水道施設復元図·····	187

表目次

第1表	遺構一覧·····	13
第2表	出土土器・陶磁器観察表·····	148~171
第3表	出土瓦観察表·····	172・173
第4表	溝の分類·····	182

第一章 調査の経緯と体制

1. 調査の経緯

1997年より中津市殿町で県道外馬場鎗矢堂線の拡幅工事が実施されることとなった。工事区間は殿町の道路沿いで、東西に走る既存の道路を北側に拡幅するものである。総延長は東西約500m。道路沿いには民家、店舗などが並ぶ市街地で、各建物を移転して工事が行われることになった。この場所は中津城本丸より南方約30mにある道路で、城下町の中に位置する。幕末の絵図によれば、上級武士の居住区にあたり、細長い短冊型の屋敷が道沿いに軒を並べていた。町名が殿町とよばれるゆえんである。道路工事に先立ち、1997年6月、大分県文化課は調査区内の試掘調査を行った。範囲内にトレンチを設定し重機にて掘削したところ、近世の遺物が出土し、遺構の存在が確認できたことから、本調査を行うこととなった。本調査については、中津市教育委員会が県文化課に委託され実施することとした。工事は工事区間内を三分割して、三ヵ年計画で行うことから、工事に先立ち、調査も三ヵ年に渡り行うこととした。

第一次調査 調査期間 1997年8月20日～1998年3月20日
調査面積 780㎡

第二次調査 調査期間 1998年4月1日～1999年3月19日
調査面積 2,212.05㎡

第三次調査 調査期間 1999年8月1日～1999年12月22日
調査面積 2,080㎡

※調査は1999年の第三次調査をもって終了し、調査終了後随時工事が行われた。

2. 調査の体制

一、調査団の構成は下記の通りである。

一、調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 高原 忠孝（中津市教育委員会教育長 ～1997年1月31日）
前田 佳毅（同 1997年2月1日～2001年1月31日）
於久 孝正（中津市教育委員会教育長代理者
中津市教育委員会管理課長 2001年2月1日～2001年3月31日）
武吉 勝也（中津市教育委員会教育長 2001年4月1日～2003年11月20日）
城戸崎九（中津市教育委員会教育長代理者
中津市教育委員会管理課長 2003年11月21日～2004年3月1日）
影木荘一郎（中津市教育委員会教育長 2004年3月2日～）

	麻川 尚良 (中津市教育委員会市民文化センター課長)	~1998年3月31日)
	尾畑 豊彦 (同)	1998年4月1日~)
	山中布由彦 (同 係長)	
	富田 修司 (同 主査)	
調査指導	坂本 嘉弘 (大分県教育庁文化課 主幹)	
	小柳 和宏 (同 主査)	
	栗原 眞 (同 主査)	
調査担当	高崎 章子 (中津市教育委員会市民文化センター 主査)	
	花崎 徹 (同 主任)	

上記の他、吉田寛氏(大分県文化課)、古武牧子氏(佐伯市教育委員会)、佐藤浩司氏(北九州市芸術文化振興財団)他多数の方々より御指導をいただいた。厚く御礼申し上げます。

一、現場作業・整理作業は下記の皆さんの協力による。

植山ヨシカ、植山京子、松本勲、黒川洋美、若木和美、上川幸枝、塩谷絹子、松村たか子、松永理恵、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、猪立山順子、清永洋美、山縣信夫、田原文子、石塔美代子、瀬口礼子、中村香代子、田中トミ子、江藤清子、中島祐子、辻原霞、寺内勝美、植山トミ子、草野郁夫、辛島雅美、植山松枝、今永キク子、中和代、泉貞世、今石智子、熊谷朝子、伊津見哲真、宇都宮人地、花田郁夫、秋吉三和子、岩崎弘子、中島二三恵、畑野常昭、福山美樹、中山裕枝、水澤ミキヨ、長岡久美子、黒川ミユキ、徳永賀子、藤田功、川西猛徳、宮崎真理、水澤憲太郎、速水浩人、北條昭信、羽良安史、堀川雅史、大沢春代、大林啓子、西山有美子、木ノ下智子、田中浩幸、相良紀誉見、深蔵剛、新田秀勝、田中静江、田畑友子、田畑つね子、高松秀子、松本貞子、田畑恵、羽立えり、筒井奈津子、菊地充、高松誠一郎、松本真由美、上野祥子、榎垣さやか、古庄隆浩、古野麻美、徳永めぐみ、原裕樹、橋本沙也子、矢野智弘、橋本並裕子、谷口幸代、宮永光美、富部智子、中野史上、友松勇、橋内順子、福住摂子(順不同)



第1図 発掘風景写真

第二章 地理と歴史的環境

1. 中津の遺跡

中津市は、大分県北部、福岡県との県境の商業都市で、人口約6万7千人、面積約55.67km²である。一級河川の山国川河口に位置し、北は遠浅の周防灘を望む。山国川の造る扇状地「沖代平野」と、市の東南をしめる洪積台地「下毛原台地」とに分かれ、山間部は市の南に隣接する三光村境にわずかにある。東は古代強力な政治力を誇った宇佐八幡宮が座す宇佐市に隣接している。

市内の旧石器時代は才木遺跡や大坪遺跡で石器を確認できるのみである。縄文時代では早期後半に黒水遺跡で陥し穴が検出された。遺跡数が増大するのは後期からである。犬丸川沿いの福島台地には、入垣貝塚を伴う集落のボウガキ遺跡、山国川沿いには三光村の自然堤防上に佐知遺跡の集落がある。山国川河口付近では高畑遺跡で土偶が発見された。弥生時代になると、遺跡は台地上や沖代平野内の低地でも確認できる。前期後葉から中期初頭、山国川沿い低丘陵上の上ノ原原遺跡で、貯蔵穴群が検出された。中期になると犬丸川沿いの福島遺跡で集落が展開し、住居跡、濠と二列埋葬の土坑墓群が確認されている。また中津市と三光村にまたがる森山遺跡では前期末から後期初頭までの集落全域を検出できた。古墳時代には沿岸部や山国川沿いに古墳、横穴が築かれ、微高地には住居が作られる。沖代平野の低湿地では水田も確認されている。生産遺跡としては南東部の山地に大規模な窯跡群が作られ、6世紀後半から8世紀にいたるまで、須恵器、瓦などが生産された。

古代史上主要な遺跡は市内南部を東西に横切る推定古代官道沿いに集中する。この道は宇佐八幡宮へ向かう勅使が通る通称「勅使街道」であり、当時のメインストリートである。道の南、山国川の東岸に、白鳳寺院の相原庵寺跡がある。また沖代平野では、おそらく8世紀前半に県下最大級の沖代条里の地割りも制定された。条里は年々開発の波に押されているが、現在でも方形の区割りをたどることができる。この条里を見下ろす低台地上に、下毛郡衙正倉に比定される長者屋敷遺跡がある。長者屋敷と相原庵寺の間には、古墳時代から近世まで続く墓地群相原山首遺跡があり、古代の蔵骨器を持つ方墳は郡司の墓に推定されている。

犬丸川沿いでは鎌倉時代の集落が検出された。特に前田遺跡では井戸から青磁、白磁、瓦器碗、土師器などの良好な一括資料が得られた。中世の建久年間には、宇都宮氏が豊前に入り、その庶流が下毛郡の地頭職についた。15、16世紀には市内各地に堀や土塁をもつ豪族居館が作られ、各所にその痕跡を残す。近年の調査では、石堂池遺跡、定留遺跡、諸田遺跡などで城館跡が新たに確認されている。長者屋敷遺跡にも16世紀に八並城が造られ、堀や土塁は今もたどることができる。宇都宮重房は野仲郷を本貫とし、以後16世紀末まで、野仲氏が勢力をふるった。八並城も野仲氏に攻め落とされている。しかし、16世紀末、秀吉から豊前をもらった黒田氏が山国川の河口に中津城を築き、宇都宮氏をはじめとする地元の豪族を次々に打ち破り、江戸時代を迎えた。中津城は一国一城令後も生き残り、河口の城を中心に城下町が発展していった。現在城内に当時の建物は残っておらず、石垣や堀が往時をしるのみである。



1. 中津城	11. 百箇匠屋敷遺跡	21. 長巻屋敷遺跡	31. 大坪遺跡	41. 草場遺跡
2. 中津城下町遺跡	12. 上橋原了洞遺跡	22. 龜山古墳	32. 森山遺跡	42. 大谷原跡
3. 高畑遺跡	13. 佐知遺跡	23. 石堂池遺跡	33. 福島遺跡	43. 藤ヶ迫竊跡群
4. 雲田小学校遺跡	14. 上ノ原平原遺跡	24. ガラヌノ益跡	34. 福島地下式横穴	44. ホヤ池竊跡群
5. 高瀬遺跡	15. 助助野地遺跡	25. 熊神社	35. 洞ノ上横穴群	45. 大池竊跡
6. 龍洞寺古墳	16. 舞旗邸古墳	26. 原遺跡	36. 洞ノ上竊跡	46. 野依桑里遺跡
7. 下磨原古園遺跡	17. 上ノ原横穴墓群	27. 定留貝塚	37. 才木遺跡	47. 大幡法乘里竊構
8. 郷ヶ原遺跡	18. 相原山首遺跡	28. 和備貝塚	38. 城山横穴群	48. 沖代桑里竊構
9. 上磨原遺跡	19. 三口遺跡	29. 定留遺跡	39. 城山古墳群	
10. 上磨原稲本屋遺跡	20. 相原庵寺	30. 黒水遺跡	40. 城山竊跡群	

第2図 中津市内主要遺跡分布図 (1/50000)

2. 中津城と城下町の歴史

中津城は山国川河口沿いの、川と海に面した要衝の地に立地している。堀の水かさには潮の干満で上下する。二重の堀を有し、外堀には通称「おかこい山」と呼ばれる土塁をめぐらせていた。そもそもこの地を選定したのは黒田孝高であった。1587（天正15）年、豊臣秀吉は九州をその支配下に繰り入れ、豊前国下毛郡など六郡の領主としてみずからの軍奉行であった黒田勘兵衛孝高を配した。黒田氏をはじめ、大塚山の砦を修築して根拠地としていたが、天正16年中津江太郎の居城である丸山城を修補し、入城した。享保の人である奥村甘斎「閑居草庵記」によると、「城はかきあげばかりで松などがうえてあった」程度であり、城郭、櫓などの修補にも古材木を使った証の貫穴などがあったという。同じ年、九州各地に秀吉の命で配された武将達がいっせいに城を築いている。中津城はその一つであり、九州最古の近世城郭の一つである。

最も古い絵図とされる「黒田如水縄張図」は現在5点確認されている。白杵市立図書館2点、県立大分図書館、耶馬溪中根家、中津市歴史民俗資料館である。いずれもほぼ同じ絵である。この絵図に描かれている城は現在の扇形と異なり方形である。本丸、二の丸、三の丸とともに「京町」、「博多町」の名称が見え、「侍屋敷或町屋」、「寺モアリ」のほか、「町」という文字も4箇所記入されている。他に地名としては「高瀬」、「犬丸」、「コイワイ」（小祝）、「竜王瀬」、「高瀬川」、「ヤックワン川」（駅館川）、「弥山」（八面山）の文字が記される。これらの地名は現在に通じるもので、京町、占博多町、新博多町の名称が残る。町名は城の東側のみに記されており、今回の調査区である城の南側には地名を表す文字はない。城郭は線のみで表され、屋敷地はまったく図化されていないが、黒田時代の絵図はこれら以外に、貴重な資料である。1600（慶長5）年、黒田が福岡に転封するまでの間、どの程度まで中津城と城下町の整備をしていたのかほとんど不明である。

黒田の次に入国してきた細川忠興は豊前一国と豊後国国東、速見郡の領主として当初中津城を居城とした。忠興は翌年居城を小倉に移し、中津には忠利を入れた。1602（慶長7）年、小倉城の造営工事を行い、翌年から1620（元和6）年まで中津城の増改築を行う。まず三の丸から着手したらしく、現在は確認できないが、中津城三の丸西門の石垣には「慶長12年9月」という文字が刻まれていたという。材木は三光村八面山から切り出し、山国川対岸の小隈（雄熊）日隈（姫熊）に散在した古墳の石組みを壊して石垣に使用したとされる。

1615（元和元）年の「一國一城令」に際して、忠興は中津城の普請を中止するように伝えている。1616（元和2）年中津城の残地が決まる。1620（元和6）年、忠興は忠利に家督を譲り三斎と号し中津城に入った。三斎の隠居城として修復、完成をみた中津城には本丸、二の丸、三の丸と八門、二十二の櫓が設けられた。城全体の地形も方形から扇形になった。城下への入口には番所が置かれ、城下町の町割りも行われた。新博多町、古博多町、京町、米町、姫路町、豊後町、新魚町、角木町、詔町、塩町、堀川町、舟町、古魚町、桜町の14町と枝町（出町・出小屋）、侍町（武家町）の原型ができた。武家屋敷は、三の丸に家老屋敷、片端・殿町に上級武士、金谷辺には下級武士の屋敷が置かれた。また相原に大井堰を築き、導水路を掘って山国川の水を城内にひいた。

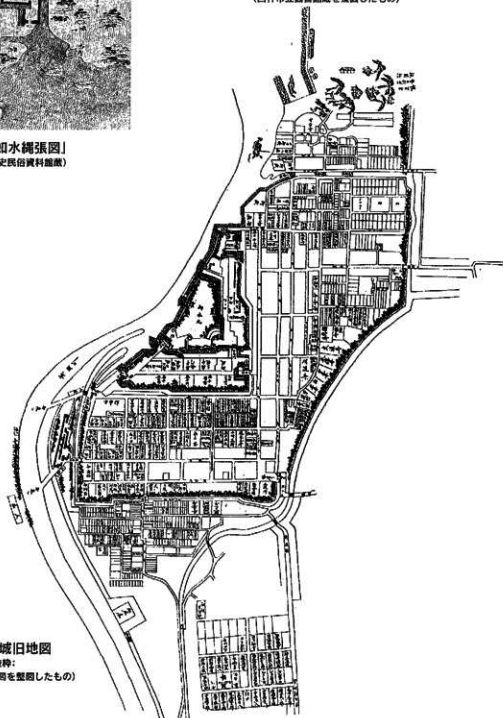
1632（寛永9）年、細川氏の熊本転封によって、中津には譜代大名小笠原長次が入部した。城下町の整備も行われ、1652（承応元）年には、石樋を城下に埋め、山国川の水を川上でとり、城下へ水を流すという、九州最初の水道の設備が行われている。小笠原時代、城下町は瓦葺きに整備され、さらに拡大した。1663（寛文3）年の「中津城総曲輪絵図」（在家文書）によれば、城下14町のほか、下正路町、留守居町、カコ町、弓町、中間町、持筒町、鉄砲町、鷹匠町、寺町、侍町などの名が見え、武



第3図 「黒田如水縄張図」
(中津市歴史民俗資料館蔵)



第4図 「黒田如水縄張図」部分
(日本文学館蔵を監製したもの)



第5図 中津城旧地図
(「中津市史」より抜粋：
日下田家所蔵縮図を監製したもの)

家町に町名がつけられている。

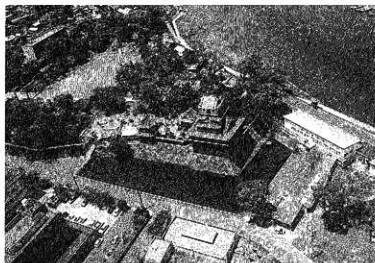
1717（享保2）年、譜代大名奥平昌成が中津に入り、以後1871（明治4）年まで奥平氏が中津藩主となった。

1870（明治3）年、廃城を願い出、翌年城は取り壊された。1863（文久3）年には本丸下壇の西側に「松の御殿」を新築している。この御殿は1871（明治4）年の廃藩置県後は、旧藩庁の残務取り扱い所となり、さらに小倉県中津支所庁として利用されたが、1877（明治10）年増田宋太郎らが襲撃し、火を放ち、松の御殿は消失した。その後中津城本丸跡は中津公園地となり、堀は埋められ、今は城北東側の菓研堀が水をたたえるのみである。現在江戸時代の建物は一切残っていない。石垣は全てではないが比較的良好に残されている。また、外堀に防御のため築かれた十手状の通称「おかこい山」は、城下町西南隅にわずかに残存するのみである。城下町には江戸時代の建物はほとんど皆無であるが、当時の町割り、細長い屋敷地は今もたどることができる。

3. これまでの調査

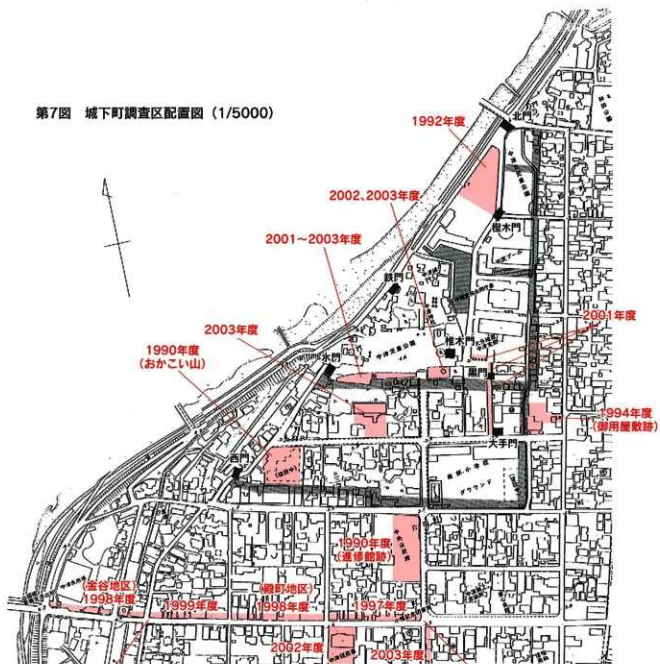
過去、中津城及び城下町で何度か発掘調査が行われてきた。1988年、マンション建設に伴い西門近くの通称「おかこい山」という土塁の調査を実施した。1990年には図書館建設のため、旧中津市庁舎跡で発掘調査を行い、藩校進修館跡を検出した。1992年には二の丸で榎ノ木門跡の調査を行った。京町の道路では工事中に御水道の溜橋と辻井戸が見つかった。1994年南部公民館建設のため大手門前の旧御用屋敷跡を調査した際、城下町側の石垣下から松材の胴木が検出された。調査区内からは黒田氏の時代まで遡れる遺物が出土している。

また、中津市では国庫補助事業「まちづくり総合支援事業」の一環として、本丸と三の丸の間の堀と石垣を復元する工事に着手している。それに伴い2000年より現在まで、堀と石垣の発掘調査を実施している。調査の結果、九州最古の近世城郭の一つである中津城の石垣には、築城当初のものが広範囲に残存していることが判明した。古い石垣は現在より低く幅の狭いものだったことも判明し、旧石垣の内側からは黒田の時代の建物遺構が検出されている。今後城内の調査は継続して行われる予定で、本丸内に初めて発掘のメスが入れられたことになる。それに比べ、城下町の調査はピンポイントのものしか行われずにきた。今回三ヵ年にわたり武家屋敷地である殿町の調査が行われた意義は大きく城下町成立過程の情報を得る大きなチャンスとなった。



第6図 中津城空中写真

第7図 城下町調査区配置図 (1/5000)



1999年度調査区

24E 23E 25E 26E 27E

1998年度調査区

17E 16E 15E 18E 22E 20E 19E 14E 13E 12E 11E

1997年度調査区

10E 1E 2E 3E 4E 5E 6E 21E 7E 8E 9E

第8図 殿町調査区配置図 (1/2000)

第三章 調査内容

1. 調査の概要

調査は平成9年度、10年度、11年度の三ヵ年にかけて行った。現地は町中であり、調査区の奥には民家が建ち並ぶことから、各家の通路を確保しつつ一部ずつ開け、埋め戻しては次を開ける方法をとった。また、それぞれの家につながるガス管、水道管、排水パイプが埋設されているため、調査区は細かく分割して行うこととなり、各遺構を同時に見ることができず、困難な調査となった。

2. 平成9年度調査の概要

本年度は工事予定地域の東端から約120m西までを調査対象とした。

まず6月に本年度調査予定地の三地点で試掘調査を実施した。重機によりバケット幅のみ掘削した結果、遺構の存在を確認したため、本調査を行うこととした。

本調査は平成9年8月20日より開始した。調査区はとりかかった順に1～10区までの10ヶ所に分割して行った。

調査の結果、表土より約1～1.2mで地山面に到達した。検出された遺構は大半が土坑である。円形や楕円形の土坑が足の踏み場もないほど、重なり合っていた。土坑は大半が廃棄土坑と思われ、多くの瓦、陶磁器、土師器などの破片が捨てられていた。出土遺物は17世紀中頃以降のものだが、18世紀から19世紀のものが中心である。

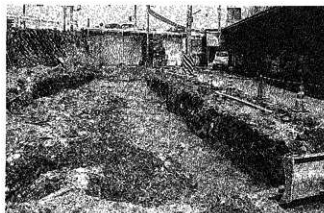
このほかに、柱穴、石組みの井戸などが検出された。しかし、屋敷の礎石などは確認できず、屋敷地の復元にはいたらなかった。平成10年3月20日、9年度調査を終了した。

今回の調査は中津城下町を広範囲に調査できる絶好の機会であり、これまで不明であった城下町の成立、展開の様子を解明する貴重な資料を得ることができた。

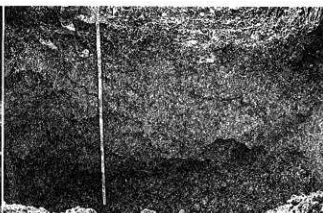
3. 平成10年度調査の概要

本年度は平成10年4月1日より5月31日まで県道外馬場鎗矢堂線の金谷地区の調査を、平成10年6月1日より平成11年3月19日まで殿町地区の調査を行った。

金谷地区は、県道外馬場鎗矢堂線の西端で、中津城外堀西の外馬場に相当する。重機による掘削を行い遺構の確認に努めた。しかし、現地は道路用地として買収される以前は、魚市場の製氷槽、ガソリンスタンドの貯油槽が埋設されていたため、攪乱が著しく、遺構の確認はできなかった。



第9図 金谷地区全景 東から西



第10図 金谷地区土層 (ほぼ全面攪乱をうけている)

殿町地区では、前年度同様調査区に隣接する民家の通路を確保する理由から11区から22区まで12箇所の調査区を設定し、開けては埋め戻すことを繰り返しながら調査を行った。その結果、多数の土坑が検出された。他に屋敷地を限ると思われる石垣、溝が確認された。出土遺物は、陶磁器、瓦、土器等大量に出土した。

建物復元に直接結びつく遺構は検出できなかったが、境界溝や石垣の検出は城下町の町割を考える上で貴重な資料となりうるものである。

4. 平成11年度調査の概要

平成11年8月1日より同年12月22日まで殿町地区の調査を行った。現地は旧武家屋敷地の最も西端の一画にあたる。本年度は平成9年から始まった「県道外馬場錆欠葦線改良工事に伴う発掘調査」の第三次調査で、本年度をもって発掘調査は終了する。調査地点は工事予定地域の西端から約100mまでが対象であるが、試掘調査の結果、西端は砂と礫が堆積しており遺構は残っていないとの判断から本調査の対象外とし、約70mの区間を調査することとなった。県と市との話し合いの結果、8月1日より大分県文化課が試掘調査を行い、8月20日以降、中津市教育委員会が引き継ぐこととした。

調査地域の北側には駐車場やアパートがあり、通路を確保する必要性があったことから、一度に広げることができず、23区から27区まで5箇所の調査区に分割し、調査後すぐ埋め戻し次の調査区を掘るという方法で行った。

調査の結果、表土より約1～1.5mで地山面に到達した。検出した遺構は、100あまりの廃棄土坑、柱穴、石列、溝等である。9年度、10年度と同じく、多くの土坑が重なり合っていた。今年新たに、玄関先の敷石と思われる石敷き面や、幅約4m、深さ約1mの、石を連ねた大規模な区画溝が検出されており、屋敷地を復元する上で、貴重な資料を得ることができた。特異なものとしては、多量の銅滓が出土する、幅約2.2m、深さ約1mの土坑が検出された。今後殿町地区は上級武士の屋敷地としてだけでなく、生産の面からの検討も必要とされよう。

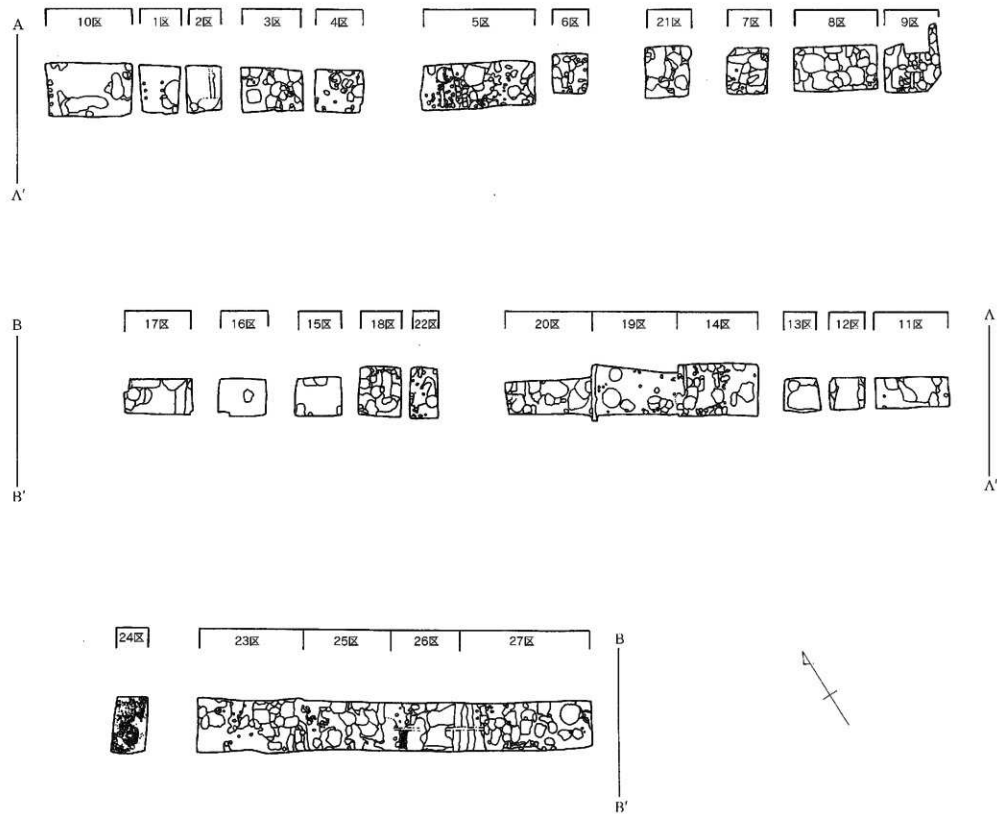
遺物は例年通り18～19世紀の近世陶磁器、瓦が主体であるが、下層では17世紀初頭のものも確認されている。また、小さな土人形を集中して出土する廃棄土坑などもあり、興味深い。

発掘調査は12月に終了したが、そのうち、作業用プレハブを市内の他所に移し、出土遺物の整理作業を実施した。9年度からの出土遺物は膨大な数にのぼっており、洗浄のすんだものから、接合、復元を行い、3月31日をもって11年度の作業を終了した。

5. 平成12～15年度作業の概要

協議の結果、発掘調査報告書を平成15年度に刊行することとなったため、平成11年度末より開始した遺物整理作業を継続して行うこととなった。平成12年度には遺物の洗浄作業は全て終了した。平成13年度は12年度に引き続き、遺物の注記、接合、復元、実測、図面整理等を行った。陶磁器全般の実測・デジタルトレース、人型・複雑な土器の実測（トレースは含まない）は12年度から14年度まで民間業者に委託することとなった。14年度は13年度と同様、遺物の接合、復元作業、小皿などの小型遺物の実測、委託遺物の確認用写真撮影（上、横、下の三方向）、委託指示表作成、図面整理などを行った。

平成15年度は調査報告書作成の年であり、遺物・遺構図のトレース、遺物の分類、観察表の作成、報告書用写真撮影等、報告書刊行にむけての作業を行った。



第11图 调查区全体图 (1/500)

第1表 遺構一覽

区	遺 構 名
1区	SK-1,2,3
2区	SK-4,5,27,29, SD-1
3区	SK-15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,26
4区	SK-6,7,8,9,10,11,12,13,14,25 SP-1,2
5区	SK-30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46,47,59,60,66,67,68,69,83,84,101,102,103,104,137,138,139,140, 石列1, SP-1,2,3,4,5,6
6区	SK-48,49,50,51,52,53,54,55,56,57,58,61,62,63,64,65,67,68,69,70,71,72,73,74,85,86,87,88,89,90 SP-1,2
7区	SK-75,76,77,78,79,80,81,82,91,118,119,120,136,141,149
8区	SK-92,93,94,95,96,97,98,99,100,105,106,107,108,109,110,111,112,113,114,115,116,117,121,129, SE-1
9区	SK-122,123,124,125,126,127,128,130,131,132,133,134,135,142,143,144,145,146,147,148,150,151,153,154,160
10区	SK-155,156,157,158,159
11区	SK-163,164,165,172,173
12区	SK-171
13区	SK-189,190,191
14区	SK-160,161,162,166,167,168,169,170,174,175,176,177,178,179,180,181,182,183,184,185,186,187,188,192,193,194,195,196,197,198,199,200,208 SD-2 SP-1,2,3,4
15区	SK-201,202,203,204,205,206
16区	SK-207
17区	SK-209,210,211,212,219,220,223,238,239, 石列2, SD-3
18区	SK-213,214,215,216,217,218,221,222,224,225,226,227,228
19区	SK-230,231,232,233,234,235,236, SD-4, SE-2
20区	SK-240,241,242,244,245,246,247,248,249,250,251,252,253,254,255, SP-1,2, SD-5,6
21区	SK-256,257,258, 石列3, SE-3
22区	SK-259,260,261,262,263,264,265,266,267
23区	SK-268,269,270,271,272,273,274,275,276,277,278,279,280,281,282,283,284,285,286,287,288,289,290,291,292,293,294,295,296,297,298,299,300,301,302,303,304,306,307,308,309,312,313,314,315,316,317,319, SP-1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17, SD-7,8, 石列4,5,6,7,8
24区	
25区	SK-320,325,326,327,328,329,330,331,332,333,334,335,336,337,338,339,340,341,342,343,344,345,346,347,348,358, SP-1,2,3,4, SE-4
26区	SK-349,350,351,352,353,354,355,356,357,359,360,361,362,376,389,390,392,393,394,399,400, SP-1,2,3,4,5 SD-9,10, 石列9,10,11,12,13
27区	SK-363,364,365,366,367,368,370,371,372,373,374,375,377,378,379,380,381,382,383,384,385,386,387,388,391,395,396,397,398,401,402, SP-1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13, SE-5

第四章 遺構と遺物

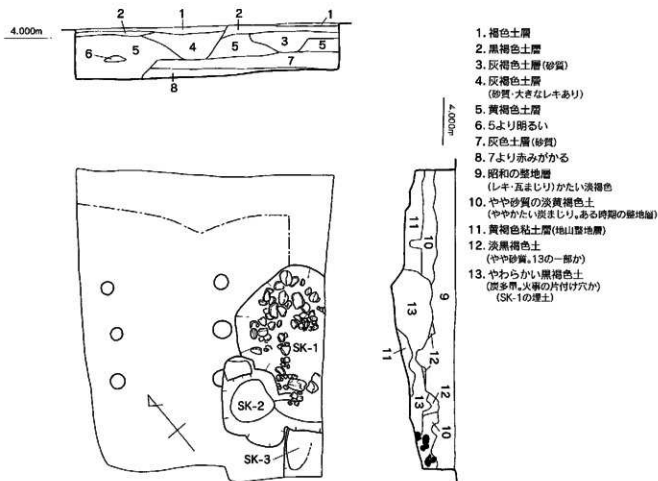
1区

(1) 遺構

南北約6m、東西約5.5mの調査区である。調査区東側に3つの土坑が重なる。地表から60cmほど下げたところで砂質の灰色土層の遺構面がでる。6個の柱穴が掘り込まれており、1間×2間、2.28m×2.0mの規模である。柱穴の心身距離は1.0m、直径は30~40cmである。SK-1は柱穴の後から掘られており、炭化物で真っ黒の土層で、礫も多数投げ込まれた攪乱層であった。SK-1, 2, 3とも柱穴とほぼ同じレベルより掘り込まれていることから、柱穴のある遺構面の建物が火災にあった際の片付け穴と思われる。SK-2からは19世紀前半代の遺物が出土している。

(2) 遺物

SK-2; 1は1820~1860年代の肥前磁器猪口。2も同年代の肥前磁器端反碗。3は18世紀末~19世紀前半の肥前磁器皿。蛇ノ目凹型高台。見込みに3個の目跡。



第12図 1区全体図・土層図 (1/80)

2区

(1) 遺構

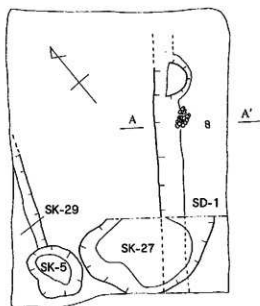
南北約6m、東西約4.7mの調査区。1区の東隣である。1区と同じく地表面より60cmほど低い、標高約3.6mで遺構面に達する。調査区南側に土坑が、東側に溝が検出された。SK-27は17世紀末～18世紀前半の土坑である。東西約2.7m、南北約1.6mの楕円形。

SD-1は南北方向に伸びる溝で、東側が調査区外になるため、東西幅は不明。上場の標高は約3.200m、下場は約2.200m、床面は平坦。溝には土師器小皿がまとまって投棄されていた。いずれもほぼ完形品であった。小皿の個体数は約20枚ほどであった。SD-1は17世紀初めの遺物が主体である。若干18世紀以降のものがまじるが、18世紀前半ごろと思われるSK-27のきりあいでは混入した、もしくはSD-1廃絶期が18世紀代であるとも考えられる。小皿完形品の一括投棄は溝廃絶時の地鎮的なものであろう。

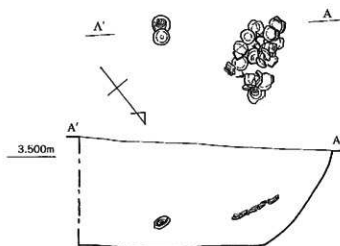
SK-5、SK-29はいずれも19世紀代の遺構である。SK-5の土層は炭化物で真っ黒で、SK-29には20cm大の礫が多数廃棄されていた。この様子は距離的に近い1区の土坑と似ており、連続する火災片付け穴と思われる。



第13図 2区全景



第14図 2区全体図 (1/80)

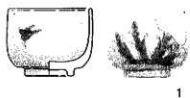


第15図 SD-1断面図 (1/40)

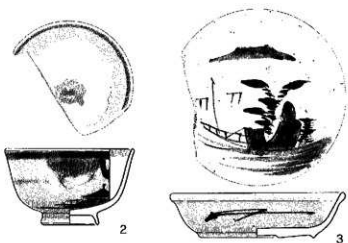


第16図 SD-1小皿出土状況

SK-2



1



1区

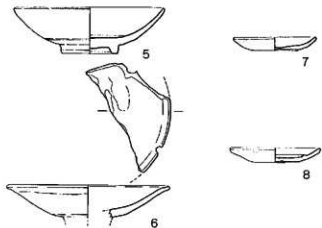
SK-5

2区



4

SK-27



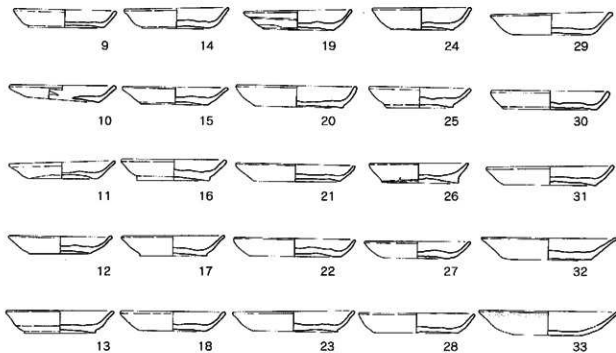
5

7

8

6

SK-28



9

14

19

24

29

10

15

20

25

30

11

16

21

26

31

12

17

22

27

32

13

18

23

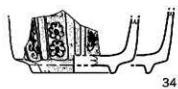
28

33

第17図 遺物実測図1 (1/3)

SK-28

2区



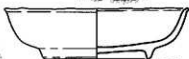
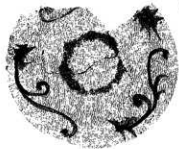
34



36



37



35



39



40



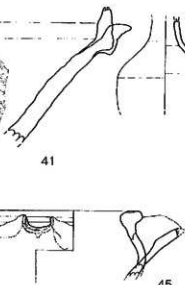
38



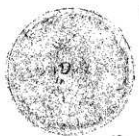
39



41



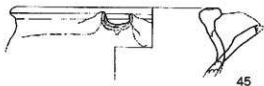
42



43



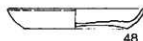
44



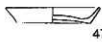
45



46



48

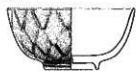


47



49

SK-29



50



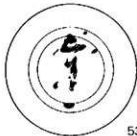
51



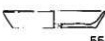
52



53



54



55

第18圖 遺物実測圖2 (1/3)

(2) 遺物

SK-5; 4は19世紀の関西系焼き陶器鉢。底部内面に刻印あり。

SK-27; 5は17世紀末～18世紀前半の肥前内野山窯の陶器皿。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。6は1600～1630年代の唐津溝線皿。見込みに砂目あり。7、8は内面に柿軸を施した土師器灯明受け皿。

SD-1; 9～23は北側ベルト出上の土師器小皿。10は底部に孔をうがつ。口縁部や内面に煤が付着しているものが多く、いずれも灯明皿として使用されたと見られる。24～33は下層出土の土師器小皿。34は1610～1630年代の肥前磁器碗。鍋が入る。35は18世紀前半の肥前磁器皿。高台内に「大明成化年製」銘あり。口縁部は輪花。ハリ支えの痕跡あり。36は1690～1740年代の肥前磁器小坏。コンニャク印判で体部外面に紅葉文様を描く。37は18世紀後半の肥前磁器くらわんか碗。38は1610～1630年代の肥前磁器皿。見込みに砂目あり。39は17世紀前半の陶器瓶。焼成不良。40は1590～1610年代の肥前陶器碗。底部に糸きり痕がのこり、見込みに4個の胎土目残存。41は17世紀前半の備前陶器鉢。42は1600～1630年代の唐津陶器瓶。43は18世紀後半以降の関西系陶器。器種不明。底部外面は無釉で、「田久」の墨書がある。44は1580～1610年代の肥前陶器瓶。底部に削りを施す。45は16世紀末～17世紀前半の灰釉の肥前陶器片口。46は陶器灯明皿。口縁部に煤付着。47、48、49は土師器小皿。

SK-29; 50は18世紀中頃～後半の肥前磁器碗。高台内に渦「福」の銘あり。51は18世紀末以降の肥前磁器小坏。52は高台内に「朝」の銘がある。18世紀前半に操業した久留米藩御用窯の朝妻焼である。53は19世紀以降の陶器蓋。底部に墨書があるが、判読不能。54、55は土師器小皿。

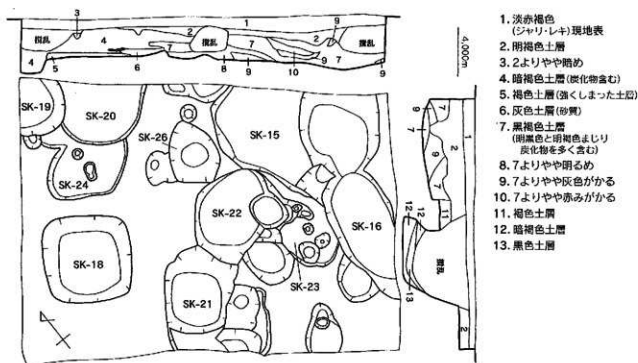
3区

(1) 遺構

南北約6m、東西約8mの調査区で、調査区全面に多数の土坑が掘られていた。標高約3.9mから、幕末の遺構面が検出された。SK-15は北壁にかかる大型の土坑で、深さ20～40cmのレンズ状で、北東隅でさらに35cmほど低くなる。遺物は17世紀、18世紀のものが一定量あり、最も新しいものは19世紀。17世紀代の遺物は深い部分に集中しており、時期差のある二つの遺構が重なっているものと思われる。浅い19世紀代の遺構は火災片付け穴と思われ、焼土や炭が大量に出土した。SK-19もSK-15と同様の19世紀中頃の火災片付け穴と思われるが、上層がレンガを含む近代の層に攪乱をうけているため、遺構の上層は不明である。SK-20を切る。SK-26も同じく19世紀中頃の土坑で、4区SK-8、5区SK-30と出土遺物が接合する。SK-18は一辺1.8m正方形、深さ約60cmの土坑。床面はほぼフラット。遺物は18世紀のものが少量出土したのみ。SK-21も床面が一辺約1.2mの方形である。18世紀後半～末の遺物が主体。SK-18、21は標高約3.600mから掘り込まれる。SK-22は18世紀後半の遺物が主体だが、一部19世紀のものもある。SK-15よりあとから掘り込まれているため、19世紀以降となる。



第19図 3区全景 西から東



第20図 3区全体図・土層図 (1/80)

(2) 遺物

SK-15: 56は19世紀前半～中頃の肥前磁器猪口。57, 58は18世紀前半の肥前磁器碗。59は1690～1740年代の肥前磁器皿。内面の蕪文様はコンニャク印判である。60の色絵磁器皿は中国製なら16世紀で、肥前製なら17世紀後半。61は18世紀以降の肥前磁器皿。62は17世紀後半代の肥前青磁香炉。3つの脚をもつと思われ、脚部は型打成形。63は19世紀以降の関西系鉄釉の陶器乗燗。底部に糸きり痕あり。64は18世紀前半の肥前磁器人形か。型打成形で、内部に布目痕を残す。染付けは青磁釉の色絵で、青、朱、黒、金彩で彩る。



第21図 SK-18

65は18世紀代の肥前磁器大皿。66～70は土師器小皿。いずれも口縁部や内面に煤付着。

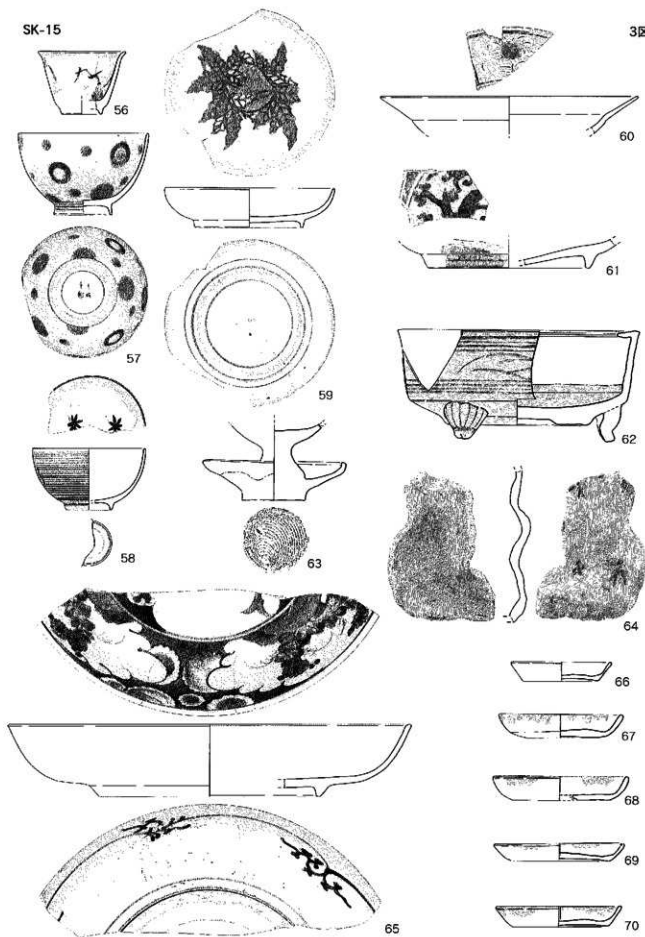
SK-18: 71は18世紀後半以降の肥前波佐見焼の磁器碗。72は軒丸瓦。左三つ巴で、珠文は11個。

SK-19: 73は明治前半の瀬戸美濃製磁器皿。型打成形でコバルトの口錆を施す。74は明治10年代の磁器輪花皿。見込みは蛇ノ目軸刺ぎ。型打成形で、製作地は瀬戸または肥前。75は明治10年代の陶器植木鉢。陶胎染付で山水と家屋を描く。製作地は肥前以外。高台に二箇所半円形の切り込みを入れる。

76は18世紀後半以降の肥前白磁紅皿。型打成形で、型押の蛸唐草文様を施す。77は19世紀以降の備前系陶器徳利。底部に刻印あり。78は1630～1650年代の肥前波佐見焼の磁器装飾品。79は陶器土瓶。象嵌

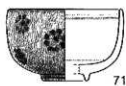
SK-15

3区



第22回 遺物実測図 3 (1/3)

SK-18



71



3区



72

SK-19



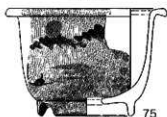
73



74



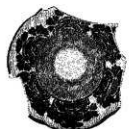
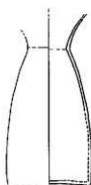
75



76



77



79



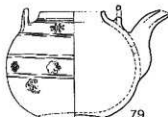
80

81

82

83

84



85

SK-21



86



87



88

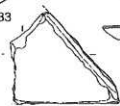


89

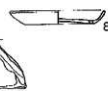


90

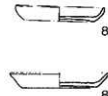
91



92



93



94



95



96

97



98

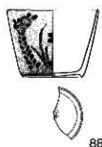
99

100

第23图 遺物実測図 4 (1/3)

SK-22

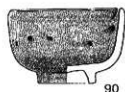
3区



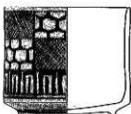
88



89



90



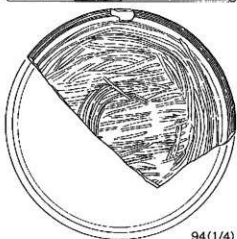
91



92



93



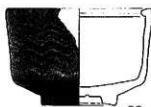
94(1/4)

SK-24

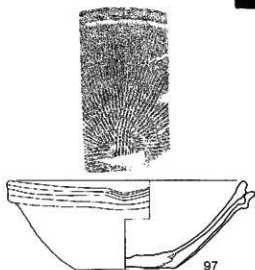


95

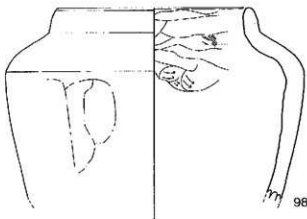
SK-26



96



97



98

第24图 遗物实测图 5 (1/3)

で花を描く。

SK-21; 80は18世紀末以降の磁器くわんか碗。高台内に渦「福」の銘あり。81は18世紀後半以降の磁器湯飲み。高台内に「乾」の銘あり。82は18世紀後半以降の関西系京焼風の陶器碗。83は17世紀後半～18世紀前半の陶器火入れ。被熱している。84は軒平瓦瓦当。文様不明。85～87は土師器小皿。85は底部に焼成前の3つの穿孔がある。

SK-22; 88は18世紀末の肥前磁器猪口。高台内に渦「福」の銘あり。89は19世紀前半の肥前磁器蓋。90は18世紀前半の肥前陶胎染付碗。91は18世紀後半以降の肥前磁器火入れか。92は陶器仏花瓶か。回転糸きり痕あり。93は土師器小皿。94は土師質土器蓋。内外面全体に庵籠きを施す。

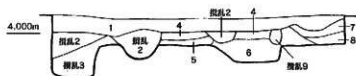
SK-24; 95は18世紀後半以降の肥前色絵磁器仏飯器。

SK-26; 96は17世紀後半～18世紀前半の肥前陶器火入れ。97は18世紀～19世紀の陶器播鉢。製作地は堺または備前。98は在地系瓦質土器壺。内外面指など、板状の削り痕。

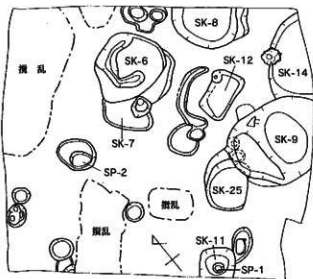
4区

(1) 遺構

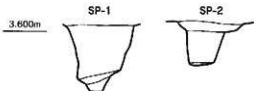
南北5.5m、東西6.5mの調査区で、全面に土坑、ピットが掘られていた。SK-9は大正後期～昭和初期のごみ捨て穴で、SK-14を切る。SK-14は明治10年代。SK-8は19世紀前半～中頃。3区SK-19、26、5区SK-30と遺物が接合する。SK-6は18世紀末～19世紀の遺物が少量出土している。SK-9、24と遺物が接合する。SK-9が大正後期～昭和初期の土坑であることから、SK-6も同時期と考えられる。またSP-1と2はしっかりした深い穴で、柱穴と思われる。SP-1は上場の掘り方が一辺70cmの方形、中心が直径25cmの円形、深さ約70cm、SP-2は上場の掘り方が80cm×70cmの浅い楕円形、中心が50cm×30cm、深さ45cmの楕円形である。他にもピットはあるが、浅いものが多く、建物の配列は見ない。



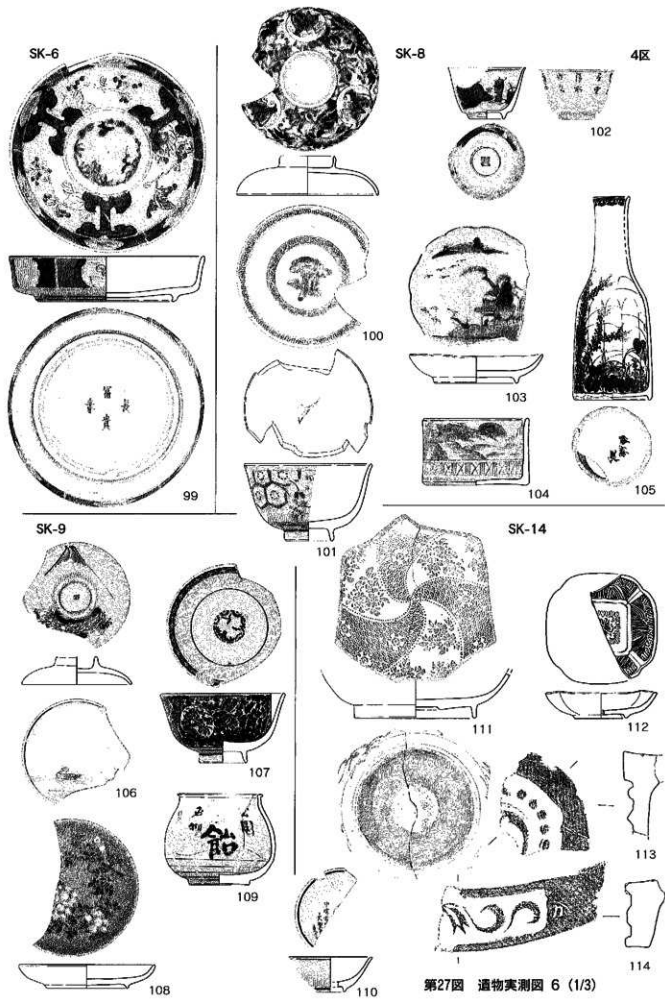
1. 淡赤褐色(ジャリ・レキ)現地表
2. 黒褐色土層
3. 明褐色土層 (コンクリル片・ビニール含む)
4. 褐色土層(10～20cmのレキを多く含む)
5. 褐色土層(やや砂質)
6. 暗褐色土層(炭を多く含む、陶磁器・瓦片)
7. 明褐色土層(2とほぼ同じ、20～30cmのレキ含む)
8. 明褐色土層(20～30cmのレキ含む)
9. コンクリル片を含む



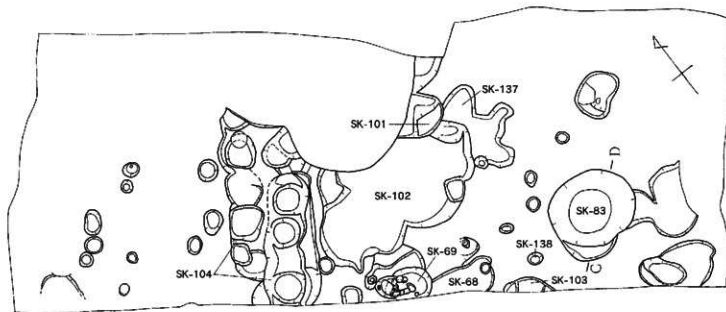
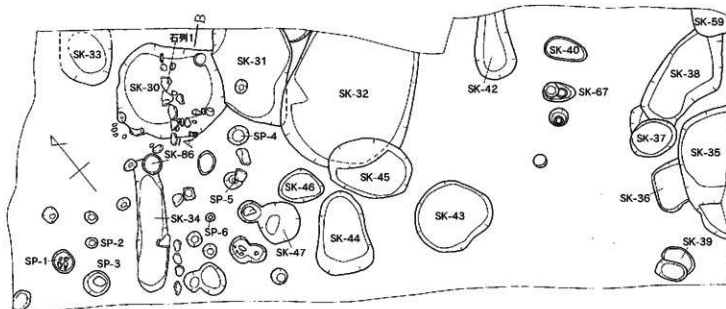
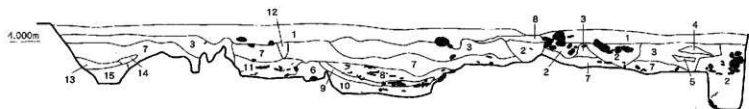
第25図 4区全体図・土層図 (1/80)



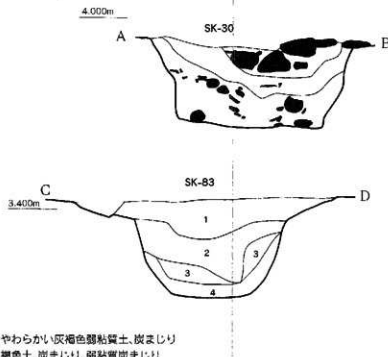
第26図 4区SP-1・SP-2断面図 (1/40)



第27图 遺物実測図 6 (1/3)



第28図 5区全体図・土層図 (1/80)



1. やややわらかい灰褐色膠粘質土、炭まじり
2. 黄灰褐色土、炭まじり、弱粘質炭まじり
3. 淡灰色土、黄土粒、やや炭まじり
4. 灰色土、黄土粒、1-2-3より炭多し(含水率高)

第29図 SK-30-SK-83土層図 (1/40)

1. 道路を作る時の整地層
2. 褐色土・やわらかい灰・石・ガラスなど、新しい近構
3. 2よりやや溜め
4. 黄褐色弱砂質土
5. 褐色土・炭・焼土のかたまりあり
6. 黄褐色土・炭・焼土の大きなかたまりあり
7. 淡褐色土・炭・焼土のかたまりあり、陶磁器若干含む
8. 褐色土炭多量。下層に炭層あり、瓦・陶磁器大皿
9. 炭層
10. 明黄褐色、弱砂質土、炭・焼土のかたまりやや含む。瓦・陶磁器若干含む
11. 褐色土、炭あり、陶磁器含む
12. 褐色弱砂質土
13. 黄褐色弱粘質土
14. 炭層
15. 灰褐色弱粘質土
16. 黄褐色粘質土(近代の整地層)(小石・ガラス・瓦)
17. 淡褐色土、炭まじり(遺物、石ともほとんどなし)
18. 暗灰褐色土(レキ・陶磁器・ガラス)(近代のゴミ捨て穴)
19. 非常にやわらかい灰褐色土(遺物なし)
20. 淡黄褐色土(遺物ほとんどなし)
21. 灰褐色弱粘質土(20cm大の石、炭あり)
22. 21と同色小石が多い、炭あり
23. 黄褐色土、石・瓦・陶磁器多量(炭あり)
24. やわらかい黄灰色土(少量遺物あり)
25. 暗灰色土、やややわらかい(黄土粒まじり)
26. 黄灰色弱粘質土
27. 暗黄灰色土(炭多量、焼土、火事の片付け穴か?)
28. 17と同色だが、17よりやわらかい(20cm大の石で埋められている)

(2) 遺物

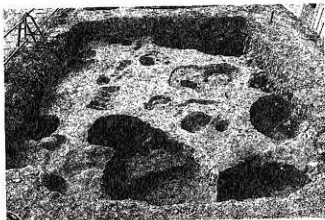
SK-6; 99は18世紀末～19世紀の肥前磁器色絵皿。金と朱で七絵付けをする。高台内に「富貴長春」の銘あり。

SK-8; 100は18世紀後半～末の肥前磁器蓋。101は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。102は19世紀前半～中頃の関西系磁器猪口。喫茶する人物と漢詩を丁寧に描き、高台内には落款を施す。また高台周縁に工具痕がめぐる。103は19世紀前半～中頃の肥前皿。型打成形で、口鏝

あり。104は18世紀末～19世紀前半の肥前磁器火入れ。105は19世紀前半～中頃の磁器徳利。製作地不明。体部は面取りを施す。底部に「□□製」と書かれるが、判読不能。

SK-9; 106は大正後期から昭和初期の磁器蓋。クロム青磁の上絵付け。銘があるが、判読不能。107は明治10年代の肥前磁器端反碗。型紙刷り。108は大正後期～昭和初期の磁器皿。109は明治前半の関西系陶器絵壺。外面に「公園 名物 飴」の文字あり。底部に回転系きり痕残存。

SK-14; 110は明治10年代の瀬戸磁器小坏。内面に「中津占 大賀 支店」の文字が読める。「中津古博多町大賀屋支店」であろうか。111は明治10年代の肥前磁器皿。型紙刷り。蛇ノ目凹型高台。焼成不良で、発色が悪い。112は19世紀以降の瀬戸美濃製白磁皿。方形の型打成形。押型で文様を描く。113は軒丸瓦瓦当。左三つ巴。114は萬文軒平瓦。瓦当面に「分」の刻印あり。



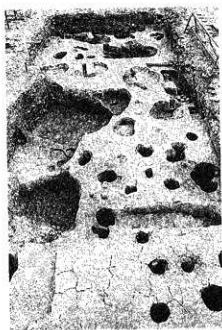
第30図 4区全景 東から西

5区

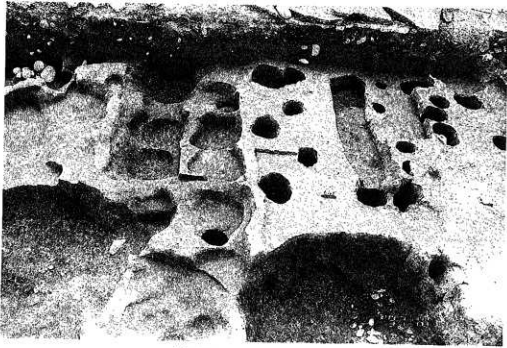
(1) 遺構

南北6m、東西14.5mの横長の調査区。標高4.000mの明治後半以降の遺構面、標高3.600m～3.700mの18世紀後半～19世紀中頃の遺構面（上層）、3.500m～3.600mの17世紀後半の遺構面（下層）がある。明治期以降はSK-42、SK-59で、SK-59は深さ約1.4mの竪穴である。瓦やレンガが廃棄されていた。

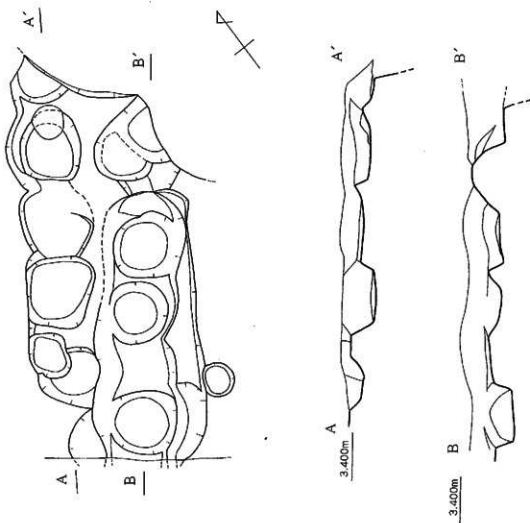
19世紀代としては、SK-30,31,32,33,35,36,42,44,45。SK-30,31,32はほぼ同時に掘られた廃棄土坑で、19世紀中頃の陶磁器を中心とした遺物が大量に廃棄されていた。中でもSK-32の遺物量は膨大で、陶磁器が密集してかさなりあっていた。遺構は東西2.7m、南北は調査区外で不明、床面は平坦、大きく上層と下層に分かれる。二つの層の間には10cmほどの厚い炭層があった。SK-30,31にも炭や焼土の塊が多く含まれており、これらは火災の片付け穴と考えられる。SK-33は直径約110cm、深さ約60cmの床面フラットな土坑。北壁にかかり全形不明。SK-35は5区東壁にかかる長径約2.8m、深さ約40cmの不定形土坑。大ききの割に遺物は少量。SK-36は深さ約15cmの浅い穴で、SK-35に切られていることもあり、SK-35と出土遺物が接合する。SK-44は長径約180cm、深さ約15cmの楕円形土坑。SK-45は長径約170cm、



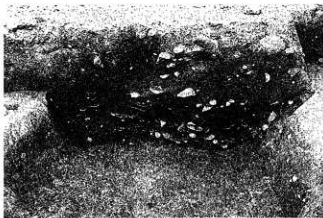
第31図 5区全景 西から東



第32図 SK-104 北から南



第33図 SK-104 平面図・断面図 (1/40)



第34図 SK-32断面

SK-37、38、43、102である。SK-37は直径約100cm、深さ約25cmの円形土坑。17世紀前～後半の遺物が出土。SK-38はそのSK-37に切られる細長い不定形土坑で、深さ約50cm。18世紀代の遺物が少量出土しているため、SK-37も18世紀代の土坑か。SK-38は埋められた後、黄色粘土で蓋をされていた。SK-43は長径約150cm、深さ約20cmの円形土坑。同じ位置の下層にSK-102が掘られているため、遺物が接合する。SK-102は深さ約20cmほどの、大型の不定形土坑。SK-32に切られる。17世紀後半の遺物を少量含んでいる。SK-43の遺物はSK-102のものであり、SK-43は18世紀代の土坑であろう。SK-83は直径約180cm、深さ約80cmの円形土坑である。16世紀代の遺物が少量出土している。

5区の遺構で注目されるのは下層に掘り込まれたSK-104である。標高3.400～3.500mから掘り込まれ、直径約70～80cm、深さ約35～55cmの円形土坑が南北に連続する。西側には4～5個確認できるが、北側をSK-31に切れ、不明。東側には3個確認できるが、南側が調査区外にのびるため、不明。床面はいずれもフラットで、西側列より東側列の方が深い。甕のような物が並べられていたのだろうか。埋土は炭まじりの暗灰褐色砂質土で、硬く、地山土と区別がつきにくかった。遺物はほとんどなく、小さな土師質土器のかけらが微量に確認できるのみで、年代は不明。

5区の調査区内のピットには、いくつか柱穴と思われるものもあった。床面に石が据えられているものもあったが、建物の配列は確認できなかった。

(2) 遺物

SK-30: 115は19世紀中頃の関西系磁器猪口。竹林の賢人と詩歌を描く。高台内には「大明嘉清年製」銘。116は19世紀前半の関西系磁器猪口。高台内の銘は「道八」。117は19世紀前半～中頃の関西系磁器猪口。外面、高台内とも面取りされる。外面には「道八造」の文字あり。118は19世紀の関西系磁器小坏。外面は面取りされる。刻印あり。焼継がなされる。119は19世紀中頃の肥前磁器碗蓋。120は19世紀中頃の肥前磁器段重蓋。外面に色絵を描く。121は19世紀中頃の肥前磁器碗蓋。122、123は19世紀中頃の瀬戸美濃製磁器皿。型打成形。124は関西系の磁器皿。型打成形。目跡が3つある。源内または淡路産。125は19世紀中頃の肥前磁器碗。126は18世紀後半の肥前磁器碗。127、128は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。129は19世紀中頃の肥前磁器鉢。蛇ノ目凹型高台で、口縁を施す。130は19世紀中頃の肥前磁器段重。焼継あり。131は19世紀前半～中頃の肥前磁器楕円皿。型打成形。高台内に「玩」の銘あり。132は三田青磁の水滴。型打成形で柳と人物を描く。底部に黒書あり。133は白磁水滴。型打成形で馬形。頭部、胴部、底部を別々に造り接合した接合痕がある。134は青磁の小型容器で、器種不明。型打成形。135、136は18世紀後半関西系の陶器土瓶。白土のイッチン掛け。137

深さ約40cmの楕円土坑で、SK-32を切る。

SK-34は南北約280cm、東西約60cm、深さ約30cmの南北に細長い溝状土坑。床面はフラットで、上坑の東側には25cmほどの石が南北に一列に並ぶ石列1が並行する。石列1とSK-34は連続する遺構と思われ、SK-34は溝と考えた方がよいだろう。これらはSK-30を切っており、明治期以降であろう石列1の上場は標高3.800m、SK-34の上場は3.700mである。

17世紀後半から18世紀代にかけての遺構は

は関西系の陶器蓋。黒、白、黄色の色絵で、イッチン掛け。138は19世紀の関西系陶器土瓶蓋。型打成形。139は関西系の陶器瓶。底部に小さな粒状の足を5つ貼り付ける。140は18世紀後半以降の関西系陶器油注。141は19世紀以降の関西系陶器土瓶。142は19世紀以降の関西系陶器急須。底部に黒書あり。「ミツ」か。143は関西系陶器上鍋。貝塚・音羽焼き。釉薬なし。全面指押さえによる成形。外面煤付着。内面に焦げた痕跡あり。144は18世紀前半の内野山窯の陶器皿。見込み蛇ノ日輪刺ぎ。145は関西系陶器灯明皿。口縁部に煤付着。146は1570～1630年代の備前陶器大甕。147は18世紀以降の小石原系陶器甕。148は陶器茶器か。製作地は京焼きか朝鮮か不明。胎土に白泥練りこみ。内面も白土で化粧している。149は土師器小皿。底部外面に墨書あり。「ミノ井 サトシ」の文字が拾えたが、意味不明。150は18世紀前半の肥前現川系陶器瓶。鉄軸に白土で刷毛目文様。151、152は18世紀後半以降の関西系陶器鉢。見込みに4つの日跡残存。153は陶器瓶。鉄軸を施し、胴部下半に釉だれしている。SK-31; 154は19世紀前半～中頃の瀬戸美濃製磁器皿。型打成形。155は18世紀代の肥前磁器水滴。型打成形。底部布目痕あり。156は18～19世紀代の土製型打人形。素焼き。157は1820～1860年代の肥前系磁器碗物の蓋。158～161は土師器小皿。158は口縁部に二箇所焼成前の切り込みがあり、煤がめぐっていることから、灯明皿として使用されている。162は軒丸瓦。163は陶器花入れか。巻貝の装飾物を貼り付ける。底部外面に刻印あり。164は18世紀後半～19世紀前半の陶器甕。素焼きの焼き締め陶器。

SK-32; 165は19世紀代の中国製磁器猪口。166は19世紀代の関西系磁器猪口。底部に「道八」銘があるが、コピー品か。167、168は19世紀代の肥前磁器猪口。168の底部には落款あり。169は18世紀後半以降の肥前磁器猪口。170は19世紀代の瀬戸美濃製の磁器猪口。171は19世紀代の肥前磁器碗。172は型打成形の白磁紅皿。173、174は19世紀代の肥前磁器紅皿。173は体部外面に「玉川」の文字あり。174には「大坂新町おせ紅」の文字あり。175、176は1820～1860年代の肥前磁器椀物蓋。175の外面には城、内面には龍を描く。176の見込みに「永楽年製」銘あり。177は1820～1860年代の肥前色絵磁器端反碗。178は19世紀代の肥前磁器碗。179は18世紀後半の肥前磁器碗。「大坂志んさいはし南清とき八紅」の文字あり。くらわんか手の碗を紅皿に転用したもので、19世紀に清水で色絵付けを施す。180は18世紀後半の磁器碗。181は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。外面に城、内面に龍を描いており、175の蓋とセットになる。182は19世紀代の瀬戸美濃製磁器碗。183、184、185は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。183は目跡が4つある。185は見込みに重ね焼き痕あり。186は19世紀代の肥前磁器碗。うがい茶碗か。187は19世紀代、直方体の肥前磁器筆筒。188は磁器水滴。船形の型打成形。底部に布目痕残存。「口ス」の墨書あり。189、190、191は19世紀代の肥前磁器鉢。いずれも蛇ノ目凹型高台。189は風景、竹等の染付けに朱で上絵付けをする。口縁部は輪花で口紅は金彩。高台内に上絵による落款がある。190は部分輪花。191は型打の六角鉢。金と朱で上絵付けをする。高台内には上絵付けによる落款「肥」がある。192は瑠璃軸の磁器鉢。型打成形で八角形。193は17世紀末～18世紀前半の肥前磁器皿。型打の菊花形。194は19世紀代の肥前磁器鉢。方形の型打成形。口縁部は輪花。見込みに重ね焼きの痕跡あり。195は19世紀の磁器鉢で青磁染付け。蛇ノ目凹型高台。口縁部は輪花。196は京焼系陶器急須。体部外面に「道八」の文字があるが、コピー品。把手に焼痕あり。197は関西系の磁器急須。198は19世紀代の肥前磁器角皿。高台内に「玩」の銘あり。焼痕あり。199、200、201、202、203は19世紀代の肥前磁器皿。いずれも口縁部輪花。199、200は蛇ノ目凹型高台。199は口鎖あり。202は高台内に銘があるが、欠損のため不明。203は高台内に「成化年製」銘あり。204は19世紀の磁器八角皿。型打成形。高台内に「乾」の銘あり。205は肥前白磁角皿。型打成形。206、207は瀬戸美濃製磁器皿。206は白磁型打成形の寿文皿。1855年以降の製作。207は染付けの型打成形。

208、209は磁器仏飯器。208は18世紀後半～19世紀中頃の肥前製色絵。209は瑠璃釉で、製作地は不明。210は19世紀～幕末の肥前白磁皿。菊花形の型打成形で、口紅を施す。見込みに4つの目跡あり。蛇ノ目軸剥ぎの凹型高台。211、212、213は肥前磁器段重蓋。19世紀代。214は19世紀代の肥前磁器合子。底部は碁笥底。19世紀代。215は三川青磁の香炉。貼り付け高台。型打成形で内面には指押さえの跡が残る。216は19世紀の肥前磁器火入れ。217、218、219は19世紀代の肥前磁器段重。220も同じく肥前磁器段重であろうか。見込みに二匹の龍が丁寧に描かれている。底部は蛇ノ目凹型高台である。221は19世紀の肥前磁器御神酒徳利。222、223、224は19世紀代の肥前磁器瓶。224は人物と漢詩が描かれ、把手の痕跡が残る装飾的な瓶である。225、226は19世紀代の磁器燗徳利。226は肥前色絵だが、225は肥前以外の製作で、植物が丁寧に描かれる。227、228は19世紀の肥前磁器皿。どちらも焼継がなされる。高台内の銘は227は「乾」、228は「天明成化年製」。229～238は陶器土瓶と蓋。231は製作地不明だが、他は全て関西系。229と230はセットである。232は汽車土瓶。233と235の底部には回転糸切り痕あり。239、240は陶器急須。製作地不明。239は底部に糸切り痕があり、墨書も確認できる。「ヒウ」か、ウを書き間違えてツを重ねている。240は胴部下に墨書がある。いずれも判読不能。241は18世紀代の関西系鉄軸の陶器鉢。242は清水焼の陶器碗。灰緑に色絵を施す。「清」の刻印あり。243は19世紀代関西系の陶器小皿。244は瀬戸の陶器紅皿。245は信楽系の陶器碗。246は関西系の陶器局鉢。247、248は陶器片口。247は焼継あり。見込みの目跡が247には3つ、248には5つ確認できる。249、250は陶器行平。いずれも鉄軸で胴部は飛び鉋を施す。249は18世紀後半の関西系で把手は面取りがなされる。251は19世紀代の関西系陶器灰落とし。底部に墨書あり。「セタヤ」とあり、タは多の略字。「総町台帳」に享保年間から「勢田屋」の名前が確認できる。「勢田屋」は町年寄りも勤めたほどの新博多町の豪商である。252、253は関西系陶器鍋の身と蓋のセット。254は19世紀代の陶器鍋。製作地は不明。下部に足の痕跡あり。255は19世紀代の関西系陶器徳利。底部全面に墨書あり。何度も重ねてかかかれているため、全ての文字を拾うことはできなかったが、「元治二年 賀寿 丑正月」の文字が読み取れた。元治二年とは1865年にあたる。256は「べこかん型」の陶器徳利。底部に刻印あり。257～261は陶器瓶。257、261には糸切り痕あり。258は関西系で布目痕あり。260は肩部に「山」の刻印あり。261は小石原または小鹿田焼系。262は19世紀代の関西系陶器灯明皿。口縁部に煤が付着。見込みに目跡2つあり。263、264は19世紀代の関西系陶器灯明受け皿。264は台付き。265は鉄軸の陶器壺。底部糸切り痕あり。266、267は陶器揃鉢。266は18世紀前半～中頃の堺製。底部内面に鉄製品付着。267は19世紀代の唐津系。268は鉄軸の陶器鉢。底部に糸切り痕残存。見込み蛇ノ目軸剥ぎで、砂目あり。269は鉄軸の陶器甕。口縁部に6つの目跡あり。270は鉄軸に白釉を掛け流した陶器甕。外面一部被熱している。釘状貼り付けあり。271は土師質土器鉢。全面銀色にいぶし。内外面全面丁寧に磨き。見込みと底部に放射状の調整痕あり。272は土師質土器甕。輪積みの痕跡あり。タタキ痕あり。胴部に把手を貼り付けている。273は19世紀代の土師質土器鉢。宇佐の高村焼。口縁部内面に赤色顔料を施す。内面は口縁部以外全面磨き、外面は削り。274、275は土師質土器焙烙。外面に煤が付着している。274は在地系。275は高村焼で、口縁部以外の内面を全面磨く。外面は削り。把手を貼り付けている。276は高村焼の土師質土器甕セイロ。口縁部内外面及び内面全体磨き。体部外面は回転篋削り。口縁下部に幅広の突帯を一条持つ。277は19世紀代の土師質土器落雁型。外面は指頭痕で覆われる。278は高村焼の土師質土器こね鉢。口縁部内外面及び内面全体磨き。体部外面は回転篋削り。口縁部内外面に赤色顔料を塗る。見込みに赤色顔料で文字のようなものを描く。279～285は瓦質土器。279は在地系煙炉。風通しの7つの穿孔が二箇所ある。高台に穿孔が一つある。280は瓦質土器焙烙。内外面丁寧に磨き。黒灰色の光沢あり。281、282は瓦質土器鉢。281は外面黒色の光沢あり。282は

内面に細い渦巻き状の条痕あり。外面には柳の回転印文がめぐる。283、284、285は火鉢。19世紀前半～中頃。いずれも型打成形による獅子頭の把手がつき、外面に赤色顔料を施す。283は筒型で、篋磨きの痕跡あり。286、287、290、291は軒平瓦当。286、290は橘文。290は小倉城と同范か。291は棧瓦。文様帯に「分」の刻印あり。288、289は軒丸瓦当。292～296は土師器小皿。297、298、300は石の硯。297の外郭は面取りがされている。298は輝緑凝灰岩で、裏面に「赤間関」の刻字がある。299は銅製品の松葉型簪。301は土師質土器線香立て。外面黒くいぶされており、花型の印文がめぐる。高台内に「可石シス」の墨書あり。302は関西系の土師質土器急須。薄手の素焼き。底部布目痕。把手に刻印あり。303は土師質土器涼炉。外面に「鶴口好」の刻印あり。304、305は土師質土器焼炉。304は外面に「遠葉」？の刻印あり。305は高村焼。3つの脚と2つの把手をもつ。

SK-33; 306は薄手の肥前磁器小坏。307は端反の肥前磁器碗。308は磁器急須で、肥前以外の生産。309は肥前磁器段重。306～309は19世紀代。310は現川系の陶器鉢。17世紀末～18世紀前。311は18世紀の肥前色絵磁器皿。やけひずみが見られる。312も18世紀の肥前磁器大皿。高台内に「□明成□年製」の銘あり。

SK-35; 313は19世紀の肥前磁器端反碗。314は19世紀肥前磁器瓶。315は土製の鈴。鳩か。内部に土製の玉が残っている。316、317、318は土師器小皿。小型で口縁部に煤付着。319は瓦質土器火鉢。19世紀代。320～323は軒平瓦。320はSK-32の287と同じ文様。321は橘文で、SK-32の290と同じ文様。322は柏葉文。323は半菊文。隅に使用された軒平瓦で、三角形を呈す。324は軒棧瓦。右二つ巴の丸瓦部のみ残存。

SK-37; 325は型打の白磁人形。獅子か。326は17世紀前半、上野高取系の陶器碗。327は17世紀後半の陶器皿。鉄軸と緑釉のかけ分け。見込みに重ね焼きの痕跡があり、高台に3つの胎土日残存。328は17世紀前半の上野高取系の壺底部。底部内面に、4個の日跡残存。

SK-38; 329は18世紀の肥前磁器小壺。貫入が入る。330は17世紀後半の肥前陶器中皿。見込みに砂日積みの目跡が5個残存。

SK-42; 331は19世紀後半の肥前磁器れんげ。内面に植物文様を施す。332は関西系の陶器水注。二つ巴の文様。18世紀以降か。333は菊紋の軒丸瓦。

SK-43; 334は17世紀後半の肥前陶器鉢。底部は故意に打ち欠いてあるか。335は藁灰釉の陶器花生底部。高取系と思われ、17世紀後半か。

SK-44; 336は18世紀後半の肥前磁器碗。337は19世紀の肥前磁器端反碗。338は18世紀末の肥前磁器湯飲み碗。339は18世紀終わりから19世紀の肥前磁器広東碗。340は19世紀の関西系の陶器乗燗。341は19世紀の関西系の陶器灯明皿台。340、341とも、底部に糸きり痕あり。342は半菊文軒平瓦。343は在地形土師質土器の焙烙。内面へら磨き。344は19世紀関西系の陶器土瓶。胴折型で、三つ足タイプ。肩に耳が剥落した痕跡あり。

SK-45; 345は19世紀関西系の陶器蓋。底部に糸きり痕あり。

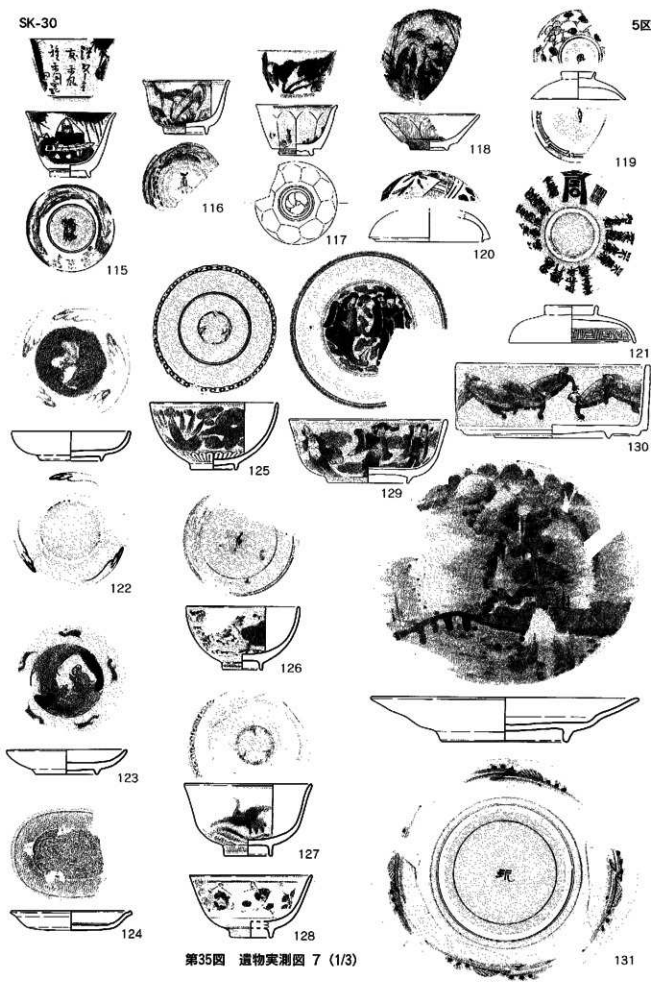
SK-47; 346は19世紀三田青磁の角皿。

SK-83; 347は16世紀瓦質土器播鉢。348は土師質土器播鉢。

SK-102; 349～354は土師器小皿。355は17世紀後半内野山製陶器皿。見込み蛇ノ日軸刺ぎ。銅緑釉と鉄釉の掛けわけ。356は高村焼の土師質土器焙烙。外面削り。一部煤付着。

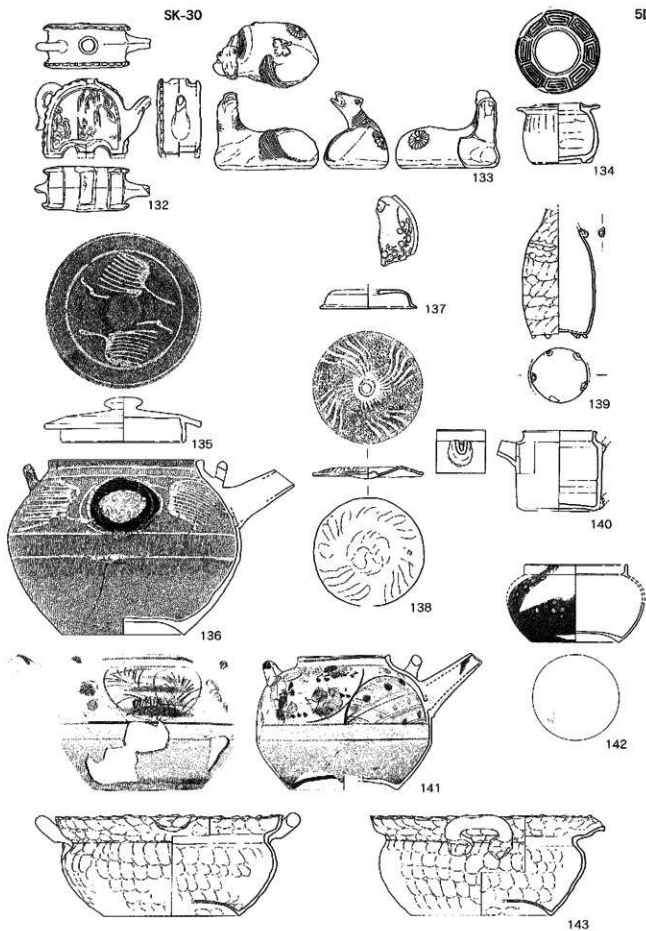
SK-30

5区

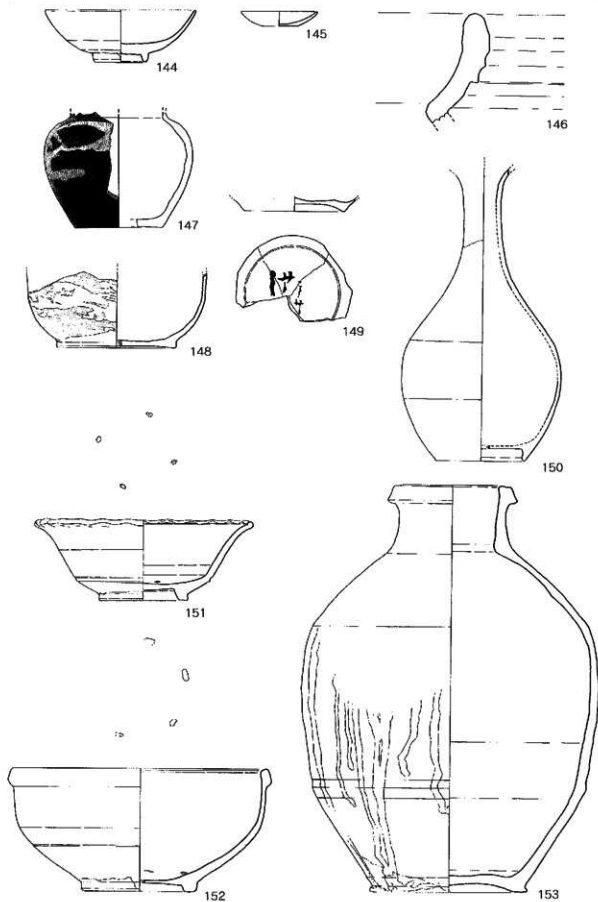


第35图 遺物実測圖 7 (1/3)

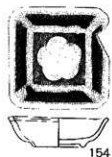
131



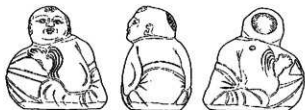
第36图 遗物実測図 8 (1/3)



第37圖 遺物実測図 9 (1/3)



154



155



156



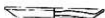
157



158



159



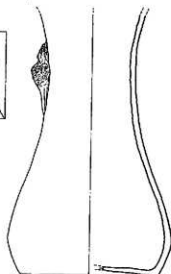
160



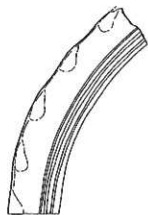
161



162



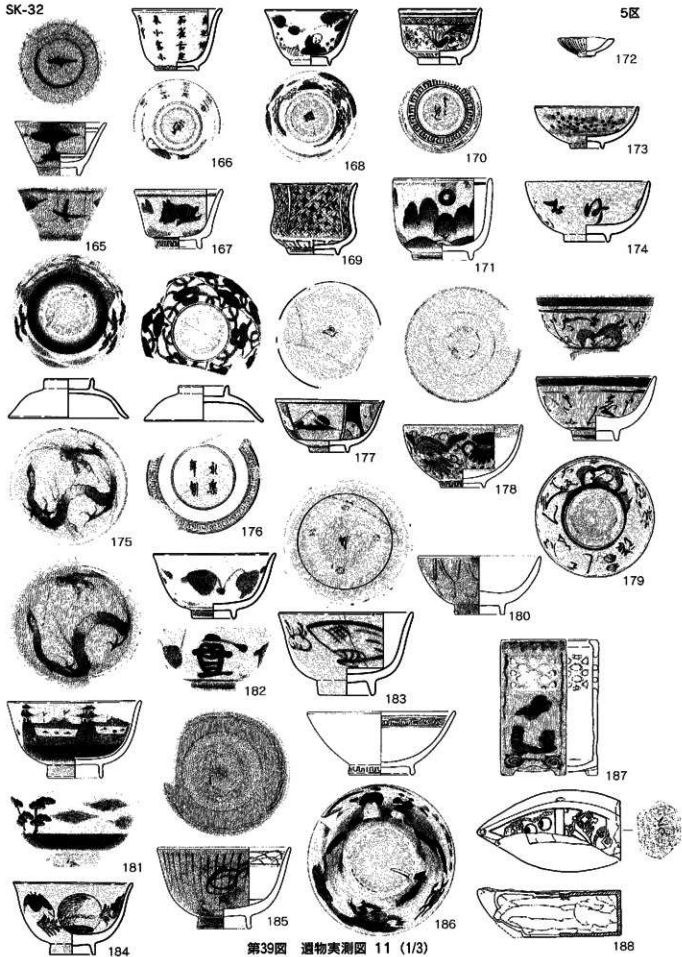
163



164

第38图 遺物実測図 10 (1/3)

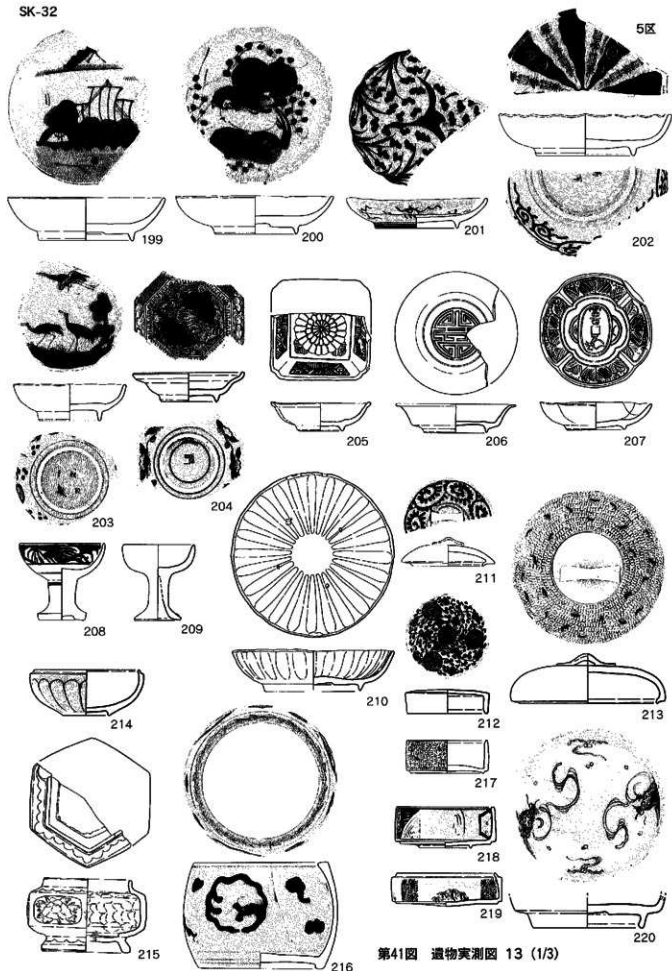
SK-32



第39图 遺物実測図 11 (1/3)



第40图 遗物実測图 12 (1/3)



第41圖 遺物実測圖 13 (1/3)

SK-32



221



222



223



224



225

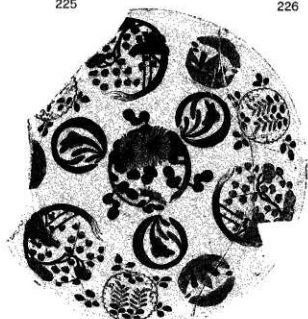


226

5区



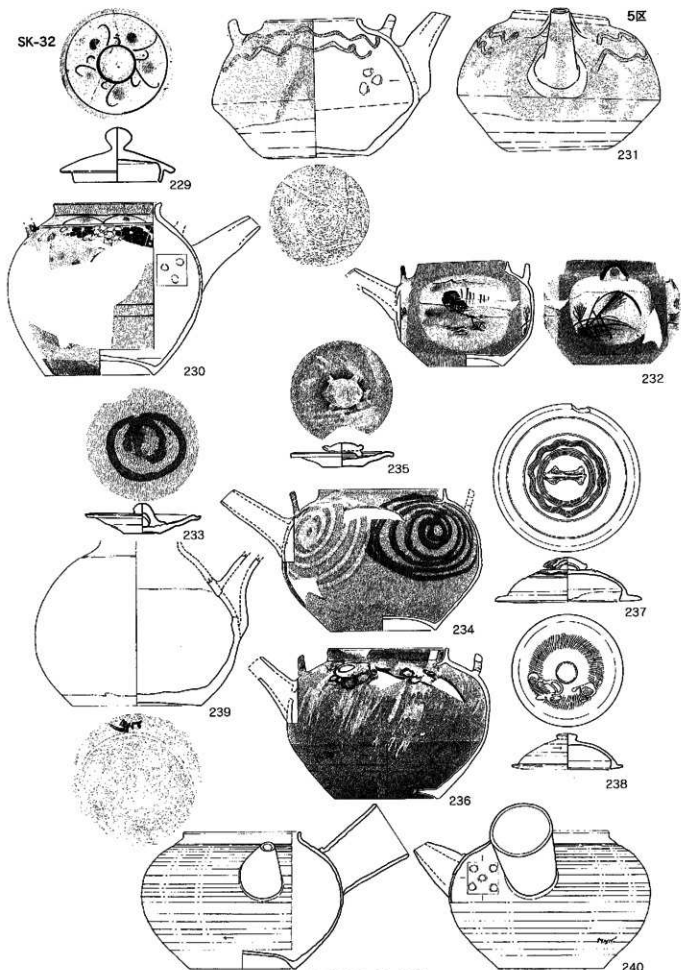
227



228



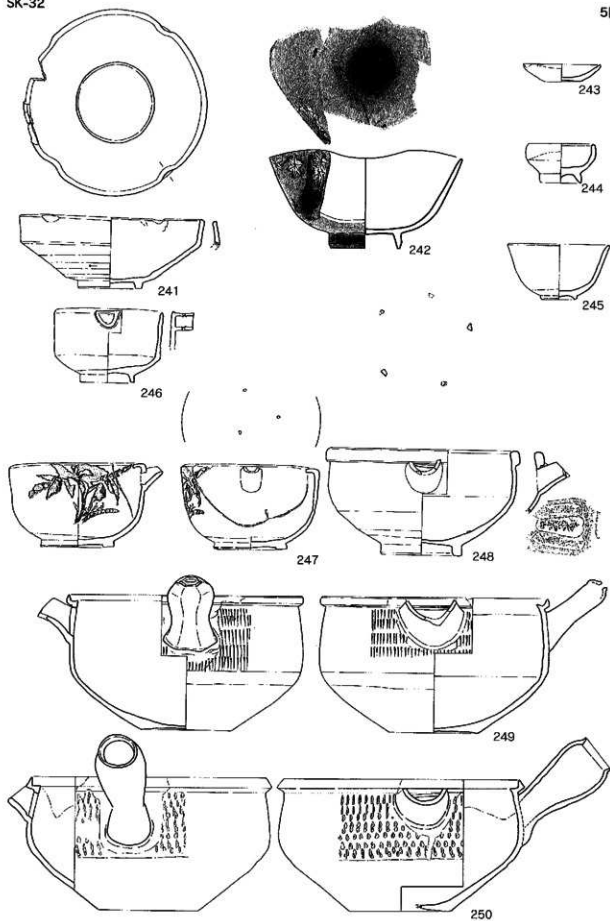
第42図 遺物実測図
14 (1/3)



第43图 遗物実測图 15 (1/3)

SK-32

5区



第44圖 遺物実測図 16 (1/3)

SK-32

5区



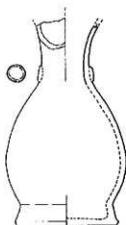
251



254



253



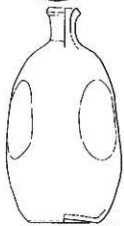
257



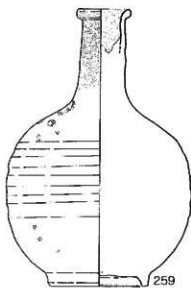
258



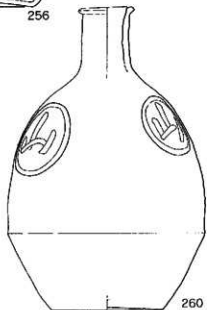
255



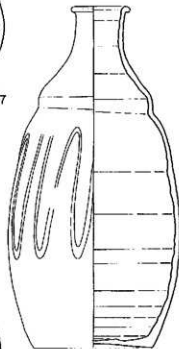
256



259



260



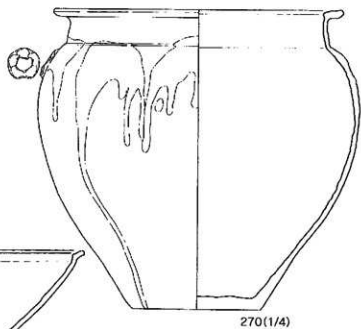
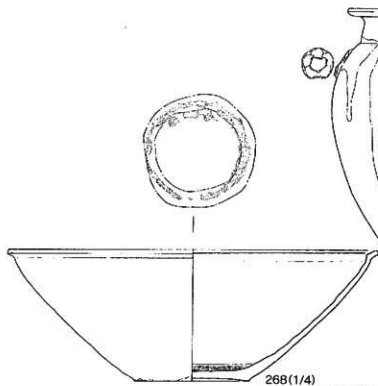
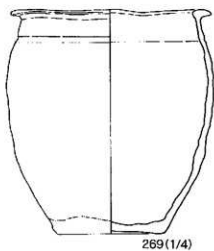
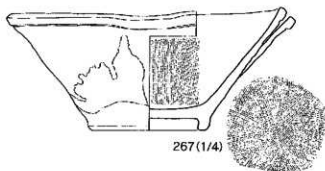
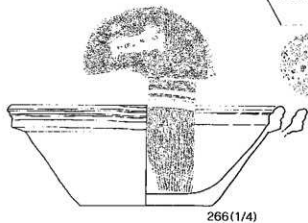
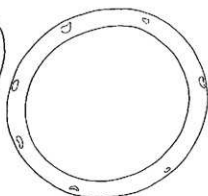
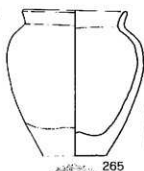
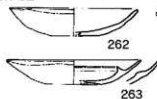
261



第45图 遗物实测图 17 (1/3)

SK-32

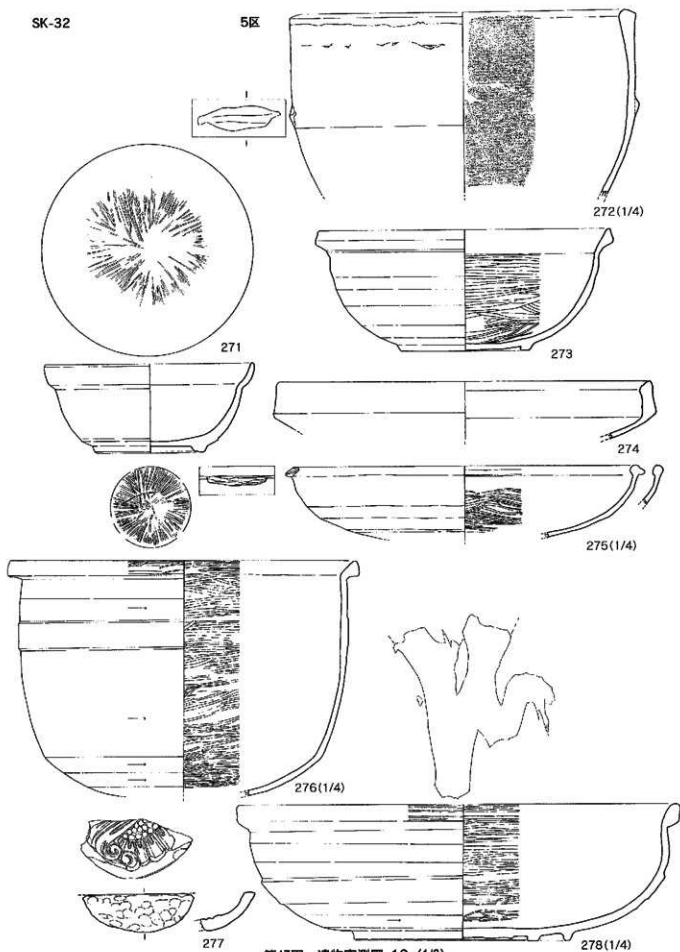
5区



第46図 遺物実測図 18 (1/3)

SK-32

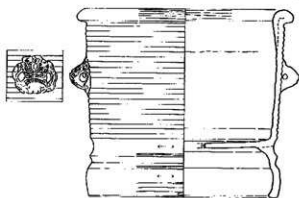
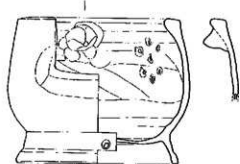
5区



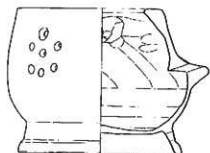
第47圖 遺物実測圖 19 (1/3)

SK-32

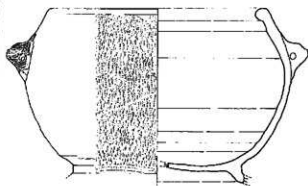
5区



283(1/4)



279(1/4)



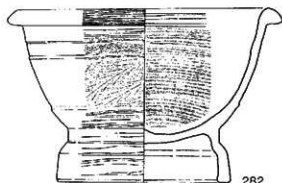
284(1/4)



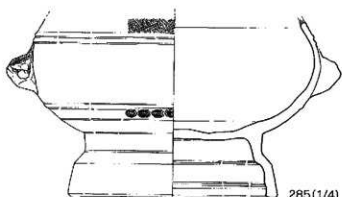
280



281(1/4)



282



285(1/4)

第48图 遗物实测图 20 (1/3)

SK-32

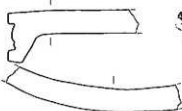
5区



286



288



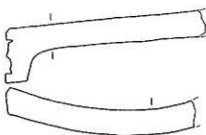
287



289



290



292



293



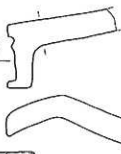
294



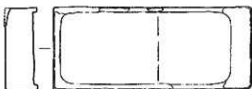
295



291



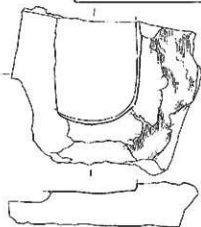
296



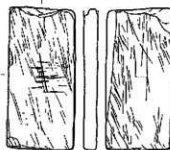
297



299



298

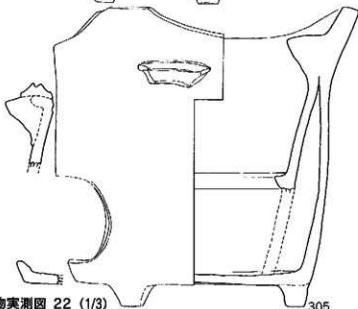
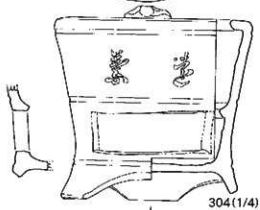
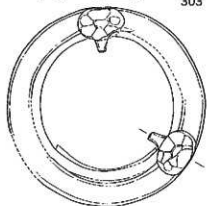
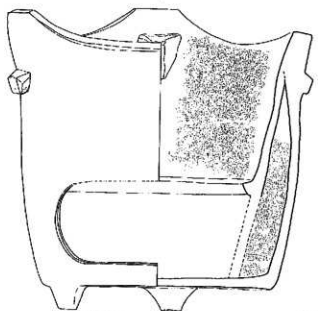
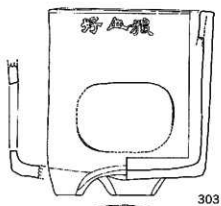
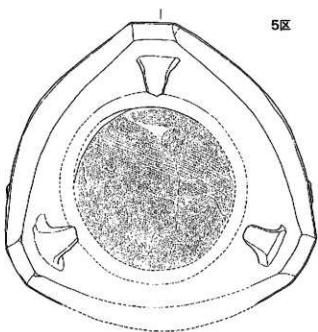
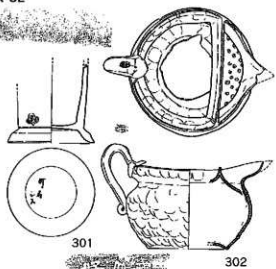


300

第49图 遗物实测图 21 (1/3)

SK-32

5区



第50図 遺物実測図 22 (1/3)

SK-33

5区



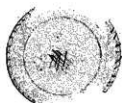
306



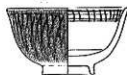
308



310



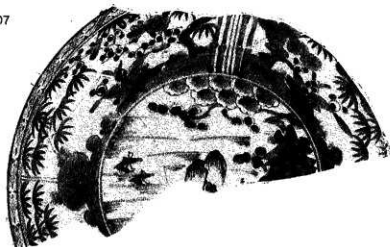
309



307



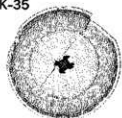
311



312

第51圖 遺物実測図 23 (1/3)

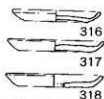
SK-35



314



315



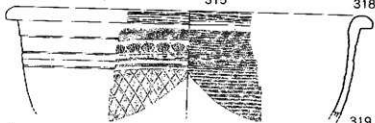
316

317

318



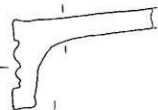
313



319



320



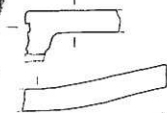
321



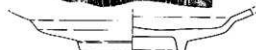
324



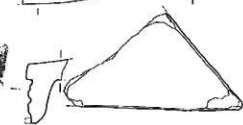
322



SK-37



323



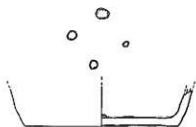
327



325

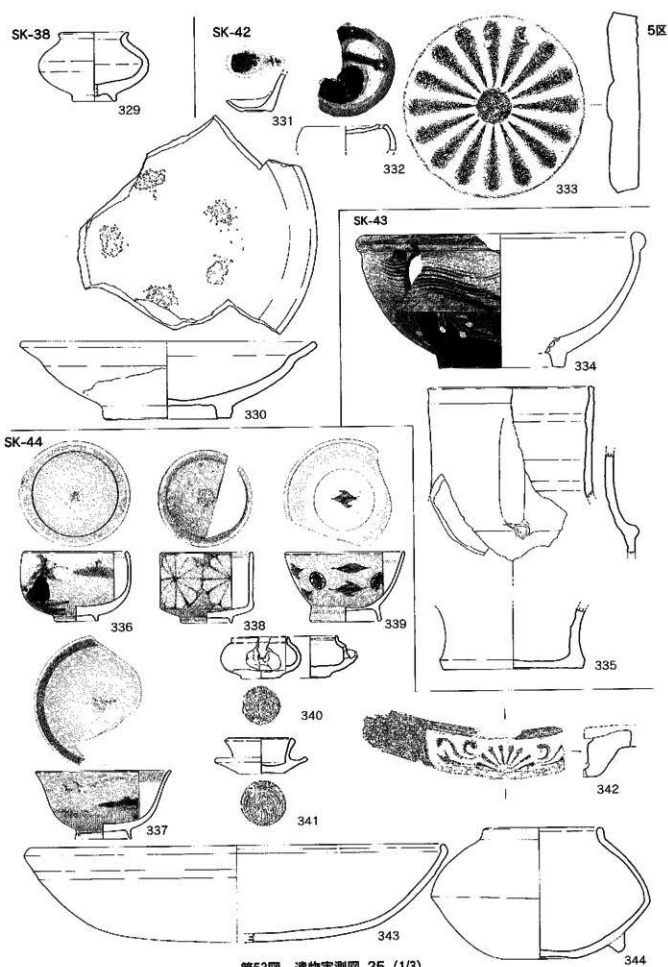


326



328

第52回 遺物実測図 24 (1/3)



第53圖 遺物実測圖 25 (1/3)

SK-45



345

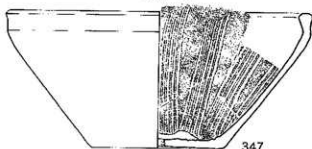
SK-47



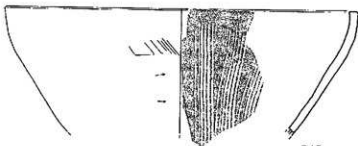
346

SK-83

5区

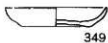


347



348

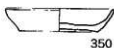
SK-102



349



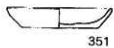
352



350



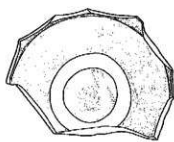
353



351



354



355



356

第54圖 遺物実測圖 26 (1/3)

6区

(1) 遺構

南北5.4m、東西4.6mの調査区。標高約3.700mの遺構面は、硬い黄褐色土。全体に上坑が広がるが、建物跡や溝など性格のわかるものは検出されていない。SP-2は調査区南壁近くの直径約25cm、深さ約35cmのピットである。17世紀初頭の唐津砂目積み皿が出土した。SK-53は150cm×85cm、深さ80cmの楕円形土坑で、炭が多量に出土した。18世紀後半の遺物がまとめて出土。SK-54と近接しているため、遺物の接合関係が認められた。SK-58は150cm×70cm、深さ50cmの長方形の土坑。床面はフラット。ほとんど遺物は出土しなかった。埋土はブロック状で人為的に埋められており、最後に黄褐色の地山土で封をするように整地されていた。その後、SK-54が掘削されている。SK-54も160cm×75cm、深さ30cmの長方形で、SK-58とよく似た土坑で、軸も南北と並行する。この二つの土坑は性格を一にするものと考えられる。屋敷地での、SK-58の使用が停止したあとの代わりがSK-54であろう。SK-54からは、点数は少ないが、19世紀前半の遺物が出土している。SK-49は直径約120cm、深さ約55cmの円形土坑である。19世紀の遺物が出土した。6区で柱穴と判断できるのはSP-1である。掘り方の直径50cm、柱痕の直径30~40cm、深さ50cmである。

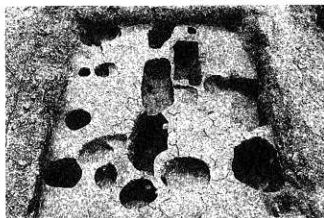
(2) 遺物

SK-49; 357は18世紀肥前磁器猪口。358は18世紀瀬戸美濃製の陶器小壺。茶入れか。359、360は土師器小皿。361は焼き壺壺。内面布目。362は18世紀以降の瀬戸美濃製陶器皿。焼けひずみ。363は19世紀在地の瓦質土器鉢。内面刷毛目。外面指頭痕。

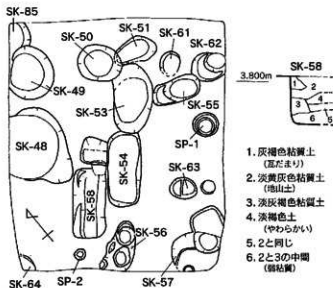
SK-53; 364は17世紀後半~18世紀前半の肥前陶器碗。365は18世紀後半以降の関西系陶器碗。見込みに目跡2つ残存。366は18世紀後半以降の関西系陶器碗。鉄絵で草花紋を施す。見込みに目跡3つ残存。367は土師質土器火消し壺。内外面指頭痕あり。外面板状の削り痕あり。口縁部外面に、等間隔に線状の調整痕あり。368は高村製土師質土器焙烙。内面丁寧に磨き、外面は削り。369は虚無僧型土製品の人形。一部縁軸がかかる。370~373は土師器小皿。

SK-54; 374、375は土師器小皿。376は19世紀前半、京焼系の磁器猪口。「華中亭道八造」の銘あり。

SP-2; 377は17世紀初頭の肥前陶器皿で、内面は6つほどに区画されている。見込みに砂目積み痕跡あり。



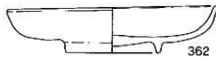
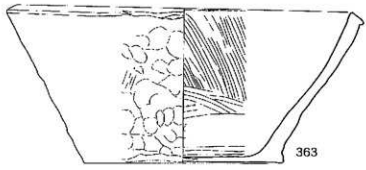
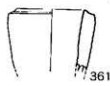
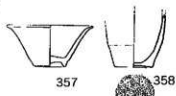
第55図 6区全景 北から南



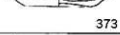
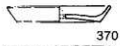
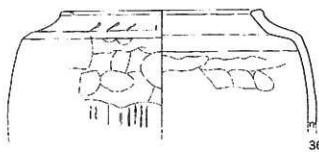
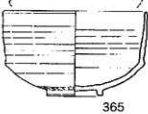
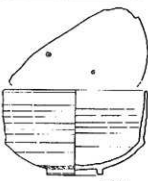
第56図 6区全体図 (1/80)・SK-58土層図 (1/40)

SK-49

6区



SK-53



367

364

365

366

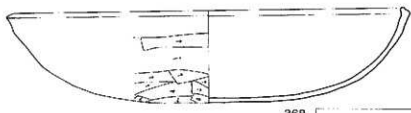
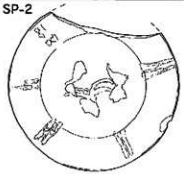
370

371

372

373

SP-2



368



SK-54



374

375

376

377

第57图 遺物実測図 27 (1/3)

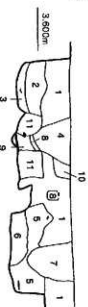
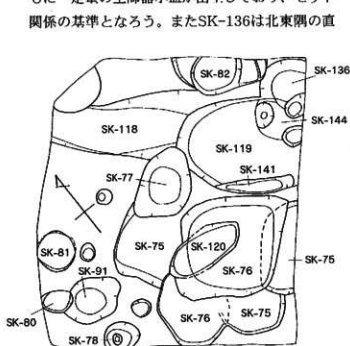
7区

(1) 遺構

南北6.2m、東西5.2mの調査区。遺構面は約3.400m～3.700mで、調査区全体に遺構が広がる。SK-119は南北200cm、東西は調査区外で不明、深さ70cmの楕円土坑である。17世紀初頭の唐津や瀬戸美濃製陶器が出土した。SK-118は南北幅100～140cm、深さ50cmの、東西に長い溝状の遺構である。SK-119を切っており、17世紀後半代の遺物が出土。SK-118、119とも陶磁器とともに一定量の土師器小皿が出土しており、セット関係の基準となろう。またSK-136は北東隅の直



第58図 7区全景 東から西



1. 暗褐色土層(砂質)
2. 褐色土層(黄色のブロック、よくしまる)
3. 暗褐色土層(1より暗め、炭化物を多く含む)
4. 暗灰褐色土層(7と同じ)
5. 暗褐色土層(黄色ブロック)
6. 灰褐色土層(10cm前後のレキを多く含む)
7. 暗灰褐色土層(レキ・コンクリ片を含む)
8. 8区SK-96と同じ
9. 灰褐色土層
10. 暗褐色土層(赤褐色のブロックを多く含む)
11. 2よりやや暗め(炭化物少し)

第59図 7区全体図・土層図 (1/80)

径130cm、深さ76cmの土坑で、出土した三葉文軒平瓦は小倉城、及び中津城の細川期の土坑から出土したものと同一のもので17世紀前半代の遺物である。SK-75、76、77はいずれも19世紀代の遺構である。SK-75は18～19世紀前半の遺物が出土する。17世紀中頃のSK-76に切られている。SK-75、76、77とも複雑に他の遺構と切りあっており、時期の違う遺物が混ざり合っている。

(2) 遺物

SK-77; 378は19世紀関西系の陶器蓋。379は18世紀以降の肥前磁器蓋物の色絵碗。380,381は19世紀の肥前磁器端碗。内面口縁部に墨はじきの枝法。382は肥前磁器急須。底部外面に布日痕あり。
SK-82; 383は17世紀末～18世紀前半の「大明年製」銘肥前磁器碗。紅葉文様はコンニャク印判である。
SK-118; 384は1650～1660年代の「寿福」銘肥前磁器碗。385は17世紀後半の唐津系陶器碗。386は17世紀後半の肥前磁器皿。387は17世紀後半の肥前磁器皿。口縁部が内側にめくれる。388は瀬戸美濃製陶器碗。389は陶器の底部だが、器種不明。底部は糸きりである。390～394は土師器小皿。
SK-75; 395は肥前磁器ままごと碗。菊弁文様の型打。396は18世紀後半の肥前磁器小杯。397は19

世紀の肥前磁器筒丸型碗。398は中国製の磁器合子。方形で、銘あり。399は18世紀の肥前白磁壺。400は19世紀の瀬戸美濃製陶器足付水盤。型打で龍が彫刻される。401はSK-75と76の遺物が接合したもの。18世紀末～19世紀の陶胎染付け碗。瀬戸美濃製。

SK-76; 402は19世紀の肥前磁器猪口。403は19世紀の陶器猪口。白土で文字の絵付けが施される。404は肥前磁器碗物の蓋。405、406は1820～1860年代の肥前磁器端丸碗。407は磁器碗で、底部高台内に「朝」の銘あり。18世紀前半の久留米の朝妻焼である。408は肥前磁器水滴。型打成形。409は型打の肥前磁器人形。410は19世紀の肥前型打磁器皿。口縁部は輪花で口鏝を施す。411は18世紀末以降の瀬戸美濃製陶器水鉢。鉄軸と緑釉がかけられ、文様が刻まれている。口縁部と底部の接点がないため、器高は不明。412は陶器の爛徳利。白土に染付けを施す。製作地不明。413は18世紀末以降の肥前磁器鉢。

SK-119; 414は18世紀末以降の肥前磁器小坏。415は17世紀初頭の瀬戸美濃製陶器碗。志野抹茶碗か。416は17世紀前半唐津の筒型陶器碗。417は1600～1630年代の唐津の陶器鉢または皿。見込みに砂目三箇所残存。418は砥石。石材は輝緑凝灰岩で、赤間関の砥石か。419は17世紀前半の備前陶器播鉢。420～427は土師器小皿。420は口縁部に一箇所切り込みあり。

SK-136; 428は軒平瓦瓦当。三葉文。中津城から同范の瓦が数点出土している。小倉城からも同じ模様の瓦が出土している。

8区

(1) 遺構

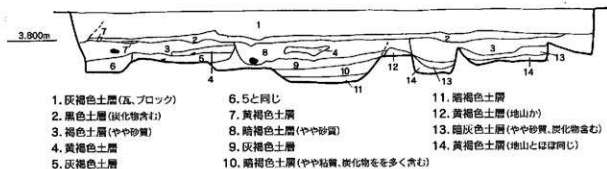
南北6.0m、東西10.5mの細長い調査区。遺構面は3.100m～3.700m。調査区全体に土坑が広がる。17世紀代の遺構はSK-96、97、106、107、111、115。中でも、SK-111は17世紀前半代で遺物の年代にばらつきがなく、良好な一括資料である。またSK-107からは17世紀前半の陶磁器とともに土師器小皿が集中して一括廃棄されていた。どちらも一辺2.4m～2.8m四角で、深さ45cmのよく似た土坑である。SK-97も北側の調査区外にのびているため全形は不明であるが、先の二つとほぼ同じ規模で、いずれも調査区の壁に並行に配置される。同様の性格をもった遺構と考えられる。18世紀代の遺構はSK-99、109、117。19世紀代の遺構はSK-93、114、121、129。



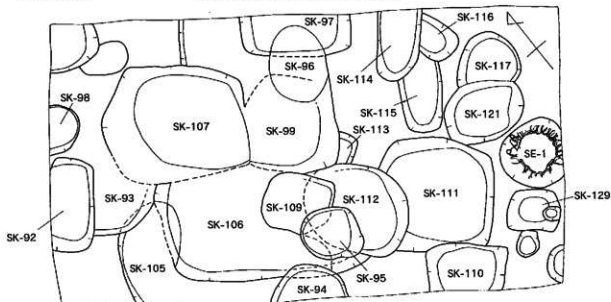
第60図 8区東側 北から南



第61図 8区西側 北から南



- | | | |
|------------------|--------------------------|-----------------------|
| 1. 灰褐色土層(瓦・ブロック) | 6. 5と同じ | 11. 暗褐色土層 |
| 2. 黒色土層(炭化物含む) | 7. 黄褐色土層 | 12. 黄褐色土層(地山か) |
| 3. 褐色土層(やや砂質) | 8. 暗褐色土層(やや砂質) | 13. 暗褐色土層(やや砂質・炭化物含む) |
| 4. 黄褐色土層 | 9. 灰褐色土層 | 14. 黄褐色土層(地山とはほぼ同じ) |
| 5. 灰褐色土層 | 10. 暗褐色土層(やや粘質・炭化物を多く含む) | |



第62図 8区全体図・土層図 (1/80)

(2) 遺物

SK-93; 429は18世紀後半の肥前磁器碗。430は18世紀後半の肥前磁器皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎ後にさらに釉をかける。431はSK-93,98,107から出土。19世紀代の関西系陶器鬺。底部外面に布目痕あり。432は軒丸瓦。右三つ巴。433は土製品の人形。434も同じく土製品の家型。箱庭の一部か。いずれも18~19世紀。

SK-96; 435は17世紀後半~18世紀前半の肥前陶器皿。三島手で、象嵌で雷文が描かれる。436は17世紀後半の肥前陶器鉢。鉄釉と白土の二彩手。内面見込みに日跡あり。

SK-97; 437は17世紀後半の肥前磁器碗。438は17世紀後半京焼風の肥前陶器器手碗。439, 440は土師器小皿。441は凝灰岩製の石製品。うろこ状の文様が刻まれている。

SK-99; 442は17世紀の肥前陶器皿。白土で象嵌が施される。443は18世紀代の関西系陶器摺鉢。444~456は土師器小皿。449は焼成時に底部に亀裂が入っている。455は内面に柿釉を施す。450, 451はSK-99,107が接合。454はSK-99,108が接合している。

SK-106; 456は17世紀前半の唐津系陶器碗。457は17世紀の肥前陶器皿。鉄釉に白土で菊花文を施す。内面見込みに日跡あり。458は17世紀末~18世紀前半の陶器碗。鉄釉に白土で外面は蟹手、内面は打刷



第63図 8区 SE-1

毛。459は土師器小皿。460は土師器焼き塩壺。461は1600～1630年代の唐津陶器皿。見込みに砂目あり。割高台。

SK-107; 462は肥前磁器碗。463は17世紀前半の唐津陶器碗。464は1600～1630年代の肥前陶器皿。見込みに砂目4つあり。465、466は軒平瓦瓦当。465は蕨文。瓦当面左端に「分」の刻印あり。467、468は軒丸瓦瓦当。467は左三つ巴に珠文は16個。468は右三つ巴。巴の尾が長い。469～493は土師器小皿。いずれも残りがよく完形品が多い。471は口縁部に3箇所切り込みあり。492は底部に穿孔が一つある。

SK-109; 494は土師器小皿。495は17世紀の肥前陶器瓶。鉄軸に白土による刷毛目と緑軸のピラ掛けを施す。496は18世紀以降の肥前磁器瓶。497は軒丸瓦瓦当。右三つ巴。

SK-111; 498は17世紀前半の陶器碗で、朝鮮か唐津産。499は17世紀前半の唐津陶器碗。500は1600～1630年代の唐津陶器碗。高台端部に砂目と回転糸きりの痕跡が残る。501は17世紀前半の型打の肥前白磁輪花皿。口縁あり。502～504は土師器小皿。505は1600～1630年代の肥前陶器皿。見込みに砂目あり。506も1600～1630年代の唐津陶器溝縁皿。灰軸に白土の模様あり。507は17世紀初頭の瀬戸美濃製陶器瓶。鉄軸で螺旋模様を描く。508は土師器小皿。内面に墨書あり。「文」と「二」以外は判読しづらい。509は17世紀前半の唐津陶器水注。把手の痕跡あり。

SK-114; 510は1820～1860年代の肥前磁器碗。511は19世紀前半萩焼の陶器碗。薰灰軸。512は18世紀末以降の肥前磁器猪口。513は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。514は1760～1820年代の肥前磁器広東碗。見込みに日跡三個あり。

SK-115; 515は土師器小皿。516は1630～1650年代の肥前磁器碗。透明軸と鉄軸の掛け分け。517は軒丸瓦。左三つ巴。

SK-117; 518は土師器小皿。519は18世紀後半以降の関西系磁器碗。口縁部は蓋を受けるため短く外に屈曲する。520は17世紀唐津陶器撞鉢。底部に糸きり痕明瞭。

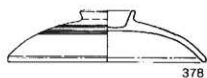
8区一括; 521は出土遺構不明の磁器碗物の蓋。「朝」銘を持つ久留米の朝妻焼きである。18世紀前半。

SK-121; 522は19世紀陶器小碗。製作地不明。523は土師器小皿。底部外面に墨書あり。524は19世紀の関西系陶器土瓶蓋。底部に糸きり痕明瞭。525、526は軒平瓦瓦当。529は19世紀の堺陶器撞鉢。

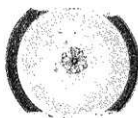
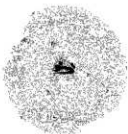
SK-129; 527は18世紀以降の肥前磁器猪口。528は18世紀後半以降の肥前白磁皿。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。重ね焼きの痕跡あり。

SK-77

7区



378



379



380



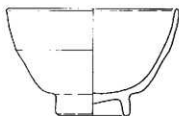
381



382

SK-82

SK-118



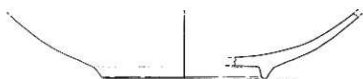
385



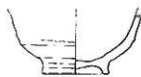
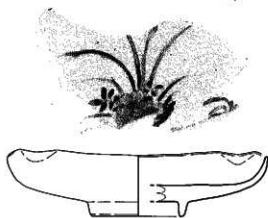
383



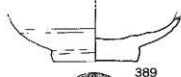
384



386



388



389



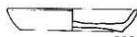
390



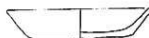
387



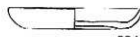
391



393



392

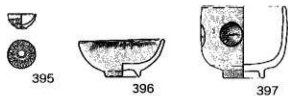


394

第64图 遗物実測图 28 (1/3)

SK-75

7区



395

396

397



398

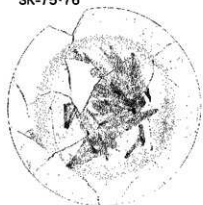


399

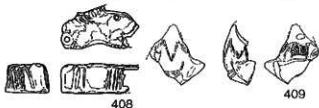
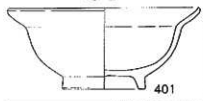


400

SK-75-76

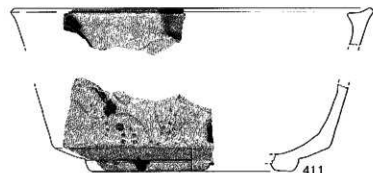


401



408

409



411

SK-76



402



403



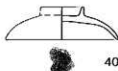
405



406



404



407



410

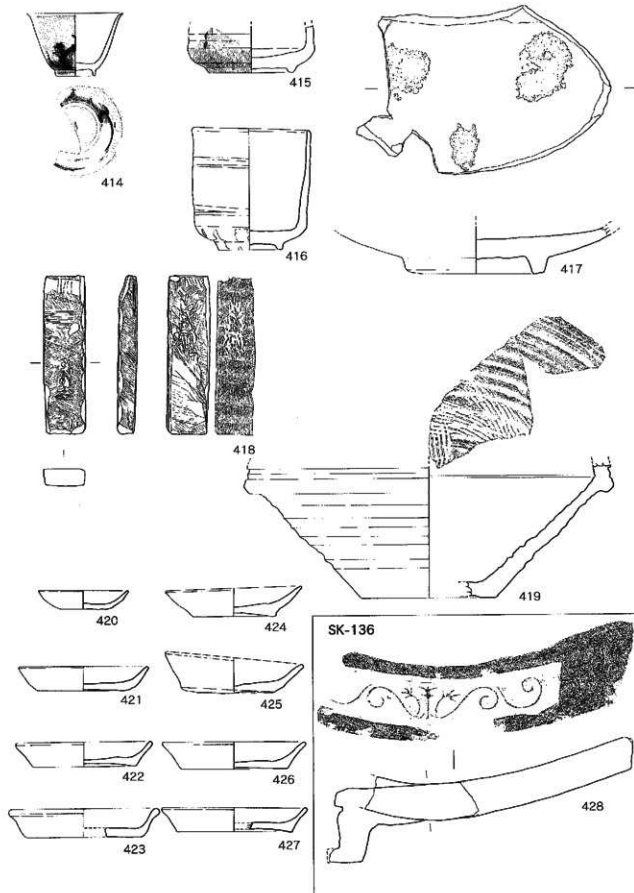


413



412

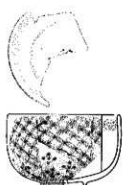
第65圖 遺物実測圖 29 (1/3)



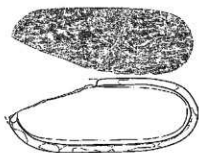
第66図 遺物実測図 30 (1/3)

SK-93

8区



429



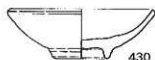
431



432



433



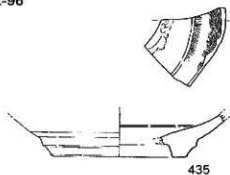
430



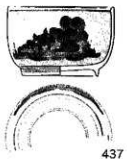
434

SK-96

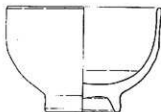
SK-97



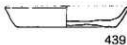
435



437



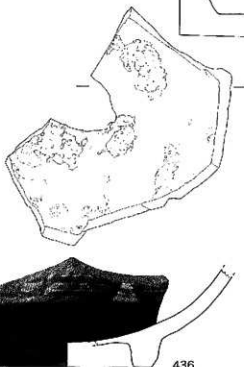
438



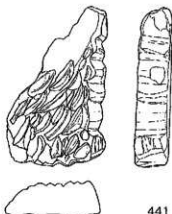
439



440



436

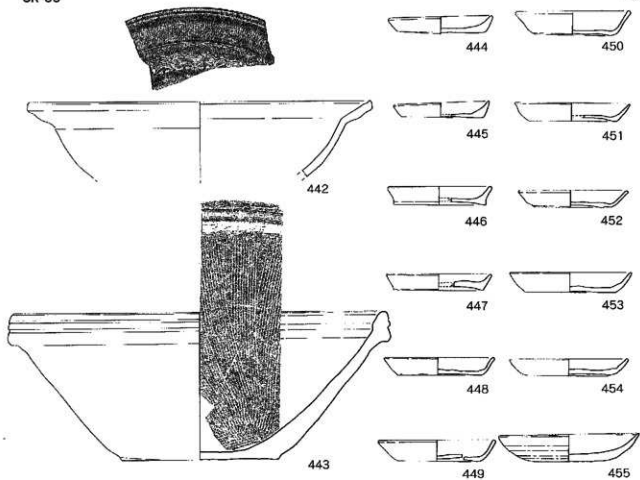


441

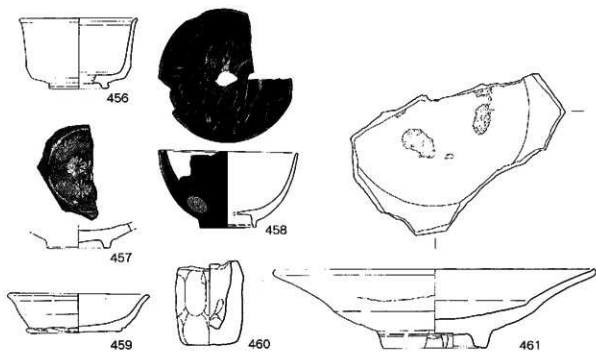
第67图 遺物実測図 31 (1/3)

SK-99

8区



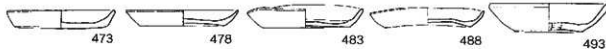
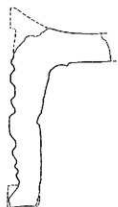
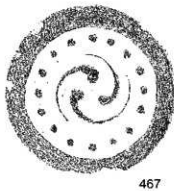
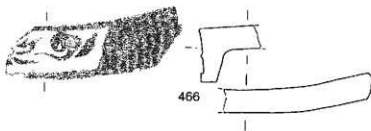
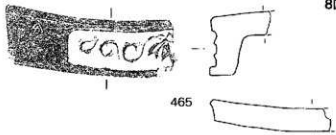
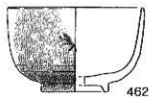
SK-106



第68図 遺物実測図 32 (1/3)

SK-107

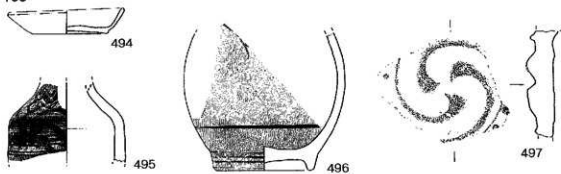
8区



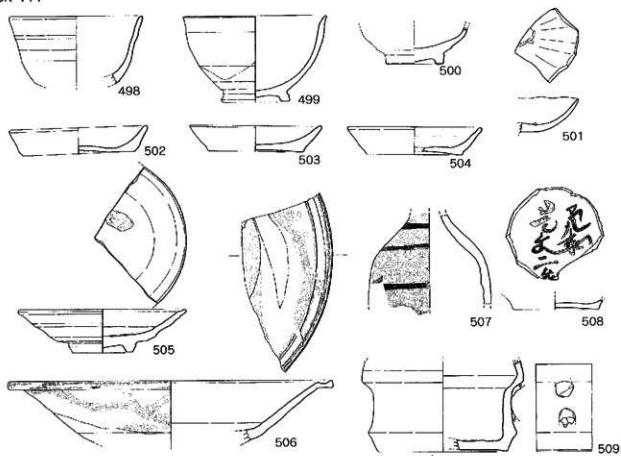
第69图 遗物实测图 33 (1/3)

SK-109

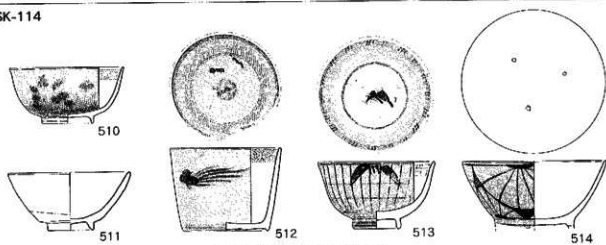
8区



SK-111



SK-114



第70图 遺物実測図 34 (1/3)

SK-115



515



516



517

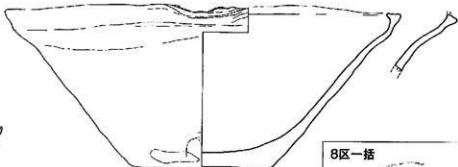


8区

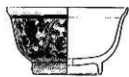
SK-117



518



520



519



8区一插



521

SK-121



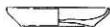
522



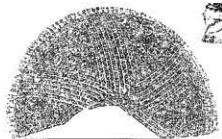
524



525



523

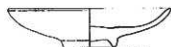


526

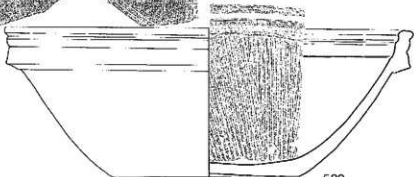
SK-129



527



528



529

第71図 遺物実測図 35 (1/3)

9区

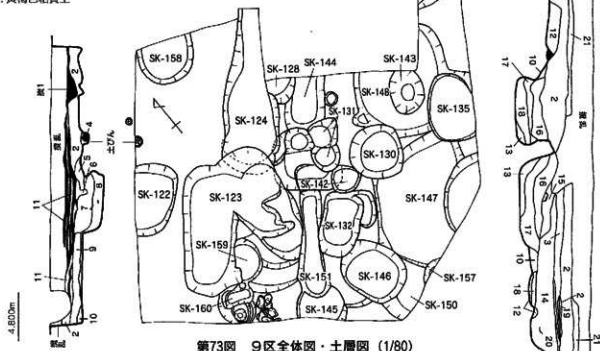
(1) 遺構

調査区は、外馬場錆矢堂線の工事区間の東端にあたる。調査区北端には、旧パン工場の地下室が残存しており、それを避けるため地下室の東西を取り囲むような形の調査区になった。調査区規模は南北5.5m～9m、東西7.0mである。多くの土坑が密集しており、遺構は攪乱され、様々な時期の遺物が混ざり合っていた。遺構面は3.100m、3.400m、3.700m。西壁の土層では、3.700m～3.900mの間に三層の炭層が確認できた。3.700mの遺構面の段階で、火災が起きた痕跡だろう。17世紀の遺構はSK-151。18世紀代の遺構はSK-123、130、133。19世紀代の遺構はSK-127、134、135、144、146、147、150、153。調査区南限近くにあるSK-154は直径90cm、標高3.100mから掘られる深さ65cmの円筒形の上坑。埋土は明褐色弱粘質土で、酸化した茶色粒を多く含む。この穴の壁には5～10cm大の礫が貼り付けられている

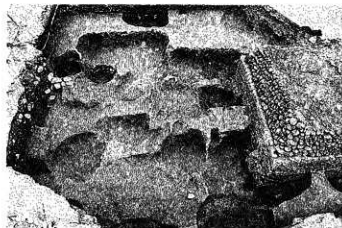


第72図 SK-154

- | | |
|--------------------------------|--------------------|
| 1. 炭層 | 13. 12より暗い、黄褐色粘質土 |
| 2. 淡褐色弱粘質土黄土粒まじり(ある時期の地層) | 14. 暗茶褐色土、やや砂質、炭多量 |
| 3. 2より暗い | 15. 茶褐色弱粘質土 |
| 4. 淡灰褐色弱粘質土(炭少量まじり)(土びんの埋土) | 16. 黒褐色弱粘質土、炭まじり |
| 5. 淡褐色砂質土 | 17. 茶褐色弱粘質土 |
| 6. 黄土ブロックと褐色土 | 18. 黒褐色弱粘質土、炭まじり |
| 7. 暗灰色土、炭少量、やわらかい | 19. 橙色黄土 |
| 8. 黒灰色弱粘質土、炭少量、やわらかい | 20. 黄褐色粘質土 |
| 9. 淡褐色土、やわらかい、5cm大のレキ多量 | 21. 明茶褐色土(現代か) |
| 10. 淡黄灰褐色弱粘質土、黄土粒まじり炭含む、きめが細かい | 22. 暗褐色土 |
| 11. 2よりやや暗い | |
| 12. 黄褐色粘質土 | |



第73図 9区全体図・土層図 (1/80)



第74図 9区全景



第75図 土瓶出土状況

穴は埋められた後、黄褐色粘質土で蓋をされていた。SK-154の南壁には幅20cm、深さ17cmほどの切り込みがあった。SK-154近くの調査区南壁には、標高3.150mの石敷きがある。固化しえなかったが、SK-154の南側まで石敷きは続いていた。SK-154は、道路に面した場所にあることから、切り込み部分に筒のようなものを据え、道路側より水を引き込む施設だったのではないだろうか。円筒形の桶のようなものを穴に据え、石で周囲を固めていたのであろう。石敷きはそれに付随する遺構と考えられる。

もう一つ、この調査区で特筆すべきなのは、調査区西壁より検出された関西系陶器土瓶である。標高3.500mの面から掘りこまれた直径20cmほどの、土瓶がちょうど座る分だけ掘り込まれた穴に据えられていた。きちんと蓋をされた完形品である。民俗例から考えて、子供の成長を願って屋敷内にエナ壺を埋める風習に土瓶が入れ物として使用されたと考えられる。

(2) 遺物

SK-123; 530は18世紀後半の肥前磁器くらわんか碗。531は18世紀前半の朝妻焼磁器碗。高台内に「朝」の銘あり。532は18世紀代の肥前磁器段重蓋。533は17世紀末～18世紀前半の肥前現川系陶器碗。高台内に離れ砂付着。534は18世紀前半の京焼風陶器碗。見込みに目跡3つ。535は19世紀代の信楽焼陶器碗。外面全体に面取りをする。全面貫入あり。536は18世紀前半の肥前陶胎染付火入れ。537は18～19世紀代の肥前青磁香炉。538は手びねりの陶器壺か。539は18世紀前半の肥前陶器鉢。540～543は土師器小皿。544は18世紀前半の関西系土師質土器焙烙。把手あり。545、546は18世紀代の肥前磁器人形の頭。色絵の型打成形。547、548は軒丸瓦瓦当。547は左三つ巴で、珠文は16個。548は右三つ巴で、珠文は17個。549は軒平瓦。

SK-127; 550は18世紀代の肥前磁器水滴。551、552は肥前磁器碗。551は18世紀後半。552は1820～1860年製。553、554は1820～1860年の肥前磁器小坏。554は端反碗で、外面の染付けには一部墨弾きの技法を用いている。555は18世紀後半の肥前磁器皿。見込みは蛇ノ目軸剥ぎ。高台に離れ砂付着。556は18世紀末以降の肥前青磁染付け皿。蛇ノ目凹型高台。557は18世紀後半以降の肥前磁器瓶。558は18世紀前半の肥前陶器鉢。559～564は土師器小皿。565は19世紀の鉄軸陶器土瓶。九州の生産と思われる。566は19世紀前半の関西系陶器急須。567は高村焼の土師質土器焙烙。外面手持ち篋削り。568は軒丸瓦瓦当。左三つ巴。

SK-130; 569は17世紀末～18世紀前半の肥前現川系の陶器碗。570は18世紀後半の肥前磁器皿。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。571は17世紀前半の肥前三島手の陶器皿。鉄軸に白土で象嵌を施す。

- SK-132; 572は軒椀瓦。丸瓦部は尾の短い右三つ巴で、珠文は9個。平瓦部は欠損。573は土師器杯。574の磁器皿は内面のみならず、外面の高台内にもかずらの文様が描かれる。
- SK-133; 575は土師器小皿。576は18世紀前半の肥前磁器碗。
- SK-134; 577は磁器水滴。製作地不明。578は18世紀後半以降の肥前磁器仏飯器。579、580、581は18世紀後半の肥前磁器碗。580には焼継痕がある。582は18世紀末～19世紀前半の肥前磁器輪花皿。見込みには3つの日跡あり。蛇ノ目凹型高台。584は土師器小皿。585は19世紀前半の萩焼陶器碗。586は土師器土製円盤。内外面に回転糸切り痕あり。窯道具か。587は土製品の鐘樓。素焼き型打成形。588は19世紀の陶器乗燭。九州産。底部に回転糸切り痕あり。
- SK-135; 589は19世紀以降の肥前磁器輪花皿。大きくひずんでいる。高台内に「成化年製」の銘あり。590は19世紀代の白磁小杯。口縁部端反て口ハゲ。591は19世紀代の関西系陶器小杯。592は18世紀後半の肥前陶器火入れ。ひずんでいる。593、594は土師器小皿。595は素焼き土製品の鳩笛。596は飾り瓦。597、598は軒丸瓦当。どちらも右三つ巴。598の珠文は小さい。599、600は軒平瓦当。600は篇文。
- SK-144; 601は19世紀関西系の磁器急須。602は18世紀代の陶器碗。603は17世紀後半～18世紀前半の肥前白磁碗。604は18世紀前半の肥前陶器鉢。605～610は土師器小皿。608は内面に赤色顔料。いずれも残りがよくほぼ完形品。
- SK-146; 611は18世紀以降～19世紀の瀬戸美濃製陶器碗。
- SK-147; 612は19世紀代の瀬戸美濃製陶器。灰釉の型打成形。裏面は指押さえの成形。器種不明。616は18世紀前半の肥前陶器片口。617は18世紀後半の肥前磁器段重。618は19世紀代の関西系陶器鍋。
- SK-148; 613は19世紀代の関西系陶器ままと道具鉢。614、615は土師器小皿。
- SK-150; 619は18～19世紀代の福岡小石原系の陶器鉢。底部外面に「□□□スキ」の墨書あり。
- SK-151; 620は1660～1680年代の肥前磁器碗。高台内に「宣徳年製」銘あり。
- SK-153; 621は19世紀の肥前型打磁器八角皿。622は17世紀後半の肥前磁器皿。高台内に「大明～」の銘あり。

10区

(1) 遺構

南北7m、東西11mの細長い調査区。調査区の端に遺構が集中し、中央から北側は空間となる。SK-155は170cm×550cm、深さ50cmの東西に細長い土坑で、大量の土錘が出土した。SK-156は150cm×350cm、深さ30cmの南北に細長い土坑。17世紀の遺物も少量まじるが、19世紀代の遺物が多い。調査区西側には直径50cm、深さ20cmほどの穴が南北に5つ一直線にならんで検出された。

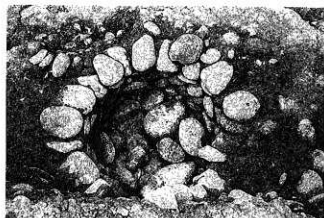
(2) 遺物

- SK-155; 623は福岡系の陶器だが、器種不明。水差しか。624は手びねりの土人形。猿型か。625～628は土師器小皿。629～648は手づくねの土錘。
- SK-156; 649～652は土師器小皿。653、654は1820～1860



第76図 10区全景 西から東

年代の肥前磁器端反碗。655は1780～1820年代の肥前磁器碗。見込みに4つの目跡あり。656は19世紀代の肥前陶器皿。657は19世紀代の関西系陶器ままごと道具土鍋。足は3つ。658は18世紀代の肥前磁器皿。蛇ノ目凹型高台。659は17世紀初頭的美濃製陶器。器種不明。660は19世紀の小石原製陶器ナス徳利。661は18～19世紀代の素焼き型打上人形。大黒様型。底部に穿孔あり。一部朱が残る。

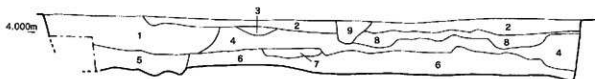


第77図 10区 SE-2

SK-158; 662は17世紀前半の唐津系陶器碗。体部下半は回転斡削りで成形している。高台にも一

部回転斡削りあり。663は土師質土器。器種不明。口縁内部に煤が付着している。

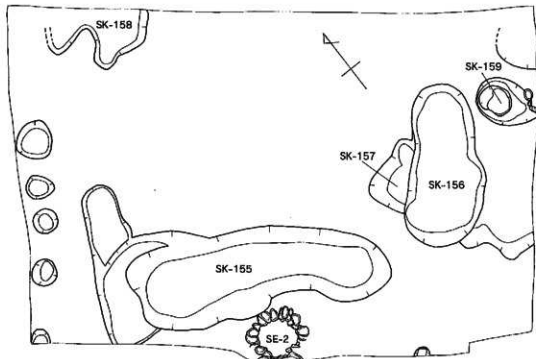
SK-159; 664は1600～1630年代の肥前陶器溝縁皿。



1. 灰褐色土層(炭化物を含む)
2. 褐色土層
3. 灰褐色土層(1と同じ)

4. 黄褐色土層
5. 黄灰褐色土層(磁砂質)
6. 灰褐色土層(砂質)(20～30cmのレキ多く含む)

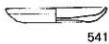
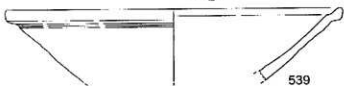
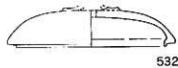
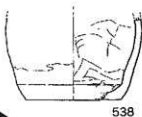
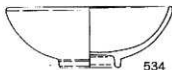
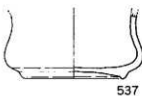
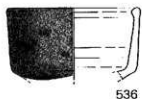
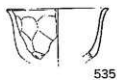
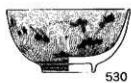
7. 暗褐色土層
8. 灰褐色土層(1・3と同じ)
9. 暗褐色土層(コンクリ片を含む)



第78図 10区全体図・土層図 (1/80)

SK-123

9区



545

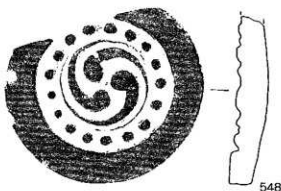
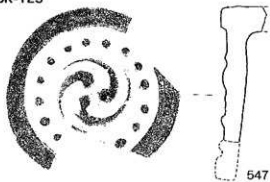
546



第79图 遺物実測图 36 (1/3)

SK-123

9区



547

548



549

SK-127



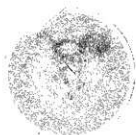
550



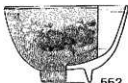
553



554



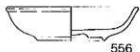
551



552



555



556



557



558



559



562



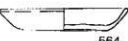
560



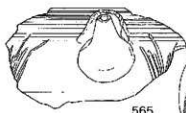
563



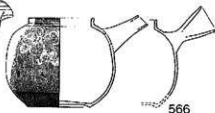
561



564



565



566



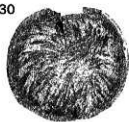
567



568

第80图 遺物実測図 37 (1/3)

SK-130



569



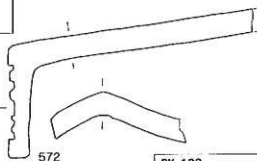
570



571

9区

SK-132

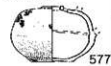


572

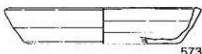


574

SK-134

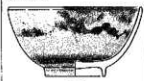


577



573

SK-133



576



578



575



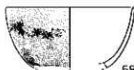
579



584



586



580



582



585



587



588



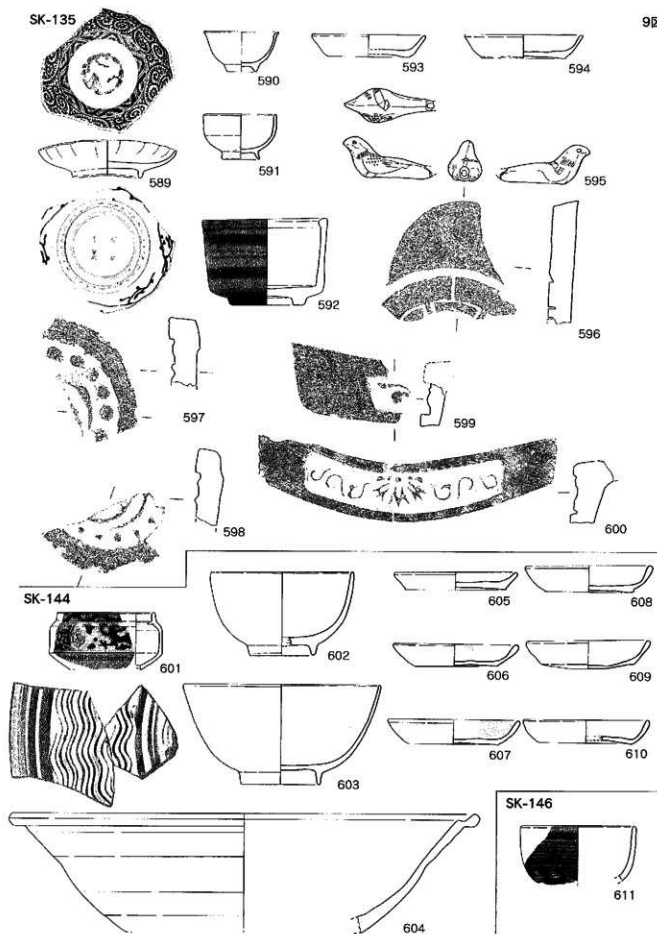
581



583



第81図 遺物実測図 38 (1/3)

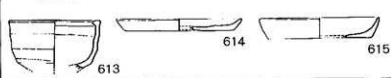


第82图 遺物実測図 39 (1/3)

SK-147

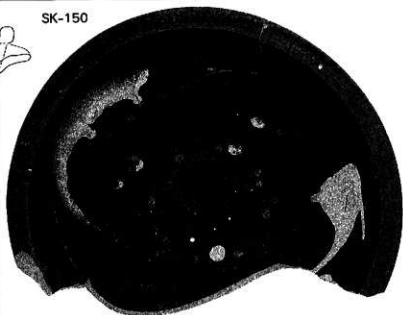


SK-148

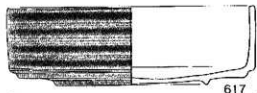


612

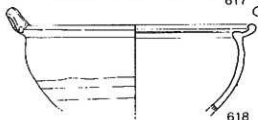
SK-150



616



617



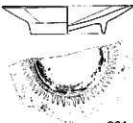
618

SK-151



620

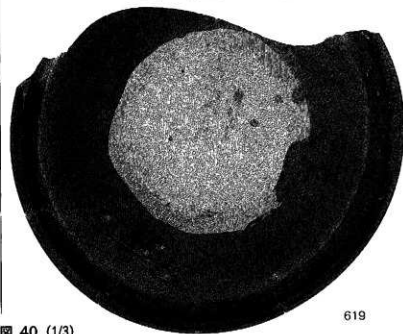
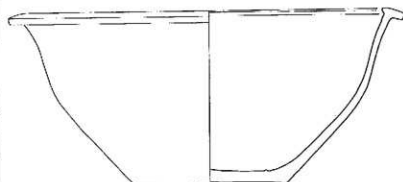
SK-153



621



622

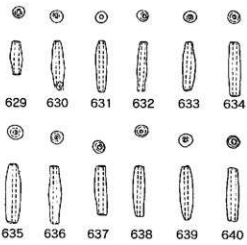
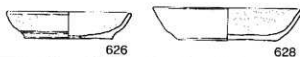
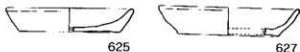
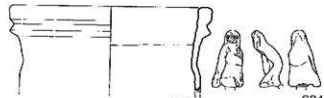


619

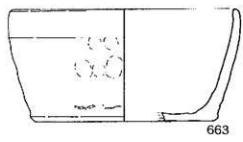
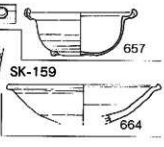
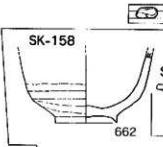
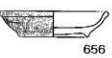
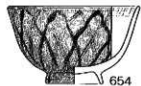
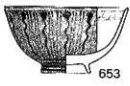
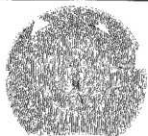
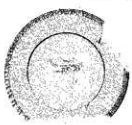
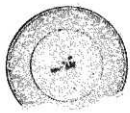
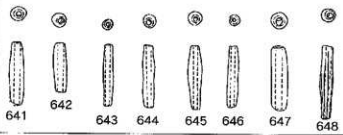
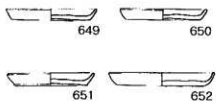
第83圖 遺物実測図 40 (1/3)

SK-155

10区



SK-156

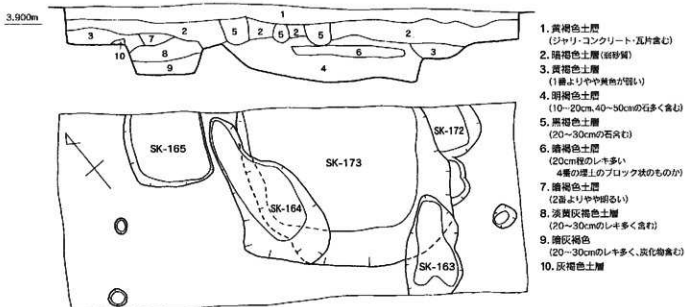


第84图 遺物実測図 41 (1/3)

11区

(1) 遺構

南北4m、東西9.7mの東西に細長い調査区。遺構面は3,500m。SK-173が調査区の半分近くをしめ、遺構の数は少ない。SK-173は東西460cm、北が調査区外のため南北長は不明、深さ90cmの方形の土坑。17世紀初頭の唐津系陶器碗とともに土師器小皿がまともって出上した。SK-163、164、172はSK-173を切っている。SK-165は東西180cm、北が調査区外のため南北長は不明、深さ50cmの方形の土坑。16世紀後半から17世紀、19世紀と時代の違う遺物が混在している。



第85図 11区全体図・土層図 (1/80)

1. 黄褐色土層
(ジャリ・コンクリート・瓦片含む)
2. 暗褐色土層(細砂質)
3. 黄褐色土層
(1層よりやや異色が強い)
4. 暗褐色土層
(10~20cm, 40~50cmの石多く含む)
5. 黒褐色土層
(20~30cmの石含む)
6. 暗褐色土層
(20cm程度のレキ多い
4層の埋上のブロック状のもの)
7. 暗褐色土層
(2層よりやや明るい)
8. 淡黄灰褐色土層
(20~30cmのレキ多く含む)
9. 暗灰褐色
(20~30cmのレキ多く、炭化物含む)
10. 灰褐色土層

(2) 遺物

SK-165; 665は瀬戸美濃製陶器皿。底部は碁笥底。666は16世紀後半の瀬戸美濃製陶器皿。667は土師器小皿。668は17世紀前半の備前やきしめ陶器鉢。外面手持ち筥削りで成形している。

SK-173; 669は1600~1630年代の唐津系陶器碗。670~676は土師器小皿。

12区

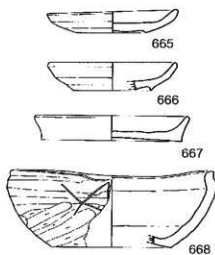
(1) 遺構

南北4.3m、東西4.7mの方形の調査区。調査区を中心を南北にSK-171が横たわる。東西幅は約3mであるが、南北は調査区外のため不明。標高3,500mから掘り込まれる。床面には10~20cm大の礫が多量に出土した。幅の広い浅い落ち込みである。出土遺物は19世紀代のもものが主体で、大正~昭和のものも含まれる。

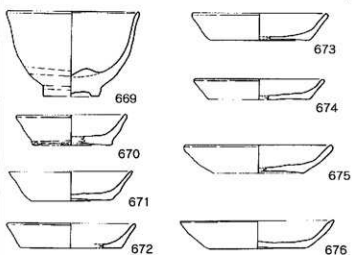


第86図 11区全景 東から西

SK-165

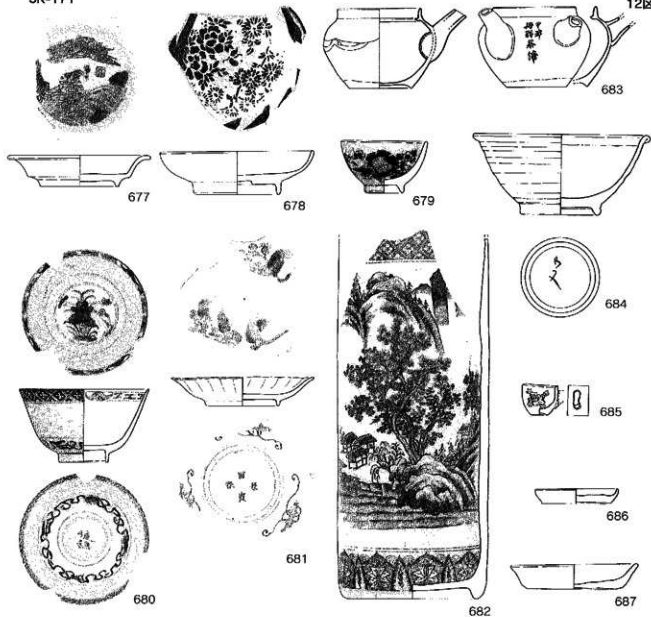


SK-173



11区

SK-171



12区

第87图 遺物実測図 42 (1/3)

SK-171

12区



688

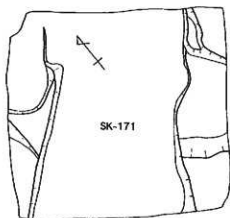


689



690

第88図 遺物実測図 43 (1/3)



第89図 12区全体図 (1/80)



第90図 12区全景 南から北

(2) 遺物

SK-171; 677は染付けの磁器皿。678は明治10年代の磁器皿。肥前または瀬戸美濃製。型紙刷り。底部は蛇ノ目凹型高台。679は大正～昭和の瀬戸美濃製磁器碗。銅版転写。680は18世紀代の中国景德鎮の磁器碗。蝟手の染付けで、高台内に「康熙年造」銘あり。681は大正～昭和の型打磁器輪花皿。黒・朱・金の色絵で、高台内に「富貴長春」の銘あり。682は明治20年以降の瀬戸または肥前の銅版転写。683は19世紀後半以降～近代の陶器急須。胴部に「中津丹羽茶舗」の文字あり。金彩の上絵付け。684は19世紀代の白磁鉢。高台部に化粧土あり。高台内に墨書あり。「ト又」か。685は近代の型打の白磁カップままごと用。把手は欠損。686、687は土師器小皿。688は19世紀の小石原産陶器徳利。底部砂付着。糸切り痕あり。胴部の文字は「中津塩町 俵屋 醤油 □□□」。689は19世紀以降の小石原産陶器徳利。底部糸切り痕あり。胴部の文字は「千田酒場」「□」「千□□□」「□□□」「～屋港」。690は19世紀代の瓦質土器仏花瓶。型打成形。底部に「常盤」の刻印あり。

13区

(1) 遺構

南北4.5m、東西4.7mの方形の調査区。狭い調査区全体に大きな土坑が広がる。SK-191は18世紀代の遺物が少量出土。SK-190は191を切っており、南北3m、東西調査区外で不明、深さ40cmの大型土坑。18世紀前半～後半の遺物が主体。遺構面は標高3.500m。



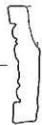
第91図 13区全景 北から南

(2) 遺物

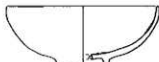
SK-190; 691は軒丸瓦。左三つ巴、珠文は10個。692は17世紀代の肥前白磁蓋。693は18世紀後半の肥前磁器皿。見込みは蛇ノ目軸剥ぎ。中央に五弁花のコンニャク印判。694は18世紀後半の関西系陶器平形碗。色絵付け。695は18世紀前半の肥前陶胎染付火入れ。見込みに重ね焼きの跡。696は18世紀前半肥前陶器片口。697は鉄軸の陶器壺。698は鉄軸に藁灰軸をかけた陶器壺。

SK-190

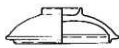
13区



691



694



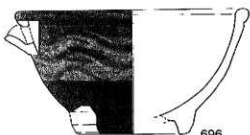
692



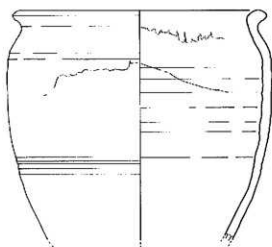
693



695



696



697



698

SK-191

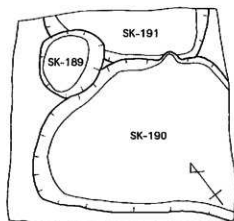


699



700

第92図 遺物実測図 44 (1/3)



1. 暗褐色土層(30~50cmのレキ少量含む)
2. 明褐色土層(新砂質)
3. 赤褐色土層(赤色、焼土かブロック)
4. 黒褐色土層(炭化物を多く含む)
5. 褐色土層(炭化物を多く含む)

第93図 13区全体図・土層図 (1/80)

びる。壁は垂直に立ち、床面はフラット。標高3.000mから掘り込まれており、床面の深さは、南端で標高1.85m、北端で1.88mと、ほぼ変わらない。溝の中央は幅7cmほど細く黒ずんだ土が南北にたどれた。炭が少量まじった淡灰褐色粘質土で、土層断面はほぼ丸い。SD-2の埋土は意識的に埋められたように水平に堆積していた。断面A-A'では、標高2.45mあたりで西側の壁に段違いがあり、そのレベルで第2層と5層に土層が別れていた。掘りなおしの痕跡だろうか。断面B-B'では、同じく第2層と5層の間でSK-198が入り込んでおり、このレベルでの上層と下層の時差が感じられる。また、SD-2の南端では、溝幅がやや膨らみ、直径30cm、深さ15cmの丸い穴の底に、丸い板が置かれていた。穴の掘り方から20cm上には丸い石が蓋をするように据えられていた。石の上面の標高は2.2m、SD-2の北端には標高2.13mの位置に同様の石が検出された。調査区ぎりぎりだったため確認できなかったが、石の下を掘れば同様の丸い遺構が検出できたかもしれない。これらの状態から、SD-2は城下町に設けられた御水道の遺構ではないかと判断した。御水道遺構については詳しくは第5章-3「御水道遺構について」で後述する。

(2) 遺物

SK-160: 701は18~19世紀の関西系陶器水滴。底部及び内面に布日痕あり。702は19世紀前半の肥前陶器小坏。赤絵付け。703は19世紀の関西系陶器土瓶。704は土師質土器罎。口縁部外面にハケ目残存。底部付近指圧痕多数。705は軒杖瓦。丸瓦部は左三つ巴、珠

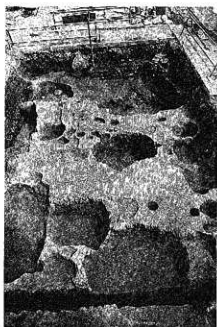
SK-191: 699は18世紀代の肥前陶器碗。外面銅緑釉、内面鉄釉。700は土師器小皿。

14区

(1) 遺構

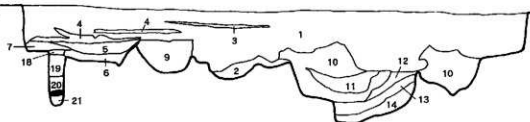
南北7m、東西10.7mの細長い調査区。遺構は調査区全体に土坑が広がり、西壁近くに南北溝が一本のびる。遺構面は標高3.000m~3.500m。17世紀代の遺構はSK-192、199、200。199、200は17世紀前半代の遺構。特に199からは遺物がまとまった量出土した。192も17世紀前半代が中心であるが、17世紀後半の遺物がわずかに出土。まざりこみか。18世紀代の遺構はSK-182。19世紀代の遺構はSK-160、161、166、169、181、188、198。調査区南東隅のSK-188は礫が大量に投げ込まれた土坑で、礫を取り除くと、10数cmの河石が直線的に配置されている様を検出できた。屋敷内の池のような遺構と思われる。

14区で特筆すべきは調査区西端の南北溝SD-2である。溝は幅45~50cm、深さ約110cm。まっすぐ直線的にの

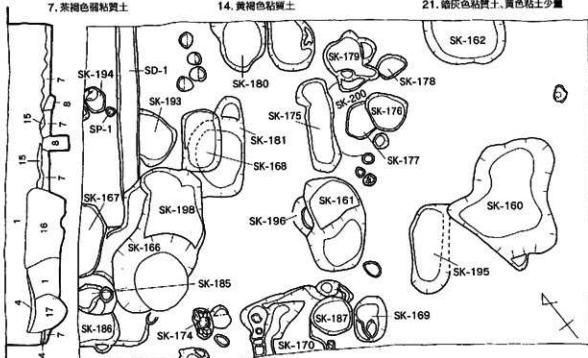


第94図 14区全景 西から東

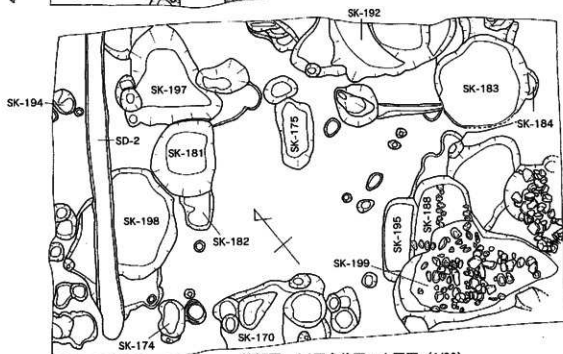
3.700m



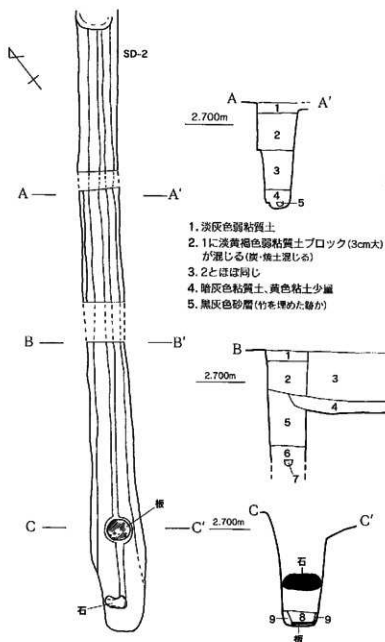
- | | | |
|--|------------------------------------|--|
| 1. 暗褐色腐砂質土(粘土・炭多い)
(トイシなどの腐り方もこの土か) | 8. 暗褐色土 | 15. 黄褐色砂層 |
| 2. 1より、やや細かい | 9. 暗褐色土(ほとんどのレキ、5~20cm大) | 16. 瓦だまり(1の土か) |
| 3. 皮層 | 10. 黒茶褐色腐粘質土(10cm大のレキまばら) | 17. 1よりやや粘質 |
| 4. 黒褐色火災層(附・焼土ぎっしり) | 11. 暗褐色土、やわらかい
(5~10cm大のレキ・瓦多量) | 18. 淡灰色粘質土 |
| 5. 褐色腐砂質土 | 12. 褐色粘質土 | 19. 18に淡黄褐色腐粘質土
ブロック(3cm大)がまじる(炭・焼土まじる) |
| 6. 暗褐色腐粘質土(5cm大のレキ多量) | 13. 12より黒い褐色粘質土 | 20. 19とほぼ同じ |
| 7. 茶褐色腐粘質土 | 14. 黄褐色粘質土 | 21. 暗灰色粘質土、黄色粘土少量 |



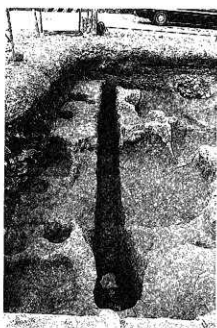
3.700m



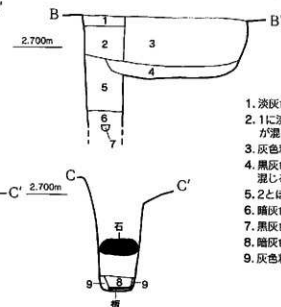
第95図 14区全体図・土層図(1/80)



1. 淡灰色弱粘質土
2. 1に淡黄褐色弱粘質土ブロック(3cm大)が混じる(灰・煤土混じる)
3. 2とほぼ同じ
4. 暗灰色粘質土、黄色粘土少量
5. 黒灰色砂層(竹を埋めた跡か)



第96図 SD-2 南から北



1. 淡灰色弱粘質土
2. 1に淡黄褐色弱粘質土ブロック(3cm大)が混じる(灰・煤土混じる)
3. 灰色粘質土
4. 黒灰色弱粘質土に黄土ブロック少量が混じる(煤土・灰あり、遺物多し)
5. 2とほぼ同じ
6. 暗灰色粘質土、黄色粘土少量
7. 黒灰色砂層(竹を埋めた跡か)
8. 暗灰色粘土
9. 灰色粘土

第97図 SD-2平面図・断面図 (1/40)

文は10個。706、707は軒丸瓦瓦当。どちらも左三つ巴。

SK-161; 708は19世紀代の関西系陶器。型打成形で魚型のつまみか。709は19世紀前～中頃の肥前磁器型打皿。輪花で、内面染付けに墨弾きの技法を用いる。710は1820～1860年代の肥前磁器くらわんか碗。見込みに4つの目跡あり。高台の欠損部に軸がかかっている。711は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。赤・緑・黄・黒の上絵付け。712は19世紀代の関西系陶器片口。見込みに5つの目跡。高台内に「三上□□」の墨書あり。713は19世紀の関西系土師質土器焙烙。714は19世紀代の在地区土師質土器蓋。外面全面へら磨き。「#」型の朱書きあり。715は土師質土器蓋。口縁部朱塗り。内面煤付着。716、717、718は土師器小皿。717と718は内外面とも黒色。719は砥石。「治」?の線刻文字あり。720は19世紀の土師質土器焔炉。口縁部直下に穿孔2つ残存。五徳一つ残存。721は軒丸瓦瓦当。左三つ巴。722は軒丸瓦。丸瓦部は右三つ巴、珠文なし。平瓦部分は楕文。

SK-166; 723は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。724は19世紀前半～中頃の肥前磁器輪花皿。型

打成形。燒雜あり。725は18世紀末以降の肥前磁器輪花皿。見込み蛇ノ目軸刺ぎ。高台は蛇ノ目凹型高台。口縁部は口鏝。726は19世紀代の関西系陶器德利。口縁部に銅緑釉がかかる。727は18世紀後半以降の肥前磁器瓶。728は18世紀後半以降の肥前磁器仏花瓶。729は1600～1630年代の土灰釉の唐津陶器皿。萁筒底。見込みに環状に砂目あり。730は19世紀代の関西系陶器蓋。白上を用いた三鳥写し。底部にケズリ痕あり。731は明治10年代の関西系陶器鍋。見込みに4個の目跡あり。底部に3つの脚がつく。732は19世紀代の瀬戸美濃製陶器植木鉢。高台に3つの切り込みあり。底部外面に「文キ」の墨書あり。

SK-169; 733は19世紀代の型打陶器人形。獅子。

SK-179; 734は軒平瓦瓦当。横文。

SK-181; 735～739は土師器小皿。740は18世紀～19世紀の肥前磁器瓶。741は18世紀後半の肥前磁器碗。742は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。743は18世紀代の福岡産の鉄釉陶器碗。744は18世紀前半の肥前陶器鉢。745は高村産の土師質土器焙烙。もち手が2個。体部全面手持ちへう削り。内面磨き。746、747は軒丸瓦瓦当。746は左三つ巴。747は右三つ巴、珠文は13個。

SK-182; 748は18世紀代の関西系陶器平形碗。749は18～19世紀の関西系陶器筒形碗。体部に「須秋月」の文字あり。

SK-184; 750は18世紀後半の肥前磁器碗。751は土師質土器甕。底部周辺指おさえ成形。体部内面へら状工具によるかきあげ。

SK-188; 752は19世紀以降の関西系陶器德利。底部に墨書がある。「白キル」か。753は手びねりの土師質土器とりべ。754は土師器小皿。755は軒丸瓦。左三つ巴、珠文は10個。細い巴頭が中央でくつつく。756、757は軒平瓦瓦当。756は高文。757は三葉文。

SK-192; 758は1610～1630年代の肥前白磁猪口。見込み及び底部から高台にかけて、粉殻多数付着。759は1600～1630年代の唐津土灰釉陶器碗。高台に砂目あり。760は1600～1630年代の唐津灰釉陶器溝縁皿。見込みに砂目あり。761は17世紀後半の二彩手の唐津陶器皿。見込みに重ね焼き痕あり。762の甕は底部に低い足が三つつく。内外面ハケ目調整。763は軒平瓦瓦当。

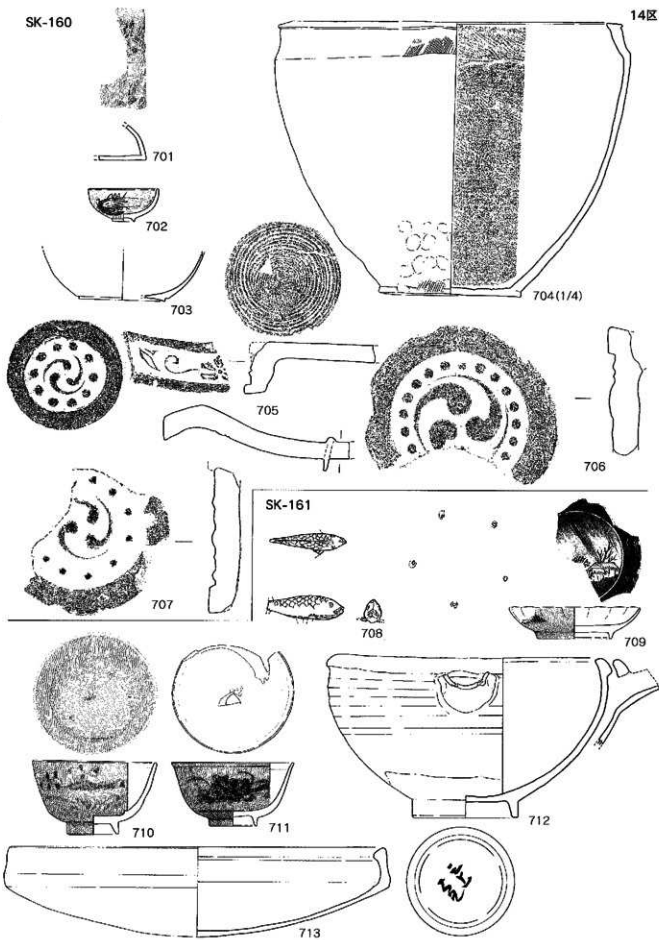
SK-198; 764は18世紀後半肥前磁器皿。底部にハリ支えの痕跡あり。高台内に渦「福」の銘あり。765、766は土師器小皿。767は19世紀関西系の白磁猪口。貫入あり。768は18世紀前半の肥前陶器鉢。鉄釉に白土の刷毛目調整。

SK-199; 769は17世紀代の肥前白磁壺。外面に牡丹が陽刻される。770は1630～1650年代の肥前磁器碗。771は1630～1650年代の型打の肥前磁器人形。老人。772は土師器小皿。773は17世紀初頭の朝鮮王朝産灰釉陶器碗。高台に砂目あり。774は鉄釉の陶器碗。775は17世紀前半の肥前内野山窯の陶器碗。高台に砂目あり。776は17世紀前半の信楽陶器壺。茶壺か。777は1590～1610年代の唐津陶器。778は17世紀の唐津系陶器鉢。切り高台。779は17世紀前半の肥前陶器挿鉢。780～784は軒丸瓦瓦当。780は左三つ巴、珠文は16個。781は左三つ巴。782は右三つ巴。783は左三つ巴。784は右三つ巴、珠文は小さい。巴頭が中央でくつつく。785は唐津の鉄釉陶器甕。内面格子目タタキ。外面削り。底部外面放射状に調整痕が回る。786は唐津の鉄釉陶器甕。内外面格子目タタキ。SK-199、160、188から出上した破片が接合している。

SK-200; 787は1600～1630年代の唐津灰釉陶器皿。見込みに砂目あり。

SK-160

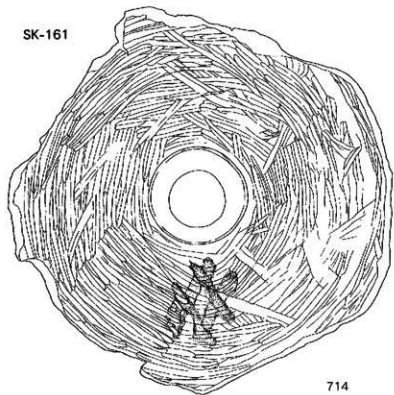
14区



第98图 遺物実測図 45 (1/3)

SK-161

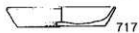
14区



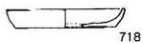
714



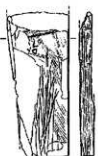
716



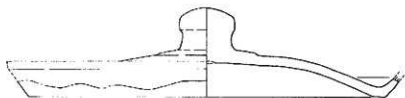
717



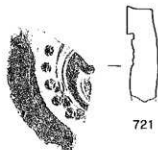
718



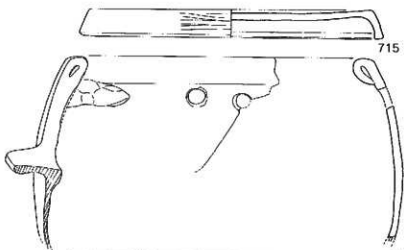
719



715



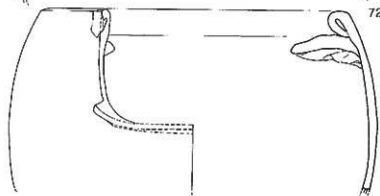
721



720

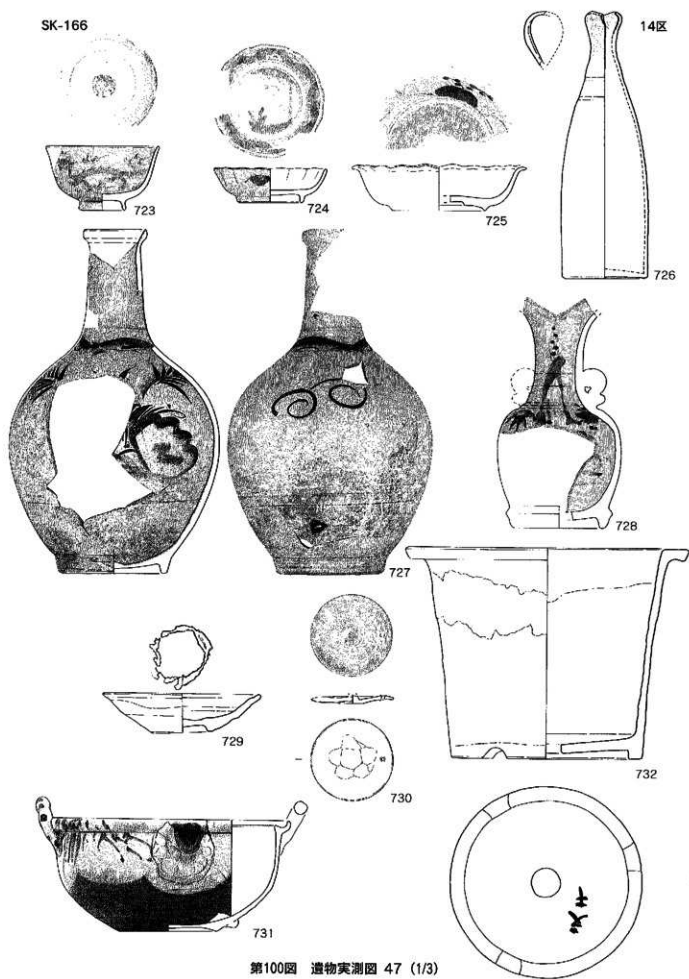


722



第99图 遗物实测图 46 (1/3)

SK-166

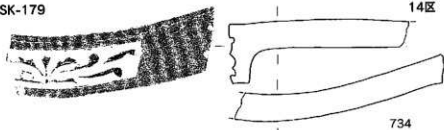


第100图 遺物実測图 47 (1/3)

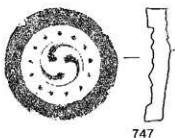
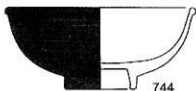
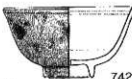
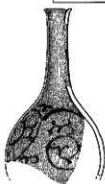
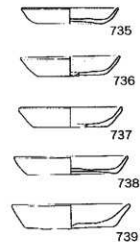
SK-169



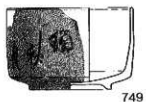
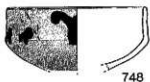
SK-179



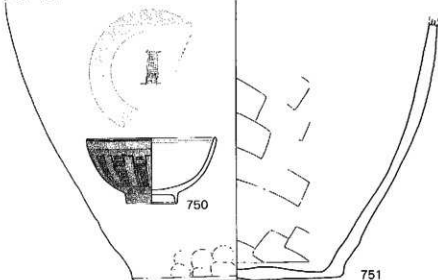
SK-181



SK-182

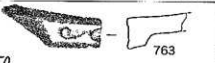
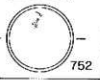
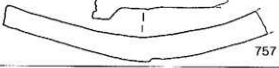
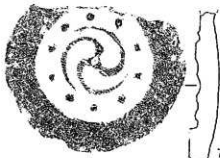


SK-184

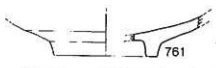
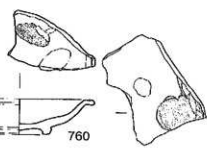
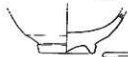
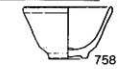
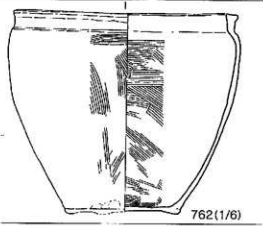


第101图 遺物実測図 48 (1/3)

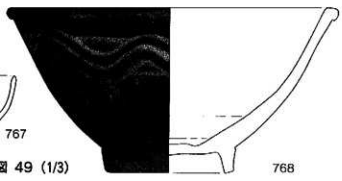
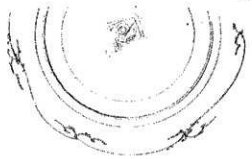
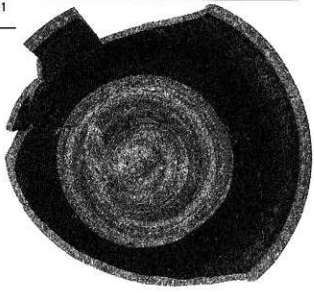
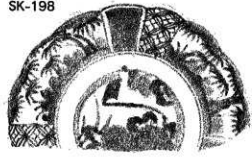
SK-188



SK-192

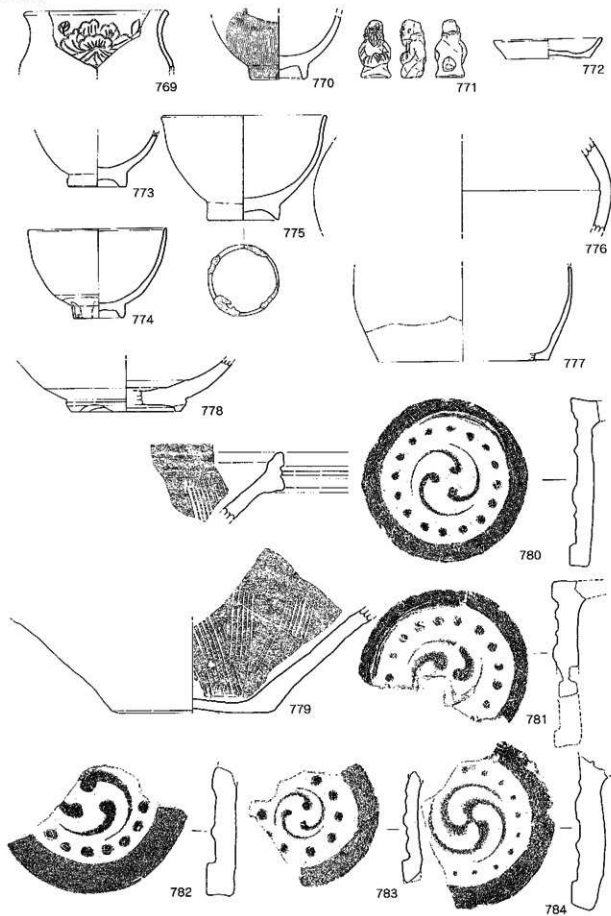


SK-198

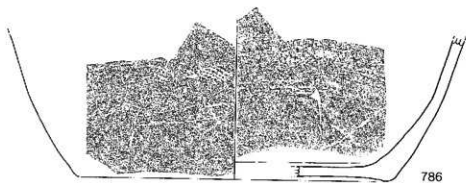
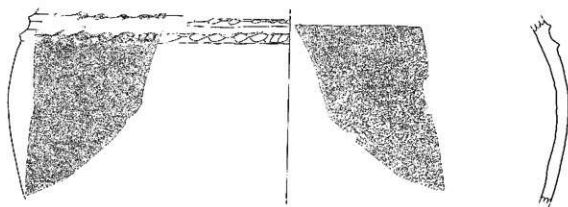
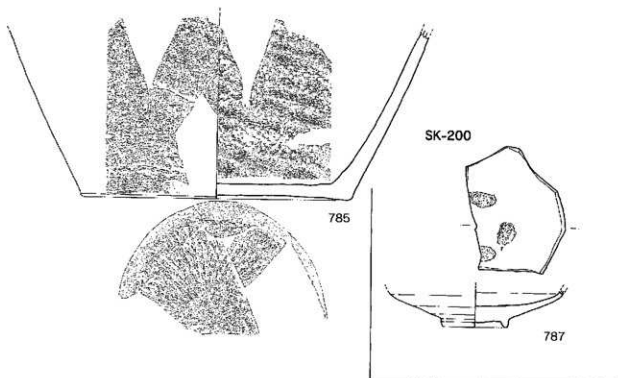


第102图 遺物実測図 49 (1/3)

768



第103图 遺物実測図 50 (1/3)



第104図 遺物実測図 51 (1/3)

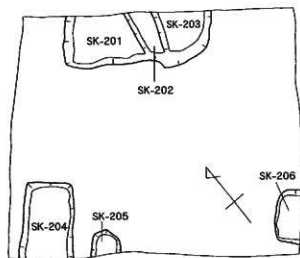
15区

(1) 遺構

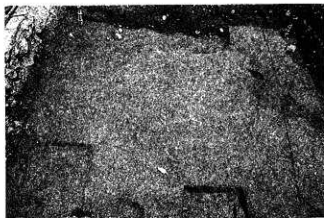
南北5.2m、東西6.0mの調査区。遺構はまばらで、取際にいくつかの土坑が掘られるのみである。北壁のSK-201、202、203はこの順で掘り込まれているのが土層より確認できる。SK-201～206まで、ほとんど遺物が出土せず、時代特定ができなかった。遺構は標高3.3m～3.5mより掘削されている。



- | | |
|---------------------|------------------------------|
| 1. 褐色土層(炭化物・焼土を含む) | 10. 反褐色土層 |
| 2. 暗褐色土層(炭化物・焼土を含む) | 11. 黄反褐色土層 |
| 3. 4とはほぼ同じ | 12. 黄褐色土層 |
| 4. 淡灰褐色土層 | 13. 黄褐色土層(弱砂質) |
| 5. 暗褐色土層 | 14. 13よりやや灰色が強い |
| 6. 明褐色土層 | 15. 反褐色土層
(灰色が弱い、炭化物少量含む) |
| 7. 暗褐色炭化物を多く含む | 16. 15よりやや暗め、
炭化物少し含む |
| 8. 反黄褐色土層 | 17. 反褐色土層
(灰色が強い、炭化物多く含む) |
| 9. 暗褐色土層 | 18. 暗灰褐色土層 |



第105図 15区全体図・土層図 (1/80)

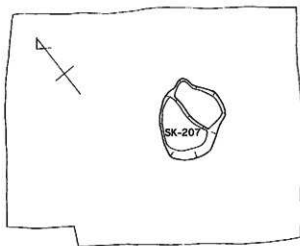


第106図 15区全景 南から北

16区

(1) 遺構

南北5m、東西6.3mの調査区。遺構はほとんどなく、中央にSK-207一つが掘られるのみ。遺構面は3.000m。遺物がほとんど出上りなかったため、時期不明。

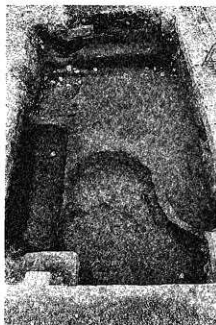


第107図 16区全体図 (1/80)

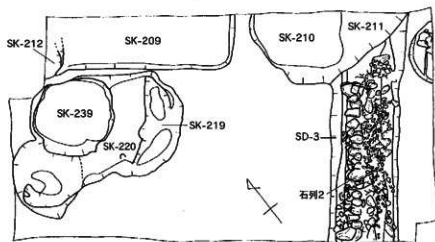
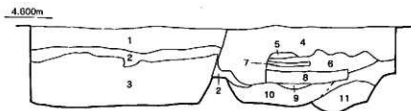
17区

(1) 遺構

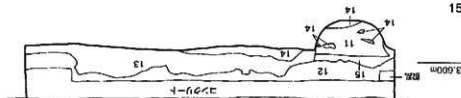
南北4.8m、東西9mの調査区。調査区東端には、南北方向に石列が伸びていた。東西幅1.4m、深さ90cmの溝状遺構から多量の石が出土した。石はかなり乱れてはいたが、南北方向に意識的に並べられている様子が伺えた。屋敷地をくぎる施設と考えられ、低い石垣（石列2）のようなものと思われる。石を除去すると、平坦な床面を持つ南北方向の溝SD-3が現れた。標高3.200mから掘り込まれ、床面は標高2.600m、溝幅は上場で1.5m、下場で約85cm。SK-209は調査区外にのびるため全形は不明だが、方形で、標高3.800mから掘られた、深さ1m、床面フラットな土坑である。出土遺物は18世紀後半で、土師器小皿がまとめて出土している。焼土や炭化物を多量に含んでおり、火災の片付け穴と考えられる。石列2を切るSK-210からは19世紀代の遺物が出土している。石列2からは16世紀末～17世紀前半の中国製磁器皿が出土しているが、遺物量が少なく、遺構の時期決定はできなかった。SK-219、223は19世紀の遺構である。



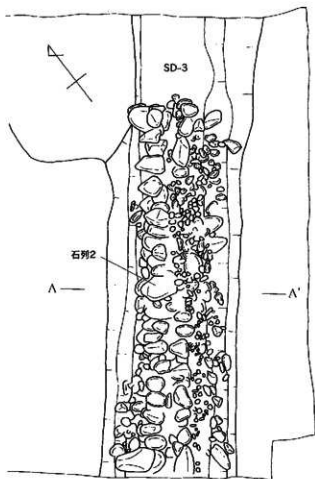
第108図 17区全景 西から東



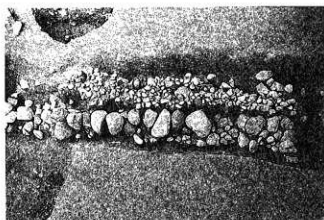
1. 灰褐色土層
2. 褐色土層(細砂質)
3. 黒褐色土層
(焼土・炭化物を多く含む、
瓦片を含む、火災土層)
4. 暗褐色土層(ブロック片・瓦片を含む)
5. 暗褐色土層(4よりやや明るめ)
6. 灰褐色土層、砂質
7. 赤褐色土層(焼土・ブロック)
8. 灰褐色土層
9. 黒褐色土層
10. 暗灰褐色土層(10～20cmのレキ多い)
11. 黄褐色土層(石列2)(30～50cmのレキ)
12. 灰色土層
(ジャリ、上のコンクリートの覆り方)
13. 褐色土層
14. 明褐色土層(埋山)
15. 11よりやや暗め



第109図 17区全体図・土層図 (1/80)



第110図 SD-3平面図・断面図 (1/40)



第111図 SD-3・石列2 検出状況



第112図 SD-3 完掘状況



第110図 SD-3平面図・断面図 (1/40)

(2) 遺物

- SK-209; 788は18世紀後半以降の肥前磁器蓋物碗。789は18世紀後半以降の肥前磁器皿。型打成形。790は18世紀後半の肥前磁器皿。高台内の銘は濁「福」か。791は17世紀後半の肥前磁器色絵変形皿。型打成形。口縁部は口鏝。792は陶器印鑑。型打成形。793は軒丸瓦。左二つ巴。794～802は土師器小皿。
- SK-210; 803は19世紀前半の肥前磁器の変形ひし形皿。型打成形。高台に離れ砂付着。
- SD-3; 804は16世紀末～17世紀前半の中国製磁器皿。底部砂付着。
- SK-219; 805は19世紀関西系鉄釉陶器壺。806は19世紀代の関西系鉄釉陶器乗桶。穿孔2つ。把手一つ。
- SK-223; 807は上製品の塔。型打成形。808は19世紀代の肥前磁器八角鉢。
- SK-238; 809は肥前磁器香炉。

SK-209



788



792



793



17区



794



795



796



797



798



799



800



801



802



789

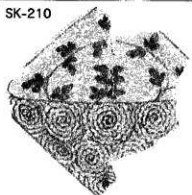


791



790

SK-210



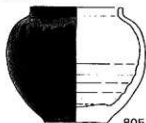
803



SD-3 石列2



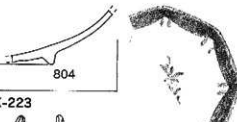
SK-219



805



804



SK-223



807



808



806

SK-238



809

第113圖 遺物実測図 52 (1/3)

18区

(1) 遺構

南北6.8m、東西5.6mの調査区。調査区全体に遺構が広がる。標高3.3mほどで遺構面。火災の片付け穴と思われるものはSK-213、217、227。炭と焼土が多量に含まれる層。SK-215は瓦を敷き詰めた長方形の遺構。南北3.2m×東西1.3mの範囲に、平瓦を重ねがないよう丁寧に敷き詰めていた。SK-215の東西の両端には直径10cm、下場径4cmほどの丸い穴が南北に並んでいた。SK-215の床面は15cmほどの深さに平坦に仕上げられていた。調査区の位置は通りに面した玄関口、もしくは前庭部分にあたり、SK-215は人が歩く通路を瓦で装飾したものであろう。二列の穴は瓦敷きを支える杭か櫓のような施設の痕跡ではないだろうか。SK-215は遺物より19世紀代に比定される。SK-217、218も19世紀前半の遺構である。SK-216は素焼きの大きな甕が掘えられており、トイレ遺構と思われる。SK-215以降の施設である。SK-225は北の壁際にかかった上炕。962の完形品の陶器甕が出土した。ごみ捨て穴というより貯蔵庫のようなものと考えられる。



第114図 18区全景 北から南



第115図 SK-215

(2) 遺物

SK-214; 810は磁器輪花皿。811は鉄袖の陶器壺。

SK-215; 812は1610～1630年代肥前磁器瑠璃釉碗。胴部は縦に鎗が入る。813は19世紀代の関西系陶器皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。814は軒平瓦瓦当。三葉文。瓦敷きの下より出土。815は軒棧瓦。

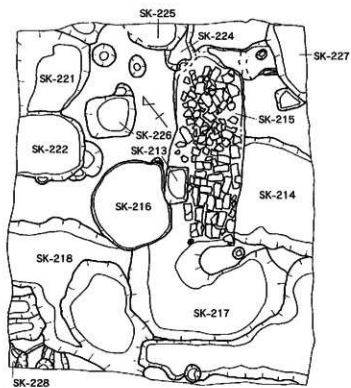
SK-217; 816は軒丸瓦瓦当。左三つ巴。巴の尾は短く、珠文は大型で9個。817は18世紀後半以降の肥前磁器瓶。818は18世紀後半の肥前磁器碗。青磁染付け。内面に染付けを施す。高台内に溝「福」



第116図 SK-225 壘出土状況

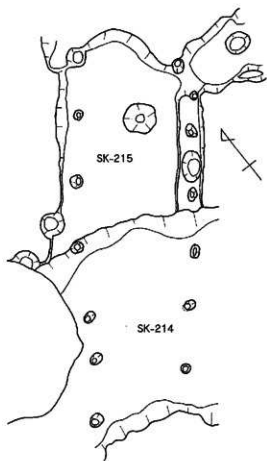
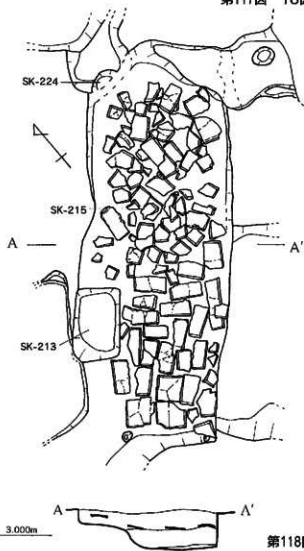
の銘。819は19世紀代の磁器大碗。口縁部は端反。高台に離れ砂付着。高台内に銘あり。製作地不明。820は18世紀後半の肥前磁器色絵碗。高台内に銘あり。821は18世紀後半以降の肥前磁器火入れ。蛇ノ目凹型高台。見込みに砂付着。822は17世紀前半の唐津陶器水注。二つの耳がつく。823は土師質土器壺。外面削り整形。口縁部と胴部のつなぎ目である頸部内面は指頭痕がめぐる。

SK-218; 824、825は1820～1860年代の肥前



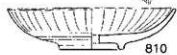
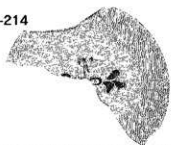
1. 表土
2. 暗赤褐色土、炭、焼土、火災層
3. 淡灰褐色弱砂質土
4. 淡灰色砂層
5. 黄褐色粘質土
6. 暗灰褐色、弱砂質土
7. 淡灰褐色、焼土、炭、火災層
8. 黒灰色炭層
9. 灰茶褐色火災層、焼土、炭
10. 黒色炭層(焼土混じり)
11. 淡褐色弱砂質土
12. 11よりやや細かい
13. 褐色土(炭、焼土混じり)
14. 黄褐色弱粘質土
15. 黒褐色弱砂質土(火災層、炭、焼土多量)
16. 黒灰色弱粘質土(炭、焼土)

第117図 18区全体図・土層図 (1/80)

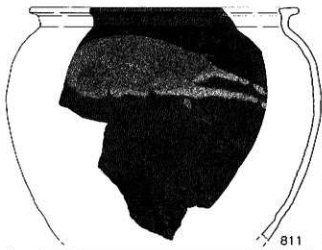


第118図 SK-215瓦敷(左図)・完掘(右図)状況 (1/40)

SK-214



810



811

SK-215



812



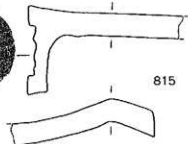
813



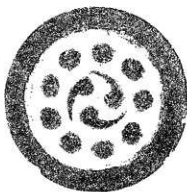
814



815



SK-217



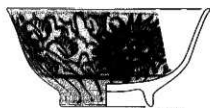
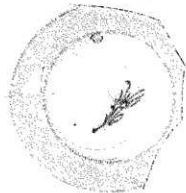
816



817



818



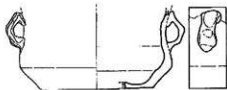
819



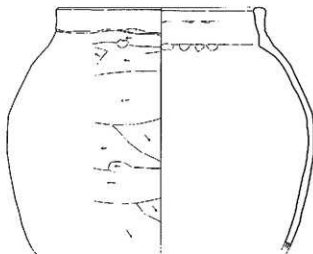
820



821



822

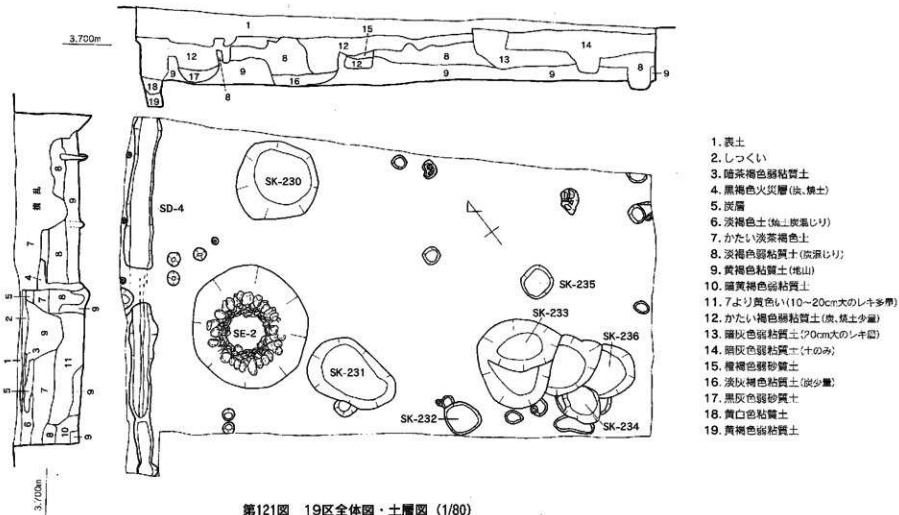


823

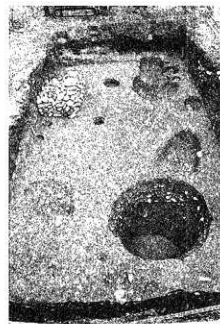
第119图 遗物実測图 53 (1/3)



第120图 遺物実測図 54 (1/3)



第121図 19区全体図・土層図 (1/80)



第122図 19区全景 西から東

磁器端反碗。826は19世紀前半の萩焼き陶器碗。薬灰釉に緑釉で絵付けをする。827は17世紀前半の肥前陶器碗。器体ゆがみあり。828は19世紀代の関西系陶器碗。内面白釉、外面は白釉、鉄釉、緑釉をかけ、イチチン掛けで花菱草を描く。829は瀬戸美濃製陶器波緑皿。830は1770～1800年代の肥前磁器蓋。つまみ部は菊花型の型打成形。831は土師質土器火鉢。外面丁寧な磨き。獅子頭付きの脚一つ残存。832は三葉文の軒平瓦。833は軒棧瓦。丸瓦部は欠損。平瓦部は蕨文。小倉城と同範か。834は土師質土器挿鉢。835は土師質土器鉢。体部外面下部には指頭痕がめぐる。内面は全面横方向の刷毛目。底部外面刷毛目調整。

SK-225; 836は陶器甕。胴部にえくぼ状のへこみあり。内面刷毛目残存。ほぼ完形品。

19区

(1) 遺構

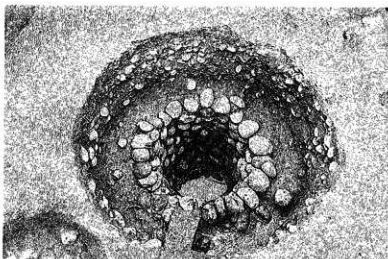
南北5.8～6.7m、東西10.5～11m。遺構の密度は高くないが、西側に井戸と南北に走る溝がある。年代のわかった土坑はSK-230、231、233で、いずれも19世紀代。遺構面は3.100～3.400m。SF-2は直径2.2～2.6mの円形の井戸掘り方の中に内側の直径1.1mほどの石組み井戸が据えられる。石組みの石は20～30cmほどの川原石で、円形につまれているが、円形とはいえ、一辺に長短はあるものの八面の直線で構成されている。井戸の遺構検出面からの深さは1.2mほどである。自然な状態で地下水がわきでていた。また、調査区の西端には幅50～60cmの直線的な溝SD-4が南北に走っていた。溝は標高3.000mから掘り込まれていた。断面Bの部分では、標高3.200mの地山「」の下をトンネル状に溝がもぐる。床面の標高は、約2.450m。溝の中央には幅6cmほどの暗黒色粘質土の細い層が南北に通っていた。この溝はまさに14区で検出した御水道の遺構と同じものである。溝の北半分の西壁には直径10cmほどの小さな穴があいていた。標高3.85mから掘り込まれており、断面に一部木材がのこっていた。約1.3mおきに溝にそうように配置されていた。御水道の壁を保護する施設の跡であろうか。

(2) 遺物

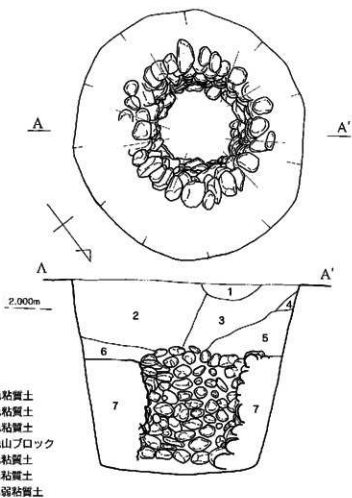
SK-230; 837は19世紀代の関西系陶器皿。見込み及び高台畳付に、それぞれ目跡3つ残存。838は鉄釉の陶器皿。口縁部肥厚する。製作地不明。

SK-231; 839は18世紀後半の肥前磁器碗。青磁染付け。840は19世紀代の瀬戸美濃製型打白磁碗。841は19世紀代の陶器瓶。842は軒丸瓦。左三つ巴。

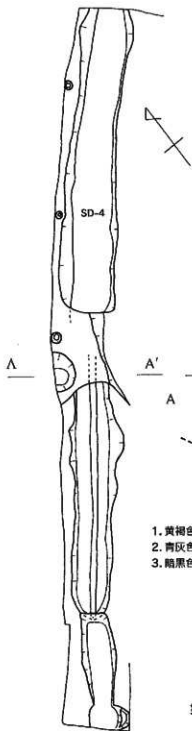
SK-233; 843は鉄釉の陶器壺。外面肩部に花の押し型。内面格子目タタキ痕。844は1820～1860年代の肥前磁器小坏。845は19世紀代の色絵磁器小坏。京か瀬戸美濃製か。846は19世紀代の肥前磁器徳利。847は瀬戸美濃製陶器皿。口鏤あり。848は18世紀後半以降の関西系陶器火入れ。底部に白土の化粧土。底部外面墨書あり。849、850は軒丸瓦。どちらも左三つ巴。850の珠文は小さい。851は型打の磁器ままごと道具。852～854は土師器小皿。853は底部中央に焼成後一つ穿孔。



第123図 SE-2

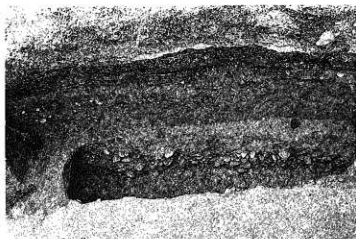


第124図 SE-2平面図・断面図 (1/40)

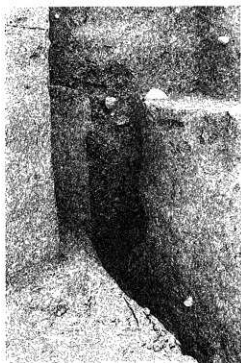


1. 黄褐色粘質土(10~20cm次のレキ)
2. 青灰色粘質土
3. 暗黒色粘質土

第127図 SD-4平面図・断面図(1/40)



第125図 SD-4横の木杭跡検出状況 東から西



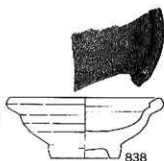
第126図 SD-4南壁断面

20区

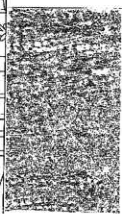
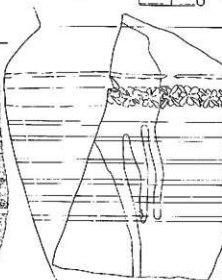
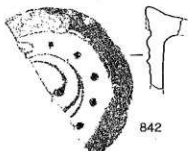
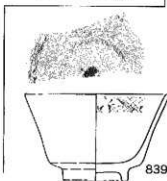
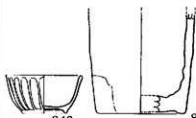
(1) 遺構

南北4.5m~4.9m、東西11.3~11.8mの調査区。調査区全体に大型の廃棄土坑が広がる。調査区西端のSK-240、SD-6は検出当初丸い河原石が投げ込まれていたが、上層の乱れた石を取り除くと、SK-240から北側をむいた東西方向の石垣が検出された。全て20~30cmの河原石で築かれており、検出時の上層の石は、石垣上部が崩壊した痕跡であろう。石垣は現況で1.3mの高さが残存していた。石垣の最下層は標高2.100m。石垣前面に南北にのびるSD-6は溝状を呈しているが、平坦な床面は3.000mで

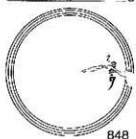
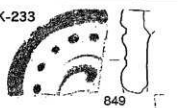
SK-230



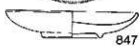
SK-231



SK-233



846



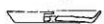
847



852



848

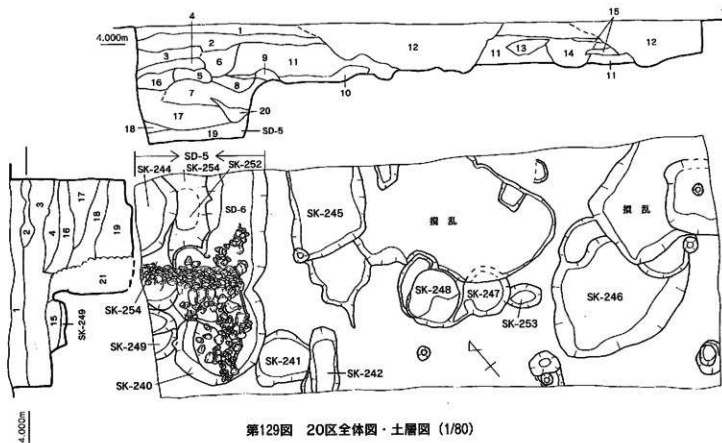


853



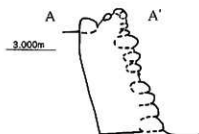
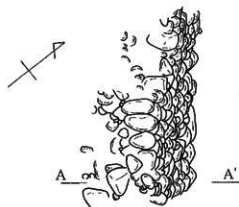
854

第128圖 遺物実測図 55 (1/3)

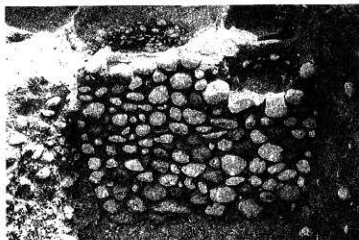


第129図 20区全体図・土層図 (1/80)

- | | |
|-----------------------|---|
| 1. 赤褐色土層 (砂利を含む) | 11. 暗褐色土層 |
| 2. 黒色土層 | 12. 灰褐色土層
(調査区の東側の竪瓦) (コンクリート片を含む) |
| 3. 暗褐色土層 | 13. 暗褐色土層 (14を切る) |
| 4. 黄褐色土層 | 14. 暗褐色土層 (13よりやや明るめ) |
| 5. 黒褐色土層 (炭化物を多く含む) | 15. 黒褐色土層 (炭化物を多く含む) |
| 6. 灰褐色土層 | 16. 暗褐色土層 |
| 7. 褐色土層 | 17. 暗褐色土層 (15~30cmのレキ多く含む) |
| 8. 暗褐色土層 | 18. 灰褐色土層 |
| 9. 暗褐色土層 | 19. 18よりやや暗め (砂質、15~20cmのレキ含む) |
| 10. 暗褐色土層砂質 (炭化物少々含む) | 20. 褐色土層、黄色ブロックを含む |
| | 21. 暗褐色土層
(砂質、5~20cm程のレキ多く含む、石垣の裏詰め) |



第130図 SD-5石垣 (1/40)



第131図 SD-5石垣 北から南

石垣最下層より高い。3.400mの高さから掘り込まれている。道路側に背をむけた格好で築かれた石垣の意味は不明であるが、庭の中の水をためる施設であったのだろうか。調査終了間際になり、北側壁を精査したところ、壁にかかるSD-6、SK-244、254のドは当初地山と思っていたが、さらに深く掘ることができた。断面を見ると、床面が平坦な溝SD-5で、石垣前面の埋土と共通する。時間の関係状、石垣裏面を掘ることはできなかったが、南北方向にまっすぐのびる26区SD-10のような境界溝になるのではないか。溝は標高約3.100mから掘り込まれ、北壁の床面は標高約2.000mである。溝幅は不明。遺物はほとんど出土しないため時期不明。SK-243はSD-5廃棄後、その境界を踏襲して造られた溝であろう。

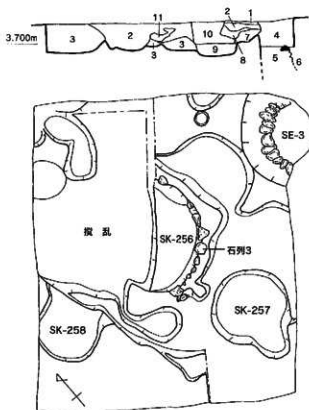


第132図 20区全景 東から西

21区

(1) 遺構

南北6.8m、東西5.8mの調査区。調査区全体に浅い落ち込みがあり、深い廃棄土坑はみあたらない。北東隅に石組み井戸SE-3、中央に凹形に弧を描く石列3がある。井戸の掘り込みは標高3.600mから。20~30cmの河原石を積んでいる。調査区の端で、深掘りは難しいことから、検出だけに留めた。中央のSK-256は13個の石が弧を描く浅い落ち込みの遺構である。石の中には2個の瓦輪塔の笠が使用されている。石が据えられている床面は標高3.200m。石は黄褐色粘質土で固定されていた。凹形にめぐる



第134図 21区全体図・土層図 (1/80)



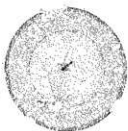
第133図 21区全景 西から東

1. 整地層、明褐色弱砂質土
2. 褐色土、炭微塵
3. 黒褐色、火災層、炭、灰土多量
4. やわらかい淡褐色土、10cm大のレキ多量
5. 淡褐色砂層(5~20cm大レキ多量)(SE-1の掘り方)
6. SE-1(10~20cm大レキ)
7. きめの細かい淡黄褐色土(炭・灰土少量)
8. 淡灰褐色砂層(炭・灰土少量)
9. きめの細かい、Bよりやや明るく、きめ細かい淡灰褐色砂層
10. 黒褐色弱砂質土(5~10cmレキ多量)
11. 雨茶色弱粘質土

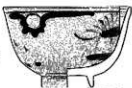
SK-256



856



857



859



858



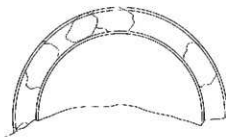
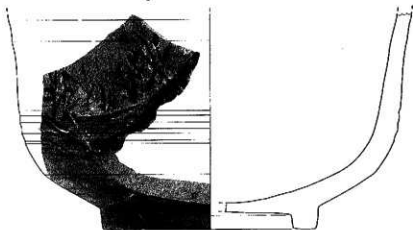
861



855

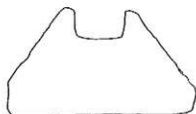
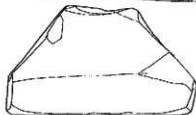
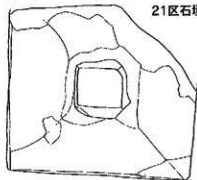


862



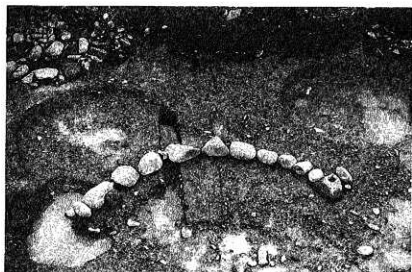
860

21区石壇



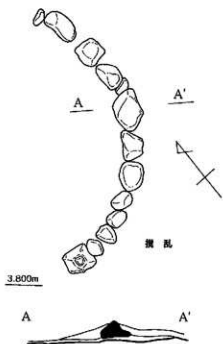
第135図 遺物実測図 56 (1/3)

863(1/6)



第136図 SK-256・石列3 西から東

かどうか、西側を攪乱で失っているため不明。石列の円の直径は2.5mほど。19世紀の遺物が出土した。石列のそれぞれの石はしっかりかみあっているわけでもなく、庭の縁石として簡単に並べられているだけの印象をうけた。



第137図 SK-256・石列3平面図・断面図 (1/40)

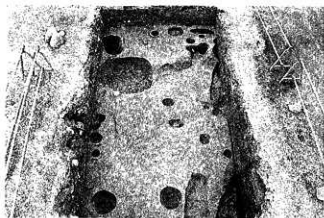
(2) 遺物

SK-256; 855は18世紀前半の肥前陶器鉢。見込みと高台に砂目痕あり。856は18～19世紀代の型打土製品人形。中心部円錐状に空洞。857は18世紀前半の唐津陶器香炉。858は17世紀後半～18世紀前半の波佐見陶器皿。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。859は1820～1860年代の肥前磁器端反碗。860は17世紀後半～18世紀前半の肥前陶器鉢。見込みに砂目跡。高台畳付に砂目痕あり。861と862は同範の蓮華文軒平瓦。石列3; 863は石製五輪塔の笠。

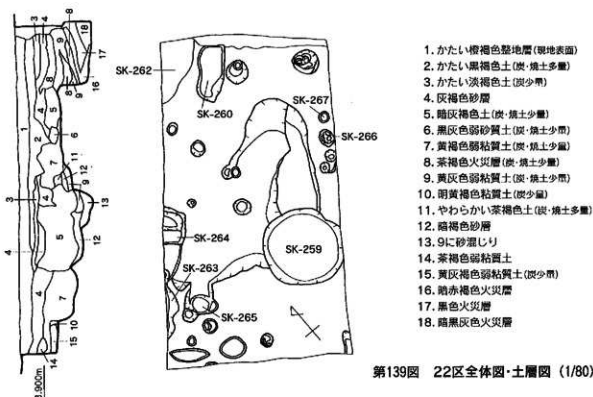
22区

(1) 遺構

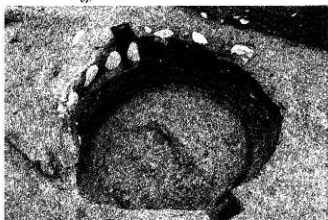
南北7.0m、東西3.7mの狭い調査区。深い土坑はSK-259のみで、深さ20cmほどのピットが多い。SK-259は標高3.400mから掘り込まれた直径1.8mの円形の掘り方に、直径1.2mの掘り込みが中心にある。深さは40cmほどで、床面は中央より縁がやや下がりが気味。掘り方には平たい河原石が差し込まれた形でめぐっている。土坑の形状から、甕のようなものを中心に据えて、石で周囲を固めた遺構と考えられる。



第138図 22区全景 北から南



第139図 22区全体図・土層図 (1/80)



第140図 SK-259

23区

(1) 遺構

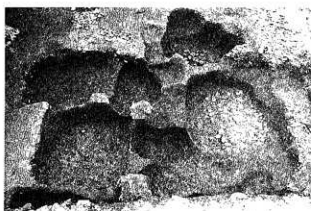
南北7.0m～東西14mの調査区。調査区西側で、標高3.900mの面で小石を集めた建物基礎を検出した。SP-1、2、3、4は直径60cm、深さ15～20cmほどのピットに小石を詰め込んだもので、柱を支える基礎であろう。南北約2m×東西約2.9m。これらの東側には同一レベルで石列4が南北に直進する。幅60cm、深さ10～15cmで、調査区北壁で西に曲がる。SP同様小さな石がぎっしり詰められていた。SD-7からは18～19世紀の遺物が少量出土しており、SPとあわせて19世紀代の建物基礎遺構である。石列4と同様の遺構は調査区東側からも検出された。標高3.500mの石列5である。石列4より6.3m東側で、幅80cm、深さ5cmの溝に小さな石が詰められていた。23区では、他にも石敷きの遺構がいくつか検出されている。石列6は石列4とほぼ同レベル。石列7、8は石列5と同レベルである。石列6、7、8はいずれも扁平な河原石を敷き詰めた石敷き遺構で、建物基礎というよりは玄関や庭の敷石となろう。17世紀の遺物を検出する土坑はSK-313である。SK-313は調査区西端の深さ15cmほどの浅い穴で、SK-307、312、317に切られているため全形は不明である。18世紀代の土坑はSK-270、275、277、281、290、301、302、304、312、317、319。19世紀代の土坑はSK-268、272、278、279、300。



第141図 23区第一面 北から南



第144図 石列5 東から西



第142図 23区第三面 北から南



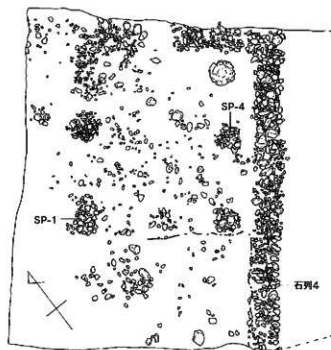
第145図 石列6 北から南



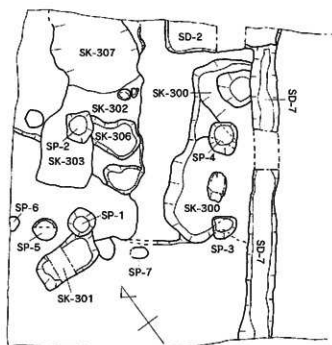
第143図 23区全景 西から東



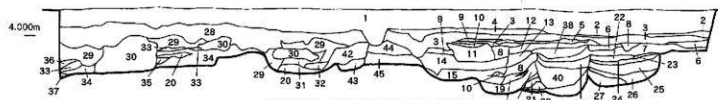
第146図 石列7・8 北から南



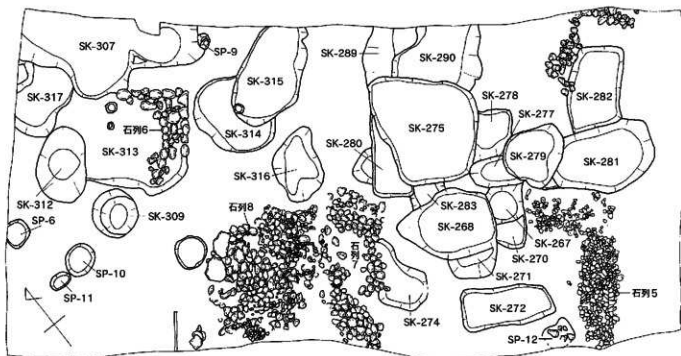
第147図 23区第1面①西側 (1/80)



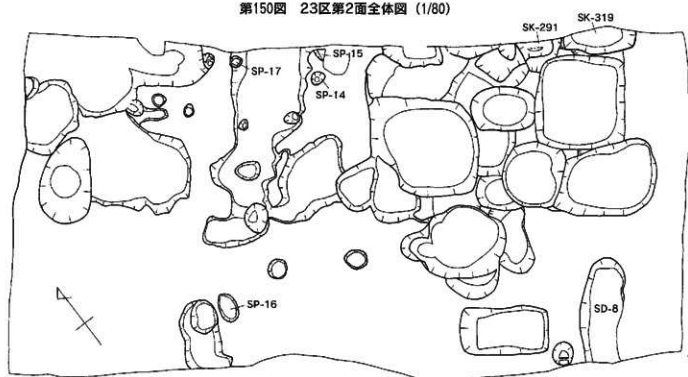
第148図 23区第1面②西側
(第1面①の石をとりのぞいた状態)



第149図 23区北壁土層図 (1/80)



第150図 23区第2面全体図 (1/80)



第151図 23区第3面全体図④ (1/80)

1. 近代の盛土
2. 黄褐色粘質土(敷地底)
3. 淡褐色細砂質土(灰含む)
4. 3より薄い
5. 炭と焼土の火災層(黒色)
6. 10cm大のレキ混じり階層土
(SK-282色の石まきはこの層にあたる)
7. 褐色弱粘質土の混じった弱砂土(灰含む)
8. 灰色砂層
9. 黄褐色砂質土(灰含む)
10. 灰色粘質土
11. 3より薄い黄褐色砂質土(灰多い)
12. 3より薄い褐色弱粘質土(灰含む)
13. 淡褐色弱粘質土(砂混じり)(敷地底)
14. 階層色砂質土(灰多い)
15. 14より薄い黒褐色砂質土(灰多い)
16. 黄褐色弱粘質土
17. 黒灰色弱粘質土(灰非常に多い)
18. 明茶褐色弱粘質土
19. 淡褐色砂質土
20. 黒色炭層
21. 黄白色粘質土
22. 淡黄褐色弱粘質土
23. 階層色弱粘質土
24. 階層色砂層
25. 22と同様
26. やわらかい黒褐色土(灰非常に多い)
27. やわらかい淡褐色土(灰含む)
28. かたい明黄褐色土
29. 黒褐色土(灰・炭土含む)
30. 5~10cm大のレキ層
31. 灰黄色のやわらかい粘質土
32. 灰色弱粘質土
33. かたい黄褐色土
34. やわらかい黒灰色土(灰非常に多い)
35. 20+黄褐色粘土
36. 29よりやや薄い
37. 36より薄い階層色土
38. 淡褐色砂層(かたい)
39. 淡褐色土
40. 階層色土20cm大のレキ多数
41. 黄褐色砂層
42. 灰色粘質土
43. 黄灰色粘質土
44. 黄褐色粘質土
45. 5~10cm大のレキ多量の黄褐色粘質土(露下層地底が)

(2) 遺物

SK-268; 864は18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器猪口。865は18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器仏飯器。866は18世紀後半の肥前磁器輪花皿。高台内の銘は渦「福」。867は18世紀前半の肥前色絵磁器。器種不明。いくつかの脚の痕跡あり。868は19世紀の陶器合子蓋。869は19世紀の関西系磁器徳利。底部に「天又」の墨書あり。870は陶器湯のみ。製作地、年代不明。871は型打土製品面型。872は鉄軸陶器鉢。見込みに砂目4箇所あり。873は軒平瓦。874、875は軒丸瓦。どちらも左三つ巴。珠文は874が10個で大型。875が17個で粒が小さい。

SK-270; 876は18世紀後半の肥前磁器八角鉢。877は軒丸瓦。右三つ巴。

SK-272; 878は18～19世紀肥前型打磁器皿。

SK-273; 879は土師質土器火鉢。内面刷毛目。外面磨き、アヤメの文様を線刻。脚の痕跡がある。

SK-275; 880は18世紀後半肥前磁器くらわんか碗。881は17世紀後半～18世紀前半の肥前磁器輪花皿。高台内渦「福」の銘あり。882は18世紀肥前磁器合子蓋。型打成形。883は18世紀前半の肥前磁器輪花皿。高台内にハリささえ痕あり。「大明成化年製」銘。884は土師質土器鉢。外面ナデ調整。内面粗い刷毛目残存。885は高村焼きの上師質土器こね鉢。内面丁寧な磨き。口縁部内面は丹塗りされる。886はドーム型の瓦質土器瓦灯傘。穿孔あり。4箇所か。887は堺の上師質土器塩壺蓋。内面布目痕あり。888は18世紀の堺の土師質土器塩壺。889～894は土師器小皿。889は内面に「めま甲」の墨書あり。

SK-276; 895は1630～1660年代の肥前磁器皿。896は土師器小皿。

SK-277; 897は18世紀後半の肥前青磁香炉。898は18世紀～19世紀の肥前磁器瓶。二つの取手がつく。899は鉄軸陶器。器種不明。900は18世紀後半の関西系色絵陶器鉢。

SK-278; 901は19世紀の肥前磁器色絵瓶。902は18世紀後半以降の関西系陶器土瓶。

SK-279; 903は18世紀～19世紀の関西系陶器鉢。904～907は土師器小皿。

SK-281; 908は18世紀前半の肥前系磁器碗。909は18世紀前半の関西系色絵陶器鉢。

SK-282; 910は土師質土器鉢。内外面刷毛目わずかに残存。

SK-290; 911は軒丸瓦。右三つ巴。912は18世紀肥前磁器瓶。913は土師器小皿。914は型打成形の土製品人形。

SK-300; 915は18世紀後半以降の肥前磁器蓋。916は19世紀の瀬戸美濃製陶器。器種不明。外面は文様を掘り込む。刺突痕多数あり。

SK-301; 917は鉄軸の陶器挿鉢。製作地不明。918は高取系の陶器鉢。口縁部輪花状に波打つ。見込みに丸い日跡あり。外面に付着物あり。

SK-302; 919は18世紀前半の肥前陶胎染付香炉。920は18世紀後半の肥前陶器碗。胴部にえくぼ状のくぼみあり。921は17世紀後半の肥前青磁鉢。

SK-304; 922は18世紀後半の肥前磁器小杯。923は18世紀後半の肥前磁器碗。924は17世紀後半～18世紀前半の肥前陶器碗。925は18世紀後半の肥前磁器碗。うがい茶碗か。926は18世紀の肥前磁器輪花皿。内面瑠璃軸。口銘あり。高台内はり支えの痕跡あり。

SK-307; 927は瓦質土器甕。内面刷毛目残存。

SK-308; 928は脚が二箇所ついた陶器。器種不明。高台内に砂目三箇所付着。

SK-312; 929は鉄軸の陶器甕。内面格子日叩き。外面肩部に貼り付け装飾の痕跡あり。底部外面に日跡二箇所あり。930は高取系の鉄軸陶器瓶か。931は18世紀後半以降の関西系陶器土瓶。

SK-313; 932は1630～1650年代の型打磁器輪花皿。高台疊付他に砂付着。

SK-268

23区



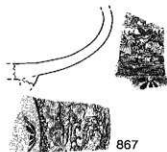
864



866



865



867



869



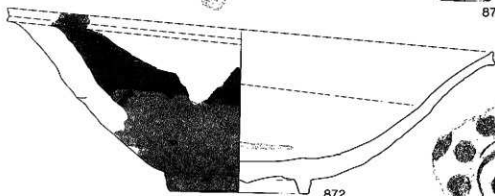
868



870



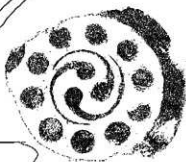
871



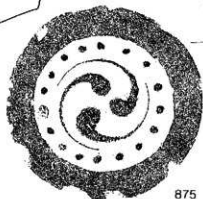
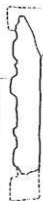
872



873



874



875



SK-270



876

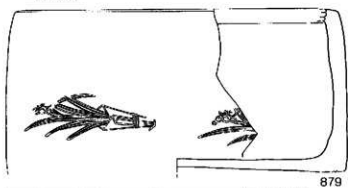


877



第152圖 遺物実測図 57 (1/3)

SK-273

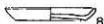
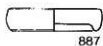
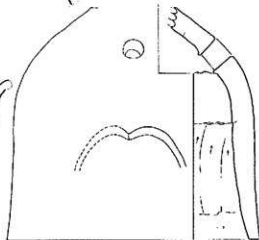
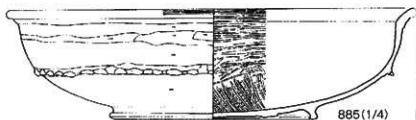
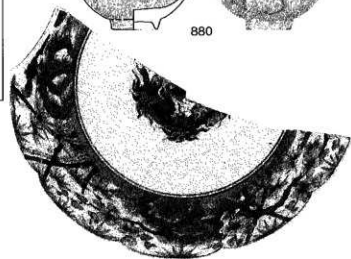
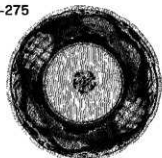


SK-272

23区

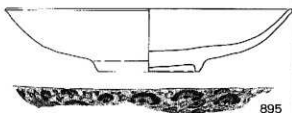
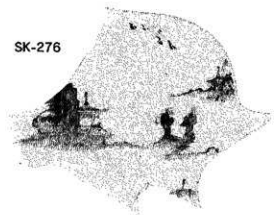


SK-275

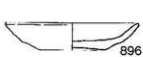


第153図 遺物実測図 58 (1/3)

SK-276

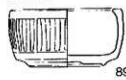


895

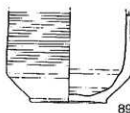


896

SK-277



897

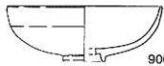


899



23区

898

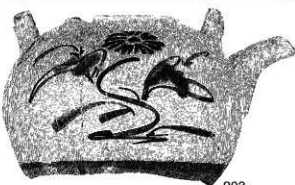
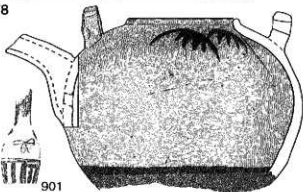


900

SK-278



901



902

SK-279



903



904



905

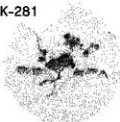


906



907

SK-281



909



908



SK-282



910

SK-290



913



911



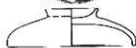
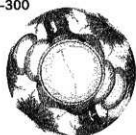
912



914

第154图 遺物実測図 59 (1/3)

SK-300



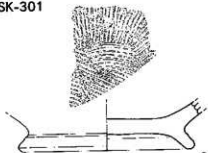
915



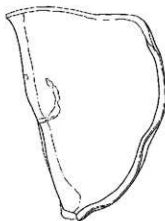
916

23区

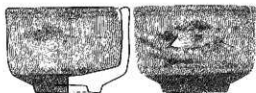
SK-301



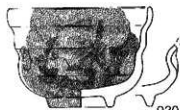
917



SK-302



919

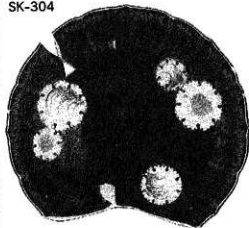


920



918

SK-304



926



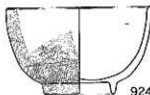
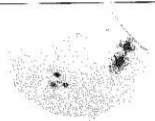
922



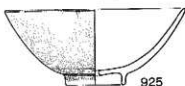
921



923

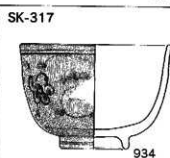
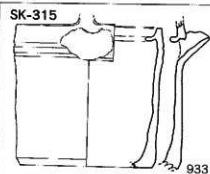
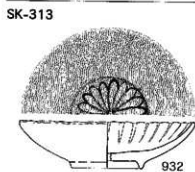
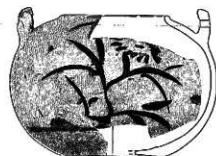
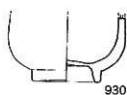
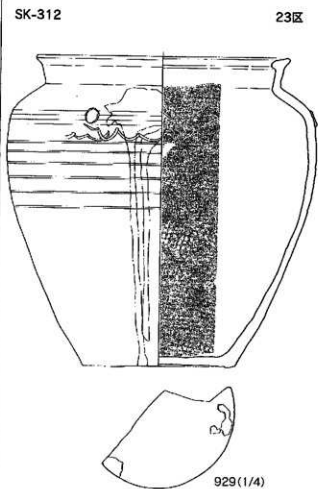
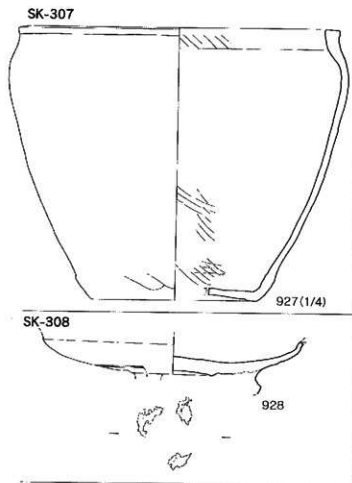


924

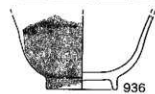
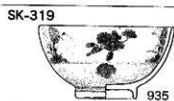


925

第155図 遺物実測図 60 (1/3)



23区 SP-2



第156图 遗物実測图 61 (1/3)

SK-315; 933は高取系の鉄軸陶器水差し。

SK-317; 934は18世紀前半の肥前陶胎染付碗。

SK-319; 935は1690～1740年代の肥前磁器碗。936は18世紀前半の肥前陶胎染付碗。

SP-2; 937は18～19世紀の肥前磁器煙管の吸い口。

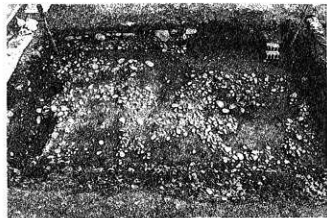
24区

(1) 遺構

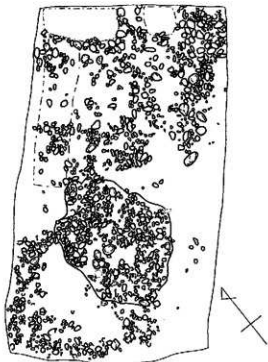
南北7.4m、東西4.0mの調査区。標高3.700mから河原石の礫を多量に含んだ淡褐色の整地層がある。その下は礫多量の暗褐色砂層。他の調査区のような土坑はみあたらなかった。

(2) 遺物

上層; 938は型打の陶器人形、関西系。



第157図 24区全景 西から東



第158図 24区全体図 (1/80)

25区

(1) 遺構

25区、26区、27区は当初別々の調査区だったが、後に連続する調査区となった。当初の25区は南北6.5m、東西13m。調査区前面に土坑が掘削される。標高3.900mで遺構面に到達する。北壁土層図3層はピットが一列に並んでいる様子が確認できる。径60cm、深さ40cmほどの穴には20～30cm大の礫が多量につめられていた。これは23区のSP同様建物の基礎となるピットである。大半の遺構は3.500mからほりこまれていた。17世紀代の遺構はSK-332、347である。SK-332は調査区西南隅で、南側が調査区外に出て南北長はわからないが、東西2.3mの南北に長い土坑である。通常の廃棄土坑とは異なる特殊な遺構で、深さ1.3mの底部まではやや船底状に下へ行くほどせばまり、壁面は度々か掘りなおされたかのような段を有していた。底部には北側に南北長30～40cm、幅6cmの細い溝が二本並行していた。埋土は灰色砂層と黒灰色炭層が交互に堆積していた。また、鉄くずが多量に出土したのも特徴的であった。用途はよくわからないが、鉄の加工に関連する遺構ではないかと考えられる。遺物は17世紀中頃のものが少量出土した。また、SK-347は標高2.800mから掘り込まれている石組み井戸の真上に掘削された土坑である。井戸は20cmほどの河原石を丸く積み上げたもので、標高1.5mまでは掘り下げて確認している。この井戸直上の埋土(16層)からは16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土している。SK-347は井戸を埋めた土層で、17世紀前半の

遺物が出土している。また、標高約3,000mの最下整地層は硬い黄褐色土で、やはり16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土している。

18世紀の遺構はSK-325、328、329、339、342で、19世紀の遺構はSK-334、SP-3である。

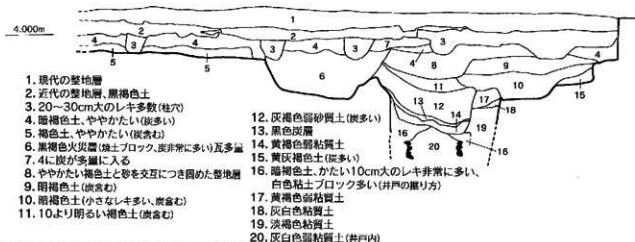
(2) 遺物

SK-325; 939は1690～1740年代の肥前磁器碗。940は17世紀後半の肥前京焼風陶器碗。緑釉。高台内に「雲」の刻印あり。941は18世紀前半の肥前磁器鉢。

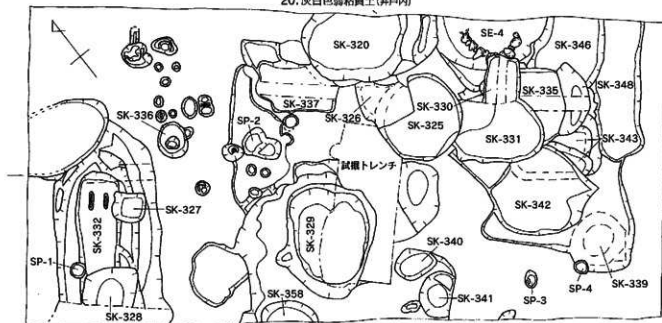
SK-327; 942は大正時代の瀬戸美濃製磁器陶物蓋。943、944は1880～1890年代の磁器蓋。急須の蓋か。943は瀬戸美濃製、944は肥前。945は18世紀後半～19世紀前半の肥前磁器段車の蓋。946は1880～1890年代の陶器蓋。土瓶の蓋か。947は陶器蓋。天井部に蝶の文様を型押ししている。948は19世紀の三重萬古焼きの鉄釉陶器蓋。



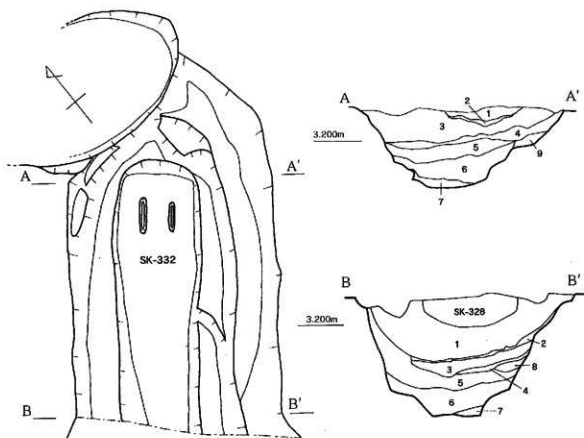
第159図 25区全景 東から西



1. 現代の整地層
2. 近代の整地層、黒褐色土
3. 20～30cm大のレキ多数(柱穴)
4. 暗褐色土、ややかたい(炭多い)
5. 褐色土、ややかたい(炭含む)
6. 黒褐色土(焼土ブロック、炭非常に多い)瓦多量
7. 4に炭が多量に入る
8. ややかたい褐色土と砂を交互につき固めた整地層
9. 暗褐色土(炭含む)
10. 暗褐色土(小さなレキ多い、炭含む)
11. 10より明るい褐色土(炭含む)
12. 灰褐色器砂質土(炭多い)
13. 黒色炭層
14. 黄褐色器粘質土
15. 黄灰褐色土(炭多い)
16. 暗褐色土、かたい10cm大のレキ非常に多い、白色粘土ブロック多い(井戸の堀り方)
17. 黄褐色器粘質土
18. 灰白色粘質土
19. 淡褐色粘質土
20. 灰白色器粘質土(井戸内)



第160図 25区全体図・土層図 (1/80)

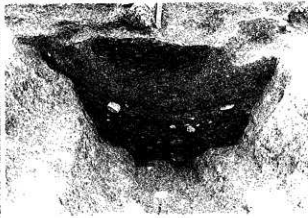


- | | |
|------------------|---------------|
| 1. 淡黄灰色弱砂質土(炭含む) | 6. 2と同じ |
| 2. 黒灰色炭層 | 7. 灰色砂層(炭含む) |
| 3. 1と同じ | 8. 灰色砂層 |
| 4. 2と同じ | 9. 黄白色粘質土ブロック |
| 5. 暗黄灰色砂質土 | |

第161図 SK-332平面図・土層図 (1/40)



第162図 SK-332 東から西



第163図 SK-332断面 北から南

24区上層



938

SK-327

25区

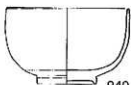


943

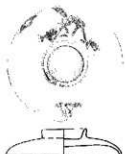
SK-325



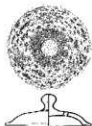
939



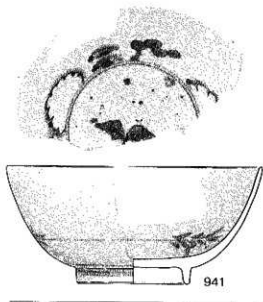
940



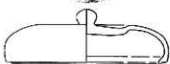
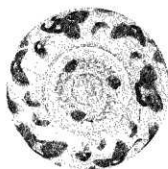
942



944



941

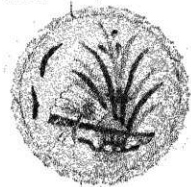


945



946

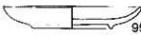
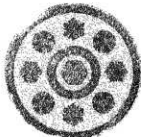
SK-327



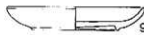
951



950



952



953



947



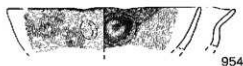
948



949

第164图 遺物実測図 62 (1/3)

SK-328



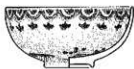
954

SK-329

25区



957



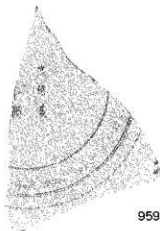
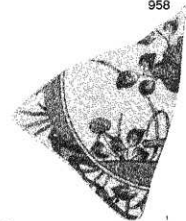
955



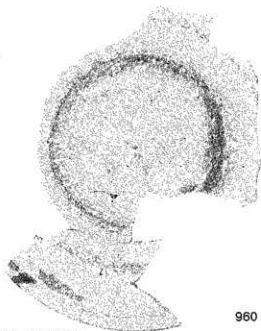
956



958

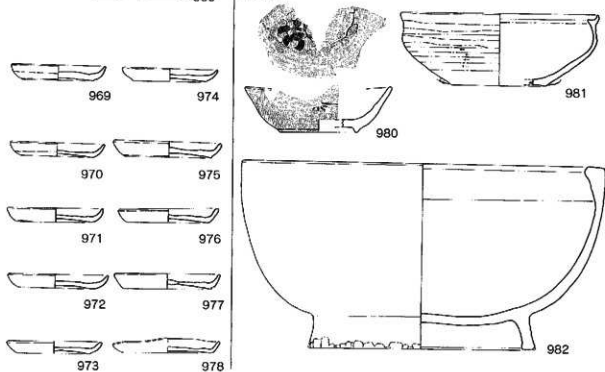
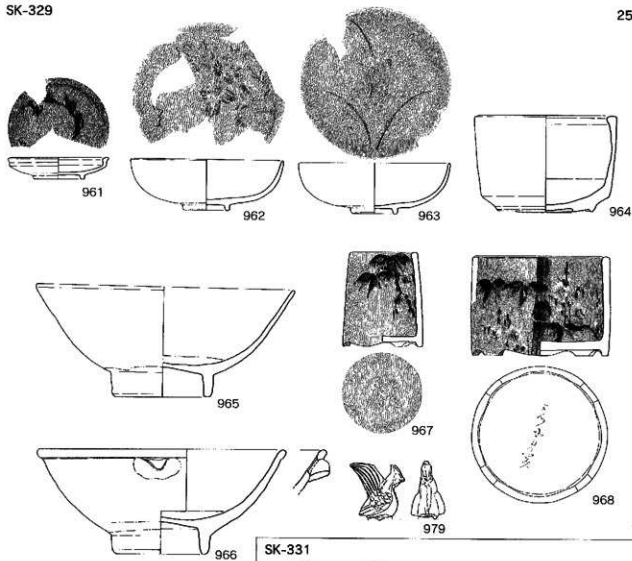


959



960

第165図 遺物実測図 63 (1/3)

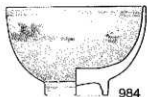


第166图 遗物実測図 64 (1/3)

SK-332



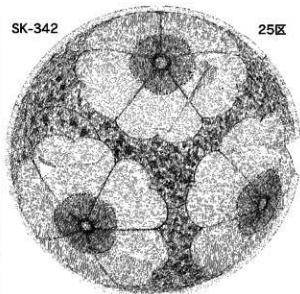
983



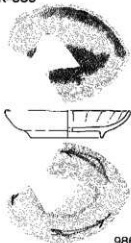
984

SK-342

25区

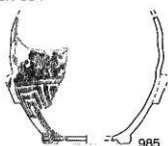


SK-339

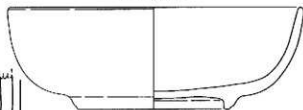


986

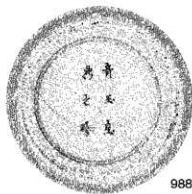
SK-334



985

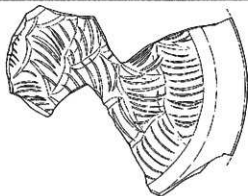


987

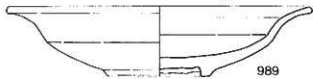


988

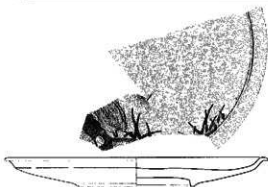
SK-347



989



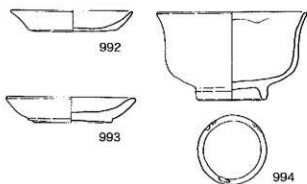
990



991

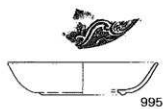
第167図 遺物実測図 65 (1/3)

SK-348



SP-3

25区



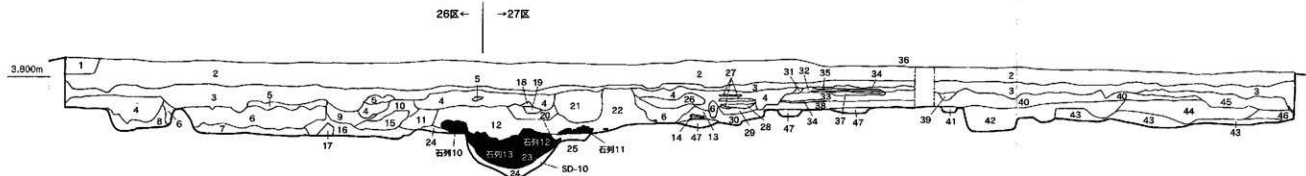
北壁16層



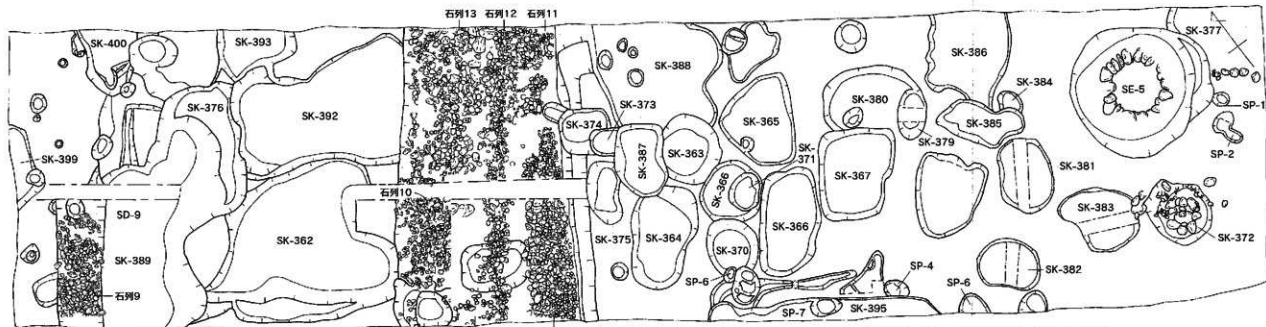
最下壁地層



第168図 遺物実測図 66 (1/3)

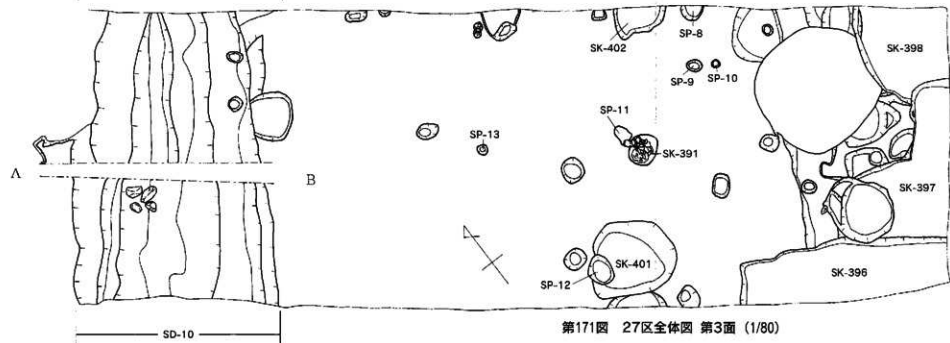


第169図 26~27区 北側壁土層図 (1/80)



第170図 26~27区全体図 第2面 (1/80)

1. 現代の盛り地
2. 現代の盛り地
3. 黒灰色土
4. 暗灰褐色弱砂質土
5. 黒色火災層
(煤非常に多い, 雑土非常に多い)
6. 灰色弱砂質土(煤非常に多い)
7. Gよりやや弱い
8. 淡灰褐色土
9. 暗灰褐色弱砂質土
10. Gよりやや黄色い
11. 黄灰色弱砂質土
12. 淡黄褐色土
13. 淡黄褐色砂層
14. 暗褐色弱砂質土
15. 灰褐色砂層
16. 灰色砂質土(煤多い)
17. 黄灰色砂質土
18. 茶褐色土
19. かなり黄褐色弱砂質土
20. Iより強い黄褐色土
21. 暗灰褐色土(ガラス片, 近代)
22. 暗黄褐色土(煤非常に多い)
23. やわらかい暗褐色土にシキ多量
24. やわらかい灰褐色土
25. きめの細かい褐色土
26. 暗灰褐色土
27. 黄褐色粘質土
28. 灰白色砂層
29. 黄灰色砂層
30. 暗黄灰色弱砂質土
31. 黄褐色弱砂質土
32. 黄褐色粘質土
33. 黄褐色弱砂質土
34. 黄褐色弱粘質土
35. 灰色砂層
36. 黄褐色弱砂質土
37. 黄褐色弱砂質土
38. 暗褐色土(煤非常に多い)
39. 褐色土
40. 黄褐色土
41. 褐色土(煤多い)
42. 暗褐色弱粘質土
43. 暗灰褐色土 粘質
44. 黒褐色土(煤多い)
45. 黄褐色土(煤多い)
46. 暗褐色土(煤多い)粘質
47. 灰褐色弱砂質土



第171図 27区全体図 第3面 (1/80)

型作りで、つまみは竹節型。949は18世紀後半以降の関西系土師器蓋。底部糸切り痕あり。柿釉を施す。950は人正時代の瀬戸美濃製磁器小坏。銅版転写の絵付け。951は18世紀末～19世紀前半の肥前磁器坏洗。952、953は大正時代の磁器皿。見込みの絵付けは銅版転写。

SK-328; 954は18世紀代の肥前磁器鉢。口縁あり。体部にはえくぼ状のくぼみ。

SK-329; 955は18世紀後半～19世紀代の関西系磁器小坏。高台内に「款」の銘あり。956は18世紀後半の肥前磁器碗。957は18世紀後半の肥前磁器筒型碗。958は18世紀の肥前磁器蓋。959は18世紀後半の肥前磁器皿。高台内に「大明成化年製」銘あり。960は16世紀末～17世紀初頭の磁器皿。中国漳州窯製の伝世品。高台畳付と高台内に砂付着。961は18世紀の関西系陶器皿。962、963は18世紀後半の関西系陶器鉢。964は18世紀後半以降の肥前製陶器火入れ。965は17世紀後半～18世紀前半の陶器刷毛目碗。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。966は17世紀後半～18世紀前半の肥前刷毛目陶器片口。967、968は18世紀後半以降の関西系陶器灰落とし。どちらも高台内に墨書あり。967は、「三ツ組 免口や口」と読める。969～978は土師器小皿。全てほぼ完形品。979は型打土製品の鳥型人形。

SK-331; 980は18世紀前半の唐津現川系陶器鉢。981は陶器土鍋。982は瓦質土器火鉢。高台外面全面が細かく剥離されている。

SK-332; 983は土師器小皿。984は1630～1650年代の肥前磁器碗。高台畳付に砂付着。

SK-334; 985は1880～1890年代の陶器瓶。胴部に貼り付け装飾あり。

SK-339; 986は1690～1740年代の肥前磁器小皿。鉢形の型打成形。糸切り細工、貼り付け高台。中の文様はコンニャク印判によるもの。987は土師質土器火鉢。底部に脚あり。器面が非常に荒れており、調整は不明。

SK-342; 988は18世紀後半の青磁染付鉢。高台内に「荷玉宝口之珍」の銘あり。

SK-347; 989は1630～1650年代の波佐見焼青磁皿。見込みに片彫りで櫛目状の文様を描く。997は鉄釉陶器挿鉢。991は1630～1650年代の肥前磁器皿。

SK-348; 992、993は土師器小皿。994は陶器鉢。高台畳付に砂日三箇所あり。

SP-3; 995は19世紀後半の軟質磁器皿。ヨーロッパ産。

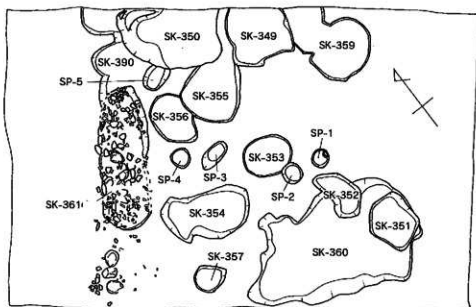
北壁16層; 16層は井戸の掘り方。996は16世紀末～17世紀初頭の中国漳州窯製の磁器皿。997は16世紀末～17世紀前半の中国製白磁碗。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。

最下整地層; 998は16世紀末～17世紀前半の土師質土器甕。内面横方向刷毛目残存。

26区

(1) 遺構

南北6.4m、東西9mの調査区。標高3.600mの上層では小型の土坑がいくつも掘られていた。19世紀代の遺構はSK-361。19世紀後半の遺物が出土する南北3.0m、東西1.0mの細長い土坑。礫とともに多数の陶磁器片が出土した。標高3.400～3.500mでは大きな上坑に遺物の破片が大量に廃棄されていた。18世紀後半の遺構はSK-350、360、362、石列10の上層。18世紀前半の遺構はSK-376、389、392。最も古い遺構は16世紀末～17世紀初頭の遺物を出土するSD-10である。SD-10は26区と27区の間を横たわる大きな南北方向の溝である。この溝の南北長は調査区外で不明だが、東西幅は4.3mと、殿町地区全体で最大級の溝である。最も深いところで標高1.600m、深さ174cmをはかる。溝には石列10、11、12、13まで4つの石敷きが認められた。最も下は石列13で、SD-10の底全面につまっていた。石列12はそのやや東上の細い石列、石列11はSD-10の東へり、石列10は西へりに並行する石列である。本来



第172図 26区全体図第1面 (1/80)

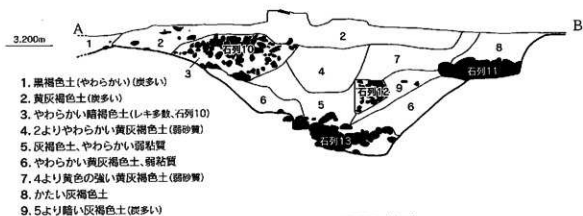


第173図 26区全景 東から西

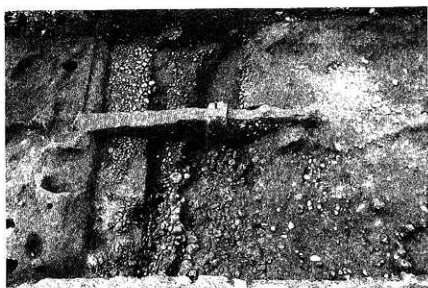


第174図 SK-362

石列13のある中心溝が16世紀末～17世紀初頭の遺物を含む当初の溝で、後に埋め戻しつつ石列12、石列11、石列10の順に設置されていき、溝の両肩が広がって4mをこす大溝として検出されたものであろう。石列13がつまった当初の溝は北側壁では標高約3.000m、床面標高約2.000m、上場の幅約2.000m、下場は北壁上層では床面やや尖り気味だが、断面ではフラットな形状がうかがえ、下場幅は約1.3mとしたい。石列12は上場の標高約2.800m、幅約35cm、石列11は上場の標高約3.050m下場は約2.800m、石列の幅は約90cm。石列10は上場の標高約3.300m、下場約2.800m、上場約1.3m。石列10からは、18世紀前半～後半の遺物が出土しており、長期にわたり使用されていた溝である。敷地をくぎる石垣のようなものであったのだろうか。同じく調査区の西端の石列9も床面フラットな溝SD-9に石を敷き詰めている。上場は標高約3.400m、下場は3.200m。溝幅は18世紀前半のSK-389に切られ不明。



第175図 SD-10土層図 (1/40)



第176図 SD-10 北から南



第177図 SD-10完掘状況 北から南

(2) 遺物

SK-350; 999は土師器小皿。1000は18世紀後半の磁器碗。1001は18世紀前半の肥前磁器鉢。高台内の銘は異体字。1002は陶器碗。1003は鉄釉陶器皿。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。1004は陶器輪花皿。1005は肥前陶器鉢。見込みに砂目痕が環状に回る。1006の陶器は器種不明。1007は福岡産の陶器壺。鉄釉に緑釉の掛け流し。1008は土師質土器鍋。外面下半削り。内面ヘラ磨き。全体的に煤付着。1009の土師質土器は器種不明。内外面丁寧な横方向ヘラ磨き。

SK-360; 1010、1011は18世紀後半の肥前青磁染付け碗。1010は高台内に渦「福」の銘あり。1012は18世紀前半の肥前磁器皿。長方形の型打。1013は18世紀後半の肥前磁器瓶。1014は18世紀前半の唐津現川系の陶器刷毛目皿。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。見込みに砂付着。1015は18世紀後半以降の関西系陶器土瓶。1016は鉄釉の壺。取手一つ残存。1017の陶器は器種不明。底部外面に墨書のような痕跡あり。1018は型打の磁器人形頭部。

SK-361; 1019は18世紀後半以降の肥前磁器碗。1020は幕末～明治の肥前磁器皿。魚形の型打。焼継あり。1021は18世紀後半以降の板作りの肥前磁器合子。色絵。1022は18世紀前半の磁器輪花皿。高台内に「大明成化年製」銘の一部残存。焼継あり。1023は19世紀前半の肥前磁器型打八角鉢。焼継あり。1024は陶器皿。1025は銅製品煙管吸い口。1026は19世紀関西系の鉄釉陶器水差し。1027は18世紀前半の肥前青磁染付け輪花皿。1028、1029は手びねりの土製品人形。1028は赤ちゃん、1029は牛。1030、1031は型打の土製品人形。1030は塔、1031は恵比寿様。

SK-362; 1032は1690～1740年代の肥前磁器小皿。楕円の型打。中の文様はコンニャク印判によるもの。1033は18世紀後半の肥前磁器皿。1034は18世紀後半以降の肥前磁器蓋。合子の蓋か。1035、1036、1037は18世紀後半の肥前磁器碗。1036の高台内の銘は渦「福」。1038は18世紀後半の肥前磁器猪口。高台内の銘は「大明年製」崩れ。1039は18世紀前半の唐津現川系の陶器刷毛目皿。1040は18世紀前半の肥前磁器瓶。1041は18世紀後半以降の関西系陶器仏花瓶。1042は土師器小皿。1043は陶器の窯道具か。回転糸切り痕あり。1044、1045、1046は型打土製品人形。1044は虚無僧、1045は鬼、1046はきつねの形。1047は手づくねの土鈴。1048～1052は土鍾。1053は18世紀前半の高村焼土師質土器片口。外面ヘラ削り、内面磨き。1054は18世紀前半の高村焼土師質土器焙烙。外面ヘラ削り。把手あり。1055は同じく高村焼の土師質土器こね鉢。外面ヘラ削り、内面丁寧なヘラ磨き。

SK-376; 1056は土師質土器甕。粘土紐巻上げか、輪積みの技法で、その痕跡が内外面に残る。内面は刷毛目調整。1057は18世紀前半の肥前白磁小杯。1058は土師器小皿。

SK-389; 1059は17世紀後半の肥前磁器輪花皿。高台内の銘は渦「福」。1060は17世紀後半の肥前磁器碗。1061は17世紀後半の京焼風肥前陶器碗。底面に刻印あり。1062は17世紀後半の肥前磁器鉢。内面青磁。1063、1065は18世紀前半の唐津現川系の陶器刷毛目碗。1064は18世紀前半の肥前陶胎染付け碗。1066～1071は土師器小皿。1072は18世紀の関西系陶器鉢。高台内に「井」の墨書あり。1073は18世紀前半の土師質土器焙烙。外面下半ヘラ削り。

SK-392; 1074の陶器碗は製作地不明。1075は16世紀後半～17世紀前半の朝鮮製白磁碗。内外面に目跡あり。1076は18世紀前半の肥前現川焼の陶器刷毛目碗。見込み蛇ノ目軸剥ぎ。見込みに高台に砂付着。1077は17世紀後半の肥前陶器皿。1078は備前陶器播鉢。1079は銅製品かんざし。1080は銅火箸。1081は寛永通宝。1082は石の硯。砥石として転用している。1083は18世紀前半の唐津陶器刷毛目鉢。1084は17世紀後半の肥前陶器刷毛目鉢。1085は在地の瓦質土器火鉢。獅子頭の脚あり。外面格子目叩き残存。

石列2上層; 1086は18世紀後半の肥前磁器碗。高台内の銘は渦「福」。1087は瓦質土器火鉢。1088は軒

丸瓦。右三つ巴。1089, 1090は18世紀前半の高村焼土師質土器焙烙。外面ヘラ削り。内面磨き。1089は把手一つ残存。

SD-10; 1091は11層出土。鉄軸の陶器碗。16～17世紀の中国製か。1092は北側最下層出土。1590～1610年代の唐津土灰軸の陶器碗。1093は石列3の中出土。16世紀末～17世紀初頭の在地系瓦質土器稲鉢。1094は16世紀末～17世紀前半の瓦質土器鍋。1096も石列3出土。16世紀末～17世紀前半の在地系瓦質土器火鉢。

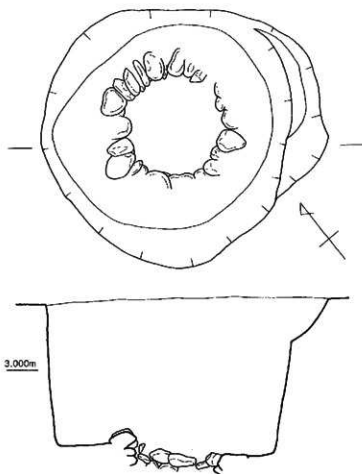
27区

(1) 遺構

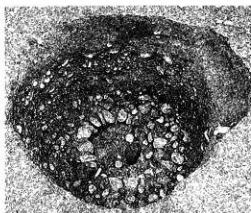
南北6.3m、東西17.2mの調査区。26区との境にSD-10が横たわっている外は、大小の土坑が全面に広がる。標高3.600mで遺構面に到達。SE-5は石組み井戸。標高3.700mから掘り方があり、標高2.300mより30cmほどの河原石で7つほどの面を作りながら丸く築く。埋め戻した上層の土からは明治期の遺物が出土している。18世紀代の遺構はSK-377, 378, 385, 387, 388, 396, 401。この調査区からは17世紀代の遺構も数多く検出された。SK-372, 383, 391, 397, SP-5, SP-7である。この区の最下整地層からは17世紀初頭の遺物が出土する。SP-5, 7からは17世紀初頭の遺物が出土しており、早い段階の柱穴跡であろう。



第178図 27区全景 東から西



第179図 SE-5平面図・断面図 (1/40)



第180図 SE-5



第181図 SK-391

(2) 遺物

SK-364; 1097は丸瓦。内面縦の横竹痕が残る。外面縦方向に削りの痕跡。

SK-365; 1098、1099、1100は土師器小皿。

SK-366; 1101は19世紀信楽系の緑釉陶器片口。1102は17世紀前半肥前三島千の陶器皿または鉢。見込みと高台畳付に目跡あり。1103は18世紀後半以降の肥前磁器蓋物の蓋。焼継あり。1104は緑釉の陶器皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。1105は磁器蓋。底部に回転系切りの痕跡あり。1106の陶器は器種不明。1107、1108は軒平瓦当。1107は藁文。465と同じ文様。1108は小花文。

SK-368; 1109は型打の土製品人形。力士の頭。

SE-5; 1110は明治以降の瀬戸美濃製碗物蓋。上絵に金彩を施す。

SK-370; 1111は軒丸瓦。右三つ巴。

SK-372; 1112は17世紀前半の肥前陶器壺。

SK-377; 1113は18世紀後半の肥前磁器鉢。1114は陶器鉢か。1115は16世紀末～17世紀前半の在地球瓦質土器播鉢。

SK-378; 1116は18世紀前半の肥前磁器段重の蓋。1117は鉄釉の陶器壺。1118は軒平瓦。

SK-379; 1119は陶器人形。馬に乗った人物。1120は土師器小皿。

SK-383; 1121は17世紀代の肥前陶器皿。

SK-385; 1122は型打の土製品人形。猿形。1123は18世紀代の高取の鉄釉陶器鉢。見込みに目跡残存。

SK-387; 1124は18世紀前半の高取の陶器碗。体部にえくぼ状のくぼみあり。1125は陶器皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。着着痕あり。1126は鉄釉の陶器甕。

SK-388; 1127は土師器小皿。1128、1129は18世紀前半の唐津系現川焼の刷毛目の陶器で、1128は碗、1129は香炉。1130は製作地不明の陶器鉢。

SK-391; 1131は17世紀初頭～前半の織部の陶器向付。1132は土師質土器甕。内外面に輪積みの痕跡あり。外面にはわずかに、内面には全体に刷毛目あり。

SK-395; 1133は陶器の鉢。

SK-396; 1134は1590～1610年代の唐津陶器鉢。1135は17世紀初頭～前半の唐津鉄釉の陶器壺か。1136は18世紀後半の肥前磁器小坏。1137は18世紀後半～19世紀の肥前磁器合子の蓋。1138は18世紀前半の肥前陶胎染付碗。1139は1600～1630年代の唐津灰軸陶器皿。見込みに目跡残存。1140は18世紀前半の肥前陶器鉢。1141は陶器の水差しか。

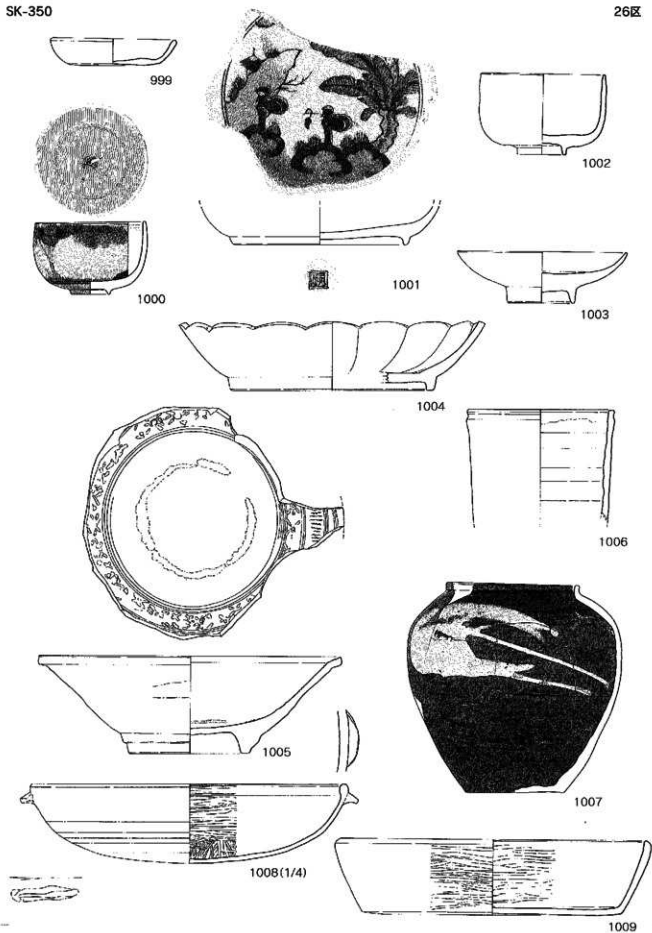
SK-397; 1142の陶器碗は製作地不明。1143は1600～1630年代の唐津陶器皿。見込みに目跡あり。1144はの陶器播鉢。

SK-401; 1145は18世紀後半の肥前青磁染付け碗。高台内の銘は満「福」くずれ。1146は関西系の土師質土器灰落とし。

27区最下層; 1147は1600～1630年代の唐津灰軸陶器皿。見込みに砂目4箇所あり。高台には重ね焼痕4箇所あり。1148は17世紀初頭～前半の高取の緑釉陶器鉢。1149は17世紀初頭～前半の高取の鉄釉陶器壺か。1150は17世紀初頭～17世紀前半の備前の陶器播鉢。1151は16世紀末～17世紀前半の備前の陶器播鉢。1152は17世紀初頭～前半の高取の緑釉陶器壺。1153は1590～1610年代の唐津の鉄釉陶器壺。

27区北壁; 1154は42層出土。1630～1650年代の肥前磁器碗。1155は52層出土。1590～1610年代の唐津系灰軸陶器皿。口縁部の窪みは注ぎ口か。1156、1157は40層出土の土鍾。短く太い。

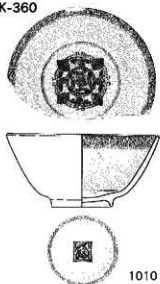
27区SP; 1159はSP-5出土。16世紀末～17世紀初頭の在地球瓦質土器播鉢。1158、1160はSP-7出土。1158は17世紀初頭～前半の高取の鉄釉陶器皿。1239は17世紀前半の福岡産の陶器壺。



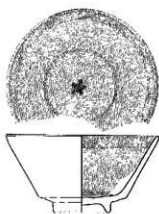
第182图 遺物実測図 67 (1/3)

SK-360

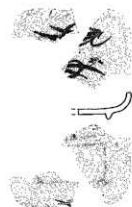
26区



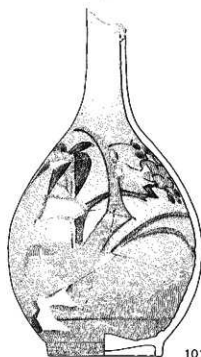
1010



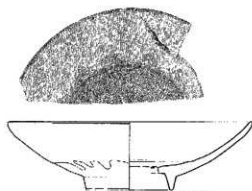
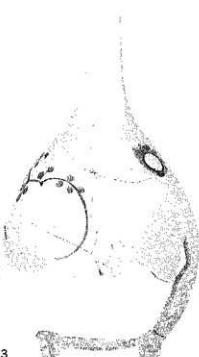
1011



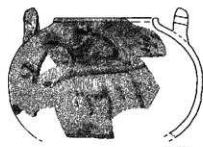
1012



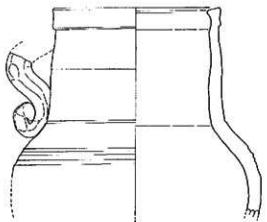
1013



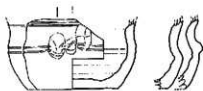
1014



1015



1016



1017

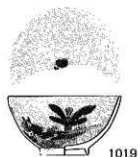


1018

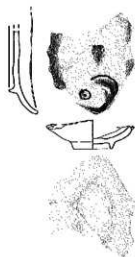
第183圖 遺物実測図 68 (1/3)

SK-361

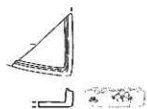
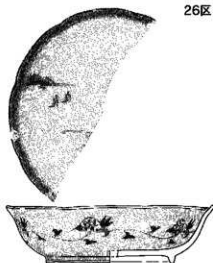
26区



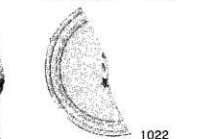
1019



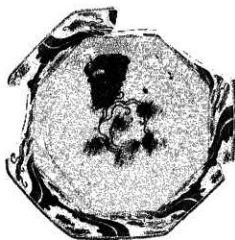
1020



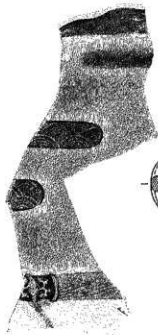
1021



1022



1023



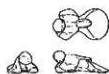
1026



1027



1024



1028



1030



1025



1029

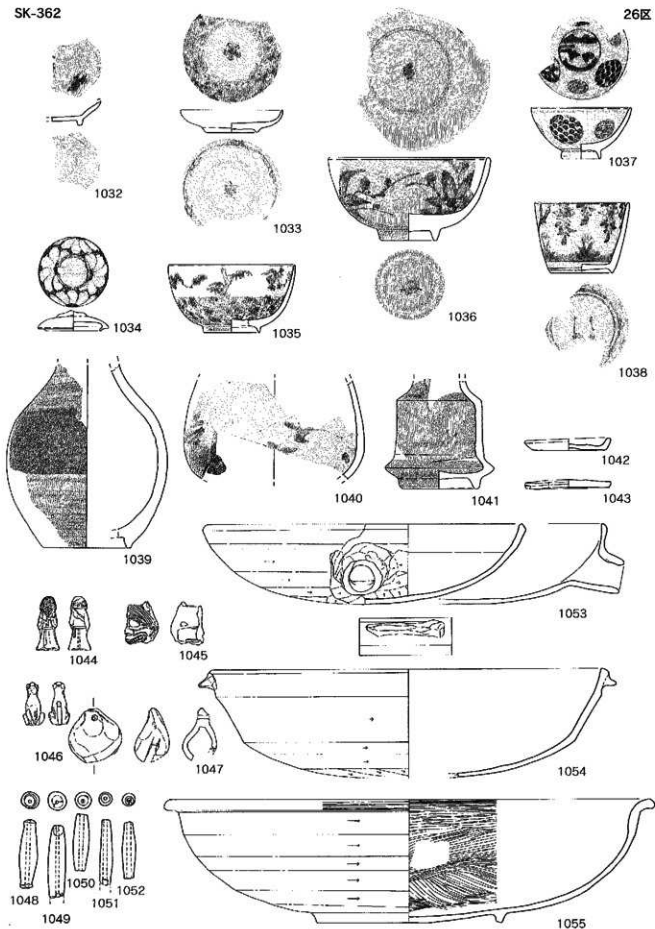


1031

第184图 遺物実測図 69 (1/3)

SK-362

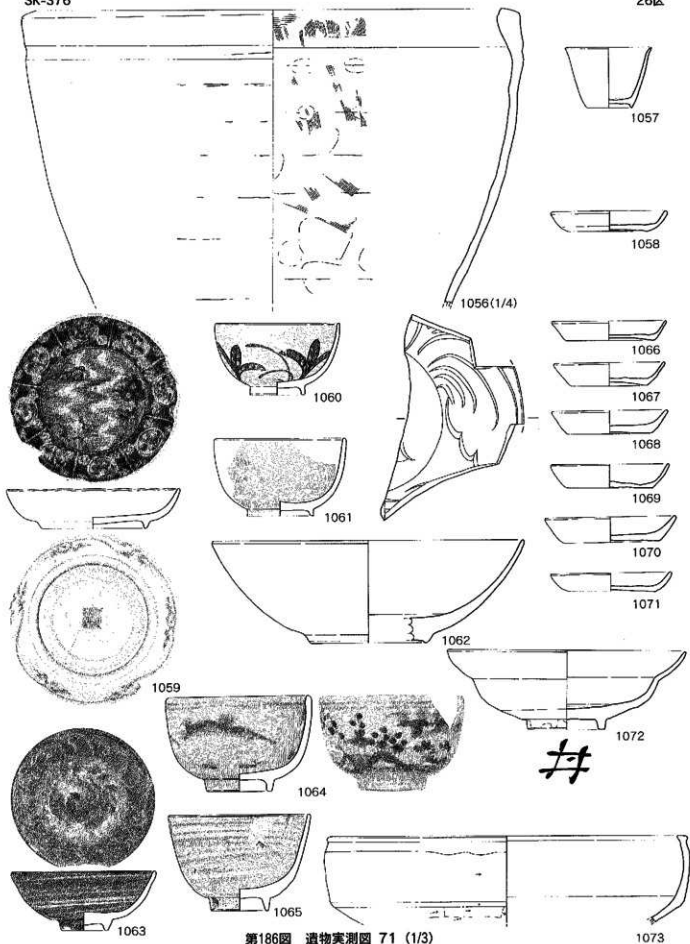
26区



第185圖 遺物実測図 70 (1/3)

SK-376

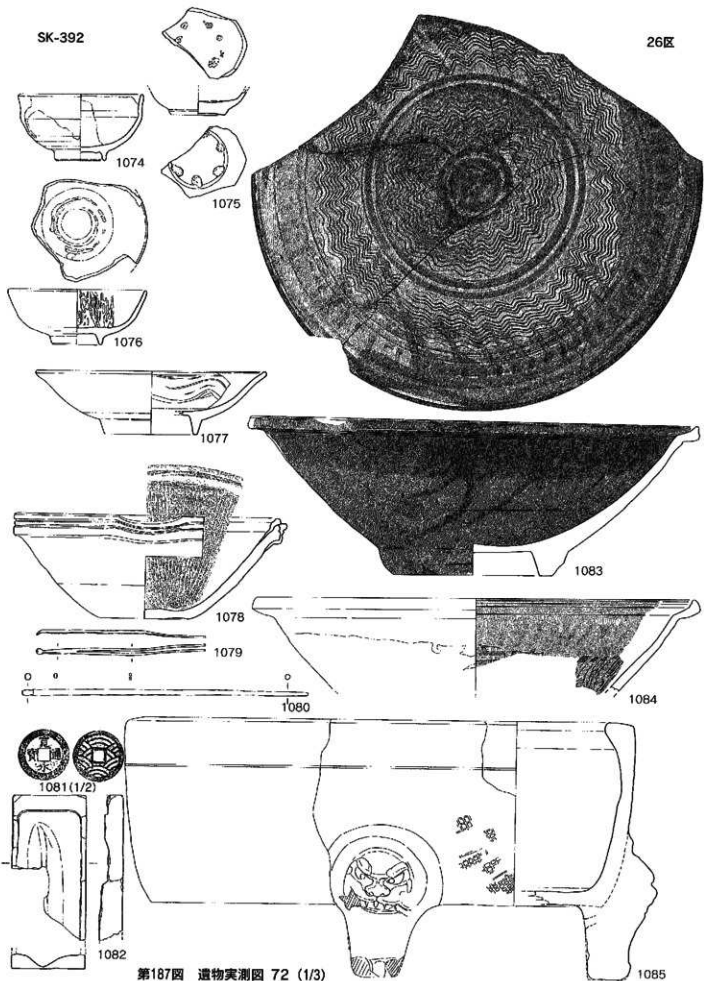
26区



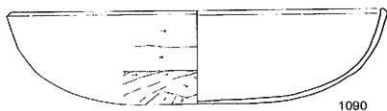
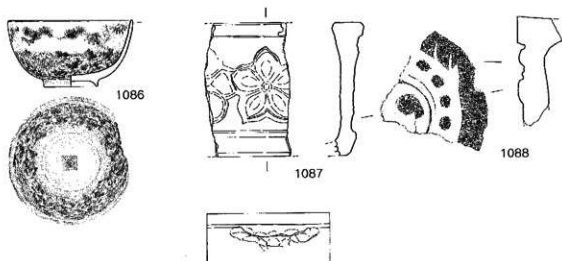
第186図 遺物実測図 71 (1/3)

SK-392

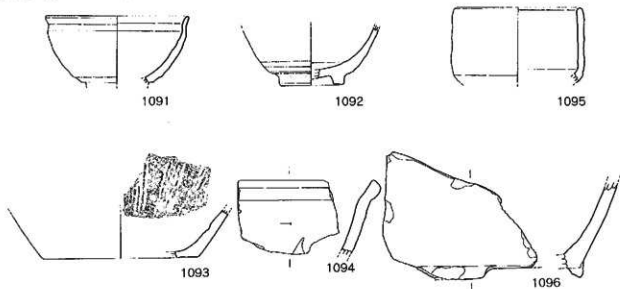
26区



第187図 遺物実測図 72 (1/3)

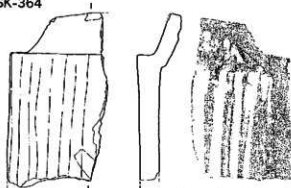


26区 SD-10



第188圖 遺物実測図 73 (1/3)

SK-364



1097

SK-365

27区



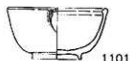
1098



1099



1100



1101

SK-366



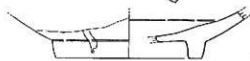
1102



1103



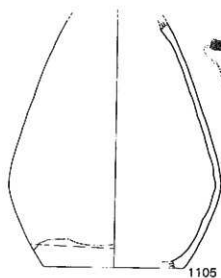
1104



1106



1107



1105

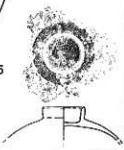


1108

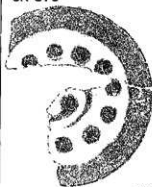


SK-369

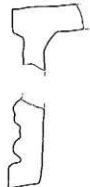
SK-370



1110



1111



SK-368



1109

第189図 遺物実測図 74 (1/3)

SK-372



1112

SK-378



1117

27区

SK-377



1113



1116



1118



1114

SK-379



1119

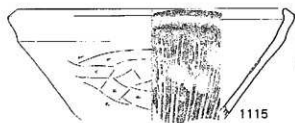


1120

SK-383



1121

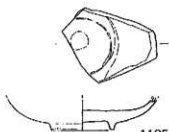


1115

SK-387



1124

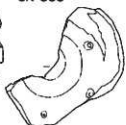


1125

SK-385



1122

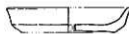


1123



1126

SK-388



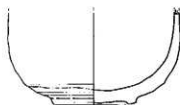
1127



1128

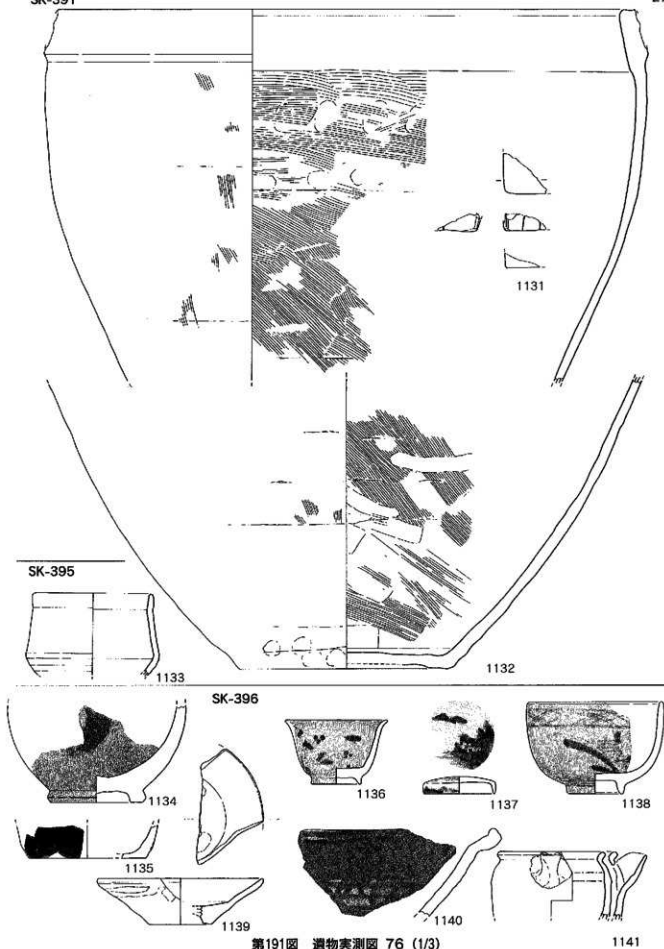


1129



1130

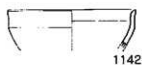
第190图 遺物実測図 75 (1/3)



第191図 遺物実測図 76 (1/3)

1141

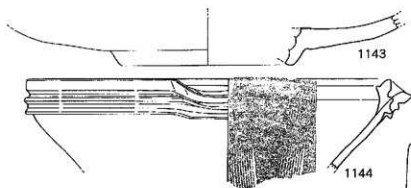
SK-397



1142



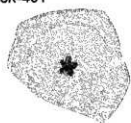
1143



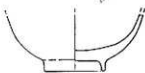
1144

SK-401

27区



1145



1146

27区最下層



1147



1148



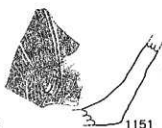
1149



1150



1151

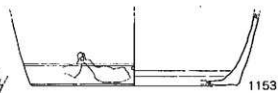


27区SP

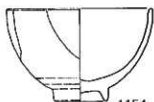
1152



1153



1154



1155

27区カベ層



1156



1157



1158



1159

第192図 遺物実測図 77 (1/3)

第2表 出土土器・陶磁器観察表

区	No.	遺構	器種	流量(cm)			成形	装飾			裏面内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	底径	高さ		彩付特徴	文様	彩付特徴					
2	52	29	磁器碗			(3.4)	ワグナ	染付・透明釉			黒「蘭」	伊豆半	18C前半	反転復元	
2	53	29	陶器蓋	16.5	2.05		ロクロ	鉄線・化粧土				伊豆半	18C後半	墨書有り	
2	54	29	土師器小皿	7.9	1.9	6.1								白粉施ス付書	
2	55	29	土師器小皿	8.2	1.4	6.1								反転復元 内面スリ書	
3	56	15	磁器猪口	6.30	5.0	(3.0)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土			伊豆半	19C前半～中葉	反転復元	
3	57	15	磁器碗	10.2	6.5	4.4	ワグナ	染付・透明釉	外:黒			伊豆半	18C前半		
3	58	15	磁器碗	6.05	4.9	(3.4)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土 内:黒土		口縁	伊豆半	18C前半	反転復元	
3	59	15	磁器皿	13.53	3.1	3.1	ワグナ	染付・透明釉	外:二重線 内:赤土		ワグナヤ 一重線	伊豆半	1690～1740 年代		
3	60	15	磁器皿	20.4	不明		ワグナ	染付・透明釉	内:赤			伊豆半	18C後半	反転復元 墨書不鮮劣	
3	61	15	磁器皿	不明	不明	(17.2)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土 内:黒土			伊豆半	18C後半	反転復元 墨書不鮮劣	
3	62	15	磁器湯呑	19.8	6.9	11.7	ワグナ (割縁有)	染付・透明釉	外:黒土(割縁)			伊豆半	17C後半代	割縁ハズレ 墨書不鮮劣	
3	63	15	陶器土瓶	6.00	3.1		ロクロ	鉄線				加刺ス切 取	伊豆半	18C以降	墨書 スリ書 墨書不鮮劣
3	64	15	人形?		不明		型打	外:青磁 色釉(青・赤・黒・金)	外:定 内:黒土			伊豆半	18C前半	墨書に誤り	
3	65	15	磁器皿	(32.2)	5.7	(17.6)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土・二重線 内:黒土・赤土・黒土 及ヒ:黒・鉄線			二重線 化粧	18C代	反転復元	
3	66	15	土師器小皿	8.1	1.8	6.0								反転復元	
3	67	15	土師器小皿	10.85	1.98	5.8								内外面スリ書	
3	68	15	土師器小皿	10.9	1.95	7.8								反転復元 口縁部スリ書	
3	69	15	土師器小皿	10.5	1.4	7.9								口縁部スリ書	
3	70	15	土師器小皿	10.1	1.6	7.7								内外面スリ書 墨書不鮮劣	
3	71	18	磁器碗	6.80	5.7	(3.4)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土 内:二重線 及ヒ:一重線			伊豆半	18C前半以降	反転復元	
3	73	19	磁器皿	(10.1)	2.25	6.00	型打	染付・透明釉	足絵:洋風の男女		口縁	伊豆半	18C前半	反転復元	
3	74	19	磁器皿	(10.8)	2.85	6.80	型打	染付・透明釉			口縁	伊豆半	18C前半	反転復元 墨書不鮮劣 墨書不鮮劣	
3	75	19	陶器木鉢	(12.0)	4.55	7.15	ワグナ	染付・透明釉	外:赤土			伊豆半	明治10年代 不明 (伊豆半以外)	明治10年代 西宮に3つの平石製の穴 はけ穴の付いた鉢	
3	76	19	磁器紅皿	6.2	1.3 1.7	2.1	型打	白磁	外:染付の磁器文			伊豆半	18C後半以降		
3	77	19	陶器徳利		6.6		ワグナ	地絵しめ				伊豆半	18C後半	スリ書	
3	78	19	磁器	(6.5)	(3.6)	2.5		白磁				伊豆半	1890～1899 年代	青磁土の磁器品の可能性大	
3	79	19	陶器土瓶	8.2	8.86	4.6	ワグナ	染付・透明釉	外:赤(兼赤)						
3	80	21	磁器碗	6.50	4.1	3.55	ワグナ	染付・透明釉	外:赤土			伊豆半	18C末以降	反転復元 (口縁部スリ書)	
3	81	21	磁器湯呑	6.11	7.90	(3.0)	ワグナ	染付・透明釉	外:赤土・赤土・黒土			伊豆半	18C後半以降	反転復元	
3	82	21	陶器碗	8.45	5.9	2.91	ワグナ	染付・透明釉	外:赤土			伊豆半	18C後半以降	反転復元	
3	83	21	陶器火入れ (香炉)	(10.8)	7.95	(6.3)	ワグナ	鉄線				伊豆半	17C後半～18C前半	墨書有り	
3	85	21	土師器小皿	7.6	1.9	5.7								反転復元 墨書不鮮劣 3つの穿孔有り	
3	86	21	土師器小皿	7.2	1.2	8.5								反転復元	
3	87	21	土師器小皿	8.08	1.25	6.05								反転復元	
3	88	22	磁器猪口	7.0	(5.50)	(4.5)	ワグナ	染付・透明釉 (動揺有)	外:黒土			伊豆半	18C末	反転復元	
3	89	22	磁器蓋	6.5	2.85		ワグナ	染付・透明釉	外:黒土・黒土			伊豆半	18C前半		
3	90	22	陶器碗	(6.75)	(6.40)	(4.00)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土			伊豆半	18C前半		
3	91	22	磁器	(6.8)	6.65	(7.3)	ワグナ	染付・透明釉	外:黒土・黒土・黒土			伊豆半	18C後半以降	反転復元	
3	92	22	陶器	(5.8)	(7.3)		ワグナ	染付・透明釉				伊豆半	18C後半以降	反転復元 一部割取	
3	93	22	土師器小皿	8.4	1.4	6.8								反転復元	
3	94	22	土師器土瓶	(24.3)	3.4									内外面金書→ヘラガキ 反転復元	
3	95	24	磁器土瓶蓋	(5.8)	(4.4)	(2.0)	ワグナ	染付・透明釉	外:白粉・黒土			伊豆半	18C後半以降		
3	96	26	陶器火入れ	(10.4)	7.35	5.4	ワグナ	鉄線・白土	外:黒土			伊豆半	17C後半～18C前半	反転復元	
3	97	26	陶器権持	18.9 19.7	6.1 7.5	8.1	ワグナ	鉄線				伊豆半	18C～19C		
3	98	26	瓦質土器蓋	16.0										内外面割取→反転復元	
4	99	6	磁器鉢	15.58	3.6	10.75	ワグナ	染付・透明釉	外:赤土(兼・黒土) 内:赤土(兼・黒土) 及ヒ:磁器文			伊豆半	18C末～19C		
4	100	8	磁器蓋	11.18	3.1		ワグナ	染付・透明釉	外:赤土・黒土 内:赤土 及ヒ:赤土・黒土			伊豆半	18C後半～18C末		

区	No.	遺構	器種	流量(mm)			成形	装飾		底面内底	製作地	製作年代	備考		
				口径	器高	底径		施付位置	文様						
2	52	29	磁器碗			(3.4)	ロクロ	染付・透明釉			新「朝」	八景美(須磨)	184歳子	反転底元	
2	53	29	陶器蓋	16.35	2.85		ロクロ	染付・化粧土				18C以降	18C以降	蓋裏有り	
2	54	29	土師器小皿	7.9	1.9	6.1								口縁部スチ付	
2	55	29	土師器小皿	8.2	1.4	8.1								口縁部元内底スチ付	
3	56	13	磁器鉢1	61.80	3.0	32.9	ロクロ	染付・透明釉	外:赤土サ			肥前	18C前半~中葉	反転底元	
3	57	13	磁器碗	10.2	8.5	4.4	ロクロ	染付・透明釉	外:丸			肥前	18C前半	反転底元	
3	58	13	磁器碗	8.9	4.9	3.0	ロクロ	染付・透明釉	外:濃しま 内:赤土			肥前	18C前半	反転底元	
3	59	15	磁器皿	13.35	3.1	8.3	ロクロ	染付・透明釉	外:濃緑 内:赤土			福岡	1890~1940年代	反転底元	
3	60	15	磁器皿	20.0	不明		ロクロ	色絵・透明釉	内:花			中国又は肥前	中国製 18C肥前製 17C前半	反転底元 傾斜不揃	
3	61	15	磁器皿	不明	不明	(17.2)	ロクロ	染付・透明釉	外:濃紫 内:赤土			肥前	18C以降	反転底元 傾斜不揃	
3	62	15	磁器香炉	19.8	8.9	11.2	ロクロ (野原車打)	青絵・黒塗	外:縁飾(内彫)			肥前	17C後半	器2つ底彫(丸はなとつぎ)	
3	63	15	陶器茶碗		(8.0)	5.1	ロクロ	染付				肥前	18C以降	反転底元 一部反転底	
3	64	15	人形?		不明		木打	染付・文様 色絵(青・赤・黒・金)	外:赤 内:有目肌			肥前	18C前半	反転底元	
3	65	15	磁器皿	22.9	6.7	(17.6)	ロクロ	染付・透明釉	外:濃青・二重線 内:濃青・すき・1区 見込・黒・緑			一橋窯	18C代	反転底元	
3	66	15	土師器小皿	8.1	1.5	6.9								反転底元	
3	67	15	土師器小皿	16.85	1.95	5.8								内外底スチ付	
3	68	15	土師器小皿	10.9	1.35	7.8								反転底元 口縁部スチ付	
3	69	15	土師器小皿	16.5	1.1	7.9								口縁部スチ付	
3	70	15	土師器小皿	10.1	1.6	7.7								内外底スチ付	
3	71	18	磁器碗	6.8	9.7	(3.4)	ロクロ	染付・透明釉	外:花文 内:濃緑 見込:一重線			肥前 (須磨)	18C後半以降	反転底元	
3	73	19	磁器皿	(16.1)	2.25	(8.0)	木打	染付・透明釉	外:浮線(内彫)			肥前	18C前半	反転底元	
3	74	19	磁器皿	(16.9)	2.65	(6.0)	木打	染付・透明釉				肥前	18C前半	反転底元	
3	75	19	陶器草木鉢	(12.3)	8.35	7.15	ロクロ	染付	外:山水			不明 肥前	明治10年代	高台口縁部の半円彫の穴 21穴(穴径3.5mm)	
3	76	19	磁器紅瓶	6.2	1.5~1.7	2.1	木打	白磁	外:濃青の感傷華文			肥前	18C前半以降	反転底元	
3	77	19	陶器徳利			6.1	ロクロ	染付				肥前	18C前半	スチ付	
3	78	19	磁器	(5.8)	(3.8)	2.1		白磁				肥前 (須磨)	1890~1895年代	青磁底の装飾品の下彫大	
3	79	19	陶器土瓶	3.3	8.56	4.6	ロクロ	白上・透明釉	外:花(金)						
3	80	21	磁器碗	(8.85)	4.1	3.45	ロクロ	染付・透明釉	外:草花			肥前	肥前	18C前半	一部反転底元 (口縁部)
3	81	21	磁器湯呑み	(8.1)	7.85	3.95	ロクロ	染付・透明釉	外:人物・文・雲々			肥前	肥前	18C前半	反転底元
3	82	21	陶器碗	8.45	5.9	2.95	ロクロ	染付・透明釉	外:松竹				肥前	18C前半	反転底元
3	83	21	陶器火入れ(香炉)	(16.5)	7.35	(5.5)	ロクロ	染付				肥前	17C後半~18C前半	蓋裏有り	
3	85	21	土師器小皿	7.5	1.9	5.7								底面に濃緑色の点状の浮彫有り	
3	86	21	土師器小皿	7.2	1.2	5.8								反転底元	
3	87	21	土師器小皿	8.35	1.75	6.65								反転底元	
3	88	22	磁器漬口	(7.0)	(3.30)	(4.9)	ロクロ	染付・透明釉 上絵付	外:秋草			肥前	肥前	18C末	反転底元
3	89	22	磁器蓋	8.5	3.30		ロクロ	染付・透明釉	外:牡丹・雲				肥前	18C前半	
3	90	22	陶器碗	(8.75)	(8.0)	(4.0)	ロクロ	染付	外:草花			肥前	肥前	18C前半	
3	91	22	磁器	0.90	8.68	(7.3)	ロクロ	染付・透明釉	外:雲・亀甲・斜格子			肥前	肥前	18C後半	反転底元
3	92	22	陶器	(8.0)	(7.2)		ロクロ	染付・透明釉				肥前	肥前	18C後半	反転底元 一部反転
3	93	22	土師器小皿	8.4	1.4	6.8								反転底元	
3	94	22	土師器土器蓋	(24.3)	2.4									内外底スチ付	
3	95	24	磁器仏郎瓶	(5.0)	(4.4)	(3.0)	ロクロ	色絵・透明釉	外:口縁・開帳			肥前	18C後半以降		
3	96	26	陶器火入れ	(16.1)	12.8	5.4	ロクロ	染付・白上	外:刷毛目			肥前	(17)後半~18C前半	一部反転底元	
3	97	26	陶器鉢鉢	18.9~19.7	6.1~7.0	8.1	ロクロ	染付				肥前	18C~19C		
3	98	26	瓦葺土器蓋	16.0										内外底ナット底スチ付	
4	99	6	磁器鉢	16.35	3.6	16.75	ロクロ	染付・透明釉	外:窓絵(赤・青) 内:窓下・植物(秋の) 見込:染付			肥前	18C末~19C		
4	100	8	磁器蓋	11.15	3.1		ロクロ	染付・透明釉	外:紅・黒・青 内:濃紫 見込:花・雲			肥前	18C後半~19C末		

区	No.	品名	器種	法系 (cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	高さ	底径		胎体構成	文様	装飾技法					
4	101	8	磁器碗	10.9	6.15	3.1	コテコ	色絵・透明釉	外: 亀甲・植物			伊前	1820~1860年代	伊前焼	
4	102	8	磁器猪口	6.5	4.4	2.36	コテコ	色絵・透明釉	外: 横線・散花する人物		漆黒	関西西	18C前半~中頃	鳥羽部分(長谷川氏)	
4	103	8	磁器皿	10(45)	2.3	6.45	コテコ	色絵・透明釉	内: 山水家景		白粉	肥前	18C前半~18C中頃	一般民衆用	
4	104	8	磁器	8.15	5.28	7.85	コテコ	色絵・透明釉	外: 風景			肥前	18C末~18C前		
4	105	8	磁器徳利	2.7	17.2	5.9	コテコ 高脚	色絵・透明釉	外: 臥室・寝室			熊川 山口	18C前半~18C中頃		
4	106	9	磁器蓋	3.0	2.35		コテコ	色絵・ツル青 線土絵付	内: 水鳥			不明	A. 平尾 18C前半	一般民衆用	
4	107	9	磁器碗	10(95)	3.65	3.75	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 四方帯		黄鉄粉	松竹梅 第一東 尾	肥前	明治10年代	一般民衆用 高脚
4	108	9	磁器皿	16.65	1.9	6.25	コテコ	青磁・透明 土絵付	内: 草花			不明	A. 平尾 18C前半	一般民衆用	
4	109	9	陶器蓋	8(4)	17.2	4.85	コテコ	色絵・透明釉	外: 公園? 山? 花鳥?		阿蘇赤 磁	肥前西	明治前半	口縁部、同一製作から 底面別	
4	110	14	磁器猪口 (小杯)	6(5)	2.6	(2.5)	コテコ	色絵・透明釉	外: 一重線 内: 文(川津吉・大賀・文 吉)			瀬戸	明治10年代	京楽用	
4	111	14	磁器皿	不明	不明	9.45	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 青磁・散花		藍鉄粉	肥前	明治10年代	一般民衆用、組合 成? 山崎高台・完成不成	
4	112	14	陶器皿	8(4)	2.9	4.4	コテコ	内磨	内: 神楽? 文(平尾?) 見: 神楽? 文			瀬戸交流	18C以降	京楽用	
5	116	30	磁器猪口	7.1	8.2	3.1	コテコ	色絵・透明釉	外: 竹の賢人・對談			熊川 大野 年製	肥前西	19C中頃	
5	116	30	磁器猪口	6(7)	4.3	(3.2)	コテコ	色絵・透明釉	外: 水鳥・散花・月 内: 二重線			熊川	18C後半	京楽用	
5	117	30	磁器猪口	6.6	4.0	2.6	コテコ 高脚	色絵・透明釉	外: 草花・文字「進入道」			肥前西	18C前半~中頃		
5	118	30	磁器小杯	7.9	2.9	2.9	コテコ 高脚	色絵・透明釉	外: 竹の賢人 内: 一重線		友部	肥前西	18C代	京楽	
5	119	30	磁器碗蓋	7(5)	2.2	-	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 文字 見: 草花		白紙	肥前	19C中頃		
5	120	30	磁器碗蓋	8(8)	-	-	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 草花 見: 草花			肥前	18C中頃	京楽	
5	121	30	磁器碗蓋	8.9	3.0	-	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 草花 見: 草花			肥前	18C中頃		
5	122	30	磁器皿	9.7	2.4	6.9	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 草花 見: 草花		口磨	瀬戸交流	18C中頃		
5	123	30	磁器皿	9.6	2.6	5.0	コテコ	色絵・透明釉	外: 草花 内: 草花 見: 草花			高野	18C中頃		
5	124	30	陶器皿	-	1.6	(6.5)	コテコ	高脚	見: 草花			肥前西	18C中頃	口縁部、同一製作 内底別	
5	125	30	磁器碗	10.3	5.5	3.7	コテコ	色絵・透明釉	外: 見立・草花 内: 見立 見: 見立・松竹梅月景			肥前	18C中頃		
5	126	30	磁器碗	9.7	5.5	3.4	コテコ	色絵・透明釉	外: 見立 内: 見立			肥前	18C後半		
6	127	30	磁器碗	10(3)	5.9	3.9	コテコ	色絵・透明釉	外: 波・松 内: 雲文 見: 松竹梅月景			肥前	1820~1860年代	高脚	
5	128	30	磁器碗	9(8)	5.1	3(3)	コテコ	色絵・透明釉	外: 松花			肥前	1820~1860年代	高脚	
5	129	30	磁器鉢	12.4	5.1	6.4	コテコ	色絵・透明釉	外: 人物 見: 人物		口磨	肥前	18C中頃	肥前高野	
5	130	30	磁器鉢蓋	15.4	5.8	9.1	コテコ	色絵・透明釉	外: 水鳥			肥前	18C中頃	京楽	
5	131	30	磁器皿	15.6~ 15.6	3.6	10.2	コテコ	色絵・透明釉	外: 水鳥 内: 山水・電			肥前	18C前半~中頃	高脚	
5	132	30	磁器水筒	-	6.4	-	コテコ	青磁	外: 人物と人物			三田		京楽用	
5	133	30	磁器水筒	-	-	-	コテコ	青磁	外: 人物と人物			三田		内底部、同一製作から 底面別	
5	134	30	磁器	3.6	4.9	4.1	コテコ	青磁	上磨に書文						
5	135	30	陶器土瓶蓋	9.5	3.6	-	コテコ	白土・透明釉	外: 見立		イッタン	肥前西	18C後半		
5	136	30	陶器土瓶	11.4	33.8	9.8	コテコ	白土・透明釉	内: 透明釉		イッタン	肥前西	18C後半		
5	137	30	陶器蓋	7(8)			コテコ	白土・透明釉	外: 見立 イッタン			肥前西			
5	138	30	陶器蓋 (土瓶)	8.7	4.0		コテコ	白土・透明釉	外: 見立			肥前西	18C	穿孔有り	
5	139	30	陶器小瓶			4.3	コテコ	白土・透明釉	外: 見立			肥前西		高脚(脚付?)	
5	140	30	陶器油注	5.4	6.5	5.6	コテコ	透明釉				肥前西	18C後半	口縁部、同一製作	
5	141	30	陶器土瓶	7.25	16.75	6.35	コテコ	白土・透明釉	外: 見立・松竹・七宝			肥前西	18C以降	口縁部、同一製作	
5	142	30	陶器急須	7(8)	6.15	6.85	コテコ	白土・透明釉	外: 見立 内: 見立			肥前西	18C以降	京楽用、京楽用(ツ) 一般民衆用	
5	143	30	陶器土瓶	18.3	8.3	11.0	コテコ	白土・透明釉	外: 見立			肥前西 (見取・青 磁粉)		京楽用(外磨の金面に表 面に)・内底に二ツ足有り	

区	No.	遺情	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	器高	底径		装付状況	文様	装飾特徴					
5	144	30	陶器瓶	(12.0)	4.2	4.3	ロウロ	透明釉	足込・瓶ノ口物類			内野山	18C後半	一級品(複製)	
5	145	30	陶器灯明瓶	6.2	1.2	2.6	ロウロ	透明釉				深野山	1810~1850年代	外周口縁部付近にス×付付	
5	146	30	陶器大甕				ロウロ	染釉				肥前	1810~1850年代	横金不剥落	
5	147	30	陶器			(7.0)	ロウロ	染釉・白土・時雨・二色下				肥前(小浜系)	18C以降	厚肉厚底 内底に付着物有り	
5	148	30	陶器茶器?	(6.1)	(9.6)		ロウロ	染釉?				不明	不明	胎土に灰層の込み 内底有白土(複製上)	
5	149	30	陶器瓶	—	—	7.8	ロウロ							胎土外面露骨有り(1.5并外?)	
5	150	30	陶器瓶			7.8	ロウロ	染釉・透明釉・白土	外:斜文目				肥前(肥前系)	18C)当	
5	151	30	陶器鉢	17.4	6.3~8.8	7.0	ロウロ	透明釉					肥前系	18C後半以降	材料4~5機存
5	152	30	陶器鉢	(22.0)	10.8	(9.6)	ロウロ	透明釉					深野山	18C後半以降	胎土に灰層の込み 横金4~5機存
5	153	30	陶器瓶	(8.0)	(12.0)	(11.7)	ロウロ	染釉							
5	154	31	磁器湯瓶	7.65	2.3	3.6	染付	染付・透明釉	内:梅枝・唐草				瀬戸美濃	19C前半~後半	1機月?
5	156	31	磁器水漬	8.2	8.35	6.3	染付	白磁・染付					春日原	18C代	
5	156	31	土製仏人形	2.85	2.7		型打	素焼						18~19C代	
5	157	31	磁器書	(6.3)	2.35		ロウロ	染付・透明釉	外:仏・牡丹 内:吉文 胎土:牡丹+一重黄緑				肥前	1820~1880年代	
5	158	31	土師器小皿	6.9	2.2	3.9									完全口縁部ス×付着 内底に灰層の込み(複製)
5	159	31	土師器小皿	7.8	0.85	6.4									完全
5	160	31	土師器小皿	6.9	0.8	6.0									胎土面
5	161	31	土師器小皿	10.9	1.9	7.8									反転焼
5	163	31	陶器花入礼		(12.0)	(11.0)	ロウロ	透明釉・染釉?	外:具(磁材・厚肉)				春日原?		反転焼
5	164	31	陶器甕	(66.3)	(11.1)		ロウロ	染釉	外:梅花・花(聖徳太子)唐草						18C後半~19C前半 反転焼 染釉特徴的
5	166	32	磁器猪口	7.2	4.2	3.2	ロウロ	染付・透明釉	外:文様 染釉・唐草				横(中国)	18C代	
5	166	32	磁器猪口	6.9	1.7	3.3	ロウロ	染付・透明釉	外:唐草				肥前系 染釉系	18C代	「器人」1771一品
5	167	32	磁器猪口	6.9	4.7	3.4	ロウロ	染付・透明釉	外:染・染白文 内:				肥前	18C代	
5	168	32	磁器猪口	7.0	4.3	2.9	ロウロ	染付・透明釉	外:染・人物				肥前	18C代	
5	169	32	磁器猪口	6.3	5.4	3.7	ロウロ	染付・透明釉	外:七宝系・染子・唐草				肥前	18C後半以降	
5	170	32	磁器猪口	6.2	4.3	3.1	ロウロ	染付・透明釉	外:唐草・唐草				肥前	18C代	
5	171	32	磁器碗	7.7	6.5	4.8	ロウロ	染付・透明釉	外:染(染白)				肥前	18C代	
5	172	32	磁器紅皿	4.7	1.8	1.7	型打	白磁							
5	173	32	磁器碗(紅皿)	8.0	3.2	2.6	ロウロ	染付・透明釉	外:草花・文字(玉川)				肥前	18C代	
5	174	32	磁器紅皿	9.5	4.7	2.4	ロウロ	染付・透明釉	外:大坂和歌川唐草				肥前	18C代	
5	175	32	磁器碗蓋	9.3	3.1		ロウロ	染付・透明釉	外:唐草・横 内:唐草				春日原?	1820~1860年代	胎土にス×付
5	176	32	磁器碗蓋	9.1	2.6	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 内:唐文				肥前(肥前系)	1820~1860年代	
5	177	32	磁器碗	9.1	4.4	3.2	ロウロ	染付・透明釉	外:富士山 胎土:				肥前	1820~1860年代	反転焼
5	178	32	磁器碗	9.4	8.0	3.4	ロウロ	染付・透明釉	外:染・唐草・唐文 内:唐文 見込:染付唐草				肥前	18C代	
5	179	32	磁器碗(紅皿)	9.4	6.1	(3.6)	ロウロ	染付・透明釉 上粉付	外:染・唐草・唐文 内:唐文 見込:染付唐草 胎土:白土(染付)				肥前	18C後半	胎土にス×付 胎土に灰層の込み (胎土付18C代に清水?)
5	180	32	磁器碗	9.6	4.6	3.9	ロウロ	染付・透明釉	外:一重唐草				肥前	18C後半	
5	181	32	磁器碗	10.5	6.1	4.2	ロウロ	染付・透明釉	外:扇系・坂 内:唐				肥前	1820~1860年代	胎土面 胎土にス×付
5	182	32	磁器碗	9.3	5.0	3.1	ロウロ	染付・透明釉	外:富士山 胎土:				瀬戸美濃	18C代	
5	183	32	磁器碗	10.7	6.7	4.3	ロウロ	染付・透明釉	外:山・唐草 見込:染付唐草				肥前	1820~1860年代	胎土にス×付・胎土面
5	184	32	磁器碗	9.4	5.6	3.6	ロウロ	染付・透明釉	外:唐草・唐草・横・唐草				肥前	1820~1860年代	胎土にス×付・胎土面
5	185	32	磁器碗	10.4	6.5	4.1	ロウロ	染付・透明釉	外:唐(文字)室(内)の唐草 内:唐(文字)室(内)の唐草 見込:染付唐草				肥前	1820~1860年代	胎土面 見込に唐草の染付
5	186	32	磁器碗	11.7	5.1	4.8	ロウロ	染付・透明釉	外:唐子・唐・唐(唐草) 内:唐文				肥前	18C代	胎土にス×付?
5	187	32	磁器茶筒	6.0	10.6	5.0	型打	染付・透明釉	外:唐(文字)唐草				肥前	18C代	底面付
5	188	32	磁器水漬	—	3.7~4.8	—	型打	染付・透明釉							内面に唐草・唐(文字)唐草 胎土にス×付・胎土面 胎土に灰層の込み 胎土外面露骨有り(2.5)
5	189	32	磁器鉢	13.1	6.9	7.8	ロウロ	染付・透明釉 上粉付(染)	外:唐草・唐・唐(文字)唐草 内:唐(文字)唐草 見込:染付唐草				肥前(肥前系)	18C代	胎土にス×付 胎土に灰層の込み 胎土外面露骨有り

No.	No.	遺構	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考
				口徑	器高	底径		絵付部位	文様	装飾特徴				
5	190	32	磁器鉢	18.1	5.8~6.1	7.2	ロウロ	染付・透明釉	外: 牡丹 内: 松島・山水園		肥前	19C代	藤越・部分新花 地/月面図高台	
5	191	32	磁器鉢	18.2	7.3	7.2	型打	染付・透明釉 上段付(金・赤)	外: 牡丹・花卉 内: 松島 見込: 松島	赤彩	肥前	19C代	地/月面図高台 六角鉢	
5	192	32	磁器鉢	14.4	—	—	型打	透明釉	内: 菊花		伊前	17C代~18C 前半	菊文皿	
5	194	32	磁器鉢	17.0	7.1~7.8	7.2	型打	染付・透明釉	外: 牡丹 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	鉢口に黒漆の刷 繪花	
5	195	32	磁器鉢	15.8	6.1~6.6	8.0	型打	染付・透明釉 透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	足/月面図高台 繪鉢	
5	196	32	陶器急須	5.1	5.5	4.2	ロウロ	染付・透明釉 白土	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	白土 黒漆・松島・松 見込: 松島・松	
5	197	32	磁器急須?	10.0	—	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 人物・雲文		肥前	19C代	急須?	
5	198	32	磁器皿	—	4.2~5.0	12.6	型打	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松	先家臣の み模様	肥前	19C代	地絵・松島・松	
5	199	32	磁器皿	12.5	3.4	7.5	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松	口縁	伊前	19C代	地絵・牡丹/月面図高台	
5	200	32	磁器皿	12.5	3.0	6.5	ロウロ	染付・透明釉	内: 牡丹		肥前	19C代	地絵・牡丹/月面図高台	
5	201	32	磁器皿	11.1	2.1	6.6	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	繪文	
5	202	32	磁器皿	13.7	3.3	17.7	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	18C代	繪文	
5	203	32	磁器皿	10.0	2.9	4.8	ロウロ	染付・透明釉	外: 牡丹 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	繪文	
5	204	32	磁器皿	9.0	2.4	4.5	型打	染付・透明釉	外: 牡丹 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	八角皿	
5	205	32	磁器皿	7.0	2.3	3.5	型打	白釉	内: 黄書平(松江文) 見込: 松島		肥前		丹皿	
5	206	32	磁器皿	9.7	2.2	8.0	型打	白釉	見込: 文字「寿」		肥前	18C前半~ 19C中	丹文皿	
5	207	32	磁器皿	9.1	2.3	4.7	型打	染付・透明釉	内: 松島 見込: 小松		肥前	18C後半~ 19C中	丹文皿	
5	208	32	磁器仏飯器	6.7	6.1	1.5	ロウロ	色絵・透明釉	外: 松島・松		肥前	18C後半~ 19C中	丹文皿	
5	209	32	磁器仏飯器	5.7	6.1	3.7	ロウロ	色絵・透明釉	外: 松島・松		肥前	18C後半~ 19C中	丹文皿	
5	210	32	磁器蓋	12.8	3.1	7.6	型打	白釉		口縁	肥前	18C~19C 前半	丹文皿	
5	211	32	磁器灯籠蓋	6.5	2.3	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	212	32	磁器灯籠蓋	6.5	2.0	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	213	32	磁器灯籠蓋	11.0	4.0	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	214	32	磁器合子	8.4	3.7	3.5	ロウロ	染付・透明釉	外: 牡丹		肥前	19C代	丹文皿	
5	215	32	磁器香炉	7.0 6.0	6.9 7.0	7.0 6.0	型打	青釉	外: 牡丹		肥前	19C代	丹文皿	
5	216	32	磁器火入丸	10.8	8.4	3.9	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	217	32	磁器灰皿	6.4	2.6	3.8	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	218	32	磁器灰皿	10.5	4.1	13.0	ロウロ	色絵・透明釉	外: 文字「寿」・松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	219	32	磁器灰皿	10.6	3.5	10.9	ロウロ	染付・透明釉	外: 牡丹・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	220	32	磁器急須?	—	8.7	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 内: 松島		肥前	19C代	地/月面図高台	
5	221	32	磁器 雜什器德利	—	—	3.6	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	222	32	磁器瓶	1.7	11.9	3.9	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	223	32	磁器瓶	—	—	4.4	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	224	32	磁器瓶	—	—	—	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	225	32	磁器雜什器	2.0	18.7	6.1	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	226	32	磁器雜什器	2.3	19.6	6.1	ロウロ	色絵・透明釉	外: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	227	32	磁器皿	—	4.6~5.4	13.6	型打	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	228	32	磁器皿	15.5	3.7	13.2	ロウロ	染付・透明釉	外: 松島・松 内: 松島・松 見込: 松島・松		肥前	19C代	丹文皿	
5	229	32	陶器土瓶蓋	6.9	4.4	—	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	230	32	陶器土瓶	8.4	13.6	8.8	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	231	32	陶器土瓶	7.3	11.3	8.2	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	232	32	陶器土瓶	7.2	8.1~8.4	6.9	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	233	32	陶器土瓶蓋	3.9	2.4	—	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	234	32	陶器土瓶	10	11.2	8.3	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	
5	235	32	陶器土瓶蓋	3.2	2.0	—	ロウロ	透明釉	外: 松島		肥前	19C代	丹文皿	

区	No.	造構	器種	法量 (cm)		成形	装飾		施内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	高さ		備付機	文様					
5	236	32	陶器土瓶	8.9	11.9	8.4	ロクロ	白十、透明釉		群馬県	19C代	No.228(七ツ)	
5	237	32	陶器土瓶蓋	11.8	3.7	—	ロクロ	透明釉	外:緑文				
5	238	32	陶器土瓶蓋	9.9	2.9	—	ロクロ	黒輪・白上	外:黒口蓋	イブツ山			
5	239	32	陶器急須	—	—	10.6	ロクロ	黒輪・緑口輪		東京都			
5	240	32	陶器急須	9.4	11.6	8.6	ロクロ					氏部外箱蓋(青リソウ)付	
5	241	32	陶器鉢	14.4	5.7	5.1	ロクロ	装飾				下部に平蓋	
5	242	32	陶器碗	115.4	7.2	7.8	ロクロ	色絵・灰釉	外:紅葉	内:白	京都府	18C代	清水焼・穴長柄(カ)
5	243	32	陶器小皿	6.2	4.4	2.8	ロクロ	透明釉					
5	244	32	陶器紅皿	5.1	3.2	3.1	ロクロ	透明釉					
5	245	32	陶器碗	8.1	4.5	2.9	ロクロ						
5	246	32	陶器鳥鉢	9.6	5.9	14.0	ロクロ	透明釉・灰釉	内:赤				
5	247	32	陶器片口	18.8	6.8	6.8	ロクロ	透明釉・灰釉	外:灰釉				
5	248	32	陶器片口	15.0	8.5	6.1	ロクロ	透明釉					
5	249	32	陶器行平	18.2	11.9	7.1	ロクロ	赤輪	外:黒口輪				
5	250	32	陶器行平	15.0	10.7	8.2	ロクロ	鉄輪・透明釉	外:黒口輪				
5	251	32	陶器灰蓋トシ	—	—	10.5	ロクロ	白色釉					
5	252	32	陶器鍋蓋	19.0	—	—	ロクロ	外:黒・緑釉					
5	253	32	陶器鉢	16.6	—	—	ロクロ	外:緑文?					
5	254	32	陶器鉢	12.9	7.6	6.0	ロクロ	白上・灰釉	外:黒				
5	255	32	陶器徳利	—	—	10.0	ロクロ	鉄輪・透明釉	外:黒				
5	256	32	陶器徳利	2.3	17.4	3.6	ロクロ						
5	257	32	陶器瓶	—	—	8.1	ロクロ	鉄輪・灰口釉					
5	258	32	陶器小瓶	2.8	9.2	5.0	ロクロ						
5	259	32	陶器瓶	(6.1)	22.5	7.8	ロクロ	鉄輪・透明釉					
5	260	32	陶器瓶	4.9	24.5	9.0	ロクロ	鉄輪					
5	261	32	陶器瓶	(4.1)	27.7	9.6	ロクロ	鉄輪・白土	外:灰釉	イブツ山			外箱(印)付
5	262	32	陶器灯明受け皿	19.4	2.2	3.6	ロクロ	透明釉					
5	263	32	陶器灯明受け皿	19.8	2.0	4.5	ロクロ	透明釉					
5	264	32	陶器灯明受け皿	6.6	4.5	4.4	ロクロ	透明釉					
5	265	32	陶器壺	8.4	11.6	5.2	ロクロ	鉄輪					
5	266	32	陶器播鉢	28.9	10.7	14.2	ロクロ						
5	267	32	陶器播鉢	28.7	12.4	12.9	ロクロ	鉄輪					
5	268	32	陶器鉢	28.0	14.9	12.2	ロクロ	鉄輪					
5	269	32	陶器鉢	21.4	23.7	11.4	ロクロ	鉄輪					
5	270	32	陶器壺	30.6	31.9	13.7	ロクロ	鉄輪・白釉					
5	271	32	土師質土器鉢	(16.7)	6.2	8.8	ロクロ						
5	272	32	土師質土器壺	24.1	—	—	輪転機						
5	273	32	土師質土器鉢	23.0	9.7	10.4	ロクロ						
5	274	32	土師質土器播鉢	30.0	—	—	ロクロ						
5	275	32	土師質土器播鉢	26.6	—	—	ロクロ						
5	276	32	土師質土器壺七口	37.0	—	—	ロクロ						
5	277	32	土師質土器落雁型	—	—	—	型輪						
5	278	32	土師質土器こね鉢	47.0	14.3	22.9	ロクロ						
5	279	32	瓦質土器壺	17.3	18.5	17.1	ロクロ						
5	280	32	瓦質土器皿(焙焼)	18.3	3.8	—	ロクロ						
5	281	32	瓦質土器鉢	31.6	11.1	23.6	ロクロ						

区	No.	濃精	器種	法量(cm)			成形	裝飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考		
				口徑	高さ	底径		絵付要素	文様	文飾特徴						
5	282	32	瓦質土器鉢	22.3	13.7~ 14.6	13.7	ワタコ		外・柳	昭和時代				内面底管状に施し、底裏より 外面管状の筒状部を有す		
5	283	32	瓦質土器 火鉢	23.2	30.8	30.0	ワタコ							把手部打撃形による傷み 跡・外面に赤色顔料		
5	284	32	瓦質土器 火鉢	23.3	-	-	ワタコ			昭和時代				19C前半~中 葉	把手部打撃形による傷み 跡・外面に赤色顔料	
5	285	32	瓦質土器 火鉢	-	-	(22.6)	ワタコ		外・柳文・梅花・藤・蓮					把手部打撃形による傷み 跡・外面に赤色顔料		
5	292	32	土師器小皿	7.2	0.8	8.9										
5	293	32	土師器小皿	7.4	1.1	3.8										
5	294	32	土師器小皿	7.8	1.16	3.8										
5	295	32	土師器小皿	7.8	1.3	6.7										
5	296	32	土師器小皿	8.8	2.2	7.0										
5	297	32	石製品礎											外面は面取		
5	298	32	石製品礎											赤銅色(銅皮剥き)		
5	299	32	銅製品簪						曲線							
5	300	32	石製品砥石													
5	301	32	土師質土器 線香立	-	-	7.0	ワタコ			陶文				外面広くくし、底部外面 管状部有す		
5	302	32	土師質土器 急須	-	6.0	6.0								蓋は、把手に穿け 有す		
5	303	32	土師質土器 急須	13.2	15.1	-	ワタコ							外面に「柳口紅」陶文		
5	304	32	土師質土器 急須	20.7	19.4		ワタコ							外面に「急須」？陶文		
5	305	32	土師質土器 急須		31.9		ワタコ									
5	306	33	磁器小杯	6.2	3.0	2.6	ワタコ	染付・透明釉	外・宋文 内・唐文					高付？ 脚つ 底平		
5	307	33	磁器碗	9.4	5.3	4.1	ワタコ	染付・透明釉	外・唐文 内・ 蓮花					肥前 1820~1860 年代	陶文	
5	308	33	磁器急須	6.3	3.0	(6.8)	ワタコ	染付・透明釉	外・山水家景					肥前以外		
5	309	33	磁器急須	7.3	3.05	7.0	ワタコ	染付・透明釉	外・透明釉					肥前 19C代		
5	310	33	陶器鉢	(15.15)	8.4	5.3	ワタコ	丹土	見込:肥ノ目 輪ハキ					肥前 (肥前産)	17C末~18C 前半	細灰白陶文
5	311	33	磁器皿	-	-	(13.8)	ワタコ	色絵・染付・透 明釉	外・唐草 内・ 唐草					肥前 18C代		
5	312	33	磁器碗	(10.30)	5.6	16.9	ワタコ	染付・透明釉	外・唐草 内・唐草 内:四方唐・唐子・白梅子 外:唐草 見込:肥ノ目 輪ハキ					肥前 (肥前産)	18C前半	日輪さつ残存
5	313	35	磁器碗	8.8	5.25	3.4	ワタコ	染付・透明釉	外:四方唐・唐子・白梅子 内:唐つばき・唐草 見込:肥ノ目 輪ハキ					肥前 1820~1860 年代	陶文	
5	314	35	磁器碗		(6.8)		ワタコ	染付・透明釉	外・花唐草					肥前 19C以降		
5	315	35	土製品鉢	(8.4)	(4.3)	3.6	型打	灰緑色						18~19C代?	内面に土製の玉が嵌る	
5	316	35	土師器小皿	7.1	0.9	5.2								反転履穿		
5	317	35	土師器小皿	7.8	0.9	6.0								反転履穿		
5	318	35	土師器小皿	7.8	1.1	8.8								反転履穿		
5	319	35	瓦質土器 火鉢	(26.6)	28.1		ワタコ		外・柳・御目(形押)					肥前 18C代	反転履穿	
5	325	37	磁器人形	-	7.3	-	型打	白陶						肥前		
5	326	37	陶器碗	(11.6)	7.0	4.6	ワタコ							高取土器 (高取式)	17C前半?	
5	327	37	陶器皿		(9.8)	(8.1)	ワタコ	緑釉・白土・貝 灰	内・梅花目					肥前 17C後半?	反転履穿 内面に産地金の痕有り 物十目さつ残存	
5	328	37	陶器		(12.4)		ワタコ	少灰釉						高取土器 (高取式)	17C前半	反転履穿 目取有り
5	329	38	磁器蓋	(8.3)	5.4	(3.2)	ワタコ	透明釉						肥前 18C代	高取有り 反転履穿	
5	330	38	陶器皿	(24.5)	6.05	9.9	ワタコ	灰緑	見込:白磁あり(5つ)					肥前 17C後半	反転履穿	
5	331	42	磁器人形 (水注)		8.1		型打	染付・透明釉	内:透明釉					肥前 19C後半	反転履穿	
5	332	42	陶器水注 (水注)				型打	透明釉・緑釉 白土・緑釉	外・二ツ巴					肥前 18C以降	反転履穿	
5	334	43	陶器鉢	(22.6)	10.75	(10.6)	ワタコ	緑釉・白土	外:唐草目					肥前 17C後半	反転履穿 底取付欠く?とある?	
5	335	43 102	陶器花生	(15.9)		(11.3)	ワタコ	ワタコ						高取?	17C後半?	口縁部反転履 内底
5	336	44	磁器碗	6.1	4.5	3.2	ワタコ	染付・透明釉	外:山水家景 内:唐草 見込:唐草 見込:唐草					肥前 18C後半	一部反転履穿 陶文	
5	337	44	磁器碗	(11.8)	5.65	(4.0)	ワタコ	染付・透明釉	外:唐草 内:唐草 見込:唐草	内面 唐草目				肥前 1820~1860 年代	一部反転履穿 陶文	

区	No.	設機	器種	流量(cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	器口	底径		胎付柄筋	文様	器輪特形					
5	338	44	磁器湯呑み	(7.3)	5.7	3.8	ワコ	染付・透明輪	外:唐花・母子母 内:三重窓 器口:三草花・金剛輪		徳前	18C末	一筋取戻元		
5	339	44	磁器碗	(9.0)	5.55	3.35	ワコ	染付・透明輪	外:唐花 内:三重窓 器口:文様・重窓		伊前	1789~1820 年代	一筋取戻元 底面縮小		
5	340	44	陶器燗瓶	4.15	3.4	3.15	ワコ	染輪			赤切	徳前系	19C代		
5	341	44	陶器灯明皿	5.0	2.9	2.7	ワコ	染輪?施き 有			赤切	徳前系	19C代		
5	343	44	十條貫土器 拵鉢	(33.5)			ワコ							内面びき 戻り戻元	
5	344	44	陶器土瓶	9.0	10.5	6.1	ワコ	染輪				徳前系	19C代	体部に身の割落し跡あり	
5	345	45	陶器蓋	4.1	1.8		ワコ	染輪	内:赤切			徳前系	19C代		
5	346	47	磁器皿	(7.4)		1.2	型打	青磁	外:草草				19C代	戻り戻元	
5	347	83	瓦貫土器 燗鉢	(23.8)	11.0	(10.6)	ワコ						18C	戻り戻元 ツアムに注ぎ口残	
5	348	83	土師貫土器 燗鉢	(38.4)	(19.1)		ワコ							戻り戻元	
5	349	102	土師器小皿	8.7	1.8	5.6								戻り戻元	
5	350	102	土師器小皿	8.8	1.8	6.4								戻り戻元	
5	351	102	土師器小皿	8.5	1.6	6.0								戻り戻元	
5	352	102	土師器小皿	8.85	1.65	5.2								戻り戻元	
5	353	102	土師器小皿	8.6	1.4	5.9								戻り戻元	
5	354	102	土師器小皿	10.8	1.5	7.3								戻り戻元	
5	355	102	陶器皿		5.8	ワコ	透明輪・染輪					伊野山	17C後半	焼付輪割跡	
5	356	102	土師貫土器 燗(燗鉢)	(27.1)	(8.9)									戻り戻元 外割クマリ 器口スリ	
6	357	49	磁器器口	(8.9)	3.4	2.25	ワコ	白磁				徳前	18C	一筋取戻元	
6	358	49	陶器燗 (器口)		(1.3)	3.2	ワコ	染輪・透明輪				徳前系	19C代		
6	359	49	土師器小皿	7.65	1.15	5.9								戻り戻元	
6	360	49	土師器小皿	8.38	1.15	7.5								戻り戻元	
6	361	49	土師器 焼き皿												
6	362	49	陶器皿	16.55	3.8	7.35	ワコ					瀬戸義隆	18C以降	割付ゆがみあり	
6	363	49	瓦貫土器鉢	(27.0)	12.3~ 12.7	16.0	ワコ					伊野?	19C代	口縁部一部成形 外底面成直	
6	364	53	陶器碗	(10.3)	7.3	4.7	ワコ	透明輪				伊野?	17C後半~19C 前半	一筋取戻元 具部手	
6	365	53	陶器碗	(11.0)	4.9	4.4	ワコ	透明輪・染輪 (器口)				徳前系	19C後半以降	戻り戻元 口縁部スリ	
6	366	53	陶器碗	(16.3)	5.8	3.7	ワコ	染輪	外:草草			徳前系 (成装鉢)	18C後半	器口戻り戻元 内底面に口縁部スリ	
6	367	83	土師器 火酒し盎	16.4										内外面割付痕あり・外面割付 クマリ・口縁部等割跡の残 存	
6	368	53	土師貫土器 拵鉢	21.7	7.6		ワコ					赤切		内面びき 外面クマリ	
6	369	53	土師器人形	(9.35)	(3.7)		型打	染輪(器)						18C~18C代	
6	370	53	土師器小皿	6.1	1.3	6.8									
6	371	53	土師器小皿	6.5	1.3	5.9									
6	372	53	土師器小皿	6.4	1.4	5.8									
6	373	53	土師器小皿	6.2	1.5	5.3									
6	374	54	土師器小皿	11.2	2.7	6.9								戻り戻元	
6	375	54	土師器小皿	10.8	3.1	7.2								戻り戻元	
6	376	54	磁器器口 (小外)	(6.8)	4.3	(2.9)	ワコ	染付・透明輪	外:施色・青磁文			徳「雪中 茶器大 器」?	底面系	19C前半	戻り戻元 器口?
6	377	SP-2	陶器皿	15.8	3.8	5.3	ワコ	土師器・染輪	内:底面 見込・砂目あり			徳前	1600~1650 年代		
7	378	77	陶器蓋	16.9	4.1		ワコ	透明輪				徳前系	19C代		
7	379	77	磁器燗瓶	11.3	3.6	5.8	ワコ	染輪・透明輪	外:施色			徳前	18C以降		
7	380	77	磁器碗	10.5	6.1	1.6	ワコ	染付・透明輪	外:施色 器口: 見込			伊前	1820~1900 年代	徳前系・口縁部スリあり	
7	381	77	磁器碗	11.0	3.9	4.4	ワコ	染付・透明輪	外:文字「草草」・七宝 内: 見込			赤切	伊前	1820~1890 年代	戻り戻元
7	382	77	磁器急須	(5.0)	7.6	6.6	ワコ	染付・透明輪	外:施色			赤切	徳前		
7	383	82	磁器碗	9.8	5.85	3.65	ワコ	染付・透明輪	外:紅藍			コンニャク 印付	徳前	1890~1740 年代	徳「天明 年製」
7	384	118	磁器碗	11.1~ 11.8	6.1~ 6.4	4.4	ワコ	染付・透明輪	外:紅藍			徳前	1890~ 1860年代	ゆがみ有り	
7	385	118	陶器碗	(15.7)	8.65	5.4	ワコ	染輪				徳前	17C後半	一筋取戻元・具部手 次筋取戻元	

区	No.	品類	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
				口徑	器高	底径		絵付模様	文様	絵付時期					
7	386	118	磁器皿	—	—	(3.0)	ワタコ	染付・透明焼	内：唐文・西方法 外：文様			肥前	17C後半	模成不良	
7	387	118	磁器皿	3.0	4.9 5.3	7.4	ワタコ	染付・透明焼	外： 内：文様			肥前	17C後半		
7	388	118	陶器碗			(5.0)	ワタコ	透明				瀬戸焼		一部反転元	
7	389	118	陶器				ワタコ	模成				赤坂		一部反転元	
7	390	118	土師器小皿	10.2	2.1	7.3								白磁器入付者	
7	391	118	土師器小皿	10.4	1.6	7.4								字跡品、口縁部と器内内底に 土質付着	
7	392	118	土師器小皿	11.6	2.4	7.8								白磁器入付者	
7	393	118	土師器小皿	10.6	1.8	8.2									
7	394	118	土師器小皿	10.7	1.7	7.5									
7	395	75	磁器 茶主一ツ輪	2.2	1.2	0.8	明打	白磁	外：唐文				肥前		
7	396	75	磁器小杯	6.8	2.9	2.6	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文				肥前	18C後半	
7	397	75	磁器碗	8.4	6.7	3.2	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文				肥前	19C代	
7	398	75	磁器合子	—	1.7	—	型打	染付・透明焼	外：唐文				宇田	18C代?	
7	399	75	磁器蓋	6.06	11.4	4.75	ワタコ	白磁					肥前	18C	
7	400	75	陶器水盃 (平水鉢 「豆付鉢」)	(33.0)			型打		外：唐文				瀬戸焼	18C代	反転元
7	401	75	陶器・陶貯瓶	15.35	6.02	6.5	ワタコ	染付・透明焼	見込				肥前	19C末～19C 代	反転元? 口縁部と器内
7	402	76	磁器猪口	6.5	1.58	3.2	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文・唐文・唐文 内：唐文・唐文				肥前	19C代	
7	403	76	磁器猪口	6.30	5.2	3.6	ワタコ	口土・透明焼	外：唐文				宇田	19C代	
7	404	76	磁器碗蓋	8.9	2.6		ワタコ	染付・透明焼	外：唐文 見込				肥前		
7	405	76	磁器碗	19.0	3.15	4.1	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文・唐文 内：唐文 見込				肥前	1800～1800 年	反転元
7	406	76	磁器碗	(10.0)	9.9	4.1	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文・唐文 内：唐文・唐文 見込				肥前	1820～1880 年	反転元
7	407	76	磁器碗			(4.0)	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文				肥前	18C前半	
7	408	76	磁器水盃		2.85		型打	染付・透明焼	外：唐文				肥前		
7	409	76	磁器人形	—	—	—	型打	染付・透明焼	外：唐文				肥前		
7	410	76	磁器皿	(10.2)	2.6	5.6	型打	染付・透明焼	内：唐文 見込				肥前	18C代	模成
7	411	76	陶器水鉢	(26.0)			ワタコ	染付・透明焼 見込	外：唐文 内：唐文				肥前	18C末以降	購入有り 反転元 口縁部と器内は 反転元
7	412	76	陶器燗徳利	3.4	—	—	ワタコ	口土・透明焼 見込	外：				肥前	18C前半	
7	413	76	陶器鉢			(6.0)	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文 内：唐文 見込				肥前	18C末以降	反転元
7	414	119	磁器小杯	(7.0)	5.0	3.0	ワタコ		外：唐文				肥前	18C末以降	反転元
7	415	119	陶器碗	(3.7)	6.6	ワタコ	染付・透明焼						瀬戸焼	17C前半	一部反転元
7	416	119	陶器碗 (筒形碗)	9.3	9.06	6.1	ワタコ	ワタコ焼					肥前	17C後半	一部反転元 口縁部と器内は 反転元
7	417	119	陶器皿又は鉢			8.9	ワタコ	染付					肥前	1800～1830 年	一部反転元 口縁部と器内は 反転元
7	418	119	石(純石)	17.8	3.35	1.65								一部反転元(一部)	
7	419	119	陶器猪口			(10.0)	ワタコ						肥前	17C前半	一部反転元(一部)
7	420	119	土師器小皿	7.2	1.5	3.5								一部反転元 口縁部と器内は 反転元	
7	421	119	土師器小皿	10.4	1.9	7.5								一部反転元	
7	422	119	土師器小皿	11.9	2.0	6.2								一部反転元	
7	423	119	土師器小皿	12.7	2.2	9.2								一部反転元	
7	424	119	土師器小皿	10.58	2.2	6.2								一部反転元	
7	425	119	土師器小皿	11.1	2.6	6.5								一部反転元	
7	426	119	土師器小皿	11.6	3.9	8.6								一部反転元	
7	427	119	土師器小皿	11.8	3.6	8.4								一部反転元	
8	429	93	磁器碗	(8.7)	5.8	(3.4)	ワタコ	染付・透明焼	外：唐文・唐文 内：唐文 見込				肥前	18C後半	一部反転元
8	430	93	磁器皿	(11.0)	1.0	(4.2)	ワタコ	透明焼					肥前	18C後半	一部反転元 口縁部と器内は 反転元
8	431	93 96 107	陶器猪口	(6.0～ 15.0)	2.9～ 3.1	(3.0～ 10.0)	型打	透明焼(模成)	外：唐文・唐文 内：唐文 見込				肥前	18C代	一部反転元
8	433	93	土製品人形	(2.0)	(2.0)		型打	染付						1800～1900	

区	No.	遺構	器 種	法量(cm)			成形	装 飾			底面 内底	製作地	製作年代	備 考
				口径	器高	底径		文付種類	文 様	装飾特徴				
8	434	93	上須草家 (須草)	(4.1)	(4.7)		型打	素焼					18C~19C	
8	435	96	陶器皿		(3.3)	(10.8)	ロクロ	鉄線・鉄線・白土	内:黄文(魚形)			徳島	17C後半~18C前半	反転底式 三島子
8	436	96	陶器鉢		(13.5)		ロクロ	鉄線・白土・白粉			内底:白粉あり(口つ)	徳島	17C後半	一輪合成 反転底式
8	437	97	磁器碗	(9.7)	5.5	2.9	ロクロ	色ハ・透明釉	外:山水風景 内:黄文(龍)			徳島	17C後半 (1800~1800年)	磁器製造
8	438	97	陶器碗	12.35	8.45	6.8	ロクロ	透明釉				伊丹 (京橋側)	17C後半	呉漆手
8	439	97	土師器小皿	9.9	1.7	7.8								反転底式
8	440	97	土師器小皿	9.9	1.6	9.0								古形品
8	441	97	石製品 (硯石?)	(12.9)	(8.1)	(2.8)								硯石製
8	442	99	陶器皿	(29.2)			ロクロ	鉄線・口上・白粉	内:黄文(龍)			加前	17C	反転底式 三島子
8	443	99	陶器楕鉢	(30.0)	11.8	(12.7)	ロクロ	鉄線(口縁のみ)				徳島 (津?)	18C代	反転底式
8	444	99 107	土師器小皿	8.3	1.35	7.1	ロクロ							
8	445	99	土師器小皿	7.6	1.2	6.5								反転底式
8	446	99	土師器小皿	8.4	1.5	7.1								反転底式
8	447	99	土師器小皿	8.5	1.3	7.3								反転底式
8	448	99	土師器小皿	8.8	1.4	6.9								反転底式
8	449	99	土師器小皿	9.4	1.7	6.8								底面にヤレツあり(完形品)
8	450	99 107	土師器小皿	9.1	1.95	6.2	ロクロ							
8	451	99 107	土師器小皿	9.2	1.45	6.9								
8	452	99	土師器小皿	8.8	1.4	8.0								反転底式
8	453	99	土師器小皿	9.8	1.7	7.3								
8	454	99 108	土師器小皿	9.6	1.4	6.6								
8	455	99	土師器小皿	11.3	2.2	8.3								口縁にスリ付(内底・鉄線)
8	456	106	陶器楕	(9.8)	3.7	4.8	ロクロ					伊津美	17C前半	反転底式
8	457	106	陶器楕		5.6		ロクロ	鉄線・口上	黄文(雲形)			加前	17C	二島子・内底に口縁(口つ)
8	458	106	陶器楕	10.9	6.2	2.3	ロクロ	鉄線・口上	赤土・黄文 内:白濁色			加前	17C前半~18C 前半	
8	459	106	土師器小皿	11.4	2.06	7.9								内面にヤレツ・反転有り
8	460	106	土師器 地ぎ塩釜	4.8	6.8	4.2								
8	461	106	陶器皿 又は鉢	(29.7)	8.35	(8.1)	ロクロ	灰滑				徳島系	1600~1608 年代	反転底式 見込に砂目有り(4つ) 裏面白 口縁部分一割程度による合成
8	462	107	磁器楕	(18.6)	6.7	(8.2)	ロクロ	鉄線				徳島		反転底式 見込に黄粉焼きの跡(4つ)
8	463	107	陶器楕	(2.6)	4.3		ロクロ	鉄線				徳島	17C前半	物に欠け(合成)製成
8	464	107	陶器楕	(2.2)	4.4		ロクロ	灰滑				徳島	1600~1630 年代	一部反転合成 見込に砂目4つ有り
8	469	107	土師器小皿	(7.2)	1.9	(5.6)	ロクロ							反転底式
8	470	107	土師器小皿	7.5	0.85	5.7	ロクロ							外面スリ付
8	471	107	土師器小皿	8.2	1.85	7.0	ロクロ							外面スリ付
8	472	107	土師器小皿	8.5	1.45	6.78	ロクロ							灰滑品・黄目有り・口縁部分 スリ付有り
8	473	107	土師器小皿	8.8	1.45	7.6	ロクロ							灰滑品
8	474	107	土師器小皿	8.7	1.3	6.5	ロクロ							灰滑品
8	475	107	土師器小皿	8.8	1.1	6.7	ロクロ							灰滑品
8	476	107	土師器小皿	8.5	1.2	6.9	ロクロ							灰滑品
8	477	107	土師器小皿	8.5	1.8	6.1	ロクロ							灰滑品
8	478	107	土師器小皿	9.8	1.3	6.9	ロクロ							灰滑品
8	479	107	土師器小皿	8.1	1.36	6.9	ロクロ							灰滑品
8	480	107	土師器小皿	(8.6)	1.9	(6.9)	ロクロ							反転底式
8	481	107	土師器小皿	8.5	1.36	6.6	ロクロ							灰滑品
8	482	107	土師器小皿	9.2	1.56	6.7	ロクロ							灰滑品
8	483	107	土師器小皿	8.5	1.85	7.1	ロクロ							灰滑品
8	484	107	土師器小皿	7.1	1.28	5.7	ロクロ							口縁部分
8	485	107	土師器小皿	7.6	1.2	6.4	ロクロ							口縁部分スリ付
8	486	107	土師器小皿	7.8	1.15	6.8	ロクロ							灰滑品
8	487	107	土師器小皿	8.4	1.4	7.15	ロクロ							灰滑品
8	488	107	土師器小皿	9.1	1.6	6.9	ロクロ							灰滑品

区	No.	図構	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考
				口径	口径	底径		胎付加高	文様	胎付加高				
8	489	107	土師器小皿	8.6	1.8	6.3	ワタコ							
8	490	99 107	土師器小皿	9.3	1.7	6.6	ワタコ							
8	491	107	土師器小皿	8.9	1.76	6.88	ワタコ							
8	492	107	土師器小皿	9(7)	1.8	6.8	ワタコ							長6.8cm・スチ付蓋 裏面1つあり
8	493	107	土師器小皿	9(6)	2.3	5(8)	ワタコ							長6.8cm・口縁部スチ付蓋
8	494	107 109	土師器小皿	9.1	1.9	6.9	ワタコ							
8	495	109	陶器瓶		9(1.1)		ワタコ	鉄輪	白土による刺し文 縁部には灰土塗		伊前	17C		反転還元
8	496	109	磁器瓶		7(4)		ワタコ	鉄輪・透明釉			伊前	18C以降		一般反転還元
8	498	111	陶器碗	10(10)	3(3)	不明	ワタコ	透明釉			新野又は 伊前	17C前半		反転還元
8	499	111	陶器碗	11(14)	6.8	5.2	ワタコ	土灰釉			新野	17C前半		一般反転還元
8	500	111	陶器碗		12(9)	4.8	ワタコ	透明釉			吉津	1600~1630 年代		底面内底に付蓋(伊前) 蓋金剛部には灰土塗 一部は刺し文
8	501	111	磁器皿				型打	内底		口縁	肥前	17C前半		反転還元
8	502	111	土師器小皿	11.1	2.1	8.9								反転還元
8	503	111	土師器小皿	10.6	2.1	7.5								反転還元
8	504	111	土師器小皿	10.8	2.8	7.6								反転還元
8	505	111	陶器皿	13(3)	3.5	1(8)	ワタコ	灰釉			肥前	1600~1630 年代		反転還元 長さに彩り付・透明釉
8	506	111	陶器瓶	28(10)	4(4)		ワタコ	口上・灰釉			新野	1600~1630 年代		透明釉 反転還元
8	507	111	陶器瓶 (びんぶくろ)				ワタコ	鉄輪・透明釉	外:なし					透明釉 (後期)
8	508	111	土師器土器 瓶	9(9.5)	7(9)		ワタコ	灰釉	内:黒漆有り					内面に黒漆有り・底面は土器 質
8	509	111	陶器水注		7(3)	10(12)	ワタコ	鉄輪・透明釉			吉津	17C前半		反転還元 底面2重塗り
8	510	114	陶器碗	8.5	6.48	3.8	ワタコ	透付・透明釉	外:赤・白・黄の3種 内:黒土		伊前	1600~1660 年代		反転還元
8	511	114	陶器碗	9.8	4.7	3.8	ワタコ	ワタ灰釉			肥	18C前半		胎付有り
8	512	114	磁器箸台	8.7	6.6	6.6	ワタコ	透付・透明釉	外:白・灰土 内:灰土 底面:黒土・十字文					胎付有り
8	513	114	磁器碗	8.2	5.3	3.3	ワタコ	透付・透明釉	外:白・黄・赤 内:黒土		肥前	1630~1660 年代		厚灰
8	514	114	磁器碗	31.3	6(2)		ワタコ	透付・透明釉	外:白・黄・赤 内:黒土		肥前	1700~1720 年代		一部内底に黒漆 内面に黒漆塗り
8	515	115	土師器小皿	16(8)	2.2	7(8)			外:底面に黒漆塗り					反転還元
8	516	115	磁器碗	11(1.7)	7.85	4(2)	ワタコ	透明釉・鉄輪 (胎付は伊前)	外:黒漆?		肥前	1630~1640 年代		反転還元 胎付によるヘラケス
8	518	117	土師器小皿	7.7	6.9	6.2								胎付・口縁部スチ付
8	519	117	磁器碗	9(8)	5(5)	5(2)	ワタコ	透付・透明釉	外:黒漆文字		明西島	18C後半1720		反転還元
8	520	117	陶器磁鉢	10(10)	12.7	11.4	ワタコ	鉄輪			吉津	17C代		一般反転還元 胎付は伊前・胎付有り
8	521	8区 枱	磁器蓋	16.4	3.15		ワタコ	透付・透明釉	外:なし		伊前	18C前半		胎付有り
8	522	121	陶器小皿	7(4)	3.9	3(2)	ワタコ	鉄輪			伊前	18C		反転還元
8	523	121	土師器小皿	9(12)	1.5	6.9	ワタコ							反転還元 外底面に黒漆有り
8	524	121	陶器蓋 (土灰蓋)	1(2)	1.9		ワタコ	鉄輪	内:赤土		伊西島	19C		反転還元
8	527	129	磁器箸台	8.7	4.6	3.0	ワタコ	透付・透明釉	外:文字?		肥前	18C以降		
8	528	129	磁器皿	13(1)	3.18	1.3	ワタコ	白胎			肥前	18C後半1750		胎付・胎付 外底面に黒漆塗り
8	529	121	陶器磁鉢	28.8	17.8~ 12.2	14.8	ワタコ	鉄輪						18C代
9	530	123	磁器碗	9(7)	8.9	4.1	ワタコ	透付・透明釉	外:黒漆・黒漆		肥前	18C前半		反転還元 口縁部は土器
9	531	123	磁器碗	11(1)	6.1	4.8	ワタコ	透付・透明釉	外:なし		肥前	18C前半		反転還元
9	532	123	磁器覆輪蓋	11(1)	6.1	4.8	ワタコ	透付・透明釉	外:黒漆(赤・赤)		肥前	18C代		反転還元
9	533	123	陶器碗	10(8)	6.5	4.8	ワタコ	白土・鉄輪	内底:黒土		肥前	17C末~18C 前半		胎付有り 胎付は伊前
9	534	123	陶器碗	10(1)	4.8	4.6	ワタコ	透付・透明釉			肥前	18C後半		反転還元 胎付有り・胎付は伊前
9	535	123	陶器碗	9(3)	4(1)		ワタコ	透明釉			吉津	19C代		反転還元 胎付有り
9	536	123	陶器大入札	10(18)	6(7)		ワタコ	胎付・透明釉	外:黒漆		肥前	18C後半		反転還元
9	537	123 133	磁器・香伊 (灰産1.7)		7(3)		ワタコ	白胎			肥前	18~19C代		反転還元 胎付有り

区	No.	器種	器種	法量(cm)			成形	裝飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考		
				口径	器高	底径		胎土	文	色					胎土	
9	538	123	陶器			(7.7)	手捏							反転瓦元		
9	539	123	陶器鉢	(27.3)	(8.4)		ロクク	青土・黒漆	内:刷毛目			肥前	18C後半	反転瓦元 反転瓦付		
9	540	123	土師器小皿	7.3	1.25	3.6								口縁部スズ付		
9	541	123	土師器小皿	8.15	1.2	5.4								反転瓦元		
9	542	123	土師器小皿	8.6	1.3	6.5								反転瓦元		
9	543	123	土師器小皿	8.7	1.45	6.2								反転瓦元		
9	544	123	土師質土器 鉢(塔格)	(20.2)	(7.5)						肥前	18C前半		反転瓦元 外底スズ付		
9	545	123	磁器人形	(8.4)	(3.15)	(2.9)	型打	白磁			肥前	18C代		器底のみ存在 白磁は存在		
9	546	123	磁器人形	(6.4)	(3.1)	(2.7)	型打	白磁			肥前	18C代		器底のみ存在		
9	550	127	磁器水筒	(5.2)			型打	染付・透明釉	外:紅藍・緑1丸		肥前	18C代		反転瓦元		
9	551	127	磁器碗	8.8	4.0	3.3	ロクク	染付・透明釉	外:牡丹		肥前	18C後半				
9	552	127	磁器碗	8.7	6.1	3.8	ロクク	染付・透明釉	外:紅紫・緑1丸 内:黒網透 底:一色網透・透藍		肥前	1820~1860 年代		内底面		
9	553	127	磁器小杯	(6.9)	4.5	3.2	ロクク	染付・透明釉	外:黒字		肥前	1820~1860 年代		反転瓦元		
9	554	127	磁器小杯	7.4	4.7	3.4	ロクク	染付・透明釉	外:紅紫・透藍・緑1丸 内:黒字		肥前	1820~1860 年代		外底一部半焼 反転瓦		
9	555	127	磁器皿	(13.9)	3.0	(8.8)	ロクク	染付・透明釉	外:紅紫 内:黒・透藍		肥前	18C後半		反転瓦元 見込部/輪縁部 外底面スズ付		
9	556	127	磁器付足	16.8	2.8	3.4	ロクク	青磁焼付	内:黄・透藍		肥前	18C末以降		外/内両面青		
9	557	127	磁器皿	(10.4)	6.8		ロクク	染付・透明釉			肥前	18C後半以降		一部反転瓦・焼成不良		
9	558	127	陶器鉢	(15.4)	7.6	(6.0)	ロクク	灰釉?白土			肥前	18C前半		反転瓦元		
9	559	127	土師器小皿	7.7	1.2	5.6								反転瓦元・内面スズ付		
9	560	127	土師器小皿	7.7	8.9	6.0								反転瓦元 口縁部・器底スズ付		
9	561	127	土師器小皿	8.3	1.65	6.2								口縁部・器底スズ付		
9	562	127	土師器小皿	9.4	1.1	7.4								反転瓦元		
9	563	127	土師器小皿	16.8	1.8	8.4								反転瓦元		
9	564	127	土師器小皿	10.5	1.8	6.78								反転瓦元		
9	565	127 134	陶器土紙	(7.4)			ロクク	新焼			九州	18C		一部合流の集反転瓦		
9	566	127	陶器急須	5.5	6.6(6.3 ~6.6)	5.4	ロクク	染付・白土・ インク・黒付	外:青紫		関西系	18C後半				
9	567	127	土師質土器 鉢(塔格)	22.0	(8.3)						肥前			少子のみ存在 外底スズ付		
9	569	130	陶器碗	9.9	6.3	4.8	ロクク	手捏白土	外:黒紫目		肥前	17C末~18C 前半				
9	570	130	磁器皿	(13.0)	3.1	6.4	ロクク	染付・透明釉	見込・天光色		肥前	18C後半		一部反転瓦 見込部/輪縁部		
9	571	130	陶器皿	(13.2)	(9.6)		ロクク	黒漆・白土・ 透藍	内:二色手		肥前	17C後半		反転瓦元		
9	573	132	土師質土器 杯	(18.0)	2.0	(12.4)	ロクク							反転瓦元		
9	574	132	磁器皿	(18.3)	3.3	7.7	ロクク	染付・透明釉	外:黒(藍)							
9	575	133	土師器小皿	9.2	1.6	10.2								反転瓦元		
9	576	133	磁器碗	(11.0)	8.8	(4.9)	ロクク	染付・透明釉	外:紅紫・透藍		肥前	18C後半		反転瓦元 一部反転瓦		
9	577	134	磁器水筒	(1.7)	4.4	3.3	型打	染付・透明釉	外:黄藍		不明	不明		器底面		
9	578	134	磁器仏飯器	7.0	6.2	3.9	ロクク	染付・透明釉	外:輪廓赤		肥前	18C後半以降				
9	579	134	磁器碗	(8.1)	6.55	3.2	ロクク	染付・透明釉			肥前	18C後半		器底面		
9	580	134	磁器碗	(10.6)	(5.1)		ロクク	色絵・透明釉	外:紅紫		肥前	18C後半		輪廓紅存在		
9	581	134	磁器碗	(8.8)	6.0	3.0	ロクク		外:清色・黒網透 内:四方印 底:色付・透藍・二色網透		肥前	18C後半 18C末~19C 前半		輪廓赤・器/内面反転瓦 器底スズ付		
9	582	134	磁器皿	11.9	3.4~ 3.7	7.0	ロクク	染付・透明釉	内:器物・透藍		肥前	18C後半		輪廓赤・器/内面反転瓦 器底スズ付		
9	583	134	磁器碗	10.3	6.7	4.3	ロクク	染付・透明釉	外:黒・透藍 内:透藍		肥前	1820~1860 年代		器底面		
9	584	134	土師器小皿	7.3	0.9	6.0										
9	585	134	陶器鉢	8.0	3.7	3.8	ロクク		外:白土		肥	18C前半				
9	586	134	陶器 (土師質土器 土製内底)				型打	新焼							外底面のみ存在	
9	587	134	土師器小皿													
9	588	134	陶器碗	3.4	9.35		ロクク	新焼			会	九州	18C			
9	589	135	磁器皿	(10.9)	2.2~ 3.0	5.4	型打	染付・透明釉	内:透藍・花 見込:色付・透藍 外:黄藍		肥前	18C後半		輪廓赤・器底面 器底スズ付		
9	590	135	磁器小杯	6.1	3.25	2.3	ロクク	白磁						18C代	18C代	
9	591	135	陶器小杯	5.65	3.65	3.0	ロクク								関西系	18C代

区	No.	濃精	器種	法量(cm)			成形	裝飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
				口径	口径	底径		込付模様	文様	縁飾				
9	592	135	陶器火入	10.3	7.1~7.3	6.8	ワタ	刷繪縁付			白磁	18C前半	漆喰(白)有り	
9	593	135	土師器小皿	9.2	1.8	6.6							反転覆元	
9	594	135	土師器小皿	9.55	1.9	6.6							反転覆元	
9	595	135	土製品横笛	(7.2)	(3.5)	(2.7)	柳打	滑光						
9	601	144	磁器急須	(8.0)	(4.8)	不底(6.0 5.4)	ワタ	染付・透明釉	外: 横・有流筋・雲文		白磁	18C後半	19C	反転覆元
9	602	144	陶器碗	(11.4)	6.7	(6.5)	ワタ	透明釉					18C代	反転覆元
9	603	144	磁器鉢	15.75	7.6	6.4	ワタ	白磁					17C後半~18C前半	
9	604	144	陶器鉢	(8.8)	(9.3)		ワタ	白土・透明・透明釉	内: 二筋手(黒毛目)				18C前半	反転覆元
9	605	144	土師器小皿	10.0	1.15	8.3								反転覆元
9	606	144	土師器小皿	10.5	1.6	6.7								虎目・目縁部・深スス付
9	607	144	土師器小皿	10.6	3.0	7.3								茶目・内縁部・付替
9	608	144	土師器小皿	10.3	3.2	7.1								茶目・内縁部・付替
9	609	144	土師器小皿	10.0	1.6	6.7								内縁部・付替
9	610	144	土師器小皿	10.1	1.8	7.5								反転覆元
9	611	146	陶器碗	(8.8)	(1.4)		ワタ	透明・透明釉					18C後半	反転覆元
9	612	147	陶器	(6.5)	(6.1)	(1.9)	柳打	刷繪					18C代	
9	613	148	陶器土器土 道具 鉢	(7.4)	(3.9)		ワタ	横溝					18C代	
9	614	148	土師器小皿	10.2	1.0	8.8								反転覆元
9	615	148	土師器小皿	9.7	1.65	9.2								反転覆元
9	616	147	陶器片口	(21.8)	(5.4)		ワタ	白土	外: 斜色筋				18C前半	反転覆元
9	617	147	磁器浅皿	20.0	6.3	12.2	ワタ	染付・透明釉 白土	外: 横溝				18C後半	
9	618	147	陶器鉢	19.8	(7.0)		ワタ	透明					18C代	
9	619	150	陶器鉢	22.4	13.6~13.8	12.4	ワタ	横溝・白土					18C~19C代	
9	620	151	磁器碗	11.4	6.3	(4.8)	ワタ	染付・透明釉	外: 横・透明釉 内: 横溝 茶目・裏面 茶目・裏面 茶目・裏面				18C~19C代	
9	621	153	磁器皿	(10.8)	2.3	(6.0)	柳打	透明釉	外: 横溝 内: 裏面 茶目・裏面				18C代	
9	622	153	磁器皿	(11.0)	(11.0)	ワタ	染付・透明釉	外: 横溝 内: 山水・鳥					17C後半	
10	623	155	陶器	(16.0)	(6.6)		ワタ	刷繪					18C代	
10	624	155	土製品人形	(4.5)	(4.5)		手づく							反転覆元
10	625	155	土師器小皿	10.2	2.0	8.2								反転覆元・内縁部・付替
10	626	155	土師器小皿	10.95	2.2	7.1								反転覆元・内縁部・付替
10	627	155	土師器小皿	11.7	2.25	8.2								反転覆元
10	628	155	土師器小皿	12.2	2.6	7.8								反転覆元・内縁部・付替
10	629	155	土製品土牌	1.65	2.7		手づく							
10	630	155	土製品土牌	1.95	4.1		手づく							
10	631	155	土製品土牌	0.95	4.0		手づく							
10	632	155	土製品土牌	0.85	5.0		手づく							
10	633	155	土製品土牌	1.65	5.0		手づく							
10	634	155	土製品土牌	1.0	4.4		手づく							
10	635	155	土製品土牌	1.3	(4.8)		手づく							
10	636	155	土製品土牌	1.1	4.8		手づく							
10	637	155	土製品土牌	0.95	4.0		手づく							
10	638	155	土製品土牌	1.0	4.1		手づく							
10	639	155	土製品土牌	1.1	4.0		手づく							
10	640	155	土製品土牌	1.0	4.3		手づく							
10	641	155	土製品土牌	1.35	5.7		手づく							
10	642	155	土製品土牌	1.1	4.0		手づく							
10	643	155	土製品土牌	0.9	5.0		手づく							
10	644	155	土製品土牌	1.0	5.1		手づく							
10	645	155	土製品土牌	1.2	5.2		手づく							
10	646	155	土製品土牌	0.8	5.0		手づく							
10	647	155	土製品土牌	1.1	5.3		手づく							
10	648	155	土製品土牌	1.15	6.0		手づく							
10	649	156	土師器小皿	7.3	0.95	6.2								反転覆元・口縁部・付替
10	650	156	土師器小皿	7.65	0.9	6.8								反転覆元・口縁部・付替

JK	No.	遺構	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	器径	底径		捺付線画	文様	捺付跡					
10	651	156	土師器小皿	7.1	1.1	8.9								反転底心・白帯紐スチ付着	
10	652	156	土師器小皿	8.6	1.1	7.0									
10	653	156	磁器碗	8.9	5.4	3.8	ワタリ	捺付・透明釉	内:花(菊)		伊前	1820~1860 年代		岡沢清	
10	654	156	磁器碗	16.6	6.4	4.3	ワタリ	捺付・透明釉	外:二重線目 見込(赤・黒)		肥前	1820~1940 年代		岡沢清	
10	655	156	磁器碗	(11.4)	6.33	5.1	ワタリ	捺付・透明釉	外:黒京(本町) 見込(黒)		肥前	1720~1820 年代		原氏に自筆4つ有り 白帯紐に付着有り	
10	656	156	陶器皿	(8.3)	2.85	(5.3)	ワタリ	捺付・透明釉	外:掛粒 見込(白)		伊前	18C代		反転底心	
10	657	156	陶器まじごと 道具 上鍋	8.5	3.5 (器の中心部 幅0.9)	2.6	ワタリ	鉄軸			備前系	19C代		一反転底心 鉄2つ有り	
10	658	156	磁器皿	13.4	4.9	8.1	ワタリ	捺付・透明釉	外:麻葉 内:花(菊)・黒京 見込(赤)		肥前	18C代		反転底心・白帯紐付着	
10	659	156	陶器			(17.4)	ワタリ	赤野焼?			長門 (赤野)	17C初期		反転底心・器合 成・白帯紐付着	
10	660	156	陶器節利				ワタリ	鉄軸	外:植物		小笠原	19C代		一反転底心・ナス巻利	
10	661	156	土製人形 (人形座)	(2.2)	(2.85)	(1.7)	型打	素焼			存立	18~19C代		一層生少残存	
10	662	158	陶器碗			(3.6)	ワタリ	透明釉			佐津系	17C前期		高台の厚みは不均等である 一層生少(ヘタス)有り	
10	663	158	土師器土 師鉢?	(18.0)	8.1	(14.0)	ワタリ							反転底心 白帯紐に付着	
10	664	159	陶器皿	(12.2)			ワタリ				肥前	1600~1630 年代		青緑色	
11	665	165	陶器皿	19.6	1.7	3.5	ワタリ	灰釉			瀬戸系	18C?		器蓋	
11	666	165	陶器皿	(18.0)	2.3	(6.3)	ワタリ	灰釉			瀬戸系	16C前半		高台部分の縁が厚い 反転底心	
11	667	165	土師器小皿	15.5	3.0	11.4								反転底心・内底スチ付着	
11	668	165	陶器鉢	(16.3)	6.8	(11.8)	ワタリ	鉄軸	赤さしめ					17C前半?	
11	669	173	陶器碗	(16.6)	6.85	4.5	ワタリ	灰釉						1600~1630 年代	
11	670	173	土師器小皿	9.0	2.5	6.4								見込の一層と反転底心入った まじごと・赤野焼	
11	671	173	土師器小皿	10.0	2.45	6.6								反転底心	
11	672	173	土師器小皿	16.1	2.9	8.2								反転底心・内底スチ付着	
11	673	173	土師器小皿	11.0	2.85	8.1								反転底心	
11	674	173	土師器小皿	10.6	1.85	8.2								反転底心・白帯紐スチ付着	
11	675	173	土師器小皿	12.9	2.3	7.4								反転底心	
11	676	173	土師器小皿	12.1	2.3	8.2								反転底心	
12	677	171	磁器皿	13.2	2.7	6.7	ワタリ	捺付・透明釉							
12	678	171	磁器皿	(12.8)	3.8	7.0	ワタリ	捺付・透明釉	内:花(菊)		型取物?	伊前又は 瀬戸系	明治10年代		肥前(肥前系) 一反転底心 高台の可成り厚
12	679	171	磁器碗	6.8	1.28	2.95	ワタリ	捺付・透明釉	外:菊(白)		瀬戸系	大正~昭和		高台に付着有り	
12	680	171	磁器碗	10.7	5.1	4.0	ワタリ	捺付・透明釉	外:良方(赤) 内:二重線目 見込(赤)		長門(肥前 系)系	宇田(肥前 系)系	18C代		笠子
12	681	171	磁器皿	11.7	2.45	6.8	型打	捺付・透明釉	外:宝(赤物?) 内:黒		肥前	大正~昭和		輪縁	
12	682	171	磁器花生	(20.3)	10.2		ワタリ	捺付・透明釉	外:赤(赤)		瀬戸又は 肥前系	明治20年代		反転底心 肥前系(白)	
12	683	171	陶器急須	6.6	6.5	4.9	ワタリ	透明釉・上 部(赤)	外:1(内底外側)の文字		瀬戸系	18C後半以降 (近代)		一反転底心	
12	684	171	磁器鉢 (お鉢)	13.9	6.5	6.7	ワタリ	白釉				19C代		高台部分に(黒)付着 こすり有り	
12	685	171	陶器まじごと 道具 カップ	2.9	2.5	1.4	型打	白釉	外:ツツ(捺付)			近代			肥前系
12	686	171	土師器小皿	6.8	1.2	5.65									口縁紐スチ付着
12	687	171	土師器小皿	16.5	2.0	7.7									
12	688	171	陶器徳利			(9.3)	ワタリ	鉄軸・灰釉	外:文字(中線型) 横(漢) 見込(漢)		資料系 品取	小笠原	19C		一反転底心
12	689	171	陶器徳利	21.6	9.8		ワタリ	鉄軸・白土	外:文字(中線型) 横(漢) 見込(漢)		真珠	小笠原	19C代以降		一反転底心
12	690	171	瓦質土師 花瓶	11.8	16.5 (器高) 10.3 (器径)	12.5	型打	素焼	外:縄文・目(型打?)		肥前(肥前 系)	18C代		特2つ残存	
13	692	190	磁器蓋	(7.6)	2.85		ワタリ	白釉				肥前	17C代		一反転底心
13	693	190	磁器皿	19.6	4.4	9.6	ワタリ	捺付・透明釉	外:赤(赤)		肥前	18C後半		内底(目)縁1層 工部系(ツツ)付着	
13	694	190	陶器平形碗	12.1	4.7	4.0	ワタリ	白釉			肥前系	18C後半			
13	696	190	陶器火入れ	19.2	8.35	5.75	ワタリ	透明釉	外:?		肥前	18C後半		見込に黒い焼の跡	

区	No.	遺構	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
				口径	器高	口径		胎付位置	文様	装飾材料				
14	750	184	磁器碗	10.1	5.25	3.9	ロウロ	染付・透明釉	外:方字文 内:二重線 足:寿字文・一重線			肥前	18C後半	
14	751	184	土師質土器 壺		(22.5)	16.1	ロウロ							器底残れている
14	752	188	陶器蒔利		11.1	5.25	ロウロ	染付・白土 透明釉	外:唐草・牡丹			肥前	19C前半	一部反転履土・器底内面裏 面有り(白土のみ?)
14	753	188	土師質土器 ヒラベ	3.0	1.8		手びねり							内面二層素焼有り 成形
14	754	188	土師器小皿	12.0	2.2	4.6								反転履土・内底面ハケ目
14	758	192	磁器猪口	17.0	4.2	13.0	ロウロ	白釉				肥前	1610~1630 年代	反転履土 見込・唐草文・白土のみで 成る多数器目録
14	759	192	陶器碗			(3.8)	ロウロ	手成釉				唐津	1600~1630 年代	高台部分に唐草文 反転履土
14	760	192	陶器皿	(11.7)	3.85	4.2	ロウロ	反釉				唐津	1600~1630 年代	見込に牡丹文 反転履土・唐津文
14	761	192	陶器皿(鉢)			(9.2)	ロウロ	反釉・二重手	内:染付			唐津	17C後半	見込に唐草文有り
14	762	192	壺	36.8	19.0	32.0								底部:輪3つ・内外面ハケ目
14	764	198	磁器皿	30.8	3.0	17.16	ロウロ	染付・透明釉	外:唐草 内:唐・十字・芙蓉手 足:唐草・一重線		肥前→ 福岡県 八戸重	肥前	18C後半	磁器皿
14	765	198	土師器小皿	7.8	0.95	6.0								反転履土・14段部ハケ目
14	766	198	土師器小皿	7.8	0.8	6.0								口縁部ハケ目
14	767	198	磁器猪口	5.96	4.75	3.96	ロウロ	白釉				唐津	18C	器入
14	768	198	陶器鉢	30.6	13.2	10.2	ロウロ	染付・白土	外:唐草 内:唐・十字・白土			肥前	18C前半	
14	769	199	磁器蓋	(11.1)			ロウロ	白釉	外:牡丹 内:牡丹			肥前	17C前半	反転履土
14	770	199	磁器碗	(5.0)	4.1		ロウロ	透明釉 染付	外:牡丹			肥前	1630~1650 年代	一薄板未合成
14	771	199	磁器人形		4.7		型打	白釉				肥前	1630~1650 年代	敷土6cm・穿孔有り
14	772	199	土師器小皿	8.8	4.8	6.9								反転履土
14	773	199	陶器碗	(4.3)	4.6	ロウロ	反釉					福岡県 17C前半		反転履土 高台部分に唐草文 高台部分に唐草文
14	774	199	陶器碗	(11.1)	3.25	4.1	ロウロ	反釉						高台部分に唐草文
14	775	199	陶器碗	(13.2)	5.4	6.7	ロウロ	透明釉				肥前(福岡 県)	17C前半	反転履土 高台部分に唐草文 高台部分に唐草文
14	776	199	陶器蓋 (茶壺)	(7.3)			ロウロ					肥前	17C前半	反転履土
14	777	199	陶器	(7.6)	(12.8)	ロウロ						肥前?	1400~1610 年代	反転履土
14	778	199	陶器鉢	(1.1)	(8.0)	ロウロ	反釉?					肥前?	17C?	反転履土・高台部分
14	779	199	陶器鉢鉢	(3.4) (8.3)	(12.2)	ロウロ						肥前	17C前半	反転履土
14	783	199	陶器碗	(15.7)	(21.2)		反釉					肥前?		反転履土
14	786	160 188	陶器碗	(14.8) (11.8)	(25.1)	ロウロ	反釉					唐津		反転履土
14	787	200	陶器皿		(1.8)	ロウロ	反釉					唐津	1600~1630 年代	見込に牡丹文 反転履土
17	788	209	煎(茶壺)	(11.9)	(5.8)		ロウロ	染付・透明釉	外:唐・高 内:唐?			肥前	18C後半以降	反転履土
17	789	209	磁器皿	9.0	9.8	5.2	型打	染付・透明釉	外:唐 内:唐 足:唐			肥前	18C後半以降	反転履土
17	790	209	磁器風	(12.2)	4.9	(7.0)	ロウロ	染付・透明釉	外:唐草 内:唐草 足:唐草		福岡 (肥前)?	肥前	18C後半	反転履土
17	791	209	磁器虎形皿	(12.5) 2.95			型打	染付・透明釉	外:唐草・唐草文 内:唐草			肥前	17C後半	反転履土
17	792	209	陶器印	(1.3)	2.5		型打							上下不揃い
17	794	209	土師器小皿	5.2	4.05	2.8	ロウロ							反転履土
17	795	209	土師器小皿	6.75	6.95	5.3								反転履土
17	796	209	土師器小皿	6.6	4.0	5.3								反転履土
17	797	209	土師器小皿	6.8	4.1	5.7	ロウロ							
17	798	209	土師器小皿	7.3	4.18	6.9								
17	799	209	土師器小皿	7.4	3.55	6.0	ロウロ							
17	800	209	土師器小皿	7.8	4.1	6.3	ロウロ							
17	801	209	土師器小皿	8.06	4.8	7.9								
17	802	209	土師器小皿	12.5	2.0	8.8								
17	803	210	磁器壺	2.5~ 3.1	5.8		型打	染付・透明釉	内:唐草・唐草文			肥前	19C後半	一部反転履土 高台部分に唐草文 高台部分に唐草文
17	804	SD 3 石列2	磁器皿		(15.8)	ロウロ	染付・透明釉		外:唐 内:唐 足:唐			中国	16C末~17C 前半	内面唐草文 高台部分に唐草文 反転履土

区	No.	遺構	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	器高	底径		絵柄配置	文様	装飾技法					
17	805	219	陶器壺	(7.3)	3.2	4.9	ワタリ	縁輪・灰肌			細輪高切 取	肥前県	18C	反転瓦片	
17	806	219	陶器茶碗		9.4	4.6	ワタリ	縁輪・北硬土				肥前県	18C代	厚底かつ底面斜角縁上付の 地手1つ有り・一底反転合皮	
17	807	223	土製品平	1.8	4.8	1.7	型打								
17	808	223	磁器鉢	(12.2)	5.5	(6.0)	型打	外・縁部子・段(5ツツヤ)・雲 内・灰肌・華蓋		紅彩 赤		肥前	18C代	八角形 反転瓦片	
17	809	238	磁器音押		(3.9)	(5.4)	ワタリ	有筋				肥前		反転瓦片	
18	810	214	磁器皿	(13.3)	3.5	(5.9)	ワタリ 型打	縁部有筋						反転瓦片・輪花瓦	
18	811	214	陶器壺	(21.1)	(11.8)		ワタリ	新輪						反転瓦片	
18	812	215	磁器碗		(5.0)	(4.1)	ワタリ	縁部有筋 透明釉				肥前	1610~1630 年代	反転瓦片	
18	813	215	陶器皿			7.0	ワタリ	透明釉				福岡県	18C代	模化の付込み有り 底ノ直線彫り	
18	817	217	磁器瓶		(8.0)	5.5	ワタリ	染付・透明釉	外・竹・梅			肥前	18C後半頃		
18	818	217	磁器碗	(11.9)	4.0	4.7	ワタリ	青磁染付 透明釉	外・有筋 内・北硬土・四方花		厚底有筋	肥前	18C後半	反転瓦片	
18	819	217	磁器人碗	15.9	7.7	7.2	ワタリ	染付・透明釉	外・有筋 内・北硬土・透明釉 見込:花・雲・蓮華・雲		縁	肥前	18C代	縁に砂付 厚底瓦	
18	820	217	磁器碗	(16.3)	5.3	(4.4)	ワタリ	染付・透明釉 色絵(上絵付)	外・方花・雲・蓮華・雲		縁	肥前	18C後半	反転瓦片	
18	821	217	磁器火入れ	9.6:	7.2:	6.8	ワタリ	染付・透明釉	外・側			肥前	18C後半頃	器反転合皮 縁ノ山田明合 瓦込に砂付	
18	822	217	陶器水注		(9.7)	(9.0)	ワタリ	新輪?				山本	17C後半		
18	823	217	土師質土器 壺		16.4		ワタリ							肥前瓦片・縁部ケズリ・口 縁部はツツの縁部まで付	
18	824	218	磁器碗	9.2	4.0	5.3	ワタリ	染付・透明釉	外・赤・桃文 内・二重線 見込:雲?・一重線			肥前	1700~1800 年代	染反転	
18	825	218	磁器碗	(9.0)	5.3:	(3.9)	ワタリ		外・方花・梅・雲 内・有筋 見込:一重線			肥前	1620~1650 年代	染反転 反転瓦片	
18	826	218	陶器碗	9.0	4.0~ 4.6	5.1	ワタリ	ワタリ染付・透明				肥	18C前半		
18	827	218	陶器碗	8.2~ 8.6	3.0~ 4.6	3.6	ワタリ					川能共切 込み	肥前 (山本?)	17C前半?	縁部のみツツの 縁部瓦片?
18	828	218	陶器碗	(7.7)	2.7	(3.3)	ワタリ	白輪・鉄輪 透明釉	外・雲文 内・二重線 見込:雲			肥前	18C代	反転瓦片	
18	829	218	陶器皿	12.8	4.0	5.3	ワタリ	透明釉				肥前		縁部	
18	830	218	磁器壺	14.7	(1.8)		ワタリ	縁部 染付 透明釉	外・雲文 内・二重線 見込:雲			肥前	1770~1800 年代	ツツみ部型打	
18	831	218	土師質土器 火鉢	約縁部 人径 (33.2)	18.5	(25.5)								反転瓦片・縁部型打1つ 残存の縁部も1つ 付ノ有筋の付込み有り	
18	834	218	土師質土器 湯鉢		31.2		ワタリ							反転瓦片	
18	835	218	土師質土器 鉢	(23.0or 25.1)	10.2	(14.4)	ワタリ							反転瓦片 内輪・付込み	
18	836	225	陶器壺	22.1	18.5	16.7	ワタリ							縁部はツツの縁部のみ有り	
19	837	230	陶器鉢(鉢)		(3.0)	8.7	ワタリ	透明釉	見込:目跡1つ残存			福岡県	18C代	反転瓦片 底面有筋・目跡1つ残存	
19	838	230	陶器皿	(12.0)	4.8	(5.4)	ワタリ	縁輪				不明	不明	反転瓦片	
19	839	231	磁器碗	(11.2)	6.9:	(4.0)	ワタリ	有筋・染付 透明釉	内・四方花 見込:二重線・コンシヤツ 列			肥前	18C後半	反転瓦片	
19	840	231	磁器碗	6.1	3.1	3.6	型打	白磁				福岡県	18C代		
19	841	231	陶器壺		(20.3)		ワタリ	縁輪	外・花(彫刻)					反転瓦片	
19	844	233	磁器小坏	6.5	4.2	3.6	ワタリ	染付・透明釉	外・草花・雲・梅文			肥前	1820~1850 年代	縁反転	
19	845	233	磁器小坏	(6.4)	3.6	(4.0)	ワタリ	色絵・透明釉	外・雲文・人物・透明・雲文 内・ツツ筋			肥前	18C代	反転瓦片	
19	846	233	磁器鉢	2.9	1.8	2.9	ワタリ	染付・透明釉	外・水車文・雲文			肥前	18C代		
19	847	233	陶器皿	50.4	2.0~ 2.2	4.8	ワタリ	透明釉	内・下地:火書・文	ワタリ		肥前	18C後半	不明	
19	848	233	陶器火入れ	9.8	8.5	9.8	ワタリ	縁輪・透明釉				福岡県	18C後半頃	縁部:白土(土師?) 底面:山田明合	
19	851	233	磁器ままご 道具 煎	1.7:	3.1	1.4	型打	滑内面・透明 釉?							
19	852	233	土師器小皿	7.9	0.8	4.9								山田山	
19	853	233	土師器小皿	8.1	0.8	7.1								底面中央に縁部1つ有り	
19	854	233	土師器小皿	7.5	0.9	5.9								山田山	
21	855	256	陶器鉢	(28.0)	8.1	10.5	ワタリ	白土・透明釉	内・内底			肥前	18C後半	反転瓦片 縁部山田明合	

区	No.	遺構	器種	流量(cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
				口径	器高	口径		法与跡類	文様	刻印跡類				
21	856	256	土製品人形	5.3	5.3	0.4	型打	素焼				18~19C代	中心部凹状に空煎	
21	857	256	陶器香炉 (桜香炉)	(12.1)	6.9	6.3	11C代	白土	外:白毫目			香炉	18C後半	反転底
21	858	256	陶器皿	5.1	3.25	4.2	17C代	素打				肥前	17C後半~18C前半	17C後半~18C前半 反転底
21	859	256	磁器碗	10.9	6.4	(4.0)	17C代	素打・透明釉	外:月七郎花 内:黒い 底:緑?・白濁			肥前	1800~1800年代	高内面反転底 透明釉
21	860	256	陶器		(17.0)	16.6	17C代	素打・透明釉	外:草			肥前	17C後半~18C前半	反転底・反転底 口縁に白濁
21	863	47列3	五輪帯		17.7									最大径27.7cm 最大厚30.8cm
23	864	268	磁器猪口 (小杯)	6.9	5.2	3.4	17C代	透明釉	外:格丁文 黒緑帯			肥前	18C後半~18C前半	
23	865	268	磁器仏飯器	6.9	5.8	3.8	17C代	透明釉	外:格丁文 黒緑帯			肥前	18C後半~18C前半	
23	866	268	磁器皿	9.7	2.3	5.8	17C代	透明釉	外:唐草文 内:帯 底:黒・白濁		内底:黒	肥前	18C後半	縁花
23	867	268	磁器				17C代	素打・透明釉	外:帯			肥前	18C前半?	縁花・くつろの縁部金付
23	868	268	陶器合子蓋	4.65	11.9							不明	19C?	
23	869	268	磁器德利	2.3	18.05~ 18.5	4.1	17C代	透明釉	外:竹・ササメ				19C	底面・外面黒色有り・又又
23	870	268	陶器ゆのみ	5.6	6.73	3.9	11C代							
23	871	268	土製品面写			5.95	型打							
23	872	268	陶器鉢	36.6	11.5~ 14.35	11.9	17C代	素打						口縁部にゆのみ 反転底・縁部くつろ
23	876	270	磁器八角鉢	(11.0)	(4.0)		型打	透明釉	外:黒い帯 空白水・黒? 蓋料ゆみに花? 内:白濁(帯縁部)			肥前	18C後半	反転底
23	878	272	磁器皿				型打	透明釉	外:黒帯 内:黄緑帯			伊前	18~19C	縁花
23	879	273	土師質土器 火鉢	(26.0)	(13.2)	(27.4)	17C代							反転底・内面に口縁・黒帯 底面・外面に縁部・黒帯 縁部有
23	880	275	磁器碗	9.9	5.4	3.6	17C代	透明釉	外:帯			肥前	18C後半	くつろみ心手
23	881	275	磁器皿	13.4	3.8	7.6	17C代	透明釉	外:唐草文 内:唐草文・帯 底:黒・白濁		内底:黒	肥前	17C後半~18C前半	縁花
23	882	275	磁器合子蓋	6.0	1.55		型打		唐草文・帯			伊前	18C	
23	883	275	磁器皿	(28.2)	6.0	(16.7)	17C代		反転底 外:花巻帯 内:白濁		内底: 人物・鹿 耳	肥前	18C後半	合成底(黒い帯)の内 底に口縁・黒帯・縁花
23	884	275	土師質土器 鉢	27.1	12.1~ 13.1	16.0								口縁部の内面に口縁 内面に口縁・黒帯・縁花
23	885	275	土師質土器 こむけ鉢	22.6	11.8	30.2	17C代							内面に口縁・口縁部の内面に 口縁・黒帯・縁花 内底:黒帯有り
23	886	275	瓦質土器 互打壺		(18.8)	(9.0)								反転底・口縁・縁花
23	887	275	土師質土器 飯盛蓋	6.7	1.9		手・穴打							完形品・内面黒目
23	888	275	土師質土器 飯盛	9.9	7.6	(8.0)	手・穴打							反転底
23	889	275	土師器小皿	(6.1)	0.9	(7.2)	17C代							反転底・口縁部に口縁 内面に黒帯有り・縁花
23	890	275	土師器小皿	7.1	1.0	5.7	17C代							口縁部・口縁部
23	891	275	土師器小皿	7.7	1.15	6.3	17C代							反転底・口縁部に口縁 内面に黒帯有り
23	892	275	土師器小皿	(7.2)	1.0	5.8	17C代							反転底・口縁部に口縁 内面に黒帯有り
23	893	275	土師器小皿	8.1	1.05	6.6	17C代							反転底・口縁部に口縁 内面に黒帯有り
23	894	275	土師器小皿	(10.9)	2.0	(5.6)	17C代							反転底
23	895	276	磁器皿	(9.7)	3.0	8.6	17C代	透明釉	外:桜山山水・人物・鹿 白			肥前	1600~1600	反転底
23	896	276	土師器小皿	(10.4)	2.15	5.7	17C代							反転底・口縁部に口縁 内面に黒帯有り
23	897	277	磁器香炉	8.7	4.65	2.9	型打	有釉				伊前	18C後半	
23	898	277	磁器瓶	(9.5)	4.5		17C代	透明釉	外:桜花			肥前	18C~19C	
23	899	277	陶器	(7.0)	(6.0)			鉄味						
23	900	277	陶器鉢	(12.2)	4.4	(3.9)	17C代	素打 透明釉	内:植物			肥前	18C後半	反転底
23	901	278	磁器瓶	(9.9)	7.45	2.45	17C代	素打 透明釉	外:口縁			肥前	18C	一帯口縁
23	902	278	陶器土瓶	8.5	(13.2)		17C代		内底:口縁 口縁部・縁花			肥前	18C後半	反転底
23	903	279	陶器鉢	(12.0)	5.4	4.3	17C代	透明釉・黒帯 縁花	外:植物			肥前	18C~19C	一帯口縁

区	No.	品名	器種	法裁(cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	器高	底径		絵付施画	文様	釉薬特異					
23	904	279	土師器小皿	7.4	1.0	6.3	ロクロ							口縁部スリ付着	
23	905	279	土師器小皿	7.1	1.15	6.7	ロクロ							口縁部スリ付着	
23	906	279	土師器小皿	7.6	1.05	6.7	ロクロ							口縁部と内底スリ付着	
23	907	279	土師器小皿	7.15	1.1	6.0	ロクロ							口縁部スリ付着	
23	908	281	磁器碗	16.0	4.85	5.8	ロクロ	透明釉	外:牡丹等 内:牡丹			肥前	18C前半		
23	909	281	陶器鉢	18.0	6.55	5.00	ロクロ	色絵 透明釉	外:牡丹			福岡県	19C前半	反転産光	
23	910	282	土師質土器鉢	21.0	11.7	19.2	ロクロ							反転産光・内面スリ付	
23	912	290	磁器碗	2.5	11.3	4.5	ロクロ	透明釉	外:牡丹			肥前	18C		
23	913	290	土師器小皿	9.25	2.25	8.50	ロクロ							完形品・口縁部スリ付	
23	914	290	土師器人形		12.6		手作り							在地?	
23	915	300	磁器蓋	10.1	5.0		ロクロ	透明釉	外:牡丹 内:四方電 見込:二重圓筒「寿」			肥前	18C後半以降		
23	916	300	陶器	28.0	11.20		ロクロ					高千穂	18C	反転産光	
23	917	301	陶器指鉢		13.5		ロクロ	鉄釉						反転産光	
23	918	301	陶器鉢	21.2	10.2	16.0~ 6.5	ロクロ		外:牡丹付 内:牡丹付			高千穂		反転産光・色絵 見込牡丹等・外 外縁付着物有り	
23	919	302	陶器香炉	9.7	6.8	5.0	ロクロ	透明釉付 透明釉				肥前	18C前半		
23	920	302	陶器碗	11.2	7.8	6.00	ロクロ	透明釉付 透明釉	外:牡丹			肥前	18C後半	反転産光 欠片有り	
23	921	302	磁器鉢	18.0	7.8	9.00	ロクロ	青磁				肥前	18C後半	反転産光	
23	922	304	磁器小杯	16.0	3.8	3.0	ロクロ	透明釉	外:横線文			肥前	18C後半	一部反転産光	
23	923	304	磁器碗	8.6	5.2	3.3	ロクロ	透明釉	外:牡丹			肥前	18C後半	くぼみ付	
23	924	304	陶器碗	11.3	6.9	5.5	ロクロ	透明釉	外:牡丹山文			肥前	18C後半~ 18C前半	一部反転産光	
23	925	304	磁器碗	14.3	6.0	6.0	ロクロ	透明釉	外:五稜 内:雲			肥前	18C後半	反転産光 欠片・色絵?	
23	926	304	磁器碗	16.5	5.6	12.6	ロクロ	透明釉	外:横線 内:雲			肥前	18C?	2部欠片・白線・色絵	
23	927	307	瓦質土器壺	24.3	26.95	17.85								反転産光	
23	928	308	陶器		14.0		ロクロ								
23	929	312	陶器壺	28.7	33.2	18.2	ロクロ	鉄釉							
23	930	312	陶器		15.0	5.3	ロクロ	鉄釉						高千穂	
23	931	312	陶器土瓶	49.25	11.2	48.25	ロクロ	透明釉	外:白泥 透明釉			福岡県	18C後半以降	反転産光 割れ付有り 底部外底に牡丹とつぼみ 代底に唐土層?紅土層有り 内底に牡丹付着物有り	
23	932	313	磁器皿	13.30	3.7	5.6	手作り	透明釉	見込:牡丹					1630~1650	反転産光・色絵 高千穂付着・牡丹等
23	933	315	陶器水差し	11.0	11.5	10.00	ロクロ	鉄釉						高千穂	
23	934	317	陶器碗	13.0	6.3	5.2	ロクロ	透明釉	外:花唐草			肥前	18C前半	一部反転産光	
23	935	319	磁器碗	116.0	8.78	14.0	ロクロ	透明釉	外:横線 内:重圓筒	コンシヤブ 印押 平書金			肥前	1600~1740	反転産光
23	936	319	陶器碗		16.0		ロクロ	透明釉				肥前	18C前半	鎌倉産・反転産光	
23	937	23区 319-2	磁器 燗瓶吸口				手作り	透明釉				伊前	18~19C?	花唐	
24	938	24区 上層	陶器人形	5.2	8.1		手作り								
25	939	325	磁器碗	16.0	5.6	11.0	ロクロ	透明釉	外:山・梅葉・花	コンシヤブ 印押 平書金		高千穂	肥前	1600~1740	反転産光
25	940	325	陶器碗	19.0	6.1	4.9	ロクロ	鉄釉				高千穂 内(反)	肥前	17C後半	反転産光・直焼産光
25	941	325	磁器鉢	20.3	9.3	9.0	ロクロ	透明釉	内:重圓筒・青磁・牡丹 外:横線・草 見込:雲			肥前	18C前半	反転産光	
25	942	327	磁器蓋	9.2	2.1~ 2.2		ロクロ	透明釉	外:牡丹・紅雲					欠片	
25	943	327	磁器蓋 (急須?)	6.0	2.3		ロクロ	透明釉	外:横線			高千穂	1600~1650		
25	944	327	磁器蓋 (急須)	6.3	2.5		ロクロ	透明釉	外:手作文 内:花			肥前?	15C後半~		
25	945	327	磁器脱直の 蓋	11.8	4.3		ロクロ	透明釉	外:横線			肥前	18C後半~ 18C前半		
25	946	327	陶器蓋	15.3	9.8	3.3	ロクロ	透明釉						1800~1800	一部産成・反転産光
25	947	327	陶器蓋	10.15	3.0		ロクロ	透明釉?	外:横線・牡丹						

区	No.	遺構	器 種	法量(cm)			成形	装 飾			底面内底	製作地	製作年代	備 考
				口径	高さ	底径		粘付痕跡	文 飾	装飾部種				
25	948	327	陶器蓋	7.6	2.45		吹成形	灰釉				伊予(上中 両方)	13C Ⅱ	つまみ縁竹節型
25	949	327	土師質土器 蓋	8.3	2.0		吹成形	灰釉		一部剥離		伊予系	13C Ⅱ後半	外縁曲
25	950	327	磁器小坏	7.8	2.4~ 4.8	3.7	吹成形	透明釉			剥離痕跡	瀬川内流	大正	
25	951	327	磁器盥洗	14.9	11.3	8.5	吹成形	透明釉				伊予	13C Ⅱ~13C 前半	
25	952	327	磁器皿	10.8	1.25	6.2	吹成形	透明釉					大正?	
25	953	327	磁器皿	10.8	1.65	6.65	吹成形	透明釉					大正?	
25	954	328	磁器鉢?	(15.4)	(3.4)		吹成形	灰釉				肥後	13C Ⅱ	灰釉剥離・赤く裏面有・口縁
25	955	329	磁器小坏	6.6	4.3	3.0	吹成形	透明釉				肥後	13C Ⅱ後半~ 13C Ⅲ	
25	956	329	磁器碗	10.1	4.8	3.8	吹成形	透明釉				肥後	13C Ⅱ後半	縁部凹凸有
25	957	329	磁器筒形鉢	69.0	8.1	36.71	吹成形	灰釉				肥後	13C Ⅱ後半	灰釉剥離
25	958	329	磁器蓋	69.8	3.6	(11.6)	吹成形	透明釉				肥後	13C	灰釉剥離
25	959	329	磁器皿			(16.4)	吹成形	透明釉				肥後	13C Ⅱ後半	
25	960	329	磁器皿	(29.9)	6.2	(14.6)	吹成形	透明釉				中国深田	13C Ⅱ末~13C Ⅲ	灰釉剥離 赤く裏面有 内・外縁に影射有 白磁土
25	961	329	陶器皿	8.5	1.7	6.0	吹成形・吹削					肥前系	13C	
25	962	329	陶器鉢	12.1	1.1	3.5	吹成形(土師料) 吹削					肥前系	13C Ⅱ後半	一帯成
25	963	329	陶器鉢	12.1	4.05	3.60	吹成形(土師料) 吹削					肥前系	13C Ⅱ後半	
25	964	329 333	陶器 火入れ	(11.3)	7.8		吹成形	灰釉				肥後	13C Ⅱ後半	
25	965	329	陶器碗	20.5	8.26		吹成形					熊本	13C Ⅱ後半~13C Ⅲ	灰釉剥離・口縁有
25	966	329	陶器片口	(6.4)	6.46	(7.2)	吹成形					熊本	13C Ⅱ後半~13C Ⅲ	
25	967	329	陶器灰落	3.1	7.5	8.5	吹成形	灰釉・白磁・灰 釉・透明釉				肥前系 (土師)	13C Ⅱ後半	灰釉剥離・裏面有 口縁有
25	968	329	陶器灰落	(10.4)	7.9	10.8	吹成形	灰釉・白磁・灰 釉・透明釉				肥前系 (土師)	13C Ⅱ後半	灰釉剥離 口縁有・裏面有
25	969	329	土師器小皿	7.8	3.8	1.25	吹成形						一般成器 口縁部スリ有	
25	970	329	土師器小皿	7.5	1.1	5.8	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	971	329	土師器小皿	7.8	1.16	6.3	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	972	329	土師器小皿	8.8	1.1	6.2	吹成形						口縁部スリ有	
25	973	329	土師器小皿	7.8	1.0	5.9	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	974	329	土師器小皿	7.7	1.06	5.9	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	975	329	土師器小皿	8.65	1.2	7.1	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	976	329	土師器小皿	6.9	1.1	6.6	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	977	329	土師器小皿	8.5	1.05	7.1	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	978	329	土師器小皿 (灯明皿)	8.4	1.2	7.0	吹成形						口縁部スリ有・灰器品	
25	979	329	土製品鳥		(4.66)		吹成形							
25	980	331	陶器鉢	(11.6)	3.65	(6.16)	吹成形	灰釉・白磁 吹削・吹削				肥前系 (土師)	13C Ⅱ	口縁不明 灰釉有
25	981	331	陶器土鍋	(15.8)	6.75	(7.5)	吹成形							灰釉有
25	982	331	瓦質土器 火鉢	26.4	15.1		吹成形							南台内流(瀬川)に似て割裂 されている
25	983	332	土師器小皿	16.9	2.9	(7.6)	吹成形							灰釉剥離・外流スリ有
25	984	332	磁器鉢	11.2	7.1	8.00	吹成形							灰釉剥離・外流スリ有
25	985	334	陶器瓶	(16.0)	(6.5)		吹成形							1960~1980
25	986	339	磁器小皿	8.8	2.15	5.1	吹成形							1960~1970
25	987	339	土師質土器 火鉢	(12.6)	(23.3)		吹成形							灰釉有 底に割がついている(割裂 は土師)・裏面有
25	988	342	磁器鉢	23.1	8.1	12.0	吹成形							1960 Ⅱ
25	989	347	磁器皿	(24.4)	5.6	8.2	吹成形							1650~1680
25	990	347	陶器楕円鉢	(26.2)	(8.0)		吹成形							1650~1680
25	991	347	磁器皿	(21.6)	3.1	(11.0)	吹成形							1650~1680
25	992	348	土師器小皿	8.9	1.7	7.2	吹成形							口縁部スリ有
25	993	348	土師器小皿	10.3	2.05	6.9	吹成形							口縁部スリ有・灰器品
25	994	329 333	陶器鉢	(12.6)	7.1	8.6	吹成形							灰釉剥離 赤く裏面に影射有

区	No.	遺構	器種	流量 (cm)			成形	裝飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
				口径	器高	底径		胎体輪数	文様	先施時装				
25	995	北野 SP-3	軟質磁器皿	01.80	2.5	6.0	ワタリ	透明釉				伊前	18C後半	反転復元 目録?
25	996	北野 16層	磁器皿?					透明釉・染付	見込:輪 松			伊前	16C末~17C 初	
25	997	25区 16層	磁器皿	(1.3)	4.4		ワタリ	白磁				伊前	16C末~17C 前半	
26	998	25区 地下部	土師質土器 魂	(26.2)	(7.0)		ワタリ					伊前	16C末~17C 前半?	反転復元・西面ハケ目
26	999	350	土師器小皿	16.1	2.2	7.4	ワタリ					伊前		内面黒×××・黒・反転復元
26	1000	350	磁器碗	8.65	3.75	3.8	ワタリ	透明釉	内:底輪 外:輪 見込:雲龍	見込 ランペキタ 印		伊前	18C後半	口口欠落
26	1001	350	磁器鉢		(3.85)	(13.8)	ワタリ	透明釉				伊前	18C後半	一部反転復元 ハケ目痕有り
26	1002	350	陶器碗	(9.9)	6.6	(4.8)	ワタリ					伊前		反転復元
26	1003	350	陶器皿	13.6	4.2	(3.2)	ワタリ	絵彩				伊前		裏面黒・目録付
26	1004	350	陶器皿	(24.8)	5.5	(16.1)	ワタリ					伊前		反転復元
26	1005	350	陶器鉢	(34.4)	7.9	9.8	ワタリ					伊前		一部反転復元 裏面に砂目有り
26	1006	350	陶器	(11.7)	(9.1)		ワタリ					伊前		反転復元
26	1007	350	陶器壺	(16.1)	16.7	7.8	ワタリ	鉄輪・磨輪?				伊前		一部合成
26	1008	350	土師質土器 鉢	(33.6)	9.5		ワタリ					伊前		反転復元・把平のウ・全体輪 にスズ(黒・内面黒・外 面黒)
26	1009	350	土師質土器	(24.8)	6.1	(21.6)	ワタリ					伊前		反転復元 内面黒い・底に砂目
26	1010	360	磁器碗	12.0	3.8	4.7	ワタリ	青磁染付 透明釉	内:底輪 見込:底十字		伊前	17C後半~ 18C前半		
26	1011	360	磁器碗	15.06	6.15	4.3	ワタリ	青磁染付 透明釉	内:底輪 見込:底十字	見込 ランペキタ 印	伊前	18C前半		
26	1012	360	磁器皿		2.15		ワタリ	透明釉				伊前	18C前半	器底に黒方跡と見られる
26	1013	360	磁器瓶		8.7	(22.6)	ワタリ	透明釉				伊前	18C後半	部分反転復元
26	1014	360	陶器皿	(19.2)	5.45	(6.6)	ワタリ	白磁・透明釉	内:底輪			伊前	16C前半	見込目録 見込に砂目・反転復元
26	1015	360	陶器土瓶	(8.1)	(9.0)		ワタリ	内底・鉄輪 透明釉				伊前	18C後半以降	反転復元
26	1016	360 362	瓶?	13.4	(15.7)		ワタリ	絵彩				伊前		把平のウ(黒・木目跡?)と見られる
26	1017	360	陶器	(7.2)	(5.6)		ワタリ					伊前		反転復元・底面外底? 文字 らしきのがみえる(器底 部分?)
26	1018	360	磁器人形	(6.6)	(3.6)		型打					伊前		器底のみ反転・内底は空面
26	1019	361	磁器碗	(9.0)	4.7	(3.7)	ワタリ	透明釉	内:底輪			伊前	18C後半以降	反転復元
26	1020	361	磁器皿		2.3		型打	透明釉				伊前		器底一側出
26	1021	361	磁器合子		1.5		型打	透明釉	内:底			伊前	18C後半以降	
26	1022	361	磁器瓶	(16.4)	4.7	(9.8)	ワタリ	透明釉	内:底輪 外:底輪・底面黒			伊前	18C後半	反転復元 器底部分・器底
26	1023	361	磁器八角鉢	18.2	10.3	8.9	型打	透明釉	内:底輪 外:底輪 見込:底			伊前	18C後半	器底・器底部分
26	1024	361	陶器皿	16.7	3.8	3.7	ワタリ					伊前		
26	1025	361	陶器水差し (口)	(7.5)	6.1	8.8	ワタリ	絵彩				伊前		器底(約3.5cm) 器底1.4cm
26	1026	361	陶器水差し	(7.5)	6.1	8.8	ワタリ	絵彩				伊前		反転復元
26	1027	361	磁器皿	(9.0)	5.1	(19.0)	ワタリ	高砂・透明釉	内面:雲龍			伊前	18C後半	器底・輪花・反転復元
26	1028	361	土製土人形	4.5	2.5		手作り					伊前		
26	1029	361	土製土人形	(4.86)	(1.86)		手作り					伊前		
26	1030	361	土製品	(3.86)								伊前		
26	1031	361	土製品	3.5	2.1	1.66	型打					伊前		
26	1032	362	磁器皿		2.1		型打	透明釉	内:底輪	ランペキタ 印		伊前	1890~1910 年代	
26	1033	362	磁器皿	8.9	1.8	4.2	ワタリ	透明釉	内:底輪 外:底輪 内:底輪 見込:底			伊前	18C後半	
26	1034	362	磁器土	4.2	1.6		ワタリ	透明釉	外:底輪 内:底輪 見込:底			伊前	18C後半以降	
26	1035	362	磁器碗	(10.0)	8.1	(4.0)	ワタリ	透明釉	内:底輪 外:底輪 見込:底			伊前	18C後半	反転復元
26	1036	362	磁器碗	(12.6)	6.6	4.1	ワタリ	透明釉	外:底輪 内:底輪 見込:底			伊前	18C後半	反転復元
26	1037	362	磁器碗	(7.9)	4.1	(3.0)	ワタリ	透明釉	外:底輪 内:底輪 見込:底			伊前	18C後半以降	反転復元
26	1038	362	磁器器口	(7.4)	5.8	4.9	ワタリ	透明釉	外:底輪 内:底輪 見込:底			伊前	18C後半	一部反転復元

区	No.	品構	器種	法京(cm)			成形	装飾			底面内底	製作地	製作年代	備考	
				口径	高さ	底径		絵付種類	文様	絵師氏名					
26	1009	362	陶器瓶	(14.5)	7.0	ワケ	内底・彫刻	外・刷毛目				18C前半	一帯合流一帯反転器		
26	1040	362	磁器瓶	(7.0)		ワケ	透明釉	外・花唐草				18C前半	反転器		
26	1041	362	陶器瓶	(8.0)	4.8	ワケ	緑絵・透明釉	外・植物				18C後半以降	一帯反転器		
26	1042	362	十筋器小皿	8.8	0.5	5.6	ワケ						反転器・外付・反転器		
26	1043	362	陶器茶道具	7.0	6.1	0.8						神楽盆切付			
26	1044	362	土製器人形(骨)	4.3			型打						最大径1.9cm・厚み有り		
26	1045	362	土製器人形(骨)	(3.8)			型打						最大径(2.7cm)		
26	1046	362	土製器人形(骨の丸)	3.5			型打						最大径1.75cm・厚み有り		
26	1047	362	土製器土器	4.38			手づかひ						最大径2.8cm・厚み有り		
26	1048	362	土製器土器上蓋	3.8	3.68		手づかひ						全体厚み約1cm		
26	1049	362	土製器土器上蓋	1.8	(3.0)		手づかひ						全体厚み約1cm		
26	1050	362	土製器土器上蓋	1.3	1.88		手づかひ						全体厚み約1cm		
26	1051	362	土製器土器上蓋	1.08	(5.30)		手づかひ						全体厚み約1cm		
26	1052	362	土製器土器上蓋	1.1	4.6		手づかひ						全体厚み約1cm		
26	1053	362	土製器土器片口	(28.0)	6.5		ワケ					西村	18C前半	反転器・内外面スチ付・内面スチ付・外底ケズ	
26	1054	362	土製器土器烙鉢	(21.3)	(8.3)		ワケ					西村	18C前半	反転器・一帯合流・内外面スチ付・内面スチ付・外底ケズ	
26	1055	362	土製器土器お鉢	(28.0)	10.9	14.95	ワケ					志村		反転器・片口・内面スチ付・外底ケズ	
26	1056	376	土製器土器	53.4	(21.20)		骨土上げ? 輪縁のみ?							反転器・口縁下に横長の底筋有り	
26	1057	376	磁器小杯	6.9	4.9	3.7	ワケ	白磁				徳田	18C前半		
26	1058	376	土師器小皿	9.1	1.80	8.1	ワケ							穴開	
26	1059	389	磁器皿	13.6	3.2	8.2	ワケ	透明釉	外・山草 内・文・文・文・竹			徳田	肥前	17C後半	輪花目
26	1060	389	磁器碗	(9.8)	3.7	(6.3)	ワケ	透明釉	外・文				肥前	17C後半	反転器
26	1061	389	陶器碗	(10.0)	6.15	(6.3)	ワケ	透明釉	外・山水文				17C前半	反転器	
26	1062	389	磁器鉢	(25.1)	8.25	(9.3)	ワケ	青磁(白磁)					肥前	17C後半	反転器
26	1063	389	陶器碗	11.3	4.7	3.6	ワケ	白磁・透明釉	外・刷毛目 内・刷毛目				徳田	18C前半	反転器
26	1064	389	陶器碗	11.1	7.55	6.0	ワケ	透明釉	外・刷毛目 内・山水文				徳田	18C前半	反転器
26	1065	389	陶器碗	11.1	7.5	4.5	ワケ	白磁・透明釉	外・刷毛目 内・刷毛目				徳田	18C前半	反転器
26	1066	389	土師器小皿	8.1	1.88	7.1	ワケ							穴開	
26	1067	389	土師器小皿	8.8	1.85	6.2	ワケ							穴開	
26	1068	389	土師器小皿	(9.1)	1.9	(7.0)	ワケ							反転器・口縁部スチ付・内面スチ付	
26	1069	389	土師器小皿	9.4	1.88	7.1	ワケ							内外面黒色	
26	1070	389	土師器小皿	(10.0)	2.05	(8.0)	ワケ							反転器	
26	1071	389	土師器小皿	9.58	1.8	7.2	ワケ							口縁部スチ付	
26	1072	389	陶器鉢	19.2	6.4	6.1	ワケ	透明釉					徳田	18C	反転器
26	1073	389	土製器土器烙鉢	(29.2)	(7.0)		ワケ							反転器	
26	1074	392	陶器碗	(9.8)	3.35	3.9	ワケ							反転器	
26	1075	392	磁器碗		(1.9)	4.4	ワケ	白磁						反転器	
26	1076	392	陶器碗	(10.0)	4.45	3.9	ワケ		外・内・心・口・縁部 内・内・刷毛目				伊藤徳田	18C前半	反転器
26	1077	392	陶器碗	(10.0)	6.1	(7.3)	ワケ						徳田	17C後半	反転器
26	1078	392	陶器鉢	21.1	8.3	7.4	ワケ							反転器	
26	1079	392	新製品かんざし	13.5											
26	1080	392	銅火箸	(23.1)	(10.25 ~10.5)										
26	1081	392	銅火箸(京水筒堂)	2.8	0.15										
26	1082	392	石製品(磁石として使用)	(11.7)	3.8	(1.5)								磁石として使用	
26	1083	392	陶器鉢	35.4	12.2	12.6	ワケ	白磁・透明釉	内・刷毛目				徳田	18C前半	反転器
26	1084	392	陶器鉢	(34.0)	(7.3)		ワケ	白磁	内・刷毛目				徳田	18C前半	反転器

区	No.	遺構	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
				口径	器高	底径		絵柄位置	文様	絵柄内容				
26	1085	392	瓦質土器 火鉢	(40.6)	21.0		ロウテ 裏打							反転元 外底に若干の欠片
26	1086	石列 10	磁器碗	9.9	5.3	1.2	コテ	透明釉	外:吹付前・牡丹唐草		高松	肥前	18C前半	
26	1087	石列 10	瓦質土器 火鉢		(10.8)									底面と思われる
26	1088	石列 10	土師質土器 漆塗	(22.2)	9.1		ロウテ					高村	18C前半	反転元 把手1つ残存 内底に若干・外底に若干 の底面欠片
26	1090	石列 10	土師質土器 漆塗	(20.1)	7.5		ロウテ					高村	18C前半?	反転元・内底面に若干の底面 内底に若干・外底に若干 の底面欠片
26	1091	SD-10	陶器碗	(11.4)	(6.4)		ロウテ	赤釉				中野?	16~17C?	反転元・底面
26	1092	SD 10	陶器碗	(4.4)	(5.0)		コテ	土灰釉				高松	1590~1610	反転元
26	1093	SD-10	瓦質土器 漆鉢	(5.4)	(12.2)		コテ					赤地系	16C末~17C 初	反転元
26	1094	SD-10	瓦質土器 鉢	(6.0)			コテ						16C末~17C 前半?	
26	1095	SD-10	陶器碗	(18.0)	(6.1)		ロウテ	赤釉					18C末~17C 後半	反転元
26	1096	SD 10	瓦質土器 火鉢	(18.4)			コテ?					高松?	18C末~17C 後半	
27	1097	364	瓦瓦											
27	1098	365	土師器小皿	9.8	2.2	6.1	コテ							高松
27	1099	365	土師器小皿	(16.4)	1.9	(7.0)	コテ							反転元
27	1100	365	土師器小皿	(11.4)	2.1	(9.2)	コテ							反転元・内底に若干の底面
27	1101	366	陶器片1	(8.0)	(4.1)	1.1	コテ	漆塗						反転元・内底に若干の底面
27	1102	366	陶器 皿小鉢	(3.9)	(11.6)		コテ	黒・口土	内:黒釉・赤釉			肥前	17C後半	反転元・片ロ一欠片存 二片半
27	1103	366	磁器蓋物の 蓋	11.1	4.2		コテ	透明釉	外:黒・牡丹			肥前	18C後半以降	一反転元 底面に若干
27	1104	366	陶器	(21.4)	8.0	8.0	コテ	漆塗						反転元・見立・牡丹・片ロ
27	1105	366	陶器蓋		(11.1)		コテ	透明釉						反転元
27	1106	366	陶器	(7.1)	10.2		コテ							底面確認
27	1109	368	土製品人形 (力士)	4.95			叩打							最大幅1.25cm・穿孔有り
27	1110	SH-6	土	(2.45)			コテ	土・赤・白 透明釉	外:黒			瀬戸美濃	明治以降	一反転元
27	1112	372	陶器表	(15.4)	6.5		コテ					高松	17C後半	反転元・内底に若干の底面
27	1113	377	磁器鉢	(12.4)	(5.1)		コテ	透明釉				肥前	18C後半	反転元
27	1114	377	陶器		(8.2)	(5.4)	コテ							反転元
27	1115	377	瓦質土器 漆鉢	(24.2)	(6.4)		コテ					赤地系	16C末~17C 前半	反転元
27	1116	378	陶器蓋 (袋蓋)	(9.0)	(1.4)		コテ	透明釉 黒	外:黒・牡丹			肥前	18C前半	反転元
27	1117	378	陶器蓋	(2.4)	(10.2)		コテ	漆塗						反転元
27	1119	379	陶器人形	(4.8)	(4.8)		叩打							内外面欠片
27	1120	379	土師器小皿	16.1	2.4	7.1	コテ							反転元
27	1121	383	陶器碗	(24.6)	(5.4)		コテ	漆塗						反転元
27	1122	385	土製品人形 (鎧)		8.5		叩打							最大幅3.2cm・穿孔有り
27	1123	385	陶器鉢	(3.7)	(8.4)		コテ	漆塗				高松	18C前半	反転元
27	1124	387	陶器碗	(9.0)	(5.3)		コテ	透明釉・口土				高松	18C前半	反転元・底面に若干の底面
27	1125	387	陶器皿	(5.8)	(1.6)		コテ							反転元・底面に若干の底面・ 透明釉有り
27	1126	387	陶器?	(6.9)	(7.4)		コテ	漆塗						反転元
27	1127	388	土師器小皿	(9.7)	2.0	6.7	コテ							反転元
27	1128	388	陶器碗	(10.2)	8.8	4.7	コテ	白泥・漆塗	外:黒・牡丹 内:黒・牡丹			藤津 高松	18C前半	一反転元
27	1129	388	陶器香炉	(12.4)	6.7	(7.0)	コテ	白泥・漆塗	外:黒・牡丹			藤津 高松	18C前半	反転元
27	1130	388	陶器鉢	(5.0)	(7.4)		コテ							反転元
27	1131	391	陶器向付	(3.4)			コテ	透明釉・白泥 赤釉						反転元
27	1132	391	土師質土器 鉢	(8.4)	(20.0)	17.3	輪削?							反転元・内面ハコ 外底面にハコ 口縁に若干の底面
27	1133	395	陶器	(9.0)	(8.7)		コテ							反転元
27	1134	396	陶器鉢	(7.7)	(7.0)		コテ	漆塗・赤釉				高松	1590~1610	反転元
27	1135	396	陶器蓋?	(2.4)	(9.3)		コテ	漆塗				高松	17C前半~後半	反転元
27	1136	396	磁器小片	(8.0)	5.1	(3.9)	コテ	透明釉	外:黒			高松	18C後半	反転元
27	1137	396	磁器蓋 (合子)	5.8	1.35		コテ	透明釉	外:口土			肥前	18C後半~ 19C	

No.	遺情	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
			口径	器高	口径		施作物類	文様	装飾物類				
27	1138	396	陶器碗	(10.4)	7.5	(4.1)	ロクワ	陶器染付 透刻目			伊豆	18C前半	反転復元
27	1139	396	陶器皿	(13.2)	3.7	(8.0)	ロクワ	灰染			香林	1600~1650	反転復元・見込目跡残存
27	1140	396	陶器鉢				ロクワ	灰染・白泥			肥前	18C前半	破片
27	1141	396	陶器水差し	8.2			ロクワ						反転復元
27	1142	397	陶器碗	(10.3)	(2.0)		ロクワ						反転復元
27	1143	397	陶器皿		(3.0)	(13.8)	ロクワ	磁粉・透刻目 透刻目			肥前	1600~1650	一部反転復元
27	1144	397	陶器漆鉢	(9.1)	(7.2)		ロクワ						反転復元
27	1145	401	磁器碗	(1.3)	1.68		ロクワ	青磁染付 透刻目	見込:土台瓦	レゾナンス 印痕	肥前中津	18C後半	一部反転復元
27	1146	401	土師質土器 灰蓋	(8.1)	(8.9)		ロクワ	灰染上り			肥前高津		反転復元・外底付あり
27	1147	27区 区下層	陶器皿	(8.1)	(8.2)		ロクワ	灰染			香林	1600~1650 年代	見込目・透刻目あり 西白・紅褐色・土質あり
27	1148	27区 区上層	陶器鉢	(8.6)			ロクワ	灰染			高取	17C前半~前半	
27	1149	27区 区下層	陶器壺?	(2.9)			ロクワ	灰染			高取	17C前半~前半	
27	1150	27区 区上層	陶器漆鉢	(3.8)			ロクワ				肥前	17C前半~前半	
27	1151	27区 区下層	陶器漆鉢	(6.0)			ロクワ				肥前	18C前半~17C 前半	
27	1152	27区 区下層	陶器壺	(7.7)			ロクワ	透刻目			高取	17C前半~前半	反転復元
27	1153	27区 区下層	陶器壺	(6.5)	(18.6)		ロクワ	透刻目	外:輪の透け分付		香林	1600~1610 年代	反転復元
27	1154	27区 北壁 42層	磁器碗	(11.8)	7.5	4.3	ロクワ	透刻目・透刻目 透刻目	外:輪の透け分付		伊豆	1600~1600 年代	一部反転復元
27	1155	27区 北壁 52層	陶器皿	(11.6)	(2.1)		ロクワ	灰染?			伊豆系	1300~1610 年代	反転復元・透刻目あり?
27	1156	27区 北壁 40層	土師質土器 土壺	1.5	4.5								外底付あり
27	1157	27区 北壁 40層	土師質土器 土壺	1.75	4.85								外底付あり
27	1158	27区 SP-7	陶器皿	(1.2)	(1.8)		ロクワ	透刻目			高取	17C前半~前半	反転復元
27	1159	27区 SP-5	瓦質土器 漆鉢	(4.4)	(12.4)		ロクワ				香林系	16C後半~17C 後半	反転復元
27	1160	27区 SP 7	陶器	(1.3)	(16.8)		ロクワ	灰染・透刻目			肥前	17C前半?	反転復元

第3表 出土瓦観察表

区	No.	遺 構	種 別	瓦当径	両縁幅	瓦当厚	珠文数	瓦当幅	文様幅	頸部幅	備 考
3	72	SK-18	軒丸瓦	14.9	2.8	2.1	11				左ニツバ
3	84	SK-21	軒平瓦					3.8	2.4	1.3	隅瓦
4	113	SK-14	軒丸瓦	14.4	2.3						右ニツバ
4	114	SK 14	軒平瓦					5.3	3.8	1.8	萬文、刻印アリ
5	162	SK-31	軒丸瓦	14.4	2.4						
5	288	SK-32 第2層	軒平瓦					4.4	2.5	1.2	楕文
5	287	SK-32 第2層	軒平瓦					4.2	2.6	1.8	
5	288	SK-32 第2層 第3層	軒丸瓦	14.8	2.3						
5	289	SK-32 第2層	軒丸瓦	15.4	1.9	2.7					
5	290	SK-32 第2層	軒平瓦					4.2	2.8	1.8	楕文、小倉城と同范か
5	291	SK-32 第2層	軒棧瓦	8.3	1.0	2.1	9	5.1	3.5	1.6	右ニツバ、平瓦文様帯に刻印アリ
5	320	SK-35	軒平瓦					4.6	2.8	2.1	SK-32 No.287と同じ文様
5	321	SK 35	軒平瓦					4.7	2.9	1.9	SK-32 No.290と同じ文様
5	322	SK-35	軒平瓦					4.1	2.4	1.5	栴華文
5	323	SK-35	軒平瓦					4.8	3.1	1.0	多言の花弁状文、隅瓦
5	324	SK 35	軒棧瓦?	7.3	1.7	2.0	0				
5	333	SK-42	軒丸瓦	14.5		2.4					菊文
5	342	SK-44	軒平瓦					3.9	2.5	1.0	半菊文
7	428	SK 136	軒平瓦					6.0	4.0	2.8	二葉文、小倉城と同范か
8	432	SK-43	軒丸瓦	14.4	1.5	2.0					右ニツバ
8	465	SK-107	軒平瓦					4.5	2.9	1.8	萬文、刻印アリ
8	466	SK 107	軒平瓦					4.4	3.4	1.2	
8	467	SK-107	軒丸瓦	13.8	1.8	1.7	16				左ニツバ
8	468	SK-107	軒丸瓦	16.2	1.7	2.6					右ニツバ
8	467	SK-109	軒丸瓦								右ニツバ
8	517	SK-115	軒丸瓦	13.7	1.6	2.5					左ニツバ
8	525	SK-121	軒平瓦								
8	526	SK-121	軒平瓦					3.1	2.0	1.4	
9	547	SK-123	軒丸瓦	14.0	1.6	1.7	16				左ニツバ
9	548	SK-123	軒丸瓦	15.7	2.5	1.9	17				右ニツバ
9	549	SK-123	軒平瓦							2.5	
9	568	SK-127	軒丸瓦	15.7	2.2	1.8					左ニツバ
9	572	SK-132	軒棧瓦	8.6	1.4	1.7	9			1.2	右ニツバ
9	596	SK-135	飾瓦								
9	597	SK-135	軒丸瓦	14.8	1.8						右ニツバ?
9	598	SK-135	軒丸瓦	13.4	2.0	2.1					右ニツバ?
9	599	SK-135	軒平瓦					5.0	2.6	1.4	
9	600	SK 135	軒平瓦					4.6	3.2	1.8	萬文
13	691	SK-190	軒丸瓦	9.5	1.5	2.0	10				左ニツバ
14	705	SK-160	軒棧瓦	9.1	1.5	1.7	10	4.0	2.5	1.6	左ニツバ、栴華文、瓦どめのクギアリ
14	706	SK 160	軒丸瓦	15.7	2.2	2.5					左ニツバ
14	707	SK-160	軒丸瓦	13.7	2.1	2.4					左ニツバ
14	721	SK-161	軒丸瓦	15.7	2.3	2.1					

区	No.	型 構	種 別	頁当径	周縁幅	頁当厚	珠文数	反当幅	文様幅	頸部幅	備 考
14	722	SK-161	軒棧瓦	8.8	1.4	2.0	0	4.3	2.8	1.9	右ニッ巴、楕文
14	734	SK 179	軒平瓦					4.8	3.1	1.1	五葉文
14	746	SK-181	軒丸瓦	14.2	1.9	1.7					左ニッ巴
14	747	SK-181	軒丸瓦	9.2	1.4	1.5	13				右ニッ巴、軒棧瓦か
14	755	SK 188	軒丸瓦	14.4	2.5	1.7	10				左ニッ巴、巴頭がくっついている
14	756	SK-188	軒平瓦					4.6	1.0	2.0	
14	757	SK-188	軒平瓦					2.8	1.7	1.2	三葉文
14	763	SK 192	軒平瓦					2.6	1.5	1.3	
14	780	SK-199	軒丸瓦	13.3	1.5	1.7	16				左ニッ巴
14	781	SK-199	軒丸瓦	13.4	1.4	2.2					左ニッ巴
14	782	SK 199	軒丸瓦	15.8	2.4	2.3					右ニッ巴
14	783	SK-199	軒丸瓦	12.2	1.7	1.4					左ニッ巴
14	781	SK-199	軒丸瓦	13.8	1.8	1.9					右ニッ巴、巴頭がくっついている
17	793	SK 209	軒丸瓦	13.4	1.7	2.3					左ニッ巴
18	814	SK-215 瓦下	軒平瓦					4.5	2.7	1.3	三葉文
18	815	SK-215	軒棧瓦	7.1	1.5	1.6	0	3.5?			左ニッ巴
18	816	SK 217	軒丸瓦	14.8	1.9	2.2	9				左ニッ巴、珠文が大きい
18	832	SK-218	軒平瓦					4.6	3.2	2.0	三葉文
18	833	SK-218	軒棧瓦					2.9	1.8	0.8	島文、小倉城と同范か
19	842	SK 231	軒丸瓦	13.6	1.8	1.5					左ニッ巴
19	849	SK-233	軒丸瓦	13.8	1.2	2.1					左ニッ巴
19	850	SK-233	軒丸瓦	15.0	2.0	2.1					左ニッ巴
21	861	SK 256	軒平瓦					4.4	3.0	1.8	SK 256 No.862と同范
21	882	SK-256	軒平瓦					4.4	3.0	1.9	瀬戸瓦文?
23	873	SK-268	軒平瓦					4.3			
23	874	SK-268	軒丸瓦	15.4	1.8	2.4	10				右ニッ巴、珠文が大きい
23	875	SK-268	軒丸瓦	15.7	2.3	2.4	17				左ニッ巴
23	877	SK-270	軒丸瓦	14.5	2.5	2.0					右ニッ巴
23	911	SK-290	軒丸瓦	15.5	2.4	2.0					右ニッ巴
26	1088	右列10	軒丸瓦	14.9	2.1	2.4					右ニッ巴
27	1107	SK-366	軒平瓦					4.5	3.2	1.7	島文、SK-107 No.465と同じ文様
27	1108	SK-366	軒平瓦					4.3	3.0	1.2	小花文
27	1111	SK 370	軒丸瓦	14.3	1.9						右ニッ巴
27	1118	SK-378	軒平瓦					4.9	2.7	1.7	

第五章 まとめ

1. 出土遺物について

(1) 遺構の年代と陶磁器について

当遺跡の遺構は大半が土坑であり、出土遺物も土坑出土のものがほとんどで、溝、ピットからは少量しか検出されていない。さまざまな時代の土坑が複雑に切り合い、攪乱を受けている。そのため、一括資料としての信頼性には大いに疑問が残る。各遺構とも混ざりこみがしばしば見られるため、年代決定の対象となる遺構は一部に限られた。一定年代の土器がまとまった量出土しそれより下がる時期の遺物が微量に出土している場合は混入とみなし、量的に圧倒的優位な年代を選択した。

最も古い遺構は出土遺物の生産年代が16世紀末～17世紀前半にかけてのものである。SD-1、25区16層、25区最下整地層、26区SD-10、27区最下整地層、27区SP-5、SK-107、111、119、173、199、347、27区SP-7である。調査区の地山は固い黄褐色土～暗褐色砂質土であるが、調査途中にところどころ地山とほぼ同じ土の整地層の存在が認められた。16世紀末～17世紀初頭の細片をまばらに含む硬い上で、地山とほとんど区別がつかない。町づくり当初の整地の痕跡であろう。二列の連続土坑である5区SK-104は微細な土師器片しか出土しなかったが、同様の硬い土がつまっており、埋上が地山と判別しづかった。古い段階の遺構と思われる。26区SD-10と同類の溝（第五章-2参照）2区SD-1、17区SD-3、20区SD-5も同じ時期の遺構である。出土遺物は中国製の陶磁器、備前の櫛鉢、瓦質土器、土師器小皿、初期伊万里など。SD-1、SK-107からは土師器小皿が一括廃棄されており、良好な資料をえることができた。また、陶器の割合が多く、唐津主体の中に瀬戸美濃、信楽、備前、高取なども散見された。

17世紀後半はSK-43、96、97、118、192などであるが、あまり良好な一括資料は得られなかった。京焼き風陶器や唐津の二彩手や三島手、見込みに蛇ノ目軸刺ぎを施す陶器が認められる。

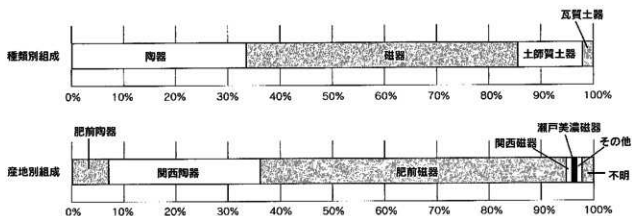
18世紀前半はSK-15、144、256、275、389などで陶磁器は圧倒的に肥前が多い。陶器は白泥を用いた現川焼の刷毛目文様が頻繁に見られる。また陶胎染付も登場する。久留米の朝妻焼もこの時期で、殿町では4点みつまっている。京町御用屋敷跡からも「朝」銘の磁器碗が1点出土している(註1)。土師質土器では、内外面に丁寧なミガキを施した宇佐の高村焼が見られる。

18世紀後半は遺物量が增大する。SK-53、123、190、209、277、304、329、360、362、26区石列10などである。依然肥前製が主体だが、関西系陶器が急速に普及する。全体の2割は占めよう。また、少量だが瀬戸美濃製も散見できる。

19世紀代は遺構が多いため多量の遺物が出土した。製作年代は19世紀前半～中頃が中心である。SK-8、30、31、32、127、181、156、161、218などである。中ごろの遺構ではSK-32から非常に多くの遺物が出土した。No.63の底部外面に書かれた「元治二年（1865）」は出土遺物の年代とも一致しており、良好な一括資料となった。SK-32については、墨書より年代が正確に抑えられたことと、大量の遺物が一括投棄されていたことから、遺物組成を検討するに十分な資料と判断した。検討対象の総個体数は900点である。口径や底径が復元できない小片は対象外とした(第193図)。SK-32出土遺物は陶器が33%、磁器が53%、瓦質土器が2%、土師質土器が12%でその内小皿が2%、高村焼1%、そ

の他雑器が9%である。また陶磁器の産地組成は肥前陶器6%、関西陶器25%、肥前磁器51%、関西磁器1%、瀬戸美濃1%、三田青磁0.5%、他は清代、信楽、堺が少量である。肥前の磁器、関西の陶器が全体の82%と大多数を占めており、他の製品はそれを補完する程度の量にとどまっている。

註1:「中津城下町遺跡京町御用屋敷跡」中津市文化財調査報告書第21集 1998



第193図 SK-32出土遺物組成表

(2) 土師器小皿について

陶磁器とともに多くの小皿が出土した。以下、おおよその年代別に法量の平均を出してみた。報告書に掲載しえなかった遺物の法量もあわせて計算している。

17世紀前半のSD-1下層、SK-107、111、119、173である。SD-1下層については、溝の底出土であり廃棄土坑の一括遺物のように短時間に廃棄されたものではないことから、まとまった量出土したものの、口径・器高にばらつきが大きく、検討対象からはずした。SK-107 (25個体) は口径7.4~9.7cm (平均8.5cm)、器高0.85~2.3cm (平均1.5cm)。SK-111 (3個体) は口径10.6~11.1cm (平均10.8cm)、器高2.1~2.3cm (平均2.2cm)。SK-119 (8個体) は口径7.2~12.2cm (平均10.8cm)、器高1.5~3.6cm (平均2.3cm)。SK-173 (7個体) は口径9.0~12.4cm (平均10.8cm)、器高2.0~2.5cm (平均2.3cm)。SK-107が一回り小さいほかは口径10.8cm、器高2.3cmが平均サイズである。

17世紀後半のSK-118 (5個体) は、平均口径10.7cm、器高1.9cmと口径は同じながらやや低くなっている。

18世紀前半のSD-1一括廃棄遺物 (15個体) は法量のばらつきが少なく、口径8.3~9.8cm (平均8.8cm)、器高 (平均1.6cm)。SK-144 (6個体) は口径10.0~10.6cm (平均10.3cm)、器高1.45~2.2cm (平均1.8cm)。SK-275 (6個体) は口径7.1~10.8cm (平均8.2cm)、器高0.9~2.0cm (平均1.2cm)。SK-389 (6個体) は口径8.8~10.4cm (平均9.4cm)、器高1.5~2.05cm (平均1.8cm)。平均口径9.2cm、器高1.6cmで、口径は10cmを切るものが主体で器高もさらに低くなる。

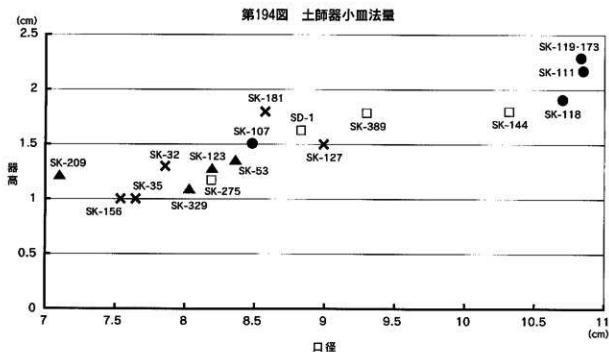
18世紀後半のSK-53 (4個体) は口径8.2~8.5cm (平均8.4cm)、器高1.3~1.4cm (平均1.35cm)。SK-123 (4個体) は7.3~8.7cm (平均8.2cm)、器高1.2~1.45cm (平均1.3cm)。SK-209 (7個体) は5.2~8.95cm (平均7.1cm)、器高0.95~1.5cm (平均1.2cm)。SK-329 (10個体) は口径7.5~8.65cm (平均8.0cm)、器高1.0~1.25cm (平均1.1cm)。平均口径7.9cm、器高1.2cm。

19世紀前半のSK-127 (6個体) は口径7.7~10.8cm (平均9.0cm)、器高は0.9~1.8cm (平均1.5cm)。

SK-181 (4個体) は口径7.8~9.6cm (平均8.6cm)、器高1.5~2.6cm (平均1.8cm)。

19世紀中頃になると遺構数は増えるが、土師器小皿の個体数が減少する。SK-32 (5個体) は口径7.0~9.8cm (平均7.8cm)、器高は0.8~2.2cm (平均1.3cm)。SK-35 (3個体) は口径7.1~7.8cm (平均7.6cm)、器高は0.9~1.1cm (平均1.0cm)。SK-156 (4個体) は口径7.05~8.6cm (平均7.5cm)、器高0.9~1.1cm (平均1.0cm)。平均口径7.6cm、器高1.1cmと、最も小ぶりになっている。

第194図は、各遺構出土小皿の平均値をグラフに落としたものである。17世紀代を●、18世紀前半代を□、18世紀後半代を▲、19世紀代を×で表した。17世紀代が最も大きく、器高は1.5cm以上、口径は11cm弱。一方19世紀代には口径9cm以上のものがなく、器高は1cm~1.6cmにおさまった。かなりばらつきはあるものの、17世紀から19世紀まで、口径はより小さく、器高はより低く、土師器小皿の小型化の傾向をたどることができた。



(3) 軒瓦について

遺跡からは多くの瓦が出土した。陶磁器類と同じく、各時代の遺物が混ざり合っていたため、ここではそれぞれの型式分類を図示するに留めておく。どちらの瓦とも文様がわかるものは全て拓本をとり分類対象とした。

① 軒平瓦

軒平瓦は中心飾りの形態からⅠ~Ⅹに分類した(第195図)。

Ⅰ類は中心飾りに三葉文を配すもの。

Ⅰ-1類；三葉文の左右に均等唐草を配す。先端のとがった三葉文の両脇から葉が左右に広がり、ゆるやかに上向きの唐草が一つつく。瓦当幅は2.8cmと薄い。SK-188のNo.757一点のみ。Ⅰ-2類；三葉

文は先端で細かく分岐、左右に均等唐草文を配す。中心飾りの脇葉は外反する。第一唐草は中心飾りの脇葉の基部内側から始まる。第一唐草、第二唐草とも強めに巻く。瓦当幅は6.0cm、顎部幅は2.8cmと本遺跡出土瓦の中で最大級。SK-136のNo.428の一点のみ。同様のものは小倉城石垣から出土している。慶長7年以前の年代が想定されている(註1)。また現在調査中の中津城内からも出土した。平成14年には本丸内の17世紀初頭の廃棄土坑から一点、15年には本丸石垣内から16世紀後半の遺物とともに数点出土している。中津城創建期に属する遺物である。I-3類；中心飾りの三葉文のまわりを細い線で囲む。左右の文様は唐草ではなく、細かく枝分かれしている。瓦当幅4.5cm、顎部幅1.3cm。SK-215の瓦敷きの下のNo.793一点のみ。

II類は中心飾りに五葉文を配すもの。

II-1類；中心飾りの五葉文は細い線状で、基部に珠点一つ有す。左右に緩やかな唐草が伸びる。瓦当幅は4.2cm、顎部幅は1.9cm。SK-179出土の一点のみ。II-2類；1類がさらに形骸化し、左右の唐草はほとんど先端が巻かず線状になる。瓦当幅4.8cm、顎部幅1.3cm。SK-179から三点(No.734)出土している。

III類は中心飾りに橘文を配すもの。

III-1類；中心飾り及び左右の唐草文は細い線状。第二唐草に相当する葉文は二つに分岐した形で表現される。瓦当幅4.4cm、顎部幅1.2cm。SK-32のNo.286一点のみ。III-2類；1類を厚肉彫りにしたもの。脇葉の基部は中心から離れる。瓦当幅4.2cm、顎部幅1.8cm。SK-32のNo.290とSK-35のNo.321がある。小倉城でも同様の文様を確認している。III-3類；中心飾りの基部が一つになる。文様全体が厚肉彫りとなる。左に小型の丸瓦当がつく軒椽瓦である。瓦当幅4.3cm、顎部幅1.9cm。SK-161のNo.722の他、SK-32(No.287)、SK-35(No.320)からも一点ずつ出土。III-4類；中心飾りの第二の脇葉が基部からそのまま伸びて先端が二つに分かれる葉文となる。唐草は中心飾りの基部から伸びたものが一つゆるやかに下向きにのびる。文様帯の横幅は非常に狭い。瓦当幅4.6cm、顎部幅2.0cm。SK-218のNo.835と、同じくSK-218からもう一点出土している。

IV類は中心飾りに蕨文を配すもの。

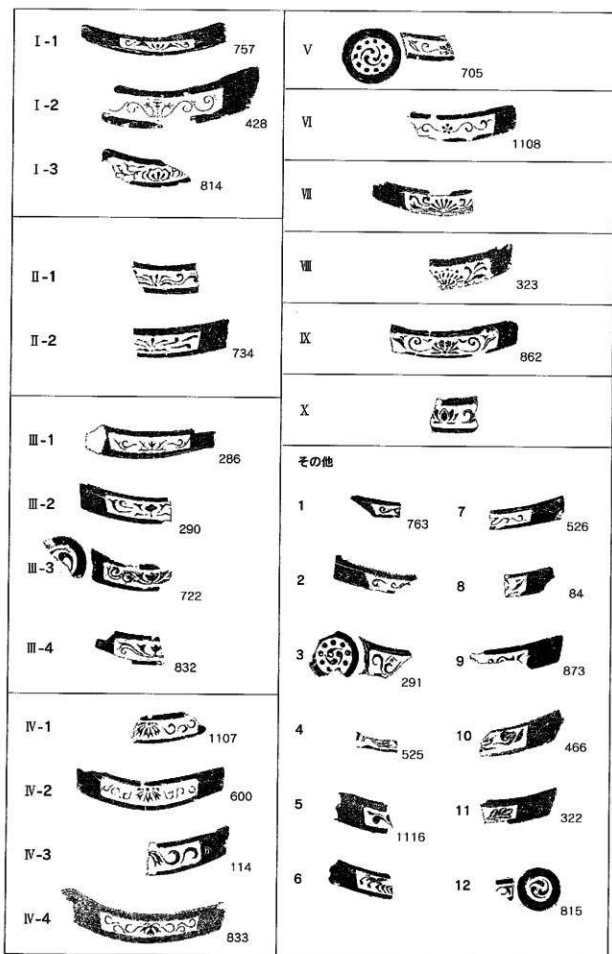
IV-1類；中心飾りの蕨文が線彫りになっている。左右の唐草は短く上下交互に三回転する。瓦当幅4.5cm、顎部幅1.7cm。SK-366のNo.1107、SK-107のNo.465の二点がある。IV-2類；1類の中心飾りの脇葉が内向きに包むように曲がっているのに対し、2類は直線的。第一唐草が装飾的に二段の膨らみを持つ。瓦当幅4.6cm、顎部幅1.8cm。SK-135のNo.600とSK-262からも一点出土している。IV-3類；文様が肉厚で大振り。唐草は上下二回転のみ。文様帯の向かって右側に「分」の刻印あり。瓦当幅5.3cm、顎部幅1.8cm。SK-14のNo.114一点のみ。IV-4類；中心飾りが1~3類と違い厚肉彫り。左右の均等唐草は上下交互に三回転する。椽瓦である。瓦当幅2.9cm、顎部幅0.8cm。SK-218のNo.833とSK-183からも一点出土。小倉城からも同様の文様が出土している。

V類は中心飾りに桔梗文を配す。桔梗文と第二唐草に相当する葉文は線彫り。瓦当幅4.0cm、顎部幅1.6cm。椽瓦で、平瓦当部左に左三つ巴珠文10個の丸瓦を有す。SK-160のNo.705一点のみである。


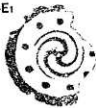
















VI類は中心飾りに五弁の小花文を配す。左右の唐草は細い線状で、第一唐草と第二唐草は連続する。第二唐草は先端で二つに分岐する。瓦当幅4.3cm、顎部幅1.2cm。SK-366のNo.1108一点のみ。

VII類は中心飾りに半菊文を配す。左右の唐草は肉厚で、巻きがゆるい。第三唐草に相当する葉文は先端が二つに分岐する直線的な葉文で、第二唐草の下に横たわる。瓦当幅3.9cm、顎部幅1.0cm。SK-44のNo.342ともう一点SK-44から出土している。

VIII類は中心飾りに多弁の花弁状文を配す。脇葉は唐草ではなく、四つに分岐する植物の葉を表現する。



第195図 軒平丸瓦型式分類図 (1/6)

右三ツ巴	左三ツ巴			
I-A  1111	I-E1 	I-E2  816		
I-B1 	I-B2  784	I-F1 	I-F2  874	I-F3  755
I-C  548	I-G1  72	I-G2  842		
I-D  468	I-H  707			
II  333	I-I1  467		I-I2  547	
	I-J  875			
	I-K  706			

第196図 軒丸瓦型式分類図 (1/6)

瓦当幅4.8cm、顎部幅1.0cm。三角形の形をした隅瓦である。SK-35のNo.323 一点のみ。

Ⅹ類は中心飾りに蓮華文を配す。左右の唐草文は肉厚。第一唐草は上向きに強めに一回転、第二唐草に相当する文様は二つに分岐する肉厚の葉で表現されている。瓦当幅4.4cm、顎部幅1.9cm。SK-256のNo.862とNo.861の二点が出土している。

Ⅺ類は中心飾りに蓮華文を配す。中心飾り及び唐草ともに肉厚。両側が欠損しているため、文様不明。瓦当幅5.5cm、顎部幅1.9cm。26区の上層から出土した。一点のみ。

その他1~12まであげているのは、いずれも中心飾りが不明なものである。1は連続する唐草文。SK-192のNo.763。瓦当幅2.5cm、顎部幅1.3cm。2は連続しない唐草文。瓦当幅3.2cm、顎部幅2.2cm。SK-174出土。3は棧瓦。平瓦文様帯に「分」の陽刻を有す。瓦当幅5.1cm、顎部幅1.6cm。SK-32のNo.291ともう一点SK-32から出土している。4は線彫りの唐草文を有す。SK-121のNo.525。5は肉厚の唐草文。SK-378のNo.1118とSK-135のNo.599の二点。瓦当幅4.9cm、顎部幅1.7cm。6の唐草文は全て下向きに連続する。瓦当幅4.2cm、顎部幅1.4cm。SK-179出土。7は中心飾りが三葉文の可能性あり。第二唐草の外側に小さな子葉が分岐する。瓦当幅3.1cm、顎部幅1.4cm。SK-121のNo.526。8は三角形の隅瓦。瓦当幅3.8cm、顎部幅1.3cm。SK-21のNo.84。9は肉厚の唐草文。瓦当幅4.3cm。SK-268のNo.873。10は中心飾りに花卉状のものがみえる。唐草文は肉厚。瓦当幅4.4cm、顎部幅1.2cm。SK-107のNo.466。11は拍葉状の葉文を有す。瓦当幅4.1cm、顎部幅1.5cm。SK-35のNo.322。12は瓦当面向かって右に丸瓦を有す棧瓦。SK-215のNo.815一点のみである。

以上の瓦の内、製作年代が17世紀代までに収まるものはⅠ-1類とその他の1、2、7のような薄く文様の単純な瓦であろう。Ⅰ-2類については16世紀末まで遡れそうである。他は大半が18~19世紀の遺物とともに出土しており製作年代の特定はできなかった。しかし、Ⅲ類、Ⅳ類はいずれも19世紀中頃の土坑から出土しており、複数点あるものもあることから19世紀前半~中頃を製作時期と考える。

②軒丸瓦

軒丸瓦はほとんど全てが三つ巴文(Ⅰ類)で、他に菊文(Ⅱ類)が一点ある。型式分類では巴文の巻く方向と珠文の数に留意して、巴文の方向がわかることと、珠文が半分以上残存し総数が推定できることを最低条件に分類した。(第196図)Ⅰ-AからⅠ-Dまでは右三つ巴、Ⅰ-EからⅠ-Kまでは左三つ巴である。

Ⅰ-A類；右三つ巴で珠文は11個。瓦当径14.3cm。巴頭は円形で、断面は台形。珠文も断面台形で大型。文様の彫りが深い。SK-370のNo.1111 一点のみ出土。

Ⅰ-B類；右三つ巴で珠文は16個。B1は巴文、珠文ともに太い。巴頭は丸く大きく尾は短い。SK-259から一点出土している。瓦当径13.8cm、瓦当厚2.5cm。一方B2は巴文は細く巴頭が中央で接着する。珠文は小さく低い。瓦当径13.8cm、瓦当厚1.9cm。SK-199のNo.784一点のみ。

Ⅰ-C類；右三つ巴で珠文は17個。巴頭は丸く大きく、断面台形。尾は長く、第二巴の中ほどまで伸びる。瓦当径15.7cm、瓦当厚1.9cm。SK-123のNo.548一点のみ。

Ⅰ-D類；右三つ巴で、珠文は18個。巴頭は小さめでくびれはゆるやか。尾は長く、ほぼ一周する。珠文は小さい。瓦当径16.2cm、瓦当厚2.6cm。SK-107のNo.468一点のみ。

Ⅰ-E類；左三つ巴で、珠文は9個。E1の巴頭は中央で接着し尾は短め。珠文の数が少ないわりに瓦当径が大きいため、珠文の配列はまばら。瓦当径16.7cm、瓦当厚2.3cm。9区一括でとりあげた一点のみ。E2は巴頭は丸く尾は非常に短い。巴文の文様帯が小さい。珠文は巴頭より大きな円形。全体に

文様の彫りが深い。瓦当径14.8cm、瓦当厚2.2cm。SK-217のNo.816一点のみ。

I-F類；左三つ巴で、珠文は10個。F1類の巴文は細い。巴頭も小さく、尾も短め。巴文、珠文とも低い。瓦当径12.2cm、瓦当厚1.4cm。SK-199のNo.783一点のみ。瓦当断面は薄い。F2類の巴頭は丸く断面台形。珠文は非常に大きく文様の彫りが深い。瓦当径15.4cm、瓦当厚2.4cm。SK-268のNo.874一点のみ。F3の巴文は巴頭が細くくびれがゆるやか。巴頭は中央で接着する。尾は短め。珠文は小さく、文様全体が低平である。瓦当径14.4cm、瓦当厚1.7cm。SK-188のNo.755一点のみ。

I-G類；左三つ巴で、珠文は11個。G1の巴頭は小さく細い。くびれ部はU字型に屈曲する。珠文も小さい。瓦当径14.9cm、瓦当厚2.1cm。SK-18のNo.72とSK-187からも一点出土している。G2の巴文も細い。尾は細く長く、一周して鬨線を形成する。瓦当径13.6cm、瓦当厚1.5cm。SK-231のNo.842一点のみ。

I-H類；左三つ巴で、珠文は12個。巴頭は楕円形で尾は短い。珠文も小さく、文様全体が低平。瓦当径13.7cm、瓦当厚2.4cm。SK-160のNo.707一点のみ。

I-I類；左三つ巴で、珠文は16個。I1は巴頭は楕円形で巴首に明確なくびれをもつ。尾は細く、第二巴の頭から1/3でとまる。瓦当径13.3cm、瓦当厚1.7cm。SK-199のNo.780と、SK-107のNo.467の二点がある。I2は巴頭は丸く断面半円形。尾は短めで、第二巴の頭から1/3まででとまる。瓦当径14.0cm、瓦当厚1.7cm。SK-123のNo.547と8区一括遺物から一点出土している。SK-199のNo.781も同じ文様であるが、瓦当径が13.4cmとやや小さい。

I-J類；左三つ巴で、珠文は17個。巴頭は丸く大きく、断面台形。珠文は小さい。瓦当径15.7cm、瓦当厚2.1cm。SK-268のNo.875一点のみ。

I-K類；左三つ巴で、珠文は20個。巴頭は丸く大きい。文様全体が低平。瓦当径15.7cm、瓦当厚2.5cm。SK-160のNo.706と同じくSK-160からもう一点、SK-127のNo.568の計三点がある。

II類は16弁を持つ菊文軒丸瓦。周縁帯はない。瓦当径14.5cm、瓦当厚2.4cm。SK-42のNo.333一点のみ。

軒平瓦同様製作年代の特定は困難である。最も古い様相を見せるのはI-D類である。SK-107からは17世紀前半期の遺物が多く出土しており、I-D類軒丸瓦もその年代に相当する遺物であろう。I-I類もSK-107と、17世紀前半期の遺物を多く含むSK-199からも出土しており、同様の年代と考える。反対に巴文や珠文が大きく新しい様相をみせるものはI-A類、I-C類、I-E2類、I-F2類、I-K類である。19世紀代であろう。全体に点数が少なく、軒平瓦と軒丸瓦のセット関係がつかめなかったのが残念である。

註1；佐藤浩明氏（北九州市芸術文化振興財団）の御教示による

2. 溝状遺構について

当遺跡からは、大小様々な溝が検出された。大きく四つのタイプに分類できる。①幅が60cm～80cmと細く、浅い溝。②幅が1.5m以上と広く、深い溝。③幅が1m前後で浅い溝。④幅が50cmほどで深さ1m以上の狭く深い直線的な溝。

①類に相当するものは5区SK-34と石列1、23区石列4とSD-7、23区石列5とSD-8。上場の標高は、5区SK-34が3.700m、23区石列4が3.900m、23区石列5は3.500mと比較的高い。23区石列4、5は浅く掘られた溝に小石がつまっていた。5区SK-34にはそれほど石はなかったが、石列1と連続しておりやはり石敷きのため浅く掘られた溝と思われる。また23区石列4は北壁付近で西に90度曲がる。この

形状は近代の建物基礎の様相と似ており、つくりも簡単であることから、①類は建物か塀の基礎ととらえたい。19世紀以降である。

②類に相当するものは、2区SD-1、17区石列2とSD-3、20区SD-5、26区SD-10の石列13の溝である。2区SD-1の上場は標高3.200m、下場は2.200m。17区SD-3の上場は3.200m、下場は2.600m、20区SD-5の上場は3.100m、下場は2.000m。26区SD-10の石列13の上場は3.000m、下場は2.000m。以上の溝は標高3.000m～3.200mという低い位置から掘り込まれ、床面の標高は2.000m、2.200m、2.600mと深い。また幅は2区SD-1が1.6m以上、17区SD-3が1.5m、20区SD-5が2.5m以上、26区SD-10が2mといずれも広い。床面は基本的に平坦で、溝の断面は逆台形。多くの石をつめているのが特徴。①のグループの石は乱雑に詰められたただけだが、②類はしっかりとしきこまれて意識的に並べられ、つまれている。低い石垣状か、石の上に土をもりあげた土塁状となると思われる。20区SD-5は廃絶後その上にSD-6という簡単な溝が掘削されている。また26区SD-10では石列13の後に石列12、11、10と次々石列が作られている。②類の溝は明確な境界線を形成する遺構といえよう。遺物は少量だが、16世紀末～17世紀前半のものが主体で、それ以降の遺物はない。現段階で最も古い遺物を検出する遺構で、殿町における城下町草創期の溝である。

		標高	幅				深さ		石		
			上場	50cm 前後	60～ 80cm	1m 前後	1.5m 以上	20～ 40cm	60cm ～1m	まばら	乱雑に つまる
①類	5区 SK-34	3.7m		○			○		○		
	23区 SD-7	3.9m		○			○			○	
	23区 SD-8	3.5m		○			○			○	
②類	2区 SD-1	3.2m				○		○	○		
	17区 SD-3	3.2m				○		○			○
	20区 SD-5	3.1m				○		○	○		
	26区 SD-10	3.0m				○		○			○
③類	20区 SD-6	3.4m			○		○		○		
	26区 SD-1	3.4m			○		○			○	
	26区 石列10	3.3m			○		○			○	
	26区 石列11	3.050m			○		○			○	
④類	14区 SD-2	3.0m	○					○			
	19区 SD-4	3.5m	○					○			

第4表 溝の分類

③類に相当するものは20区SD-6、26区石列9とSD-1、26区SD-10の石列10、26区SD-10の石列11である。20区SD-6は幅1.2m、上場の標高が3.400m、下場が3.000m。26区石列9は幅1.1m以上、上場の標高3.400m、下場3.200m。26区SD-10の石列10は上場の標高3.3m、下場2.9m、幅1.2m。26区SD-10の石列11は上場の標高3.050m、下場2.800m、幅90cm。20区SD-6以外はいずれも石がしっかりとめられていた。また、20区SD-6は20区SD-5を踏襲してつくられたもの、26区SD-10の石列10、石列11、石列12は26区SD-10を踏襲してつくられたものである。②類の溝より簡単なつくりになったとはいえ、境界線を形成する溝ととらえたい。26区SD-10の石列10からは18世紀前～後半の遺物が出土しており、20区SD-6、26区石列9も18世紀後半頃と思われる。石列11は他よりも低く、石列13よりも上であることから、17世紀後半から18世紀前半期となろう。

④類に相当するものは14区SD-2と19区SD-4。いずれも細く深い直線的な壁を持つ溝で、江戸時代



第197図 溝遺構位置図 (1/1000)

の上水道の遺構である「御水道」である。この遺構についての説明は第5章の3「御水道について」で紹介する。

①～④類の溝を江戸時代の町割と比較してみた図が第197図である。溝を表記した図は現在の土地境界線に調査区をはめこんだもので、溝の類ごとにまとめた。中央の図は幕末(註1)の「吉本家絵図」を元に製図したもので、上下の1/1000平面図とサイズがあうように拡大した。この絵図は現存する絵図の中で、最も詳しく精度の高いものである(註2)。今回拡大してみて、現状の町割と絵図の寸法がほぼ一致することを再確認した。また、溝から絵図に向かって点線をおろし、それぞれの溝が絵図上どの位置にくるものかを表した。最も古い溝である②類は第197図をみても、他の類の溝より明らかに幅が広く、土地の境界線上に位置することがわかる。2区SD-1は「古宇田治朗助」と「鈴木力兵衛」の境界と重なる。17区SD-3は「坪坂半助」と「服部傳右工門」の、20区SD-5は「山崎弥一兵衛」と「角三郎兵衛」の境界と重なる。26区SD-10のみ「生田伴兵衛」の敷地にやや入る幅広の溝であるため、溝の西端をたどればほぼ境界線上といてよい。②を踏襲している③も当然境界線上になる。それに比して、①はいずれも境界線上にはのらない。しかし、23区石列4と5は現在の境界には重なっており、新しい溝であることを示している。また、御水道遺構である④は14区SD-2が「桑名口次郎」と「山崎弥一兵衛」の境界線上であるが、19区SD-4はのらない。水道の引込み線が必ずしも敷地の境のみにつくられたわけではないのだろう。

絵図にみる地割は通りに面して間口が狭く、奥行きが深い短冊型である。現在はいくらかの乱れはあるものの、かなり当時の地割が残存している。比較した絵図は幕末のものではあるが、②の溝は全て境界に重なっており、城下町形成の当初より地割ラインは基本的に踏襲されてきていることが判明した。

註1：図中の「奥平孫次郎」は「御家中系図御家中先祖書」（中津市立小幡記念図書館蔵）の嘉永三年（1850年）改にその名が見える。

註2：中津城下町遺跡京町御用屋敷跡（中津市文化財調査報告書第21集 1998）発掘調査の際、大手門に通じる道幅、長さ、石垣の位置等、正確に描かれていることを確認した。

3. 御水道について

(1) 御水道とは

殿町の調査で、南北に真っ直ぐ掘られた溝が二箇所で見つかった。溝は深く、中心には細い竹筒の痕跡が残っていた。これは中津城下町に設置された「御水道(おすいどう)」という江戸時代の水道施設の痕跡である。中津城が海に近い山国川河口に位置していたため、上流から飲料水を引き込む工事が江戸時代初期に行われたものである。

水道は江戸をはじめ、水戸、小田原、甲府、富山、駿府、名古屋、桑名、鳥取、福山、高松、そして中津の各城下町で、城下町の成立期に上水道工事が行われた(註1)。そもそも山国川の水を城内にひきこんだのは1600(慶長5)年に城主となった細川忠興である。忠興は1602(慶長7)年居城を小倉城に移した。その後1620(元和6)年家督を忠利に譲り隠居して三斎と号した。翌元和7年、中津城に居を移し再び城下町の整備に取り組む。「明治以前日本土木史」(註2)によれば、三斎は、城内の用水が乏しかったため、奉行職横左馬・大工頭孫太夫等に命じて直ちに工を起し、唐原村大井手に大堰を築き、樋を通じて山国川の河水をひいてこれにあてた。「大宰管内誌」によれば、大井手堰は斜め

に築いた井手の長さは240間、川の幅は50間ばかりもあったという。城内には引いた水をためる池をつくり、鑑賞や防火用水として使用した。池は忠興の村三斎の名を冠して「三斎池」と呼ばれ、現在も中津城内で水をたたえている。

1632(寛永9)年熊本へ移った細川氏のかわりに、小笠原長次が人国した。「下毛郡誌」(註3)によると、長次もまた中津庶民の水に苦しむを憐れみ、1652(承応元)年、奉行職澤渡志摩・人工頭内海作兵衛等をして樋管を延長して町中に疎通し、一般の需要に供した。大井手堰の口は三個に分かれ(現在地名を三口(みくち)という)、その中流を水道用とし、取り入れ口より島田に至るまでは、内径二尺角の石樋を用いて暗渠とし、自然流下により勢溜より分岐して、城下町に入れた。この地は城下町への御水道の取り入れ口として今も「水道口」という通称で呼ばれている。分岐した御水道の内一つは京町、片端町、三ノ丁、二ノ丁を経て椎ノ木御門より城内の井戸並びに「三斎池」に通じた。他は分岐して市内に入り、幹線は石樋だが、支線の大部分には土管又は竹樋を用いた。街の四辻には径三尺深さ七尺ほどの石造又は木製の溜樹を設けて砂泥の沈殿にあて、上澄水のみを支管を通して各戸の井戸に導き汲み取らせた。四辻の溜樹の内幹線主要部に設けた大溜と称すものの構造は、平時は沈殿又は清掃用監視用にし、火災時には汲水口に利用した。藩政時代には特に水道番所を置き、常に清掃をし警戒取締りをさせたという。

また、「惣町大帳」(註4) 寛永4年(1751)7月13日の条によれば、御水道は道の真ん中に埋設され、辻に溜樹が設けられていたことが書いている。また同書享保3年(1718)11月7日の条からは、藩の職制として水道奉行があり、工事のための人夫が町会所の月番を通じて徴用されていたことがわかる(註5)。

中津水道の石樋で現在中津市歴史民俗資料館に展示されているものは、39cm×49cm×970cmの直方体で、継ぎ手は合い欠き式になっており、扁平な蓋をかぶせる。この石樋は後に再利用されることも多かったようで、城下の地中からはしばしば掘り起こされる。水道管としてだけでなく、排水管としても利用されていたようである。また大正時代の内堀の様子を表した絵には、堀に土管を通して水を引き込む様子が描かれている。

(2) 発掘された御水道

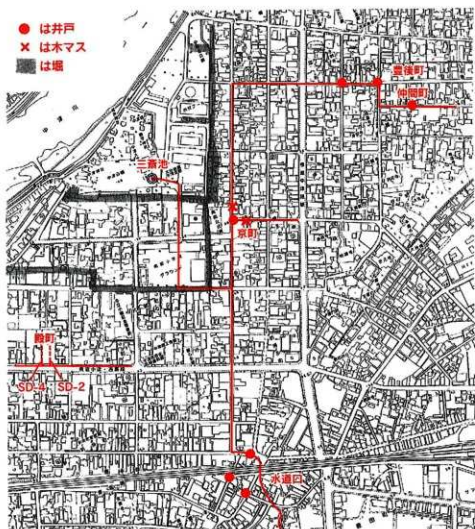
第198図はこれまで発掘された御水道遺構を図に落としたものである。赤い●印は辻井戸、×印は方形の木榭を表す。赤線は水道口から引き込んだルートでこれまでに判明しているものである(註6)。

昭和60年、中津市京町の公共下水道工事現場で江戸時代の井戸がみつかった。「井戸は古くから残る街路の三叉路にあり、地下30cmに石の蓋がしてあった。直系160cm、深さ163cm、上部33cmが石の縁で、下は木の桶を埋め込んだ形。底の上60cm足らずの所に向き合うようにして石樋(とい)がのぞき、さらに時代を下って設けたとみられる土管もある。城下町が整備された折の上水兼防火用水路の中継点として辻ごとに設けられた井戸のひとつらしい。」(朝日新聞)この井戸の模型が中津市歴史民俗資料館に展示されている。水の出入りする石樋より木の桶の底は深く、泥砂が沈殿するようになっている。また中津市桜町と豊後町でも以前井戸が検出されており、豊後町の井戸枠には「延享元年(1744)甲子八月三日作之」の文字が記されていた。京町では、木製の方形の溜樹が出土している。溜樹には道に沿って石樋が前後に通され、残る二面には細い竹筒が通されていた。石樋が幹線で、竹筒は各家庭に引き込むための支線であろう(第199図)。

殿町で検出した御水道遺構の中心を通る細い溝はこの竹筒の痕跡である。14区の御水道遺構SD-2からは、道路から引き込む際、さらに小さな溜樹が設けられていた。円形の木製榭で、直径27cmの底板のみがのこされていた。竹筒部は榭の底よりやや上になるよう取り付けられており、泥砂を沈殿させ



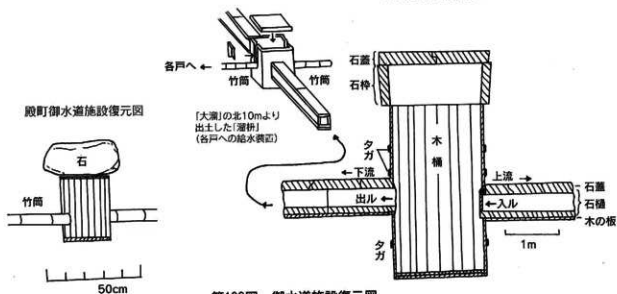
1/50000



1/7000

第198図 御水道位置図

中津市歴史民俗資料館「御水道図解」より
京町辻井戸復元図



第199図 御水道施設復元図

上澄みを利用できるようになっている。この溜樹の上には川原石がのせられており、清掃のための日印兼蓋になっていたのだろう（第199図）。これまで、辻井戸の状況しかわからなかった御水道であるが、初めて城下町の各家にひきこまれる末端部分の様子を解明することができたのである。

14区SD-2は標高3.000mから掘り込まれており、床面は標高1.850m。幅45～50cmで、直線的で垂直な壁を持つ。途中標高2.450mの地点で、壁に段違いがあり、掘り込む位置が多少ずれている。また別の地点標高2.450mでSK-198が途中入り込んでおり、このあたりで掘りなおしが確認できる。また、19区SD-4も同様な溝で、3.500mから掘り込まれているが、深さは標高2.450mでとまっている。この高さは14区SD-2の掘りなおしの床面と共通している。両者を比べたとき、14区SD-2が先行して造られ、後に19区SD-4とともに14区SD-2が作り直されたと考えられる。第五章2「溝状遺構について」で触れたが、SD-2は敷地の境界線上にのるが、SD-4は敷地内を横断している。遺物が検出できてないので明確な時期はいえないが、時代が下がるにつれ御水道は城下町に拡大していったと思われ、水道水の引き込みが分岐していく様を如実に表している。

殿町では総延長の長い調査区のなかから二箇所しか御水道遺構が検出されていない。これは、調査概要でも記した通り、調査区背後の各家への通路、水道管、ガス管等の配管の確保のため、家の境をあまり掘れていないためであろうか。現在の水道管もそうであるように、御水道の施設も家の境界に建設されたと考えられるが、残念ながらこれ以上検出はできなかった。

2003年、中津城三ノ丸にて芸術文化センター建設計画があり発掘調査が行われた(註7)。当地は大名屋敷の跡で、調査区から方形の貯め樹をもつ御水道遺構が検出された。また、同年市道拡幅工事に伴う発掘調査でも、御水道遺構が検出されている(註8)。近年の相次ぐ調査で中津藩の水利事業の充実ぶりが伺える。遺構の検出状況からすると、現地表から遺構面はかなり低く、城下町の御水道は各所良好な形で残存していると推察される。今後調査の機会が得られた際、特に注意を要する遺構である。

註1；「中津水道および宇土水道について」波多野 純 1983年 日本建築学会

註2；「明治以前日本土木史」1936年 社団法人土木学会 (株)岩波書店

註3； 山本 利夫 編著 1912年 私立三余女学校

註4； 中津市立小幡記念図書館所蔵

註5； 註1

註6； 中津市歴史民俗資料館作成

註7； 中津城三ノ丸地区 2003年度調査

註8； 中津城下町遺跡跡町地区 2003年度調査

4. おわりに

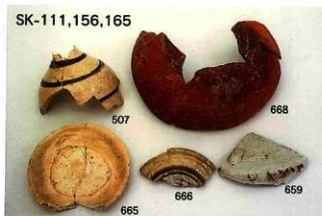
三年間城下町の通りを一直線上に掘るというチャンスに恵まれたにも関わらず、あまりにも不十分な報告書を作成することになってしまった。発掘調査の途切れることがなく、遺物整理に専念できなかったことが大きな原因ではあるが、その状況を理由に勉強を怠ってしまったのは事実で恥じる次第である。

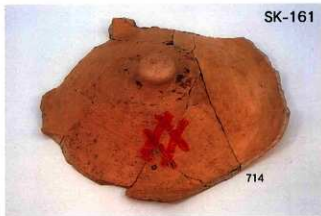
ただ幸運なことには、現在中津城を調査中であるが、城の形成期の様子が徐々に解明されてきており、今後殿町の資料とのつきあわせが可能になった。殿町の最古段階の溝②類は標高3.000～3.200mから掘削されている。中津城の発掘調査で出土した黒出期と思われる礎石は標高3.200mから掘り込まれ掘えられている。その下の標高2.600～2.700mの遺構面は16世紀後半を下らない中世の遺構面である。今後中津城下町を調査する上で標高3.000～3.200mは鍵になるレベルであろう。

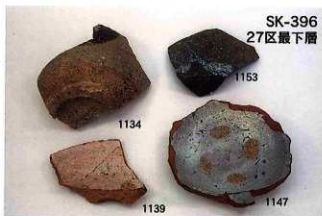
1588年に黒田孝高が中津城の造営を始め、1603年より細川忠利が中津城の改修を始める。中津城の整備が完成したのが1620年、中津城下の整備がほぼ終了したのが1652年の小笠原の時代と言われている。殿町は上級武士の居住区であり城下町でも中心に近い場所であるから、1652年より早い段階で整備に着手されていたと考えるべきである。16世紀末～17世紀初頭の遺物が一定量出土していることから、1620年頃までには殿町地区の整備がなされたととらえたい。その開発の着手が黒出期まで遡るのかどうかは今後の課題である。

城下町形成期の遺構面は現地表面よりかなり低く遺存状況も良好である。今後、城下町調査の機会に恵まれた時、殿町地区での経験を生かし、よりよい調査結果を得られるよう努力したい。









報 告 書 抄 録

書 名	中津城下町遺跡 殿町地区 発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編 著 者 名	高崎 章子
編 集 機 関	中津市教育委員会
所 在 地	大分県中津市豊田町14-3
発 行 年 月 日	2004年3月29日
所 取 遺 跡 名	中津城下町遺跡 殿町地区
所 在 地	大分県中津市1391番地他
市 町 村 コード	44203
遺 跡 番 号	101002
北 緯	33° 36' 00"
東 経	131° 11' 7"
面 積	5072.05㎡
調 査 期 間	19970820~19980320 19980401~19990319 19990801~19991222
調 査 原 因	県道拡幅工事
種 別	近世城下町住居跡
主 な 時 代	近世(16世紀末~19世紀末)
主 な 遺 構	土坑・石列・溝・井戸
主 な 遺 物	陶磁器・瓦
特 記 事 項	城下町武家屋敷跡。廃棄土坑と溝を検出。多量の近世陶磁器が出土した。 近世上水道である「御水道」遺構検出。

中津城下町遺跡殿町地区
発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第32集

2004年3月29日

発行 中津市教育委員会

印刷 久恒日昇堂印刷